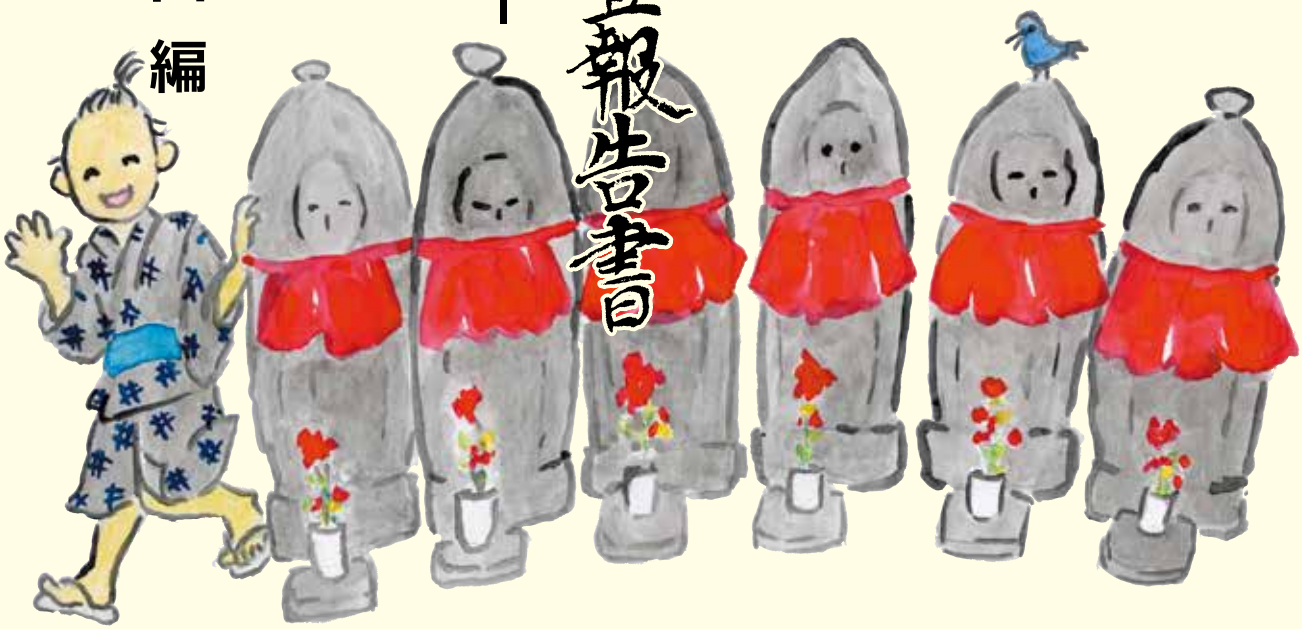
日野市郷土資料館

勝五郎生誕二百年記念

ほどくぼ小僧
勝五郎生まれ変わり物語 調査報告書

―改訂版―

勝五郎生まれ変わり物語探求調査団 編

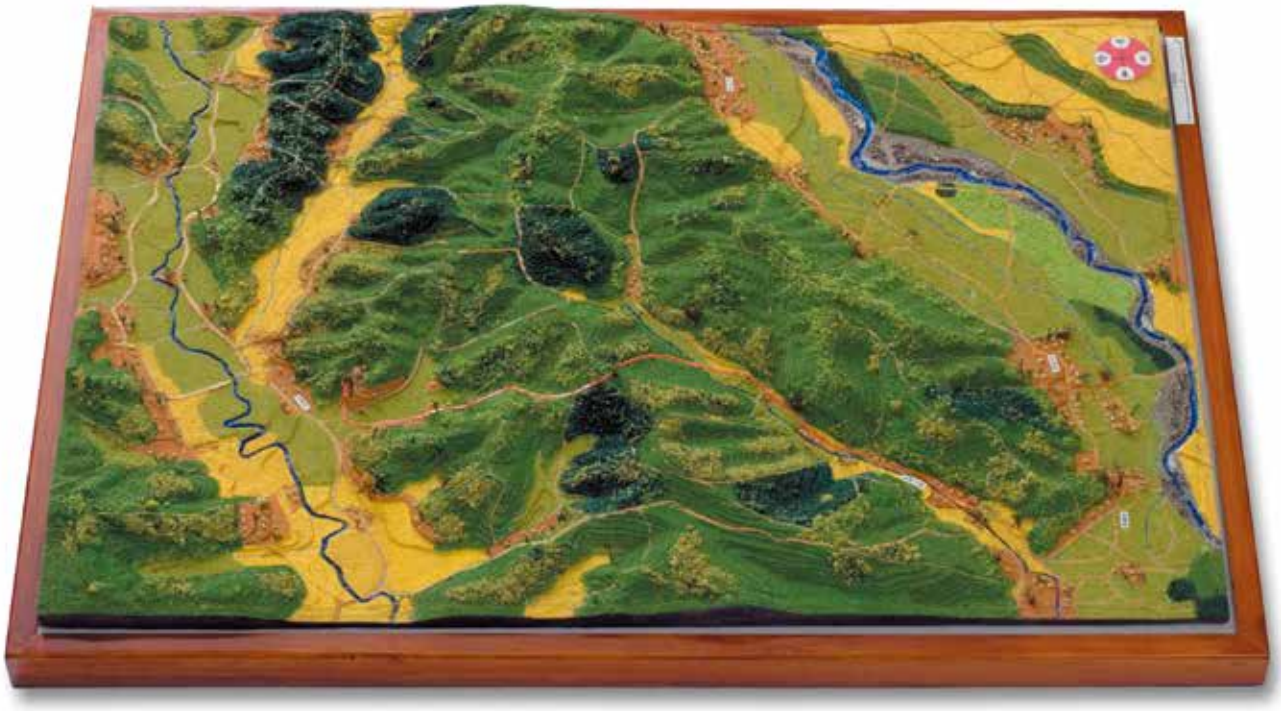


日野市郷土資料館

勝五郎生誕二百年記念

ほどくぼ小僧
勝五郎生まれ変わり物語
調査報告書

―改訂版―



程久保村と中野村のジオラマ

序

程久保村の藤蔵と中野村の勝五郎の生まれ変わり物語は、日野市程久保と隣接する八王子市東中野を舞台に、江戸時代の後半の文化文政期に起こりました。

およそ二百年前に多摩で起こった生まれ変わり物語は、江戸から都へ、そして海外へと知られ、当時の詳細な記録が遺された生まれ変わり物語として、現代に伝えられています。

平成十八年、日野市郷土資料館では、市民参加の「勝五郎生まれ変わり物語探求調査団」を結成し、この生まれ変わり物語を様々な角度から調査・研究して来ました。本報告書は、勝五郎生誕二百年記念事業の一環として、その成果をまとめたものです。

記念事業としては、あわせて日野市郷土資料館特別展「ほどくぼ小僧　勝五郎生まれ変わり物語－勝五郎生誕二百年記念展－」（会期平成二十七年九月十九日～十一月十五日）も開催します。

刊行にあたり、調査団をはじめ多くの関係者・関係機関のご協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。

平成二十七年九月

日野市教育委員会　教育長　米田　裕治

上梓にあたり

平成十八年七月、市は文化事業の一環として、市内に伝承されてきた「勝五郎再生話」について調査・研究し、資料・情報を収集・整理すること、また、伝承を広く市民に知らせるための普及活動を行なうことを目的として、市民参加の調査団を結成することを計画しました。私どもはこれに応じて「勝五郎生まれ変わり物語探求調査団」を結成し、日野市郷土資料館を拠点として活動を続けてきました。以来十年、調査団では、地元をはじめとして関係各地を訪ね、資料・情報の収集に努めてまいりました。

今年、勝五郎生誕二百年、調査団結成十年を記念して調査報告書としてまとめました。これは、団員の熱意と和の結晶であり、十年間倦まず弛まず地道に史実を追い求め、精進を続けたことの結果であります。結成時には三十二人であった団員も、現在は六十人余となり、活況を呈しています。

資料収集は困難を極めましたが、縁が縁を呼ぶと言いますか、時に情報の提供等があり、喜びにつながることも多々ありました。ここに『ほどくぼ小僧　勝五郎生まれ変わり物語調査報告書』として上梓することが出来ました。改めてご教導、ご協力を賜りました多くの方々に心より御礼申し上げます。

平成二十七年九月

勝五郎生まれ変わり物語探求調査団　代表　朝倉　海玄

（改訂版の刊行にあたって）

平成二十七年に刊行した報告書は大変好評で、完売しました。このため数年前から改訂版の刊行が検討されて来ましたが、ようやく「勝五郎が生まれ変わりを語って二百年・露姫没後二百年」記念事業として実現の運びとなりました。新たな調査報告・論考を加えて、増頁となりました。

また、より多くの方々のご利用と情報発信の便宜のため、ＷＥＢ版の配信も行ないます。「勝五郎生まれ変わり物語」が、今後もますます語り継がれていくことを祈念しています。ご協力いただいた関係の皆様に、厚く御礼申し上げます。

令和四年十二月

勝五郎生まれ変わり物語探求調査団　代表　朝倉　海玄

目　次

【解説編】

一「勝五郎生まれ変わり物語」について……1

二 池田冠山・露姫と勝五郎―始まりは露姫の夭折から―……3

（調査報告①）鳥取調査に於ける露姫の位牌と遺墨の発見（小宮豊）……5

（調査報告②）池田冠山と松連寺八世住職魯庵如道の関係について（西村勉）……6

（調査報告③）菊沖藤兵衛と露姫遺墨（市川三千代）……7

（調査報告④）向島の弘福寺と鳥取の池田家墓所（小宮豊）……8

（調査報告⑤）勝五郎が出会った多門傳八郎は誰か？（矢口祥有里）……9

三 平田篤胤と勝五郎……16

（調査報告⑥）平田篤胤『上京日記』について（鈴木淳世）……18

（調査報告⑦）『気吹舎日記』に見える勝五郎（北村澄江）……19

（調査報告⑧）勝五郎が訪れた西教寺（小宮豊）……20

（調査報告⑨）『小谷田異童傳』の発見（北村澄江）……21

（論考1）『勝五郎再生記聞』の諸本（中川和明）……22

＊『勝五郎再生記聞』日野市郷土資料館関係資料一覧……24

四 江戸の文人たちと勝五郎……26

（調査報告⑩）斎藤月岑（幸成）と池田冠山との交流（大河内祥行）……27

（論考2）勝五郎の転生譚と江戸の知識人―前世語りから転生譚へ―（今井秀和）……28

五 小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）と勝五郎……35

（調査報告⑪）『珎説集記』の発見（北村澄江）……36

（論考3）小泉八雲の勝五郎伝説への貢献（松村恒）……37

六 胎内記憶研究と勝五郎生まれ変わり物語……51

（調査報告⑫）胎内記憶について（鈴木俊子）……51

七 勝五郎とその家族……53

（調査報告⑬）勝五郎の人物像（北村澄江）……53

（調査報告⑭）勝五郎の身内調査について（市川三千代）……55

八 その他……59

（調査報告⑮）山岸萬吉が寄進した版木（市川三千代・大河内祥行）……59

（調査報告⑯）中野村の酒造「十一屋」について（矢口祥有里）……60

（調査報告⑰）藤蔵の子孫小宮家での伝承（小宮豊）……61

（調査報告⑱）藤蔵のお墓を訪れる人々・「藤蔵・勝五郎生まれ変わりゆかりの地記念碑」の建立（小宮壽子）……62

（調査報告⑲）勝五郎が遊び眺めた石仏たち（加地勝）……65

【再録編】

（再録①）下田九一「史料から見た勝五郎とその周辺」（『日野の歴史と文化』2～4号）……67

（再録②）勝五郎再生の実地調査（『心霊研究』23巻1～3、24巻2・5）……82

（再録③）中嶋繁雄「蘇った勝五郎」（『歴史と旅』昭和五十年六月号）……95

【資料編】（解読　上野さだ子・大窪俊彦・大河内祥行・片山幸和・小宮豊　鈴木淳世・髙橋國夫）

1 勝五郎再生前生話……99

2 六とせの夢……101

3 花月日記……107

4 池田冠山公墨蹟……108

5 雲龍寺覚書……109

6 勝五郎再生記聞……109

7 上京日記上・下（抄録）……123

8 甲子夜話……128

9 視聴草……130

10 藤岡屋日記……132

11 睡余操觚……134

12 山海里……135

13 武蔵名勝図会……137

14 桑都日記……138

15 珎説集記（付　勝五郎の転生）……138

16 神判記實……147

17 再生勝五郎覚書……149

18 「小谷田勝五郎紀念碑」碑文……150

※ 藤蔵と勝五郎の家系図……152

※ 関連年譜……153

※ 関係資料一覧……157

※ 程久保村と中野村について……159

※「勝五郎生まれ変わり物語探求調査団」の活動について・活動成果報告……160

※ 刊行物一覧・調査団名簿……166

※ あとがき……167

※ 協力者並びに資料提供者……168

（表紙題字　川澄祐勝　高幡山金剛寺前貫主）（原画　叶内匡子）

［凡例］

1　本書は、日野市郷土資料館に委託された「勝五郎生まれ変わり物語探求調査団」の、平成十八～二十七年に至る調査報告書（以下報告書（初版））に、令和四年十二月までの改訂を加えたものである。

2　調査団有志の報告書編集委員会が全体の構成・編集を行ない、団員が執筆・資料解読を行なった。編集作業は、郷土資料館の北村澄江・矢口祥有里が行なった。

3　再録編には、今日では差別的な用語が用いられているが、そのまま掲載した。

解説編

一「勝五郎生まれ変わり物語」について

程久保村の藤蔵と中野村の勝五郎の生まれ変わり物語は、東京都日野市程久保と隣接する八王子市東中野を舞台に、江戸時代の後半の文化文政期（一八〇四―一八三〇）に起こった。平成二十七年（二〇一五）は、主人公勝五郎の生誕二百年にあたる。

人が生まれ変わるという伝承は、日本だけでなく世界各地に伝えられているが、具体的な内容は次第に忘れられ、昔話や世間話という形で語り伝えられていることが多い。

「勝五郎生まれ変わり物語」は、当事者が実在し、生没年や住んでいた場所、墓所などもはっきりわかっているという点で、他の生まれ変わり伝承とは一線を画するものである。それは、勝五郎が語った内容を、当時の文人・役人・学者などが、同時期に記録し、その記録がずっと伝えられてきたという点にある。そして、その記録は、明治になると小泉八雲の手で、海外に紹介されていくことになるのである。

◆勝五郎生まれ変わり物語の概要

一、文政五年（一八二二）十一月、中野村に住む八歳の勝五郎（小谷田姓）が、兄と姉に、自分の前世は、程久保村の藤蔵（須崎姓）で、六歳の時に疱瘡（天然痘）で亡くなったと語った。

二、勝五郎の話は、やがて父や母の知るところとなり、十二月、勝五郎は生まれ変わりの顛末を以下のように、父母たちに詳しく語った。

藤蔵が死んだ時、魂が身体から抜けだして家に帰ったが、誰も気づかなかった。→白い髭に黒い着物を着たおじいさんに導かれ、あの世に行った。→三年たったから生まれ変わるのだと言われて中野村の柿の木のある家に連れて行かれた。→竈の陰に隠れていると、父母が相談をしていた。それは、家計を助けるために母が江戸へ奉公に行くというものだった。→藤蔵の魂は母の胎内に入り、文化十二年十月十日に勝五郎として生まれた。（柿の木は、あの世とこの世の境にある木だという説がある）

三、勝五郎の生まれ変わりの話は、両親にとっては信じがたいものだったが、母が江戸に奉公に行く相談をしていたという話は、両親以外の人は知らないことだったので、勝五郎の語ることは本当かもしれないと思うようになった。

程久保村のことを知っている人に聞いてみると、藤蔵の家は実在し、疱瘡で亡くなった子どもがいることがわかった。勝五郎の生まれ変わりの噂が広まり、「ほどくぼ小僧」というあだ名がついて、見物に来る人が出てきた。

文政六年一月二十日、勝五郎と祖母つやは程久保村の藤蔵の家を訪ねることにした。勝五郎は行ったことがないはずの程久保村の事をよく知っていて、祖母を藤蔵の家に案内した。

四、藤蔵の家では、母しづと義父の半四郎がいて、勝五郎が藤蔵によく似ているといって喜んだ。勝五郎は、初めて来たはずの家の中の事もよく知っていて、向かいの「たばこや」（屋号）の木は以前はなかったなどといって、皆を驚かせた（屋敷は、今も同じ場所にある）。藤蔵と勝五郎の家は、親類のように行き来するようになり、勝五郎は実父久兵衛の墓参りもした。

五、二月のある日、江戸から池田冠山という大名（鳥取藩の支藩の藩主、当時は隠居）が、勝五郎の家を訪ねて来て、生まれ変わりの話を聞きたいと求めた。勝五郎は気おくれして話すことが出来ず、祖母が代わりに話した。

三月、冠山は聞いた話を『勝五郎再生前生話』としてまとめ、松浦静山や泉岳寺の貞鈞大和尚などの、文人仲間に見せた。冠山の著作は次第に多くの人の目に触れることとなり、勝五郎の生まれ変わりの噂は江戸中に広まった。冠山が、中野村まで生まれ変わりの話を聞きに行った背景には、文政五年十一月に、藤蔵と同じ六歳で疱瘡のために亡くなった末娘「露姫」の存在があった。（解説編二参照）

六、四月、中野村の領主で旗本の多門傳八郎が、源蔵・勝五郎親子を江戸へ召喚した。知行所での騒ぎが大きくなって、そのままにはしておくことが出来なかったからである。多門は、四月十九日に源蔵親子から話を聞き、これをまとめて、上司である御書院番頭佐藤美濃守に「届書」として提出した。

七、多門傳八郎の届書の写しは、すぐに多くの文人たちが入手することとなり、平田篤胤のところへも届けられた。篤胤は、友人の屋代弘賢の勧めもあっ

て、多門の用人谷孫兵衛に、勝五郎への面会を申し入れた。四月二十二日に、源蔵と共に篤胤の学舎、気吹舎（いぶきのや）へ来た勝五郎から直接話を聞いた。勝五郎は、生まれ変わりの顛末を語ることをいやがったので、篤胤、友人の伴信友、当時気吹舎にいた天狗小僧寅吉（嘉津間）などが、入れ替わり立ち替わり、なだめすかして話を聞いた。これを、伴信友が整理をしてまとめた。篤胤が、勝五郎の話を聞いたのは、四月二十二日、二十三日、二十五日の三日間である。七月九日に源蔵が勝五郎とその兄、姉を伴って訪ねてきた時は、越谷（埼玉県越谷市）に行っていて不在だったので、弟子たちが話を聞いた。源蔵たちは三日間滞在した。

八、六月、篤胤は、勝五郎の話に自身の考察を加えて『勝五郎再生記聞』をまとめ、七月二十二日からの上洛に持参、光格上皇と皇太后へ上覧した。御所では、女房たちの間で大評判となり、五十日も本が戻ってこなかった。

九、文政八年八月二十六日、勝五郎は気吹舎の門人になり、およそ一年ほど気吹舎にいたといわれているが、その後の消息ははっきりしない。

十、勝五郎は、中野村に帰ってきてからは、普通の人と変わらない生活をし、農業の傍ら家業である目籠（めかご）の仲買を行ない、裕福な生活をしていたと伝えられている。明治二年（一八六九）十二月四日、五十五歳で亡くなった。

十一、明治三十年に、小泉八雲が、随想集『仏の畠の落穂』のなかに、「勝五郎の転生」を書いたので、勝五郎の生まれ変わりは、海外の人にも認知される事例となった。

◆記録された生まれ変わり物語

勝五郎の生まれ変わり物語は、当時の一流の文人・学者によって記録された。文人大名として名高い池田冠山は、最も早く、勝五郎の家を訪ねて話を聞いたが、勝五郎ではなく祖母のつやが話したことを、話し言葉のまま書き留めている。（資料1）

中野村領主の多門傳八郎は、職務上の取調べを行なって、調書を上司に提出している。調書なので、聞いたことを正確に書き取っているはずであるが、勝五郎本人というよりは、父源蔵が語った内容と思われる。調書の写しは、すぐに関係者の手に渡ったようであるが、原本の所在は不明で、『勝五郎再生記聞』に写されたもので内容を知ることが出来る（図1）。ただし、冠山の『勝五郎再生前生話』の写本にも、多門傳八郎の調書の写しが加えられているものがある。宮内庁書陵部所蔵本や、日野市内の個人所蔵本（秋田藩佐竹家に伝来したと伝えられている）などで、小泉八雲が底本とした『珎説集記』の内容から、冠山と親しかった泉岳寺の貞鈞大和尚も、冠山とは別の知人から多門の調書を入手して写していることがわかる。なお、多門の調書によると、藤蔵の義父半四郎は、勝五郎が程久保村を訪ねるよりも前に、中野村の源蔵宅を訪れている。

平田篤胤の『勝五郎再生記聞』は、主に勝五郎本人から聞いたことを記録している。しかし、篤胤が書いているように、勝五郎が語ったことをそのまま記したのではなく、たどたどしく語ったことを、伴信友や篤胤が、整理をしてまとめたものである。

「再生記聞」は産土神（うぶすながみ）の存在が強調されているなど、池田冠山・多門傳八郎・平田篤胤の三つの記録には、それぞれの立場の違いによる見解の相違はあるが、おおよその事実関係は矛盾していない。いずれも、勝五郎が生まれ変わりを語ってから、三～五か月後の記録である。

なお、『藤岡屋日記』の記述は、藤岡屋由蔵が、中野村の源蔵宅を訪問し、源蔵から聞いたことを記しているように受け取れるが、藤蔵が埋められた墓の場所は、半四郎宅の裏山となっていて、他の記録にはない内容が記されていて興味深い（資料10）。この他にも、地元の風聞を記したものなどもあるが、詳細は資料編を参照されたい。

図1「多門傳八郎届書写」
（国立歴史民俗博物館所蔵『勝五郎再生記聞』－文政仙洞叡覧本－より）

二　池田冠山・露姫と勝五郎―始まりは露姫の夭折から―

◆池田冠山と地誌の編さん　池田冠山（松平縫殿頭定常）は、明和四年（一七六七）十月三日に、旗本池田半蔵政勝の次男として、江戸麹町番町（千代田区）で生まれた。安永二年（一七七三）に遠縁の鳥取藩宗家の分家西館池田家の養子となり、天明五年（一七八五）に二万石の家督を襲封した（享和元年―一八〇一―三十五歳で隠居）。その領地は因幡若桜（わかさ）（鳥取県八頭郡若桜町）にあった。冠山は学問を好み、天保四年（一八三三）七月に没するまで、特に地誌類の著作や編さん事業に多くの功績を残している。

文化七年（一八一〇）、大学頭林述斎は、幕府が収集した書籍の解題目録の作成を冠山に依頼した。これは、冠山が優れた地誌の研究者であったことを物語っているが、個人の仕事としてはあまりにも膨大なため、間宮士信（まみやことのぶ）を総裁とする幕臣たちによって引き継がれ、「編修地誌備用典籍解題」が編さんされた。しかし、二千部にも及ぶ書籍の解題の半数以上は、冠山の手によるものである。幕府は、この成果をもとに諸国風土記の編さん事業を進めていくが、『新編武蔵風土記稿』の編さんも、このような経緯のなかで行なわれたのである。冠山は、文政七年（一八二四）には『武蔵名所考』を刊行した。古歌に詠ぜられた武蔵野の名所を考証したもので、江戸やその近郊に実際に足を運んで編さんしたものである。

◆冠山、中野村へ　文政六年二月、冠山は突然中野村の勝五郎の家を訪ね、生まれ変わりの話を聞いた。

『武蔵名所考』の編さんなどのため、何度も多摩の地を訪れていた冠山が、その関係の人々との繋がりの中で、勝五郎の生まれ変わりの情報を得たであろうことは、十分想像できることである。それなりの土地勘があった上での中野村訪問であったのかもしれない。しかし、隠居とはいえ元大名が直接農民の家を訪れるのは、異例のことであった。

勝五郎は気後れしてしまって何も話すことが出来ず、冠山は祖母つやから話を聞いた。冠山は、江戸へ戻ってから、聞いた話を『勝五郎再生前生話』（図1）としてまとめ、友人たちに見せた。文人大名として活躍していた冠山の著作は、江戸の文人・学者の間で大評判となり、中野村領主多門傳八郎（おかどでんぱちろう）の勝五郎親子の江戸召喚、平田篤胤の聞き取りにと発展するきっかけを作った。

◆愛娘露姫の夭折　冠山の中野村行きには、露姫の突然の死が深く関わっている。冠山には正室はなく、側室との間に八男一六女という多くの子どもに恵まれた（このうち一八人は、成人前に亡くなっている）。露姫は、冠山五十一歳の時、最も愛したと伝えられる側室おたえの方との間に生まれた末娘であった。利発で信仰心が厚く、多くの人に愛されていた露姫は、文政五年十一月二十七日、疱瘡のため数え年六歳で亡くなってしまった。深い悲しみのなかにあった冠山にとって、同じように六歳の時に疱瘡で亡くなった藤蔵の生まれ変わりであると語る勝五郎の存在は、露姫の再生を期待させるものであったと思われる。わが子露姫の再生を願って、中野村への道を急いだ冠山の心情はどのようなものであっただろう。

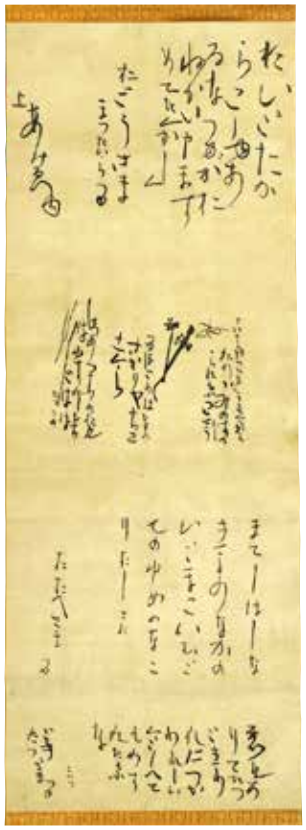
◆露姫の追悼物語　露姫は、多くの人に追悼を寄せられたお姫様としても知られている。露姫の事跡は、池田家の家臣服部脩蔵が著した『玉露童女行状』（刊行本『玉露童女追悼集』一に収録、玉露童女は露姫の法号の略称）に詳しく綴られている。これによると、露姫没後一か月ほどたった頃、遺品の中から露姫の書付が見つかった。それは世話になった侍女や母、兄弟などへの、感謝の気持ちや惜別の思いを詩歌に込めて綴ったもので、特に父冠山への飲酒を諫める手紙は、人々の感動を呼ぶものであった。（図3）（資料2）

冠山は、露姫の菩提を弔うために、遺墨四通と戒名を、刷物として全国の寺院や友人・知人に送り、追悼文や詩歌を求めた。鳥取市の雲龍寺に残されている資料によれば、この時一緒に「覚書」「露姫の戒名を記した紙片」「補足の説明書き」などが添えられていたようである。（資料5）

露姫の親兄弟を思う心情は、多くの人々の共感と感動を呼び、老中だった松平定信（楽翁）から、市井の人々まで、老若男女を問わず千六百余点の追悼が寄せられた。冠山は、これらを三十巻の巻子に仕立てて浅草寺に納めた（図5）。現在も浅草寺には二十九巻の追悼集と、露姫の木彫像が残されている（図4）。文政七年、露姫の墨蹟は『応化菩薩辞世帖』として板行され、露姫の事跡は一層人々に知られることとなった。応化菩薩とは、露姫のことで、親孝行で信心深いお姫様は、ついに菩薩の化身とされたのである。

『玉露童女追悼集』は、淺草寺伝法院の宝蔵に永い間秘せられていた。小谷惠造『池田冠山傳』に、森鷗外が「玉露童女追悼集儼存イタシ居候由、之ニ関スル詩文諸家ノ集ニ散見候ヘドモ、如此モノ完存セムトハ不存寄」と感嘆したと紹介しているが、このように、その全容を知る人は極めて少なかったと思われる。淺草寺では、昭和六十三年（一九八八）に観音堂落慶三十周年を記念して、『玉露童女追悼集全三十巻』の公刊に着手、昭和六十三年（一九八八）十二月から平成八年（一九九六）三月を経て、全五巻を発行した。（平成三十一年三月、露姫木像と共に台東区有形文化財に指定）

現世では関わりようのなかった村の少年、藤蔵・勝五郎と大名のお姫様露姫は、父池田冠山の追悼のなかで、深く結び付けられていった。露姫の夭折がなければ、勝五郎の生まれ変わり物語が、現在のように語り継がれることはなかったのかもしれない。勝五郎生まれ変わり物語は、露姫の夭折から始まっているのである。



おいとたか　十いちかつ御きうそくてかく
らこしゅあ（が）　（蝶図）おのかみのすへおし　まてしはしな
るなつゆがお　ら（ず）にもふこてう　きよのなかの
ねかい申ます　（桜図）つゆほとのはなの　いとまこいむと
めてたくかしく　さかりやちこ　せのゆめのなこ
おとうさま　さくら　りおしさに
まつたいらつゆ　（雨図）あめつちのおん　おたへさま
あけるつゆ　はわすれしちち　つゆ
上　とはは　六つ
六つつゆ　つゆ
ときさま
たつさま

図3「露姫遺墨」（日野市郷土資料館所蔵　小谷惠造氏寄贈）

図4 露姫木彫像（淺草寺所蔵）高さ約16.5cm
文政11年2月8日、淺草寺本堂に安置、11月27日七回忌が行われた。（『淺草寺日記』17）

図1 池田冠山『勝五郎再生前生話』（写）
（早稲田大学図書館所蔵）

図5『玉露童女追悼集』全30巻の内16～30巻
（淺草寺所蔵）

図2 露姫肖像
（『玉露童女行状』より　鳥取県立図書館所蔵）

「今やしる古くそとひし鷲の山
かゝる雲井の法のしるしを　篤胤」

図6『玉露童女追悼集』
第29巻収載の平田篤胤の追悼歌
（淺草寺所蔵）

（調査報告①）

鳥取調査に於ける露姫の位牌と遺墨の発見

小宮　豊

鳥取市鹿野の雲龍寺に露姫に関する資料が保存されていることを知ったのは偶然の事であった。平成十九年（二〇〇七）十一月、勝五郎調査団で鳥取へ池田冠山関連の調査に行った時のことであった。鳥取県立図書館で服部脩蔵著書の『玉露童女行状』を閲覧し、池田家墓所を参拝したところ、墓所を案内して頂いた沖廣俊氏から、雲龍寺に露姫の位牌が祀られていることを知らされた。

雲龍寺はこの時の調査旅行の行程にはなかったが、雲龍寺の住職は我々の突然の訪問にも拘わらず、笑顔で迎えてくれた。本堂で露姫の位牌をお参りし、広間へ通された。広間のテーブルの上にたくさんの資料が並べられており、すべて露姫の遺墨に関する資料であった。（図7～10）

図7 露姫の位牌と遺墨に関する資料
（雲龍寺所蔵）

図8 覚書（同）

図9 露姫の法名を記した刷物（同）

図10 遺墨の補足説明書き（同）

ここで初めて閲覧することが出来た覚書（図8）（資料5）により、池田冠山が露姫の菩提を弔うため、遺墨の他に覚書・法名の刷り物・補足説明書などを添えて、江戸だけではなく全国の関係者に配布していたことが判明した。

藤蔵の子孫である小宮家には、露姫の位牌がずっと祀られてきたが、位牌に記された文字は一字一句紙片に書かれた文字と同じであった。現在当家にはこれ等の資料は残っていないが、同様の経緯で、勝五郎の家族を通じて当家にも露姫の法名の刷物が届けられたものと想像される。長い間謎であった当家に露姫位牌の存在する意味が、初めて明らかになった瞬間だった。

なお、鳥取池田家の菩提寺は興禅寺であるが、雲龍寺も池田冠山と深い関わりのある寺院である。

池田冠山の祖先である池田輝澄は、池田輝政の四男として生まれ、母は、徳川家康の次女・督姫である。輝澄は、播磨山崎藩六万八千石の大名であったが、お家騒動のため、改易され、甥に当たる鳥取藩主・池田光仲預かりとなった。輝澄は、家康の外孫ということもあってか、鳥取藩内鹿野に一万石を与えられた。

輝澄は寛永十七年（一六四〇）に、弟政綱（「雲龍院殿梵良秀音大居士」）の位牌を鳥取鹿野の松月寺に納めた。万治三年（一六六〇）に松月寺の僧侶・洛翁嫩京が同じ鹿野の千手寺の第五世住職になった時に、「雲龍院殿」の位牌を千手寺に移し、菩提寺として寺号も「雲龍寺」に改められたのである。

雲龍寺には今も、池田輝澄・政綱兄弟の位牌が祀られている。（図11・12）

図11 雲龍寺（鳥取市鹿野）

図12 池田政綱（中央）と輝澄（右）の位牌
（雲龍寺所蔵）

（調査報告②）

池田冠山と松連寺八世住職魯庵如道の関係について

西村　勉

日野市百草の地にあった黄檗宗慈岳山松連寺は、江戸時代には風光明媚な名刹として知られ、大田南畝をはじめとする、多くの文人墨客が訪れ、紀行文を遺している。現在は、「京王百草園」として一般に開放され、梅の名所となっている。

松連寺の八世住職魯庵如道は、文人としても活躍し、池田冠山とも交流のあった人物である。冠山と魯庵、二人のかかわりについて述べてみたい。

◆池田冠山と『江戸黄檗禅刹記』　池田冠山は、地誌、仏典等の和漢に通じており、佐伯藩主毛利高標、仁正寺藩主市橋長昭と共に篤学の三大名の一人と称された。

『武蔵名所考』他六十余もの多くの書物を遺しているが、その中の一つとして、文政十年（一八二七）十一月の『江戸黄檗禅刹記』がある。この書物は、池田冠山が、自ら各寺を回って、碑文や文書を調査し、見聞きしたことを著録したものであるという。回った寺二十二寺、六庵一堂、一寮であり、おそらく六歳にして夭折した娘の追悼冥福を祈って、黄檗宗の寺を回ったのではないだろうか。

『江戸黄檗禅刹記』巻六の中に涼月寺という寺院があり、こう書かれている。

「元禄十六癸未年、開祖之像を武之百草村松連寺に移住し本庵を光鑑禅師に譲る、相い続て官庁に出づ、鑑禅師本庵之地の過半を地主に報ず、他に譲るに今三百坪余為り、正徳元辛卯年、孝禅師再び本庵に返り之を受く」

萬福寺（京都府宇治市）文華殿の田中和尚のご教示によると、涼月寺は一度桝井山松連寺に合併されたが、後に復活したという。そして、この涼月寺（旧禅海庵）の開山は天柱元磉であり、開基は松平仲澄夫人である。松平（池田）仲澄は、池田冠山の祖池田清貞（西館）の兄（東館）になる人物で、冠山にとって涼月寺は、池田家先祖縁の寺院ということになる。

また、記述中にある光鑑禅師は、松連寺に隣接する百草八幡神社に伝わる「武州多麻郡百草村枡井山正八幡宮傳紀」を記述した臨済正宗三十五世亀光鑑のことである。亀光鑑にとって天柱元磉は兄弟子でもあった。

桝井山松連寺が廃れた後に再興された慈岳山松連寺の歴代住職の墓地の近くに、三基の墓があるが、そのうちの二基が、『江戸黄檗禅刹記』の涼月寺の項に記されている人物の入寂年月日と一致し、天柱元磉と仲澄夫人の侍女で天柱元磉に帰依した「海眼院江月浄輪大禅尼」の墓であることが判明した。また、天柱元磉の墓碑銘から、天柱元磉が桝井山松連寺の中興開山であることも判った。

このように見てくると、松連寺は、涼月寺との関係から、池田家の先祖縁の寺院ともいえることになり、冠山にとって、文人の訪れる風光明媚な寺院という以上に、先祖との関係を意識させる寺院であったということが推察されるのである。

◆魯庵如道について　露姫が夭折し、冠山がその追悼を人々に求めていた頃、魯庵は江戸白金の瑞聖寺（現港区白金台、松連寺は末寺にあたる）にいた。魯庵は、「魯庵道人」の名で、次のような追悼を寄せている。（図13）

瑞聖寺（読み下し）

玉露如泡大童女を追悼し奉る
六歳にして粧成る　玉露の顔
飜然として俄かに入る　法蓮の間
訃音報後　遺墨に驚く
愛霧　情雲　招けども還らず

魯庵道人敬草

図13『玉露童女追悼集』
第21巻収載の魯庵道人の追悼詩
（浅草寺所蔵）

魯庵の消息については、百草八幡神社境内にある文政十三年（一八三〇）に建立された「松連禅寺之碑」と同裏山にある天保十二年（一八四一）「松連寺詩碑」（図14）、年未詳「松連寺由緒言上ニ付」（東京都多摩市杉田家文書）などに記されている。

「松連禅寺之碑」は、歴代住職の名前や歴史、松連寺を復活させた中興開士としての魯庵の功績などが記されている。また、「松連寺詩碑」は、菊池五山の詩、市河米庵の書という当代一流の文人の手になるもので、魯庵が建立したものである。魯庵は、松連寺を復興するために、新たに寺内に十八景を作ったりして江戸の文人たちの興味を呼び、江戸から一日の行程の風光明媚な名刹として賑わったという。

今回、池田冠山・露姫と魯庵の関係が明らかになる中で、魯庵が江戸の瑞聖寺からやってきた僧侶であることが判明し、松連寺住職になる以前から、池田冠山をはじめとする江戸の文人と交流があったことがはっきりした。魯庵が、松連寺の振興に格別熱心であったことの理由の一端がわかり興味深い。

なお、真偽のほどは明らかでないが、杉田家文書「松連寺由緒言上ニ付」には、魯庵が竹木を伐採したり、寺の重宝である寿昌院の長刀を売却したりと、芳しくない評判が記されている。

魯庵の墓は、百草園の正門から二百㍍ほどの七生丘陵散策路のほとりにあり、精巧な造りの立派なものである（図15）。墓は寿塔であるため、入寂年月日等は不明である。ただ、七代住職の祖門衍活が文政六年（一八二三）六月に入寂しているので、その後、露姫追悼を寄せて後間もなく住職になったと考えられる。

◆池田冠山と魯庵　冠山と魯庵の交流が、いつからどの程度であったかはわからないが、江戸の文人たちとの繋がりから、お互いに知己を得ていたことは確かと思われる。資料では確認できないが、池田家に縁のある松連寺を、以前から冠山が訪れていたことは想像に難くない。とすれば、勝五郎の生まれ変わりの噂も、案外そのような人の繋がりの中から伝わってきたのかもしれず、自ら勝五郎の家を訪れるという異例の行動にも、納得がいくように思われるが、いかがだろうか。

図14 松連寺詩碑
（日野市百草　百草八幡神社本殿裏山）
天保12年（1841）9月建立、総高約400cm

図15 魯庵の墓石

（調査報告③）

菊沖藤兵衛と露姫遺墨

市川　三千代

宮内庁書陵部にて不軽居士（池田冠山）著『護法漫筆』を閲覧した時に、最後の頁に「活版所桃葉軒菊沖藤兵衛」の名と印が記載されているのを見つけた。藤兵衛は、『玉露童女追悼集』巻二に追悼を寄せているが、冠山から露姫遺墨の木版刷りを依頼された板摺師である。

「哀なる硯の海の菊沖も　はんするたびに涙ながるゝ　板摺師　菊沖藤兵衛」

菊沖藤兵衛について東京都府中市中央図書館・中央区京橋図書館資料室より情報を得、国立国会図書館で調査をした。

『日本書誌学大系』七十六　近世書林版元総覧（井上隆明著　一九九八年版）には、

菊沖藤兵衛　江戸日本橋通り四丁目
三社託宣一毛抄　釈亮盛　安永四　序　一七七五年
大黒宝嚢記　釈亮盛　寛政五
堂号本姓雅号一覧に桃葉軒　菊沖藤兵衛

と記載されている。

また、国会図書館所蔵デジタルコレクション「七夕草露集」（不可得上生菴誌・天明六丙午年六月）には「日本橋通り四丁目　菊沖藤兵衛」とある。

活版所があった江戸日本橋通り四丁目は、現在中央区日本橋三丁目にあたり、八重洲通りと中央通りが交差する丸善本店付近である。池田冠山の屋敷があった鉄砲洲（中央区明石町）に近く、江戸時代には多くの書物問屋が並んでいた場所である。

藤兵衛は、冠山の出版を数々引き受けていた信頼できる板摺師であったからこそ、冠山は大切な遺墨を依頼したのかもしれない。多くの書物の出版を手掛けていた冠山にとって、露姫遺墨を刷物にすることは、違和感のない行動であったのであろう。

（調査報告④）

向島の弘福寺と鳥取の池田家墓所

小宮　豊

江戸向島にある牛頭山弘福寺は、延宝元年（一六七三）黄檗宗の僧鉄牛道機の開山、稲葉正則の開基により香積山弘福寺を現在地に移して建てられた寺院である。弘福寺は、江戸時代には鳥取藩池田氏の菩提寺で、冠山の時代の弘福寺住職は第二十三世鶴峰といい、池田冠山と深い親交があった。

冠山と露姫は弘福寺に埋葬され、弘福寺には乱積みの石の上に亀趺を台座とした池田冠山の墓碑が存在する（図16）。その墓碑の左右と裏の三面には、冠山と交流の深かった佐藤一斎が撰文、松崎慊堂の銘、市河米庵の書による、冠山の事績が刻まれている。しかし、露姫の墓碑はない。関東大震災の折に弘福寺にあった墓碑は大変な被害を蒙り、昭和五年に池田家の正室など大きな墓石を鳥取・奥谷にある池田家墓所に改葬したそうであるが、鳥取の池田家墓所にも露姫の墓碑は存在しない。おそらく露姫のような小さな墓はこの時に合葬されてしまったのではないかと思われる。

図16 弘福寺（墨田区向島5-3-2）にある
池田冠山墓碑（上）と弘福寺本堂（下）

鳥取の池田家墓所は鳥取市国府町奥谷にあり、元禄六年（一六九三）に初代藩主池田光仲を埋葬して以来池田家の廟地とされている。

墓所内には光仲以後の七十八基の墓碑が立ち並び、周囲には二百六十基を超える灯籠が家臣等により供えられている。そして、ここにも池田冠山の墓石があり、冠山の六男第七代藩主定保が墓碑を建立している。冠山の墓石の背面に刻まれた文字は、

故從五位下縫殿頭入道源朝臣
定常天保四年歳在癸巳秋七月
九日丁丑考終於江戸銃洲賜邸
孝子長門守定保建　河三亥書

と、読める。書は「河三亥」とあるので、市河米庵である。

鳥取藩宗家の藩主は、鳥取以外の場所で逝去した場合も、必ず鳥取奥谷にある池田家墓所に葬られたが、歴代藩主夫人は、文久二年（一八六二）まではお国入りを許されなかったので、江戸弘福寺に埋葬された。前述の通り、その後昭和五年に墓石を鳥取奥谷にある池田家墓所の主の側に改葬されたのである。（図17）

しかし次の四名の藩主夫人は、実家の宗派の関係もあってか他へ埋葬された。

◎　初代光仲夫人「芳心院」（紀州徳川頼宣長女　茶々姫）池上本門寺に埋葬された。「万両塚」と呼ばれる立派な墓碑が池上本門寺境内の「永寿院」にある。

◎　二代綱清夫人「長源院」（盛岡南部重信長女　式姫）池上本門寺に埋葬された。墓碑は「千両塚」と呼ばれ、娘の「慶春院」の墓と並んで建立されている。

◎　四代宗泰夫人「桂香院」（紀州徳川宗直二女　久姫）千駄ヶ谷仙寿院に埋葬された。昭和三十九年東京オリンピック道路拡張工事に伴い、墓石は処分され、遺骨のみ上野寛永寺第一霊園五八八番の徳川家の墓に合祀された。

◎　九代斉訓夫人「泰明院」（将軍徳川家斉五十一女　泰姫）芝増上寺に埋葬された。昭和三十三年に徳川家霊廟へ合祀塔として改葬された。

図17 池田家墓所（鳥取市）にある池田冠山墓碑（左側）と墓所内

（調査報告⑤）

勝五郎が出会った多門傳八郎（おどでんぱちろう）は誰か？

矢口　祥有里

文政六年（一八二三）四月、小谷田勝五郎と父源蔵は、多摩郡中野村（八王子市東中野）の領主であった旗本多門傳八郎の屋敷へ呼び出され、かねて噂になっていた生まれ変わりの話について聴取を受けた。多門はその内容を「届書」として、四月十九日付で御書院番頭の佐藤美濃守に提出した。勝五郎父子は多門傳八郎から衣類や菓子、金などを与えられて帰宅した。

多門傳八郎といえば、歴史上最も有名なのは、いわゆる「忠臣蔵」に登場する多門家六代の傳八郎重共であろう。重共は元禄十四年（一七〇一）三月十四日、浅野内匠頭が吉良上野介に切り付けた刃傷事件の際に、目付として取調べと浅野の切腹に立ち会った。浅野の処分をめぐって老中らと対立した顛末を記した「多門傳八郎覚書」が伝えられている。この重共の代の宝永三年（一七〇六）に、多門家は多摩郡中野村の領主となり、明治維新を迎えるまで続いた。

本稿では、勝五郎父子が会った多門傳八郎が、多門家の何代目当主にあたるのかを調査して、判明した事柄や多門家の系譜について報告する。

多門家の系譜

まず、旗本家の系譜を調べる際に基本資料となる『寛政重修諸家譜』（以下『寛政譜』）を確認する。『寛政譜』は、寛政十一年（一七九九）から徳川幕府が編纂を始め、文化九年（一八一二）に完成した。「寛永諸家系図伝」（寛永十八年（一六四一）～同二十年完成）以降の系譜を追加しただけでなく、「貞享書上（譜牒余録）」、「干城録」、「略譜」、「諸家系譜」など新資料の提出によって書き改められた部分も多い。特に、寛政十一年、九代多門縫殿助（ぬいのすけ）信雅の代に提出された「諸家系譜」は、『寛政譜』には採用されなかった事柄が多く含まれており貴重である。しかし、この後、明治維新までの約七十年は新たな家譜の編纂はなく、幕末期に提出された「明細短冊」によって空白を補った。なお、上記資料はいずれも国立公文書館所蔵である。

『寛政譜』に載せられた多門氏は、次のⅠ～Ⅴまでの五家である。すべて三河安祥（安城）御譜代の多門縫殿助重則から始まる系譜に連なる。系譜によれば、多門氏の先祖は三河国額田郡大門村（愛知県岡崎市大門。現在の読みは「だいもん」）に住み、大門氏と称し、後に多門に改めたという。家紋は剣鳩酸草（けんかたばみ）である。Ⅰ～Ⅴまでの五家はいずれも明治維新まで続いた。【　】内は「明細短冊」の提出年と提出者で、『寛政譜』以降は…（点線）以下が「明細短冊」によって判明する人名である。なお、Ⅰ嫡家については、墓碑他からの情報も追加している。

Ⅰ嫡家　（別表参照）　武蔵・相模　高七〇〇石
初代　縫殿助重則
二代　縫殿助重利
三代　縫殿助重信
四代　縫殿助信清
五代　傳八郎信利
六代　傳八郎重共
七代　傳八郎信良
八代　傳八郎信照
九代　縫殿助信雅
…一〇代　傳八郎
一一代　縫殿助重孝
一二代　松之助【慶応二年　甲府勤番　多門松之助】のち傳八郎重明
一三代　傳八郎貞吉
一四代　縫殿助　（一五代以下略）

Ⅱ成正別家　武蔵　高六五〇石　品川妙国寺
Ⅰ家三代重信の三男平次郎（平左衛門）成正を祖とする。
成正―正勝―正景―正忠―律信―成美―一次郎成之
…銓之丞―鉄之丞―平次郎【慶応三年　陸軍奉行並支配　多門平次郎】

Ⅲ正友別家　高二〇〇俵　牛込法正寺
Ⅱ家初代成正の二男甚右衛門正友を祖とする。

正友―正輝―正泰―正方―孫右衛門正芳―正珉
…孫左衛門―甚右衛門―松之助【慶応元年　小普請組重立肝煎　多門松之助】

Ⅳ　正永別家　武蔵　高四〇〇石　品川妙国寺↓小石川慈照院
Ⅱ家初代成正の三男権左衛門正永を祖とする。
正永―正吉―親乗―親房―正延―正肥―金次郎正英
…金次郎―忠左衛門―鎗次郎【文久二年　田安家奥詰　多門鎗次郎】

Ⅴ　信正別家　高二〇〇俵　市谷長龍寺
Ⅰ家三代重信の四男平兵衛信正を祖とする。
信正―正吉―正明―正豊―豊通―正岑―正包―平兵衛正長―正清
…平兵衛―平兵衛―鎌之助【慶応元年　小普請　多門鎌之助】

法正寺の調査

『寛政譜』によれば、初代重則と二代重利は信光明寺（愛知県岡崎市）、三代重信と四代信清は蓮馨寺（埼玉県川越市）、五代信利からは牛込法正寺を葬地とすると書かれている。そこで、平成二十八年（二〇一六）十一月九日、新宿区岩戸八番地にある浄土宗法正寺を、勝五郎生まれ変わり物語探求調査団（以下、調査団）で訪問した。

久野真人住職のご厚意で過去帳を見せていただいたところ、「（弘化四年）八月十日　憲了院殿則順達懿居士　多門傳八良トノ事、甲府教安寺ニ葬」とあった。年代的に、勝五郎に会った可能性の最も高い多門傳八郎ということになる。また、別の過去帳には、「永録（禄）十卯年九月廿六日没ス　芋芳浄甫俗名多門縫殿助事重利云　施主多門傳八先祖　文化十四丑年九月廿六日二百五拾回吊依写」と書かれていた。文化十四年（一八一七）に二代重利の二五〇回忌をしたとの記事であるが、施主は前述の傳八郎と同一人と考えられた。

法正寺の墓地には、八代傳八郎信照の円頂方柱墓一基と、その向かって左隣に「多門家累代墓」と書かれた円頂方柱墓一基が現存している。八代信照の墓は、正面に信照の法名「義仙院殿定誉勇哲大居士」、向かって右側面に「寛政六甲寅年四月八日　俗名多門傳八郎源信照」、左側面に「施主　多門縫殿助信雅」の文字がある。（なお、「諸家系譜」では信照は四月二十一日没とある。）「多門家累代墓」は、向かって左側面に「多門傳八郎源信照妻」とあり、右側面には信照妻の没年月日「天明五乙巳年九月三十日」と「大正十一年十月改修」の文字があった。さらにその左隣にも「多門家之墓」と書かれた比較的新しい一基があったが、関連についてはよくわからなかった。（図18）

図18 多門家の墓（上）法正寺　図19（下）教安寺

教安寺の調査

法正寺での調査を元に、平成三十年（二〇一八）十一月十四日、調査団で山梨県甲府市城東二―八―四にある浄土宗教安寺を訪問した。ここで初めて、『寛政譜』以降の、九代信雅から一五代までの法名や没年月日などを知ることができた。（図19）

多門家の墓域には、中央正面に「多門家歴代之墓」と書かれた突頂方柱墓がある。大正十二年（一九二三）に一四代多門縫殿助（一三代傳八郎貞吉の長男）が建立したもので、側面に一三代傳八郎貞吉と一二代重明の後妻久子が亡くなった大正十一年以降、一五代までの計八人の名があった。

その左隣には、一三代傳八郎貞吉が建立した建立年未詳の「先祖累代」と書

かれた円頂方形の墓碑がある。表面に初代重則から九代信雅夫妻、一三代貞吉の先妻までの一八人の法名、裏面に没年月日があり、さらに向かって右側面に三方ヶ原で戦死した多門越中源重倍（重利と誤記されている）の名を入れたもので、これまでそれぞれ別の場所に葬られていた先祖の名を一つの碑にまとめ列記したものである。

その手前、墓域の左側には、尖頂方柱墓が二基並んでいる。一つは正面に法名「瑞雲院花月妙祥大姉」とあり、向かって左側面に「甲府勤番夏目金十郎長女　山梨県士族多門傳八郎妻墓　俗名ちか　三十年三ヶ月」、右側面に「明治九年一月二十四日卒　多門貞吉郎建之」とある。これは、甲府勤番夏目金十郎（二百俵）の長女で、一二代傳八郎重明（松之助）の先妻だった「ちか」享年三〇の墓である。一三代傳八郎貞吉が建てたとあるが、貞吉は明治二年（一八六九）生まれで、ちかが明治九年（一八七六）に亡くなってすぐに墓を建てるには幼すぎるため、後年になってから建てたものか、あるいは別の人物が貞吉の名で建てたものか。

その左隣には、「恭楽院殿楢誉守道居士」「誓信院殿弘誉重明耀旃居士」「洲含智瓊童子」の三人を合葬した墓がある。向かって左側面に「恭　十一代多門縫殿助重孝　万延二年六月十五日没」「誓　十二代多門傳八郎重明　明治十五年五月卅日没」とあり、一一代縫殿助重孝と一二代傳八郎重明の墓であることがわかる。他には情報がなく、童子については不明である。

一方、墓域の右側には、「憲了院殿天誉則順道懿居士」と書かれた笠付方柱墓一基がある。向かって左側面に「弘化四年丁未八月九日」「辞世　我灰ハ枕の元や手向酒」と刻まれているが、俗名はなく、没時の年齢についてもわからない。しかし、法正寺の過去帳にあった法名と没年月に一致する部分があることから、この笠付方柱墓こそが、他には一切名前の出てこない一〇代傳八郎の墓と推測された。（図20）

なお、大正七年（一九一八）三月発行の『山梨人事興信録』（甲府興信所／国立国会図書館デジタルコレクション）に、一三代多門傳八郎が掲載されているが、その中では一〇代傳八郎のことを「十代則順」、また一一代重孝を「重昌」と伝えている。

図20 10代傳八郎の墓
辞世の句は、「我灰ハ枕の元や手向酒」（わがはいは　まくらのもとや　たむけざけ）と読める。

一〇代多門傳八郎について

寛政十一年（一七九九）の「諸家系譜」提出時には、九代多門縫殿助信雅は四〇歳、小普請組仙石弥兵衛支配とある。そして教安寺の墓碑によれば、信雅は天保三年（一八三二）十月二十六日、七三歳で没した。つまり、文政六年（一八二三）に九代信雅は六四歳で健在であり、勝五郎に会うことも可能だった。しかし信雅の通称は縫殿助で、傳八郎が使われたことはない。また、文化十四年（一八一七）に二代重利の二五〇回忌の施主を傳八郎がつとめていることを考えると、信雅はこのときすでに隠居していたと考えられる。

「諸家系譜」によれば、信雅には惣領（嫡男）の正太郎信松、二男金蔵、三男鍬之助（『寛政譜』では鉄之助）がいると書かれている。信松は、寛政十年五月十四日に信雅が剣術上覧を勤めた際に打太刀として出たが、寛政十一年の時点でまだお目見えしていない。寛政七年（一七九五）に松平助十郎乗郡（のりくに）の娘と縁組したが、寛政十一年八月に病身を理由に離縁した。なお、信雅の妻は乗郡の妹であり、信松はいとこと婚姻したということになる。（さらにいうと、信雅の弟（信照の二男）乗之は乗郡の養子に入っている。）

順当にいけば、信松が一〇代傳八郎になったと考えられるが、一〇代傳八郎は諱、生年、没年齢、家督相続した時期などが不明であり、信松の弟が跡を継

いだ可能性や、他家から養子をとった可能性もあることから、一〇代傳八郎と信松が同一人物であるとの確証がなかなか得られずにいた。しかし、多門傳八郎が勝五郎についての届書を、「御書院番頭佐藤美濃守」へ出していること、いくつかの資料が多門傳八郎を「西丸書院番士」と書いていることを手掛かりに『文政武鑑』を調べたところ、当時、佐藤美濃守（信頭）が西丸御書院番一番組の頭をつとめていることがわかった。さらに「御番士代々記」（国立公文書館所蔵）の「西丸御書院番一番名前目録」で「多門傳八郎信松」の名を確認することができた。それによれば、多門傳八郎信松は、文化十二年（一八一五）四月七日に、小普請組近藤左京支配から西丸御書院番一番組となったとある。よって、勝五郎を屋敷へ呼んだのは、多門家の一〇代傳八郎（信松、則順）で間違いないことが判明した。

改めて読むと、『睡余操觚』（資料11）に、佐藤美濃守と一番組組頭の森勘右衛門も勝五郎を見たいというので、近々会わせるという文言もあった。ただ、勝五郎が多門家の用人谷孫兵衛に連れられて平田篤胤の元を訪れた四月二十二日には、西丸で書院番士（三番組）の松平外記による刃傷事件が起きたため、実際に勝五郎と会えたかは不明である。

さて、その一〇代傳八郎だが、弘化二年（一八四五）改　甲府魚町四丁目村田屋孝太郎板「甲官便覧」（一橋大学附属図書館幸田文庫デジタル）に、山手組の勝手小普請として「七百石　多門傳八郎」の名がある。

『山梨県史　通史編３　近世』（山梨県編集　山梨日日新聞社　二〇〇六年）や『甲府市史　通史編　第２巻　近世』（甲府市市史編さん委員会編集　甲府市　一九九二年）によると、寛政三年（一七九一）に新設された「甲府勝手小普請」とは、不良旗本・御家人への懲罰処分の一種で、甲府城下の守衛に当たるといった任務がある甲府勤番とは異なり、普段は小普請金を納めるだけで、明確な職務（役）は与えられていなかった、という。

甲府勤番多門松之助（一二代傳八郎重明）が慶応二寅年（一八六六）に提出した「明細短冊」には、

「多門松之助　寅歳二十七
高七百石武蔵・相模　本国三河　生国武蔵
祖父　多門傳八郎　死　甲府勝手小普請
父　多門縫殿助　死　甲府勤番相勤申候
安政三辰年三月二十七日父縫殿助願之通隠居被仰付、家督無相違被下置、如父時勤番被申渡候」

とある。つまり、松之助の祖父にあたる一〇代傳八郎は甲府勝手小普請のまま甲府の地で没し、一一代縫殿助（松之助の父）の代から甲府勤番を勤めるようになった。そして父の隠居願いによって、安政三年（一八五六）三月二十七日に一七歳の松之助に家督が譲られ、父と同じく甲府勤番となったことがわかる。（なお、『山梨人事興信録』には、多門家が甲府勤番となって甲府に赴任したのは九代信雅から、とあるが根拠は不明である。）

明治維新後の多門家

多門家は一二代松之助（傳八郎重明）のとき明治維新を迎えた。明治元年（一八六八）六月十四日、甲府勤番士のうち朝臣を希望する者は、そのまま甲府に居住することを許され、護衛隊に入り山梨県士族となった。多門家が朝臣となり甲府に残ったことは、一二代重明の先妻ちかの墓に「山梨県士族　多門傳八郎」とあることからも明らかである。しかし、多門家は早々に新政府に仕えることをやめて、当時としてはまだ珍しい牛肉割烹料理店「吹寄（ふきよせ）」を甲府に開店した。吹寄は、甲府市桜町三十八番地（現・甲府市中央四―三付近）にあって、大変に繁盛した人気店だったという。松之助（一二代重明）は明治十五年に四三歳で没した。

『山梨人事興信録』には、松之助の長男である一三代多門傳八郎貞吉の履歴や家族について詳しく載せられており、甲府市料理組合の取締役をつとめるなど活躍していたことがわかる。同書には、三代重信が拝領した家康の朱印状や船印などが多門家に残されていることも書かれている。しかし甲府市桜町の一帯は、昭和二十年（一九四五）七月六日の空襲でほぼ焼失したといい、多門家は県外へ移住しているようである。

多門家の知行について

『旧高旧領取調帳』（明治初期）によれば、一二代多門松之助の知行地は、武蔵国多摩郡中野村（八王子市東中野）に三五四石九斗と、相模国大住郡下大槻

村（神奈川県秦野市下大槻）に三九五石四斗九升八合あった。

四代信清の天正十九年（一五九一）五月十七日、それまで駿河、遠江、三河などにあった知行地に代わり、武蔵国川越、高麗郡鶴間村（埼玉県富士見市）に四〇〇石を拝領した。五代信利の寛永十年（一六三三）六月に、それまでの川越と高麗郡鶴間村に代わり、相模国大住郡下大槻村に四〇〇石を拝領した。慶安四年（一六五一）十一月（「諸家系譜」では寛永十九年四月）に蔵米三〇〇俵が加増され、高七〇〇石となる。

六代重共は、元禄十年（一六九七）七月、蔵米三〇〇俵分を、武蔵国埼玉郡のうちに新知三〇〇石として拝領した。八月に埼玉郡のうち羽生領本川股村（埼玉県羽生市本川俣）物成造込高二〇八石七斗余と、同郡騎西領辻村（埼玉県加須市北辻）物成造込高一〇五石三斗六升九合一勺をそれぞれ代官から受け取っている。宝永二年（一七〇五）十月、本川股村御用につき代官伊奈半左衛門に引き渡し、翌宝永三年正月二十三日、武州多摩郡のうち柚木領中野村物成造込高三五〇石九斗を代官町野惣右衛門から受け取った。

『寛政譜』では、重共が宝永元年八月二日、「其務に応ぜざるにより、小普請に貶され」、埼玉郡の采地（領地・知行所）を多摩郡へうつされた、と書かれており、懲罰的なものを感じさせる。だが、同時期に洪水で利根川の水が江戸へ押し寄せたこともあり、治水工事などの「御用」のために知行地を替えられたと考えれば、多摩郡中野村への采地替えはそこまでひどい懲罰的な内容であったのか、今後検討を要する。

以後、幕末まで、多門家は相模国大住郡下大槻村と武蔵国多摩郡中野村を合わせた約七〇〇石を知行した。多門家が甲府へ移住した後も、地頭所の用人らによって両村の支配は滞りなく行なわれていたようである。

屋敷について

三河安城譜代だった多門家は、三代重信が天正十八年（一五九〇）八月一日の徳川氏の関東入府に御供し、翌十九年武蔵国高麗郡鶴間村に住むようになった。寛永六年（一六二九）没の四代信清は川越の蓮馨寺に葬られたが、寛永十八年に没した信清の妻は法正寺に葬られていることから、この間に江戸に屋敷が与えられて住むようになったと考えられる。

六代重共が、元禄十四年（一七〇一）三月の浅野内匠頭の刃傷事件について記したとされる「多門傳八郎覚書」には、「傳八郎屋敷四番町通りに候」とある。宝暦五年（一七五五）刊行の吉文字屋版「番町絵図」（東京都立図書館蔵）には、表四番町通りに多門傳八郎と多門多宮（Ⅱ成正別家）の屋敷が並んでいるのが確認できる。寛政十一年（一七九九）の「諸家系譜」にも、拝領時期は不明としつつ、表四番町に拝領屋敷があり、寛政九年に四方相対替を行なったと書かれている。表四番町は現在の千代田区九段北の辺りである。

九代信雅については、「諸家系譜」に「居屋敷　本所二ツ目通御竹蔵後、屋敷　麻布新町」とある。本所二つ目通りは現在の清澄通り、御竹蔵（本所御蔵）は現在の墨田区、江戸東京博物館の北側一帯をさす。麻布新町の屋敷は、寛政四年（一七九二）七月の火災により類焼したようである。

一方、勝五郎の生まれ変わりを記した植田孟縉「武蔵名勝図会」、宮崎成身「視聽草」（国立公文書館蔵）、著者未詳「珎説集記」（國學院大學図書館蔵）は、多門傳八郎の屋敷を「根津七軒町」（現在の台東区池之端の辺り）と書く。しかしこの後に、多門家は甲府へ移住したまま、江戸へ戻ることはなかった。

以上、中野村領主の多門傳八郎家について述べた。別家も含めて、多門家にはまだまだ豊富なエピソードがあり、紙面の都合上紹介できず残念であるが、今後も新たな発見が得られるよう調査を継続していきたい。それにしても、いつ、いかなる理由で、一〇代傳八郎は甲府勝手小普請にされたのであろうか？一〇代傳八郎による勝五郎の取調べは、単に職務上の必要からだけとは思えない好奇心と熱心さがうかがえ、あの立派な墓と辞世の句からも、あるいは当時の文人らと交流があるような人物像を感じさせる。

別表　多門氏系譜（Ⅰ嫡家）　矢口祥有里作成　記号：（教）教安寺墓石　（法）法正寺　過去帳・墓石　（諸）諸家系譜　（寛）寛政重修諸家譜

	名	没年月日	享年	法名	葬地・墓	備考
初代	多門縫殿助重則	大永元年（1521）４月18日	63歳	西誉静安信士（諸）、西誉浄安信士（教）	信光明寺（岡崎市）	三河国安城譜代。松平信光、親忠、長親に仕える。
	妻	永禄元年（1558）4月20日	（未詳）	月窓妙円尼（教）		
２代	多門縫殿助重利	永禄10年（1567）９月26日	75歳	芋芳浄甫（法・教）	信光明寺（岡崎市）	松平信忠、清康に仕える。
	長女（重信の姉）	天文16年（1547）3月14日	25歳	普光院禅定法尼		内藤勝重の妻。竹千代（家康）乳母。疱瘡にかかった竹千代の身代わりを祈願して自害。
	二男　多門越中重倍	元亀3年（1572）12月22日	46歳	浄義（諸）		三方ヶ原合戦で戦死。子孫は本多中務大輔家来多門庄兵衛家として存続。
３代	多門縫殿助重信	文禄元年（1592）４月7日	72歳	浄順（諸）、我然一翁浄順大禅定門（教）	蓮馨寺（川越市）	松平広忠、家康に仕える。御朱印・日の丸の船印を賜る。天正19年、武蔵国高麗郡鶴間村（埼玉県富士見市）に住む。
	嫡男　平七郎重正	天正12年（1584）４月９日	25歳	道暁（諸）、慶雲院殿了心道暁居士（教）	信光明寺（岡崎市）	長久手合戦で討死。三方ヶ原初陣で家康から金張扇子を賜る（山梨人事興信録）。
別家Ⅱ	三男　平次郎成正	慶長15年（1610）12月7日（諸・寛）	43歳	照光院大眼（諸）	報身寺（駿府）	別家をおこす。多門一次郎成之が祖。武蔵国高麗郡に采地。父重信のため大眼山照光院浄円寺を建立。
別家Ⅴ	四男　平兵衛信正	寛永13年（1636）（諸）	75歳			別家をおこす。信清養弟。多門平兵衛正長が祖。
４代	多門縫殿助信清	寛永６年（1629）２月19日（教・寛）、18日（諸）	68歳	隆崇院殿梅岸道薫居士（教）	蓮馨寺（川越市）	重信二男。長久手合戦で家康から御弓を賜る。駿河・三河・遠江の采地を武蔵国高麗郡にうつされる（400石）。蓮馨寺に宝篋印塔あり。
	信清妻	寛永18年（1641）6月18日（教）、17日（諸）	（未詳）	光理院殿倫誉清運信女（教）	法正寺（新宿区）	羽太半蔵正次の娘。
５代	多門伝八郎信利	延宝４年（1676）４月15日（教・諸）	70歳（諸）	善勝院殿栄誉宗繁居士（教）	法正寺（新宿区）	大番、小普請奉行、徒頭。武蔵国高麗郡鶴間村から相模国大住郡下大槻村に知行替。加増して高700石に。
	信利妻　芳心尼養女	延宝丙辰（４）年（1676）４月（諸）	（未詳）	涼守実誉向真（諸）	法正寺（新宿区）	大奥の侍女某氏の娘。芳心院は３代将軍徳川家光の側室お琴の方。
	多門縫殿助清董	万治2年（1659）7月12日（諸）	26歳（寛）	頓覚源利（諸）	法正寺（新宿区）	信利嫡男。母は芳心尼養女。

	名	没年月日	享年	法名	葬地・墓	備考
6代	多門伝八郎重共	享保８年（1723）６月22日	65歳 （教・諸・寛）	得禅院殿定誉祐徹居士（教）	法正寺（新宿区）	朝比奈彦右衛門真辰の三男。書院番、小十人頭、目付。浅野内匠頭切腹時に、目付当番として検死副使にあたる。埼玉県の采地を武蔵国多摩郡中野村にうつされる（700石）。
	妻	享保13年（1728）11月17日（諸） 享保15年（1730）11月17日（教）	75歳	松林院殿法誉栄讃大姉（教）	法正寺（新宿区）	多門信利の娘。
7代	多門伝八郎信良	宝暦７年（1757）７月９日	56歳	信良院殿歓誉受法喜触居士（教）	法正寺（新宿区）	神保惣右衛門長重の三男、重共養子。書院番、西丸小納戸。
	妻	享保11年（1726）3月29日	（未詳）	瑞光院殿身誉清琢了昌大姉（教）	法正寺（新宿区）	内藤豊前守家臣竹林次郎兵衛の長女。
	後妻	寛政２年（1790）４月１日	73歳	慈昌院殿繁誉栄光大姉（教）	法正寺（新宿区）	内藤豊前守家臣竹林次郎兵衛の二女。
	養子　信熙	宝暦３年（1753）7月14日（諸）	23歳	光流教聞道徳（諸）	法正寺（新宿区）	牧野越中守成熙の八男。
8代	多門伝八郎信照	寛政６年（1794）4月8日（法） 寛政６年（1794）４月21日（諸・寛）	60歳	義仙院殿定誉勇哲大居士（法）	法正寺（新宿区）	弘前藩分家黒石領4000石当主津軽采女寿世の五男（四男とも）。祖父津軽政兕の正室は吉良義央の実の娘。書院番組頭。
	妻	天明５年（1785）９月30日	50歳	魏光院殿顔誉容珠大姉（教）	法正寺（新宿区）	多門信良の娘。
9代	多門縫殿助信雅	天保３年（1832）10月26日	（73歳）	宣暢院殿演誉杜州浄説居士（教）	教安寺（甲府市）	多門信照の長男。小普請組。寛政11年に40歳。
	妻	文化10年（1813）11月18日	（未詳）	霜演院殿英誉香倫大姉（教）	教安寺（甲府市）	松平助之進乗盈の娘（同助十郎乗郡の妹）。
10代	多門伝八郎信松・則順	弘化4年（1847）８月9日（教） 弘化4年（1847）８月10日（法）	（未詳）	憲了院殿則順達懿居士（法） 憲了院殿天誉則順道懿居士（教）	教安寺（甲府市）	西丸書院番。甲府勝手小普請。
11代	多門縫殿助重孝	万延２年（1861）６月15日	（未詳）	恭楽院殿楢誉守道居士（教）	教安寺（甲府市）	甲府勤番。
12代	多門伝八郎重明	明治15年（1882）５月30日	（43歳）	誓信院殿弘誉重明耀旃居士（教）	教安寺（甲府市）	甲府勤番多門松之助。慶応2年に27歳。維新後、牛肉料理屋「吹寄」開業。
	妻　ちか	明治9年（1876）１月24日	30歳	瑞雲院花月妙祥大姉（教）	教安寺（甲府市）	甲府勤番夏目金十郎の長女。
	後妻　久子	大正11年（1922）12月23日	64歳	信光院殿明誉智照大姉（教）	教安寺（甲府市）	吉田常吉長女。
13代	多門伝八郎貞吉	大正11年（1922）９月６日	54歳	実性院殿豁誉真順浄道居士（教）	教安寺（甲府市）	料理業「吹寄」店主。
	妻	明治40年（1907）2月27日	（未詳）	真教院殿広誉日演大姉（教）	教安寺（甲府市）	
	妻　ちよ	昭和28年（1953）9月14日	76歳	実岸院真室妙道大姉（教）	教安寺（甲府市）	三上助治郎長女。
14代	多門縫殿助	昭和37年（1962）７月20日	54歳	（法名なし）	教安寺（甲府市）	貞吉長男、教安寺「歴代之墓」建立。
14代	多門縫殿助　大助	平成13年（2001）12月１日	90歳	慈雲院明徳大環居士（教）	教安寺（甲府市）	貞吉次男。兄と同じ14代を名乗る。

三　平田篤胤と勝五郎

◆平田篤胤と幽冥界研究　平田篤胤（一七七六―一八四三）（図１）は、出羽国秋田郡久保田（秋田市）の出身で、二十歳の頃江戸へ出て、独学で国学を学んだ。文化元年（一八〇四）独立して「真菅之屋」と号し、十三年天磐笛発見に因んで「気吹乃屋（気吹舎）」と改めた。勝五郎の生まれ変わりが評判になった文化文政期には、篤胤は幽冥界に興味を持ち研究に励んでいた。文化三年には、備後国三次（広島県三次市）の住人稲生平太郎が、三十日間妖怪と格闘した記録、『稲生物怪録』を弟子に校訂させた。文化十年、代表作『霊能真柱』を刊行した。文政三年（一八二〇）十一月には、天狗に伴われて八年間異界を旅したという天狗小僧寅吉（十五歳）に出会い、彼の話を詳細に聞き取って『仙境異聞』をまとめた。

◆『勝五郎再生記聞』を著す　異界と交渉を持った人物に興味を持っていた篤胤にとって、あの世から戻ってきた（生まれ変わった）と語る勝五郎の話はどうしても聞いておきたいものだった。文政六年四月、勝五郎が江戸に来ていることを友人の屋代弘賢から聞いた篤胤は、中野村領主である旗本多門傳八郎宅を訪ねたが不在。二十二日に、多門の用人谷孫兵衛の計らいで湯島男坂下（東京都文京区）にあった気吹舎にやってきた勝五郎は、はじめは話をすることを嫌がったが、妻や娘が菓子を与えたり、気ままに遊ばせたりとなだめすかして、二十二・二十三・二十五日と少しずつ話を聞いた。特に、もう多摩へ戻るからと暇乞いに来た二十五日は、誰も聞いていない所でなら話すといったので庭の片隅で話を聞いた。篤胤は物陰からそっと話を聞き、その場には門人となっていた天狗小僧寅吉（嘉津間）や、友人の国学者伴信友などがいた。たどたどしく幼児の言葉で語る勝五郎の話を、伴信友は苦労してまとめ、六月、篤胤はそれをもとに『勝五郎再生記聞』を著した（資料６）。七月九日には、源蔵が勝五郎のほか兄・姉も伴って気吹舎を訪れ三日間滞在したが、篤胤は留守だったので門人たちが話を聞いた。篤胤が、勝五郎の生まれ変わりの話の中で特に注目したのは、彼をあの世へ誘った黒衣の老人、すなわち産土神の存在だった。

◆篤胤上洛する　文政六年七月、篤胤は多くの著作を携え念願の上洛を果たした。本居派の国学者からは冷遇されたが、詩歌を司る公家、冨小路治部卿貞直の尽力で、仁孝天皇・光格上皇に著書を献上することが出来た。このとき篤胤は『勝五郎再生記聞』を見せ、上皇をはじめ大宮御所の女房たちがたいへんな興味を示したという。上覧に供した本は、十月になって漸く戻ってきたが（当初の予定になかったものなので、献上はしなかった）、篤胤はこれを名誉とし、上皇が読んで折り曲げた箇所には、わざわざ朱で線を引いて記録に残しているほどである（図４）。こうして勝五郎の生まれ変わりは、都の人々にも知られることとなった。「再生記聞」は、篤胤の死後清書本が門人に頒布されたので、多くの写本が存在し、たくさんの人に興味を持って読み継がれたことがわかる。（図３・４）

◆勝五郎篤胤の門人となる　文政八年八月二十六日、勝五郎は気吹舎の門人となった。門人帳には「武州多摩郡中野村源蔵忰　小谷田勝五郎　十一才」と記されている（図５）。『気吹舎日記』の同日の項にも「源蔵、勝五郎を連て来」とある。勝五郎は、一年ほど気吹舎にいたといわれている。気吹舎で何を学んだのか、同じく門人だった天狗小僧寅吉にどんな話を聞いたのか、興味は尽きないが、記録は残されていない。

　生まれ変わりがきっかけとなり、勝五郎は稀代の国学者に出会い、学ぶ機会に恵まれ、一般の農民の子どもには経験できないことを体験することとなった。

◆その後の勝五郎と平田篤胤　生まれ変わり騒動が収まってからの勝五郎の消息については、ほとんど伝えられる資料が残っていない。地元では、農業の傍ら父源蔵の稼業であった目籠の仲買いを引き継ぎ、普通の人として生涯を終えたと伝えられている。明治二年（一八六九）十二月四日、五十五歳で亡くなった。墓は、生家近くにあったが、昭和六十年頃に、多摩ニュータウンの開発にともなって、八王子市下柚木の永林寺に移転し、現在に至っている。一方、平田篤胤は、天保十二年（一八四一）幕府により著述を差し止められ、国許秋田への帰還を命じられ、十四年閏九月十一日、失意のまま六十八歳の生涯を終えた。

図2『勝五郎再生記聞』草稿（国立歴史民俗博物館所蔵）
平田篤胤自筆の草稿。推敲の跡が見られる。
草稿は、『平田篤胤関係資料』のなかに、4点存在する。

図1 平田篤胤肖像
（国立歴史民俗博物館所蔵）

図3 日野市域にある『勝五郎再生記聞』の写本の一部
（図右から）『再生記聞　全』（弘化4年写　日野市郷土資料館寄託）、『勝五郎再生記聞　評論條々』（同館所蔵　故下田九一氏寄贈）、
『再生記聞　全』（同館所蔵　故立川愛雄氏寄贈）、『再生記聞』（安政2年写　同館所蔵　故清水庫之祐氏寄贈）、
『再生記聞　全』（高幡山金剛寺所蔵）

図5『誓詞帳』ー表紙と勝五郎入門の頁ー（国立歴史民俗博物館所蔵）
気吹舎に入門した人の名前が、年代順に記されている。勝五郎の11歳で入門というのは異例のことと思われるが、紹介者の名前がないので平田篤胤の勧めで入門したと考えられる。

図4『勝五郎再生記聞』ー文政仙洞叡覧本ー
（国立歴史民俗博物館所蔵）
表紙（右）と光格上皇が付けた折筋（朱線を引いて示す）（左）

（調査報告⑥）

平田篤胤『上京日記』について

鈴木　淳世

文政六年（一八二三）七月、平田篤胤（四十八歳）は、かねてから念願であった上京を果たすため、江戸を後にした。その目的は、自作の著書『古史成文』『古史徴』『開題記』『神代御系図』『霊能真柱』『古史伝』の抄写本を朝廷に献上すること、本居宣長亡き後の鈴屋を訪問し、宣長の墓に詣でることなどであった。この旅中に記した『上京日記』は、上・下二巻、江戸出発の七月二十二日から始まり、京を後にして伊勢路に向う直前の十月五日で終わっている。（図6・資料7）

七月二十二日篤胤は、門人太田豊太郎朝恭と下僕又兵衛（又平）を伴い江戸を出立、東海道を上り八月六日京都に入った。翌七日室町にあるヌテノヤ（鐸舎）城戸千楯が経営している本居学の学舎）を訪れるが、城戸千楯に拒まれ寄宿出来ず、以後篤胤は、京都における活動をこの城戸を中心とした鈴屋の一派に妨害される。

そのような中で篤胤に協力したのは、服部中庸（箕田水月）と六人部節香・是香父子、それに京都を中心とした気吹之舎の門人たちであった。彼等の尽力により、九月一日献上本を冨小路貞直の屋敷に届け、貞直から仙洞御所（光格上皇）と禁裏御所（仁孝天皇）へ献上することができた。しかし、光格上皇は、かつての尊号事件以来幕府と対立しており、そのため九月一日の項には、「されど余り世にひろくしれぬ様、かつ関東の察を恐れ給ふよし、返々返々御しんしやく也」と幕府との緊張した関係が読み取れる。

なお『勝五郎再生記聞』は献上本ではないが、「仙洞御所・女房衆まで差出置たり」と記されているように、仙洞御所に届けることができた。後日戻ってきた『勝五郎再生記聞』の表紙には「文政仙洞叡覧本」と朱書され、その顛末も篤胤によって朱書で書き添えられている（図7）。この『上京日記』には、京都における篤胤の門人や鈴屋の門人、冨小路貞直を始めとする宮中の人々等多くの名前が列記されているので、主な人々を左に記しておく。

＊湯浅定憲　号恒山。後に大和と改める。国学者、京都の人。平田篤胤に入門。

＊城戸千楯　宣長の門人、書林恵比寿屋の主人、鐸屋を開き京都における鈴屋の拠点としていた。上京した篤胤の行動を種々妨害する。

＊服部中庸（箕田水月）　宣長の古参の門人、上京以前から篤胤と交渉があったが、八月七日鐸舎で初めて篤胤と対面、篤胤の人物に傾倒し、宣長の門人ではあるが、献上本などについて種々相談に乗り、対策を講じている。

＊六人部右衛門節香　山城国乙訓郡向日神社神主。

＊六人部縫殿是香　節香の養子。節香・是香親子は上京した篤胤に心腹し、篤胤著書の禁中への献上に多大の協力を行なった。是香は九月二十一日に篤胤の門人となる。是香の母は円乗院と呼ばれ、仙洞院皇后付の人である。

＊冨小路貞直　公卿、歌人貞直はかつて本居宣長が上京した折、宣長の講釈を聴講しており宣長の古学に関心を持っていた。篤胤とも上京以前から何らかのつながりがあったのであろうか。篤胤の著書献上に協力を惜しまなかった。

＊小侍従　冨小路貞直の娘明子のことで、光格院の侍姫。篤胤の献上本は、貞直から小侍従の手を経て仙洞御所へ届けられたと思われる。

なお、**江戸丹後為之・紅屋吉兵衛（紅吉）・業合（相）大枝（備前国八幡宮神主）**等は、気吹之舎の門人である。

図6『上京日記』上・下　表紙（右）と8月13日の項（左）
（国立歴史民俗博物館所蔵）

図7『勝五郎再生記聞』―文政仙洞叡覧本―
（国立歴史民俗博物館所蔵）
光格上皇の上覧に供したときの顛末が、篤胤の自筆で朱書されている。

（調査報告⑦）

『気吹舎日記』に見える勝五郎

北村　澄江

国立歴史民俗博物館所蔵『平田篤胤関係資料』中の『気吹舎日記』から、平田篤胤の学舎における勝五郎の動向がわかる部分を紹介する。

『勝五郎再生記聞』によれば、勝五郎が初めて気吹舎に来たのは、文政六年（一八二三）四月二十二日のことである。『気吹舎日記』（表題なし　平田篤胤関係資料一―二　図8）には

○勝五郎親子初て来る　谷孫兵衛同道　同廿三日

とある。谷孫兵衛は、中野村の領主多門傳八郎の用人である。二十三日も谷孫兵衛に連れられて気吹舎に来たということで、『勝五郎再生記聞』の記述と一致する。『気吹舎日記　書抜』（同一―一　図9）にも、文政六癸未年四月の項に

○廿二日　勝五郎此頃より此方ニ居

とある。なお、一―一は娘婿銕胤（かねたね）が、篤胤の文政七年以前の日記を整理したもの、一―二は篤胤自筆の日記である。

（日記には記載がないが、『再生記聞』には七月九日に源蔵は、勝五郎兄姉三人を連れて気吹舎を訪問し、三日間逗留したとある）

図8

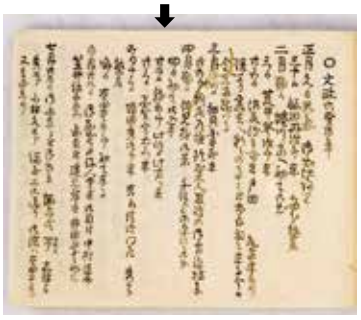


図9

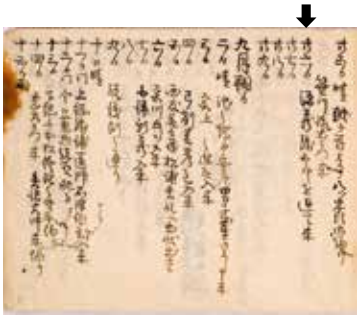


図10

『誓詞帳』によれば、勝五郎は、文政八年八月二十六日に入門したことがわかるが、銕胤の日記（表題「日記第一　篤真」同一―五　図10）の同日の記事にも、

廿六日　源蔵勝五郎を連て来

とあり、入門の日に、勝五郎が気吹舎に来たことがわかる。

また、同日記文政九年三月（図11）には、

廿五日　曇　越谷をち様御帰り、内蔵助、勝五郎・勇太郎を連越ヶ谷へ行

廿六日　雨　父君越ヶ谷へ御出

廿八日　天気　父君御初我等越ヶ谷より帰ル

とある。内蔵助は銕胤のこと。越谷（埼玉県越谷市）には、有力門人山崎篤利がおり、妻織瀬の出身地でもある。篤胤はしばしば門人の指導に越谷へ赴いており、久伊豆神社の境内には、篤胤が逗留した建物があったという。この時勝五郎は、篤胤・銕胤に同道して越谷へ出かけているのであり、この頃は気吹舎で暮らしていたのだと思われる。同文政十年七月の項（図12）には、

廿一日　勝五郎来ル

廿二日　今朝より勝五郎来

とある。二十二日の項は、二十一日にむけて線が引かれ、勝五郎の記述が二十一日の事であると示されているので、七月二十一日朝から勝五郎が気吹舎にやってきたということであろう。朝、湯島の気吹舎に来たということは、勝五郎はすでに江戸にいたということになる。目籠の仲買をしていた父源蔵の定宿は、馬喰町（東京都中央区）にあったということなので、父と共に江戸に来ていたのであろうか。詳細は不明である。これ以降の気吹舎日記には、勝五郎の名前は見えないということである。

図11

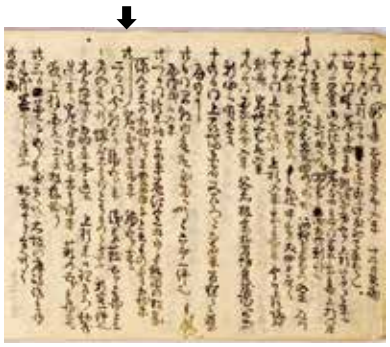


図12

（調査報告⑧）

勝五郎が訪れた西教寺

小宮　豊

勝五郎親子が領主の旗本多門傳八郎に呼び出されて江戸に来ている時に、西教寺を訪れたことを、平田篤胤は『勝五郎再生記聞』で次のように記している。

「右異童のこと、或人の筆記を見たりし後に、地頭へ呼出され吟味ありて、支配頭へ届ケ書出たるよし、其ノ写をも見たりけるに、屋代輪池翁のなほ己にゆきて尋ねよと云るゝによりて、四月二十一日の日に多門主の用人谷孫兵衛といふ人を訪ひて問きゝけるに、其日ハ勝五郎、父源蔵と駒込の西教寺といふ寺へ、或人の計らひにて行たる由にて居合さず、谷氏にあらましを問ひて帰れるが、同人の計らひにて、翌二十二日に源蔵、勝五郎を連来りしかバ、屋代翁へも知らせたるに翁も来らる」

平田篤胤は『勝五郎再生記聞』の中で再三「或人」という言葉をつかっているが、文中の「或人の筆記」とは、池田冠山の著『勝五郎再生前生話』を指していると考えられるので、或人は、池田冠山であると推量できる。

西教寺は、東京大学農学部の道路を挟んだ西側、文京区向丘にある浄土真宗の寺院である。平成二十三年三月に「勝五郎調査団」では西教寺を訪問した。勝五郎が、どのような理由で西教寺を訪問したのかを調査するためである。

生憎、村松賢英住職はご不在だったが、住職夫人に応対していただいた。西教寺には勝五郎のことは伝承されていなかったが、池田冠山に関する資料はあるということで、池田冠山に関するものを中心に資料を拝見させて頂くことが出来た。

勝五郎が西教寺に招かれた時の住職は、第八世の慧海（えかい）潮音上人である。慧海上人は、天明三年（一七八三）に江戸四谷の酒屋に生まれ、西教寺の養子になり、後に住職となった。儒学・神道も学び、そのためか、仏教関係者だけでなく、儒学者や国学者など多くの知識人たちと交流があったが、中でも池田冠山との交流が深かったようである。ちょうど西教寺では現存する資料を調査中とのことだったが、資料が最も多いのは池田冠山に関する資料だということだった。小谷惠造氏も『池田冠山傳』の中で冠山と交流が深かった人で忘れてならない人物が潮音上人であると述べている。西教寺境内の墓地の一画に慧海潮音上人の墓石があった。（図13）

図13 慧海潮音上人の墓石
（西教寺境内墓地）

西教寺を訪問し、池田冠山ゆかりの寺院であったことがわかり、勝五郎が池田冠山のはからいで西教寺を訪問したのだということが明らかになった。慧海上人は、勝五郎が江戸に来ていることを冠山から聞いて、会ってみたいと言ったのかもしれない。慧海潮音上人も露姫に追悼の書を寄せている。

西教寺・根津七軒町（台東区池之端）の多門傳八郎の屋敷・気吹舎のある湯島天神男坂下（文京区湯島）は、不忍池の周辺で、そう遠くない距離にある。近くまで来ていたということが、訪問の一つの理由であったのかもしれない。勝五郎は、慧海上人とどのようなやり取りをしたのだろうか。

『再生記聞』には、二十一日に行った寺（おそらく西教寺）で、茶菓を出してもてなしてくれたのに、僧は嫌いだと言って手を付けようとせず、父源蔵が申し訳なく思ったという記述もある。

慧海潮音上人は、各地に出向いて見聞を広めたり、漢詩や仏教の勉強をしていたが、天保六年（一八三五）五十二歳の時に、奈良の吉野など西国のあちこちを旅行した。年老いた慧海上人にとって一世一代の大旅行だったようで、出発に際し当時の多くの文人たちが慧海上人に漢詩文などを贈った。これ等を巻物に仕立てたのが同寺にある「西国見聞録」である。「送別」の文頭には池田冠山の漢詩文が記されていたが、冠山と上人の深い関係が伺える資料である。

（調査報告⑨）

『小谷田異童傳』の発見

北村　澄江

平成二十七年四月、東京都府中市郷土の森博物館において、『小谷田異童傳』を閲覧することができた。同館に寄贈された府中市小野宮の内藤治右衛門家文書中の一冊（資料番号U―9―25）で、同館学芸員の花木知子氏から、内藤家文書の中に勝五郎に関する資料があるという情報をいただいたことによるものである。

同書の内容は、平田篤胤『勝五郎再生記聞』の写しであったが、奥書に大変興味深い記述があった。左に全文を掲載する。

此書伊吹廼舎平田大人の書つめて
小谷田勝五郎がもとへおくりたまへる
をことしやよひばかり勝五郎が妹なる
ものふとはなし出せしかばしばし
かりて見まくといひやりけるに勝五郎が
とくおこせしかば燈の本にて写しおはりぬ
原本題名なし以かりに小谷田奇（異）童傳
と記して家蔵の一となすハ嘉永七年
甲寅の卯月望の日になん　　懐安

図14『小谷田異童傳』表紙（右）と奥書（左）
（府中市郷土の森博物館所蔵）

この奥書によると

① この本の原本は平田篤胤本人が書いたもので、勝五郎に贈ったもの。
② 勝五郎の妹からこの話を聞き、勝五郎に借用を依頼し書写した。
③ 原本には題名がなく、仮に「小谷田異（奇→異に訂正）童傳」と記した。

ということがわかる。嘉永七年（一八五四）四月十五日のことであった。

内藤治右衛門家は府中市小野宮の旧家で、代々の当主は学問を好み、詩歌に長じている人が多い、また、多くの史料に詳細な奥書が付けられていることも、特長であるという。（同文書目録解説による）

嘉永七年には、勝五郎は三十九歳であり、平田篤胤から贈られた『勝五郎再生記聞』の写本を所持していたことになる。また、妹は、文政六年（一八二三）当時四歳であった「つね」と考えられる。「つね」は、越後出身の杜氏（とうじ）山岸萬吉に嫁ぎ、萬吉は四谷（府中市）で酒造業を営んでいた。勝五郎の没後、記念碑を建立しようとして奔走した人でもある。（資料18参照）

書写した懐安は、内藤家六代目当主重鎮のことであり、近所に住む「つね」とは、知り合いであったのであろう。同書の発見により、勝五郎が平田篤胤本人から『勝五郎再生記聞』の写しをもらっていたという、今まで知られていなかった事実が判明した。それが、いつのことであるのかは不明であるが、勝五郎は大切に保管していたのだと思われる（同本の所在は現在不明）。気吹舎から中野村に戻った後の消息がほとんど知られていない勝五郎の動向を知る情報としても貴重である。

平田篤胤自筆の『文政仙洞叡覧本　勝五郎再生記聞評論條々』（上覧本）と内容を比較してみると、読点や仮名使いなどの相違といった程度で、内容はほぼ同一のものといってよいが、注目される点がいくつかある。

その一つは、題名が付けられていなかったという点である。篤胤は、上覧本の冒頭に「表紙も付けないまま上洛し、戻ってきてから表紙を付けた」と記している。勝五郎が題名を付けられていない再生記聞をもらったとしたら、それは上京前とも考えられるが、題名は後に失われたものかもしれず、上京前に写しを与えるということは、考えにくいことである。もう一点、文政六年四月十九日付多門傳八郎の届出書写における藤蔵の葬地が、平田本では三沢村「禅宗医王寺」と誤記されているのに対し、異童傳では「真言宗医王寺」と正記されている点が、注目される。医王寺は、真言宗高幡山金剛寺の末寺で、明治になって廃寺となった。平田門人の写本では、禅宗という誤記がそのまま踏襲されている。禅宗→真言宗の訂正は、これを写した内藤重鎮が行なったのか、勝五郎自身が行なったのかはわからないが、地元の人でなければ気づかないことである。異童傳のほか、勝五郎家の本家を継承する小谷田忠一良氏所蔵『小谷田勝五郎再生記』と高幡不動尊所蔵『（再誕奇童）實聞記』など、「再生記聞」の題名を持たない写本が同様に「真言宗医王寺」と正記されていることを考えると、多摩地域では、平田門人とは別系統の写本が流布していた可能性も考えられる。なお、勝五郎母せいの父は、平田本では「村田吉太郎、文政四年四月廿七日七十五歳にて死去」とあるが、異童傳では「村田太郎右衛門、文化年中九月廿二日五十六歳にて死去」とあり、高幡不動本は同じ、小谷田家本は、「文化四年中　同」で名前は両方が併記されている。（上覧本との比較は高橋國夫が行なった）

（論考１）

『勝五郎再生記聞』の諸本

中川　和明

平田篤胤の『勝五郎再生記聞』には様々な写本があって、全国に多数残されている。これらの写本を調査すると、『勝五郎再生記聞』がいかに流布し読まれていたか、といったことを知ることができるのである。

まず、国立歴史民俗博物館（平田篤胤関係資料八―五―三―一）には、文政六年（一八二三）に篤胤が上京した際、冨小路治部卿（貞直）を通して仙洞御所に上覧に供し、大宮御所（女院御所）でも回覧され、後に篤胤のもとに返却された原本が所蔵されている。右の原本の見返しには貼り紙があり、『北窓瑣談』が引用する『菽園雑記』の一節を紹介している。たまが身体を離れる一証とすべきであるという。この貼り紙は、三河国の羽田野敬雄（文政一〇年七月二一日入門）が書いて張りつけた可能性がある。後述する羽田八幡宮文庫本『再生記聞』の本文の頭注に「タカヲ云」として右の貼り紙と同じ内容が書かれているからである。

この原本巻頭に、文政六年十二月十六日付の篤胤自筆（朱筆）の序文に相当する文章が綴じられていて叡覧と返却までの経緯が詳しく記されている。原本の本論部分は、①文政六年四月十九日付の御書院番頭佐藤美濃守宛多門傳八郎届書、②関係者の調書、③文政六年四月二十九日付立入事負記、④文政六年五月八日付伊吹廼屋あるじ記、⑤文政六年六月七日付伊吹舎主又記によって構成されている。複数の者によって書かれたものを篤胤がまとめたのであり、篤胤自身が書いたのは、このうち④・⑤である。①は旗本多門傳八郎が源蔵と勝五郎の取り調べを行なって作成したものである。②は藤蔵とその家族の調書、さらに勝五郎とその家族の調書からなっている。③は立入事負（伴信友）が勝五郎の再生譚について整理して書いたものである。④は伊吹廼屋あるじ記、すなわち篤胤による記録である。まず、同年四月二十一日に、篤胤は多門の用人谷孫兵衛を訪問して、一件のあらましを聞いた。同年四月二十二日、二十三日、二十五日、平田塾で勝五郎と会見してその様子を記録している。篤胤は再生譚を記したうえで、生まれ変わりは産土神の取り計らいによるものとし、さらに産土神と中国の城隍神とが同一であるといった自説を展開している。⑤は伊吹舎主又記、すなわち篤胤による追記で、多四郎一件など産土神に関する事例が記されている。「生まれ変わり」問題が、産土神の問題に移行しているのである。漢籍からの引用も多い。この原本の裏表紙見返しの部分に、羽田野敬雄による貼り紙があり、神隠しの事例（三河国松平村の神隠し一件）が紹介されている。産土神六所明神に祈願したところ、異人に神隠しにあった小僧が無事に戻ってきたというものである。この小僧は二度も神隠しにあっている。羽田野は十三、四年前に知り合いの僧侶からこの話を聞いたという。なお、国立歴史民俗博物館には、篤胤自筆の「勝五郎再生記聞草稿」（平田篤胤関係資料八―四―二六―四）も所蔵されている。

多和文庫本は、篤胤自筆草稿『再生記聞』の一部である。この文庫は讃岐国平田門人（慶応元年五月朔日入門）の松岡調が明治十八年（一八八五）に神社の境内に設立した香木舎（かきのや）文庫にはじまるものである。「多和文庫目録　上・下」（『国文学言語と文芸』七十九号・八十一号、東京教育大学国語国文学会）をみると、同文庫には平田国学関係の書籍が二十五部ほど確認できる。平田塾では門人の求めに応じて、篤胤自筆のものを贈与することがあるため、この自筆草稿『再生記聞』も同様であろう。

東京国立博物館本は、幕臣堤朝風による転写本である。文政七年（一八二四）の書写奥書があることから、『勝五郎再生記聞』成立後の比較的早い段階で筆写されたものである。堤と篤胤は懇意であって、身近なところから『再生記聞』は広まっていったとみられる。堤は篤胤の『霊能真柱』に序文を寄せるなど平田国学にはたいへん重要な人物であり、『再生記聞』の中にも登場する。昭和期に東京国立博物館に同書を寄贈した徳川宗敬は、水戸徳川家の出身であったが一橋家徳川達道の養子となり、貴族院議員を務めた人物である。

羽田八幡宮文庫本は、篤胤生前における『再生記聞』の流布を考察するうえで、貴重なものである。文政十一年十二月七日付書簡で平田篤真（銕胤）が鈴木陸奥守（重野）・羽田野常陸（敬雄）・岩崎典膳に対し、「再生紀聞ハ被成御一覧候哉如何」（『愛知県史』資料編二〇近世6学芸、五〇四頁）と尋ねているが、読むように勧めているのであろう。文政十三年二月十五日付の羽田野宛平田銕胤書簡によれば、「再生紀聞差上申候、此本ハ大悪本ニ而写し甚不宜誤字も有之候間、其思召ニ而可被下候」（田崎哲郎「平田家から羽田野敬雄の書簡

をめぐって」、愛知大学綜合郷土研究所『総合郷土研究所紀要』第五十二輯、一八三～二〇三頁）とある。これによれば平田塾から羽田野に送られた写本は写し方のよくない「大悪本」であったという。現在、豊橋市図書館羽田八幡宮文庫には羽田野が文政十三年三月二十七日に筆写した『再生記聞』が残っている。奥書から岩崎も『再生記聞』を読んでいたことがわかる。岩崎によれば、『再生記聞』は平田塾では「門外不出とさだめていまだ他見はゆるし給ハぬ書」とされていて、容易に見ることのできないものであったという。羽田野が所蔵することでさらにそれを転写したものが広く読まれることになった。例えば、新城市教育委員会本や神宮文庫本（三本のうち二本）は、羽田野所蔵本が転写されたものである。神宮文庫本（三門４５６１号）は、天保三年（一八三二）正月前川吉興が「灯火之夜」に「旅宿」において羽田八幡宮文庫本を筆写し、さらに天保五年（一八三四）二月二十五日に前川本を伊勢神宮（外宮）の神職である御巫清直（みかなぎきよなお）が写したものである。次に、神宮文庫本（十一門２０４５号）は、御巫清直の筆写した写本を借りた屋満久智起業（おきなり）（山口起業）が嘉永四年（一八五一）十二月十五日に筆写した写本である。近年、木越俊介「国文学研究資料館蔵　平田篤胤『再生聞問』生まれ変わりの少年は何を語ったのか？」（『広報たまちいき』令和四年七月号）が、嘉永六年（一八五三）五月十八日に山口起業の写本によって度会某が筆写した写本が国文学研究資料館に所蔵されていることを紹介した。この山口起業（皇大神宮主典兼権大講義）撰の『神判記實』（明治七年刊）には、勝五郎の再生譚が掲載されている。後の山口起業原撰『口語神判記實』（昭和十四年一月刊、神道天行居、国立国会図書館デジタルコレクション）には、口語訳したものが載せられている。

東京大学図書館本は、三河国平田門人竹尾高鞆（たかとも）（正寛、文政十年入門）が天保五年（一八三四）七月二日に筆写したものである。場所など筆写の経緯は明確ではないが、高鞆の父竹尾正鞆（まさとも）が三河国から江戸に出ていた時期であることが、『気吹舎日記』からわかる。高鞆が筆写した写本から転写本が多数作成されている。東京大学図書館本→岩瀬文庫本（同年九月二十二日在慈堂写）→刈谷市立図書館本（同年一二月四日蓬慮写）の順に転写がなされていった。岩瀬文庫本には、三河の国学者渡辺政香の書き入れがある。刈谷市立図書館本は刈谷藩の国学者村上忠順（ただまさ）の旧蔵書であり、蓬慮は忠順の号である。

東洋大学図書館本のうちの一本には、天保六年六月写の奥書があり、篤胤生前に筆写されたことがわかる。同大の『再生記聞』はいずれも哲学者井上円了の旧蔵書である。

京都大学図書館本は天保十三年（一八四二）八月に伊勢国桑名の在住者が転写したものである。天保十四年（一八四三）閏九月に国許秋田で篤胤が病没したため、この京大本は篤胤晩年に筆写されたものということになろう。篤胤生前には『再生記聞』の流布は限られていたと考えられる。京大本は、元は明和年間に開業した名古屋長島町の貸本屋（大野屋惣八）の旧蔵本である。大規模な貸本屋であり、『再生記聞』も広く読まれていたものと考えられる。

日野市郷土資料館には、弘化四年（一八四七）三月四日に平田銕胤から借りて「稲之屋主」が筆写した写本が寄託されている。篤胤没後の比較的早い段階に筆写された写本である。この写本には巻末に、中野村と程窪村を描いた絵図が追加されていて興味深い。（図15）

同館には、安政二年（一八五五）に甲斐国巨摩郡の金丸山大神の神官内藤青丘が、友人田中年胤（平田門人、天保十二年正月十日入門）の所蔵本を借りて筆写した転写本も所蔵されている。田中は、篤胤晩年の門人であり甲斐国の平田門人グループの中心的人物の一人である。甲斐国の入門者のうち十人ほどを紹介する役割を果たした。篤胤著『玉襷』巻八の校合者三人のうちの一人でもある。田中は「平田篤胤大人著御国学書類取次所」（安政三年九月二十三日付平田銕胤宛田中年胤書簡、平田篤胤関係資料三―一六―九三―一二）の設置を願い出るなど、平田塾の書籍を流布させることに尽力した。さらに、「誠語れハ聞人のなき世の中なから我嚆矢と相成候積りニ御座候」（安政五年七月十六日付平田銕胤宛田中年胤書簡、平田篤胤関係資料三―一九―二―一三）と述べているように、田中は

図15『再生記聞』全（弘化4年 日野市郷土資料館寄託）**に添付された絵図**
「稲之屋主」が、「武蔵國輿地全図」「東都近郊全図」を参考に作成した。

平田国学の拡大に強い意志を持っていた人物である。（24頁表参照）

府中市郷土の森博物館本は、嘉永七年（一八五四）四月の写本である。奥書によれば、篤胤から小谷田勝五郎のところに贈った写本を、勝五郎の妹から借りて転写したものである。表題がなかったため、『小谷田異童伝』という書名を付けたという。勝五郎のところに『再生記聞』が送られていたというのは、この写本によってはじめて明らかになったことである。（調査報告⑨）

静嘉堂文庫本の一本は、色川三中旧蔵の『再生記聞』である。平田塾が正式につくって有料で頒布した清書本の原物とみられるものであり、たいへん貴重な一本といえる。土浦の色川三中は平田門人ではないが、『再生記聞』を入手していたのである。但し、入手年は明らかではない。静嘉堂文庫のもう一本は、田中頼庸の旧蔵本である。田中は薩摩藩出身の国学者である。神祇省に入り、大教正・伊勢神宮大宮司・神道神宮教管長となった人物である。

青森県立図書館本は、津軽平田門人（安政四年六月十一日入門）で富商の今村真胤（大津屋要太郎）が平田銕胤から送られた『再生記聞』を安政四年（一八五七）五月二日に筆写したものである。奥書によれば、銕胤から送られたものをそのまま写したという。

無窮会専門図書館本は、平田門人（文久元年十二月十七日入門）であった井上頼国の旧蔵書である。国立国会図書館本は、印記から「福山国史寮」の旧蔵書であったことが知られる。その他、『勝五郎再生記聞』の写本は多数あり、同書がかなり広範囲で読まれていたことが窺われるであろう。人々の関心の高さをよく示している。今後も新たな写本が発見されるものと思われる。

『勝五郎再生記聞』日野市郷土資料館関係資料一覧

No.	所蔵	外題	内題	刊写	冊数	墨付	法量（cm）	印記	書写事項	見返	篤胤の序文	多門の届書	関係者の調書	伴信友記	伊吹廼屋のあるじ記	伊吹舎主又記	裏表紙の見返	備考
1	日野市郷土資料館寄託1	『再生記聞　全』	『再生記聞　全』	写本	一冊	46	27.3×19.4	有	稲之屋主写・小石川区原町七十一番地　島田蔵本	×	×	○	○	○（伴信友記）	×	○	×	中野村付近地図
2	日野市郷土資料館寄託2	『再生記聞』平田篤胤述	なし	写本	一冊	35	23.8×16.8	なし	なし	×	×	○	○	○（伴信友記）	○	○	×	
3	日野市郷土資料館寄託3	『再生記聞』	なし	写本	一冊	49	24.0×16.8	なし	なし	×	×	○	○	○（伴信友記）	○	○	×	罫紙
4	日野市郷土資料館寄託4	『異聞珍書』	なし	写本	一冊	52	27.5×20.3	なし	文政13年3月27日羽田野敬雄写／乙亥秋8月秦慷国蔵写	×	×	○	○	○（立入事負記）	○	○	×	
5	日野市郷土資料館下田九一氏寄贈	『再生記聞』	『再生記聞　評論條々』	写本	一冊	52	27.0×20.0	有（4種）	島田蕃根蔵本（貼紙）	×	×	○	○	○（立入事負記）	×	○	×	帙入

6	日野市郷土資料館 立川愛雄氏寄贈	『再生記聞　全』	なし	写本	一冊	42	26.9× 20.0	有（3種）	羽田野敬雄	×	×	○	○	○（伴信友記）	×	○	後藤蔵書	後付表紙有
7	日野市郷土資料館 清水庫之祐氏寄贈	『再生記聞』	なし	写本	一冊	54	24.2× 16.8	有「東京八王子市八日町住清水庫之祐」	内藤青丘	×	×	○	○	○（伴信友記）	×	○	×	
8	日野市郷土資料館 小泉吉永氏寄贈	『勝五郎再生記聞』	なし	写本	一冊	41	26.1× 19.8	有（2種）	なし	×	×	○	○	○（立入事負記）	○	○	×	
9	高幡山金剛寺	『再生記聞　全』	なし	写本	一冊	35	24.7× 16.1	有（2種）	忠行写	×	×	○	○	○（伴信友記）	○	×	×	
10	小谷田忠一良	『小谷田勝五郎再生記』	なし	写本	一冊	29	25.0× 17.8	なし	なし	×	×	○	○	○（立入事負）	○	×	×	明治27年小谷田家家系図
11	高幡山金剛寺	『再誕奇童實聞記』	なし	写本	一冊	16	27.0× 17.4	なし	なし	×	×	○	○	○（立入事負記）	×	×	×	
12	府中市郷土の森博物館所蔵内藤治右衛門家文書	『小谷田異童傳』	なし	写本	一冊	35	24.2× 17.0	有（1種）	懐安（内藤重鎮）	×	×	○	○	○（立入事負記）	○	○	×	奥書有（嘉永7年4月15日写）、朱書で春登筆記との異同を記す

※墨付は表の表紙を除く丁数とした　　※　日野市郷土資料館が、寄贈・寄託を受けたものと、コピーを所有している『再生記聞』をまとめた。

四　江戸の文人たちと勝五郎

文化文政期は、文人たちが不思議な話や珍しい事物、怪奇現象などにこぞって興味を示した時代だった。このような世の中にあって、池田冠山の『勝五郎再生前生話』、平田篤胤の『勝五郎再生記聞』は多くの文人たちの耳目を集めることとなった。文人たちの多くの書物に勝五郎の生まれ変わり物語が記録され、冠山・篤胤がまとめたもの以外の情報も記述されている。その一部を紹介する。

◆**『甲子夜話』巻二七（文政六年四月十二日）**　冠山の友人でもあった肥前平戸藩元藩主で文人としても有名な松浦静山の随筆集。多門傳八郎の届書などのほか冠山の『勝五郎再生前生話』も収録している。静山は、勝五郎について、百姓の倅に似合わず行儀が良い、手先が器用で籠細工が上手、少食で魚類を食べないと記し、隣人の荻野梅塢宅にやってきた勝五郎の風貌を家人に見させ、「髪はけし坊主にて、毛赤く、面長く、痩せたる方にて、色黒く之れ有り候得共、容儀も見苦しからず、伶俐の小児と見請け申し候（以下略）」と記している。（資料８）（論考２）

◆**『睡余操觚』**　調査報告⑩参照（資料11）

◆**『桑都日記』続編巻七**　八王子千人同心組頭塩野適斎の著作。「文政五年壬午の冬十一月、柚木領中野村の百姓源蔵の子、勝五郎、九歳にして前生の事を語る（略）」とあり、程久保へ行ったのは両親と勝五郎であると記されている。同様の中国の例を引き、勝五郎の生まれ変わりを偽りと思わないほうが良いとしている。（資料14）

◆**『武蔵名勝図会』多摩郡之部巻六柚木領**　八王子千人同心組頭植田孟縉が著わした地誌。序文は冠山が書いている。「前生覚知の小童」と題して記述、程久保村へ行ったのは高幡不動参詣途中の母と一緒とされている。勝五郎の生まれ変わりの話が近隣だけでなく江戸にも伝わっていると書かれている。『桑都日記』とあわせて、地元で聞いた噂を記しているものと思われる点が貴重である。（資料13）

◆**『藤岡屋日記』（文政七年七月二十八日）**　神田御成道（千代田区　秋葉原付近）で露天の古本業を営みながら、様々な情報の売買を以って稼業としていた須藤（藤岡屋）由蔵の日記。『勝五郎再生記聞』の要約を記しながら、両親兄弟のいるところで父源蔵から聞いた話を掲載しており、おそらく自身で中野村の源蔵宅を訪ねたものと考えられる。勝五郎の生まれ変わりは、情報屋の藤岡屋が現地調査をするに足る値打ちの情報だったということになる。同日記によれば、藤蔵の墓は、道も遠く途中に荒れた畑山もあるので、父親の埋められた墓ではなく、家の裏山に新たに墓所を掘って埋められたという、他にはどこにも記されていないことが書かれている。藤岡屋が、本当に源蔵宅で聞き取り調査をしたとすれば、これはかなり信憑性の高い情報となるが、真偽は確かめようがない。藤蔵宅の裏山は現存しているが、高幡不動尊に移転する前の藤蔵の墓石は、父親と同じ、同家の畑のある向かいの山の墓地にあった。（資料10）

◆**『山海里』**　京都の大行寺（浄土真宗　京都市下京区）の僧信曉の著わした仏教説話集。文政五年から安政五年（一八五八）にかけて刊行されたが、勝五郎の生まれ変わりは文政八年の項に記述されている。露姫の『応化菩薩辞世之事』も記されている。江戸だけでなく都においても勝五郎の生まれ変わりが話題となっていたことがわかる。（資料12）

◆**『視聴草』二集七**　江戸末期の旗本宮崎成身が、文政十三年より三十年以上にわたって手元にある資料を自らの著述とともに編さんした雑録。「幼女遺筆」として露姫の遺墨の刷り物が綴られているほか、「小児前生話」として、冠山の『勝五郎再生前生話』が収録されている。（資料９）

◆**『神判記實』**　皇大神宮主典兼権大講義の山口起業撰の神意霊験実話集。明治七年（一八七四）に出版された。五巻之上に、「武蔵国多摩郡なる藤蔵が再生して六とせ幽冥にありたるよしを語れる話」がある。（資料16）

◆**『藁裏』**　時宗の僧侶であり国学者であった春登上人の随筆集（写本六冊武蔵総社文庫蔵）。この中に「児、前世を知る」として、勝五郎のことが記されている（猿渡盛厚『武蔵府中物語』下）。春登上人は、当時武州関戸（多摩市）延命寺の住職だった。『小谷田異童傳』（調査報告⑨）には、「春登筆記」との異同が朱書されている。

（調査報告⑩）

斎藤月岑（幸成）と池田冠山との交流

大河内　祥行

斎藤月岑（一八〇四―一八七八）は江戸時代後期、江戸神田雉子町（東京都千代田区）に住んでいた草創名主である。

父の没後、十五歳で町名主職を世襲、元服して幸成と名乗った。銀町の日尾荊山の私塾至誠堂に入門して漢学を修め、上田八蔵（兼憲）に国学を、谷口月窓に絵を学んだ。

彼は日常の公務を遂行したほかに、祖父幸雄以来の事業であった『江戸名所図会』の稿本を補正し、全二十巻を天保五年（一八三四）と同七年に刊行した。また、この書に関連した『東都歳事記』五巻も天保九年に刊行。このほか『武江年表正編』十巻・続編四巻、『正曲類纂』六巻、『百戯述略』十巻、『恐惶記事』五十巻、『睡余操觚』二十四巻、『松濤軒雑纂』四巻、『翟巣漫筆』七十五巻、『類聚撰要』八十五巻など、今日もなお有益な名著を残した。さらに月岑は文政十三年（一八三〇）から明治八年（一八七五）までの詳細な日記を残している。

池田冠山は武士であり、年齢も月岑より三十七歳年長であったが、互いに尊敬し、親しく交際していたようである。以下、月岑の日記に見える最晩年の冠山との交流を紹介する。

○　天保元年十二月二十七日　「（鉄砲洲）十軒町松平縫殿助（頭）様御長屋出火、少々」

（冠山との交流を示す最初の記事）

さらに日記を読み進めると、天保四年から交際が頻繁になっている。

○　天保四年一月二十七日冠山邸へ年始に行き、菓子折を差し上げる。

○　二月三十日　冠山様が御家来衆二人を連れお出でになった。

○　三月十七日朝、淺草寺三社権現祭礼を見に行き、境内の梅園院にて冠山様にお目に掛かった。待乳山（聖天宮）も参詣した。

○　四月十五日　羅漢堂から観音像を三市（サザイ）堂へ移し入仏供養をするので、お参りするため羅漢寺に行き、冠山様にお会いした。

○　四月十七日淺草寺に行き、三社御相殿を拝み、梅園院にて冠山様にお会いした。待乳山（聖天宮）にも参詣。

○　五月四日　小奈木川（小名木川）の因幡若桜藩下屋敷に冠山様を訪ね、大工平次郎より到来した肴を持参した。

○　五月十七日　淺草観音参詣。梅園院へ寄ると冠山様がお出でになった。後、真土山（待乳山聖天宮）へ参った。

○　六月二日　小名木川の若桜藩下屋敷に冠山様を訪ねた。そこで蜷川越中侯にお目に掛かった。

○　七月十九日　小名木川の冠山様下屋敷へお悔やみに行った。冠山様七月九日ご逝去の由。お部屋付きのおさよ様に逢いお話を伺った。

○　七月二十七日　松平冠山様御葬式。

○　七月二十九日　今日から三夜の間、本所牛島の弘福寺にて松平冠山様の御法事が執り行われる由。

○　七月三十日　弘福寺松平長門守様御隠居冠山様御廟をお参りした。

冠山邸に参上したり、淺草寺で談笑したりと、冠山逝去前の約半年の交遊であった。

月岑日記を見ると、町名主として当然のことながら、時々南北いずれかの奉行所から呼び出しを受け出かけていることが記されている。その際入手したと思われる奉行所の取り調べ記録を、『睡余操觚』（十五）に、文政六年（一八二三）四月の記事として書き留めた。勝五郎の生まれ変わりである。（資料11）

そこには、多門傳八郎の届書きの他、月岑が聞いた風聞が記されている。内容は、『甲子夜話』とほぼ同じであるが、勝五郎があの世であったのは、老人と地蔵とあり、冠山が勝五郎のことを様付けで呼び、自宅へも駕籠で送迎したとある。勝五郎親子は、江戸で冠山の屋敷へもいったのであろうか。月岑自身は、冠山のこの様子を、「何故に候や未だ分らず」と記している。

冠山と月岑の交流がいつからあったのかは不明であるが、勝五郎の一件がきっかけであったかもしれない。淺草寺は、露姫が繁く参詣した寺院であり、玉露童女追悼集全三十巻（うち一巻行方不明）と玉露童女の木像が奉納されている。冠山に淺草寺で度々逢っていた月岑は、冠山から直接露姫のことや勝五郎の生まれ変わりの話などを聞いていたのではないだろうか。

（論考２）

勝五郎の転生譚と江戸の知識人 ―前世語りから転生譚へ―

今井　秀和

一　勝五郎の前世語り

前世の記憶を持つという少年、小谷田勝五郎の噂は、発生源である武蔵国を飛び越えて、江戸に集まる知識人たちの間でも話題になった。

「勝五郎の転生」というファクターは、勝五郎の前世語りに一応の信を置くことによってはじめて成立する。すなわち、勝五郎の前世語りを周囲全てが虚言と判断していたならば、転生という話題は生じ得ない。実際、勝五郎の姉は彼の話を信じていなかったわけだが、勝五郎を可愛がっていた祖母の介在によって、「勝五郎の前世語り」は「勝五郎の転生」譚へとステップアップするきっかけを得たのである。

民俗学における説話の分類方法を適用するならば、勝五郎の前世語りや、彼をとりまく人々が交わしていた転生譚は、「世間話」というカテゴリに入る。特定の土地の遠い過去を語る「伝説」とも違い、また、現実の時空間とは異なる場でのフィクショナルな物語である「昔話」とも違い、「世間話」は、これを語る人々の身近な時空間で、一応は実際に起きたこととして語られるものである。従って、勝五郎の前世語りおよび、それに基いて人々が仲介していた噂話は、民俗学で言うところの「世間話」ということになる。

江戸期には、一応の事実として、仏教説話に由来する転生譚が広く語られ、ある程度信じられていた。また、歌舞伎や浄瑠璃などの芝居、草紙類や読本などの文芸作品といったフィクショナルなメディアにおいても、転生はポピュラーなテーマとして扱われていた。転生は、虚実のあわいを漂う話題として、広く巷間に知られたものだったのである。

では、勝五郎の語った前世の話は、江戸の当時、どのような意味を持った情報として受け取られていたのだろうか。この世間話は、嘘として処理されたのか、真として取り上げられたのか、あるいは虚実入り混じった風説としてこそ、意味を持っていたのであろうか。

結論から述べてしまえば、人によって、勝五郎をめぐる世間話の受け取り方は様々であった。現在残された資料からは、勝五郎と直接・間接に関わった個々の知識人によって、勝五郎による前世語りの受け取り方が大いに異なっていたことを確認できる。本稿では、広く日本人の「死と再生」への視線を踏まえた上で、江戸期の知識人それぞれが勝五郎の前世語りをどのように受け止めていたのか、その差異を確認していきたい[一]。

また、現代を生きる我々は、江戸期の小さなコミュニティ内で生じた勝五郎の転生譚になぜ興味をひかれるのだろうか。古今東西の転生譚をふまえながら、こうした問題についても考えてみたい。

二　江戸の怪異怪談

本論に入る前に、筆者の立場を明らかにしておく。筆者の専門とする研究領域は江戸期から近現代にかけての怪異・妖怪文化である。当然、研究対象には霊魂や転生といった、死後の人間をめぐる問題も含まれる。しかしながら個人としては、霊魂の存在に信を置いておらず、したがって、転生も現実的には有り得ないものと考えている。端的に言えば、人間の死後、その意識が存続するとは思っていない。

ところが、霊魂の存在を信じていない筆者のような者でも、身近な人間が死ねば供養を行ない、法要ごとに故人を想い、ある意味で死者との対話を繰り返しながら生を送っている。霊魂の存在を信じていないのに、すでに存在しない死者との対話を繰り返しつつ生きているというのは、厳密に考えれば二律背反のようにも思えるが、個人としてはこの矛盾を否定的に捉えることなく生活しているわけである。

むしろ、これら実在しない（あるいは仮に実在したとしても到底、証明不可能な）死後の意識の行方に対して、時代ごと、個人ごとに筆者自身を含む日本人がいかなる態度をもって関わって来たのか、という点が興味の中核にある。本稿も、そうした立場から記すものである。

ごく大雑把に言ってしまえば、江戸期は、それまでの時代に比べて比較的、政情の安定した時代であった。そうした時代背景は、日々の生活を「憂き世」転じて「浮世」と捉える、ある意味で刹那主義的な、ある意味で享楽的な人々を生み出すに至った。しかし、裏を返せばそれは、いつパックリと開くやとも知れぬ、足元にある「地獄の釜の蓋」を意識してのドライな現実認識でもあった。

世情が安定している時こそ、人は様々な不安によく気が付き、それらを抱え込んで生きることになる。こうした時勢とも関係してか、日本において怪談が隆盛を迎えたのは江戸期であった。たとえば百物語など、実際に怪談を語る会もたびたび催されていた。百本の燈心に火をつけ、ひとつ怪談を語るごとに一本ずつ火を消していく。最後の火が消された時、その場に本当の怪異が訪れる……というのが、百物語である。本来は、西洋の降霊術にも似た「怪異の招来」という効果が期待されていたが、次第に遊戯的な側面を強めていったものと考えられている。そして、百物語は出版メディアへとその舞台を移し、読み物としての怪談集が人気を博すようになる。

国文学者の太刀川清は、近世（江戸期）の怪異小説を、百物語系と伽婢子系に大別した。前者はすでに述べたような流れで出版された、数多くの百物語本を指す。後者は、僧の浅井了意による怪談集『伽婢子』に端を発する怪談集の系譜である。

了意は、怪談を多く含む仏教説話集『因果物語』の平仮名本の編者だとも考えられている。しかし、そもそも『因果物語』は、別の僧、鈴木正三が巷間で聞き集めた世間話を集積したものであった。正三の没後、遺稿にかなりの手が加えられた上、無断で刊行されたことに腹を立てた正三の弟子たちは、師の遺志を汲んだ片仮名本の『因果物語』を刊行した。

また、仏教唱導の現場においては、祐天上人による、怨霊「累」の済度など、ゴーストバスターとしての高僧譚が語られてもいた。日本における怪談は、僧の介在によって広く流通した側面を持つのである。僧は、葬儀や法要の執行者というだけでなく、人間の死をめぐる説話の管理者でもあったのだ。ただし、江戸後期の怪談は次第に僧の手を離れて、広く巷間に放たれていくことにもなる。

三　「死と再生」の想像力

個人の死後、その意識はどうなるのか、どこへ行くのか、という問題は、現代人にとっても重大な関心事である。己の自我は死とともに雲散霧消してしまうのか、死んだ人にはもう二度と会えないのか……。こういった問いは、普遍的なものとして我々人間の心の一定部分を占めている。死によって個人の意識は消滅する、という最もシンプルかつ合理的な解釈が存在するにも関わらず、多くの人間はそうではない可能性を求め続け、様々なかたちで想像力を働かせてきた。

たとえば、地獄や極楽という「あの世」は、僧による仏教唱導ともあいまって、具体的なイメージをもって想像できるものであった。一方、民間信仰においては、死者の霊魂は必ずしもあの世へ行くわけではなく、現世に留まることもあるとされていた。死者の霊魂があの世から現世へ彷徨い出てくる、または、それを呼び出すことが出来るという考えも広く行なわれていた。

死者の蘇生や、妖怪などによる死体の乗っ取りも信じられており、死体の上に刃物を置くなど、これらを防ぐための呪的な行為も一般的なものであった。土地により、今でもこうした風習は続いている。このように、前近代から続く日本人の信仰を全体的に眺めてみると、霊魂は実に様々な場所に存在すると考えられていたことがわかる。国学者の平田篤胤が勝五郎や仙童寅吉といった少年たちへの取材を通して追い求めていた幽冥界も、「あの世」のひとつのかたちではあった。

こうした、死をめぐる様々な想像力の発露の中に、転生がある。日本の民間信仰における転生譚は、大陸渡来の仏教における「輪廻転生」思想の影響下にある。ただし、転生という言葉の持つ意味は広い。以下、簡単にその側面を整理しておこう。勝五郎の前世語りは、単体としてそこにあるものではなく、前後の文化的背景をも含めた上で分析すべきものだと考えられるからである。

大陸渡来の仏教経典には仏陀の前生譚（ジャータカ）が含まれており、また、女性としてこの世に生をうけた人物が男性に転生する、あるいは生きながらにして変化する説話（変成男子）も多く収められる。

このような仏教説話の影響もあってか、日本の古典文芸においても転生をめぐる話題は枚挙にいとまがない。ただし、ひとくちに転生譚と言っても、実に様々な側面がある。たとえば、高貴な人物が艱難辛苦の流浪の果てに神仏へ転生を遂げる（貴種流離譚）といった、寺社縁起などにおける本地物の類もあれば、仏教説話集における動物から人への転生、あるいはその逆などもある。江戸期に絞って言えば、犬が飼い主の夢枕に立って、前世に人であった時の罪業を語る、というかたちの説話が非常に広く見られるものであった[二]。

こうした、一応の「事実」として伝承されていた説話と、おそらくは相互影響するかたちで、国内外の文芸でも多くの転生譚が作られてきた。中国の小説で例をあげれば、清代の曹雪芹『紅楼夢』の前半部では、天上界の番人や花の精、仙女たちが下界に下って人間に転生するところから話が展開する。同じく清代の李汝珍『鏡花縁』も、百名の花の精（仙女）たちが人間の女性に転生して世界を巡るという構図を持った物語である。

前近代における転生譚は、神から人へ（あるいはその逆）、動物から人へ（あるいはその逆）、人から人へ、といったパターンに大別できる。ひとくちに転生といっても、このように色々なかたちが存在していたのである。

四　近代以降の転生譚

インドや中国などの大陸渡りの仏典や説話集、文芸などの影響を受けつつ、前近代の日本の転生譚は育まれてきた。そして、西洋で発展した哲学・科学・文学の洗礼を受けた近代以降の日本の小説でも、たびたび転生が題材となってきた。

たとえば短編小説では、人間の夫婦が動物に転生する悲喜劇を描いた志賀直哉の「転生」がある。長編では、平安期の『浜松中納言物語』における輪廻転生を踏まえた上で書かれた三島由紀夫『豊饒の海』が有名であり、同作では登場人物の転生が大きな主題となっている。

また、「勝五郎の転生」を書いた小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）には、同じく転生を扱った「伊藤則資のはなし」や「お貞のはなし」もあり、八雲が示していた転生への興味が窺えよう。近代以降、現代に至るまで、転生をめぐる伝承、創作物は実に多い。勝五郎の転生譚を含む「転生」というテーマがたびたび一般の人々の関心を呼ぶことの背景のひとつには、転生に強い関心を持つ作家たちの影響もあるものと考えられる。

現代においては、とくにマンガ・アニメ・ゲームなどのサブカルチャー作品において、転生というテーマが積極的に扱われ続けている。現在もサブカルチャー領域に強い影響を与え続ける作家、山田風太郎の『魔界転生（まかいてんしょう）』は、剣豪たちが忍法によって転生を遂げ、時代を越えた戦いを繰り広げるというストーリーであった（一九六四―六五年、「おぼろ忍法帖」の題で「大坂新聞」に連載。一九八一年の映画化に伴い『魔界転生』に改題）。

一九八七年に連載の始まった日渡早紀による少女マンガ『ぼくの地球を守って』は、前世の記憶を持った主人公たちを描く。同作は、読者の少女たちによる「前世の仲間探し」ブームという社会現象に拍車をかけたことでも知られている。

また、一九八六年に刊行されたライトノベル（若年層向けイラスト付き小説）、作：西谷史・絵：北爪宏幸『デジタル・デビル・ストーリー　女神転生（めがみてんせい）』では、コンピュータを用いた「降魔術」で悪魔を現世に出現させることを「転生」と表現しており、また、登場人物の一人である少女は、日本神話の女神イザナミの転生した姿という設定を持つ。その後、『女神転生』（略称『メガテン』）は、テレビゲームの人気シリーズ作品に姿を変え、現在も続く一大コンテンツとなった。

『女神転生』シリーズは人間から人間への転生を描いたものではなく、その点で同時代的なサブカル作品『ぼくの地球を守って』とはだいぶ趣を異にする。しかし、タイトルに「転生」を含み、その用語の一般化に資したという意味では、山田風太郎『魔界転生』と並ぶ大きな影響力を持っていたと評価することができるだろう。

五　オカルトブームと前世、転生

フィクション以外の分野に目を転じれば、一九六〇年代末頃から新宗教などで前世や転生といったトピックが扱われるようになり、八〇年代には学研『ムー』などのオカルト雑誌の読者投稿欄を通して、前世でともに過ごしていた仲間を求める少女たちの文通が行なわれるようになった。八九年には「前世仲間」の女子中学生たちが自殺未遂を起こす事件も発生している[三]。

その前後、マスメディアなどで「前世」、「臨死体験」、「幽体離脱」などの、死にまつわるオカルト言説が一応のノンフィクションとして、ある意味で無責任な扱われ方をするようになった。信じるかどうかは別として、これらのオカルト言説は、一九七〇年代に隆盛を迎えたオカルトブームの前後期間を経て、誰もが知る知識になったと言えるだろう。

近代以降の欧米では、キリスト教教義へのカウンター的な意味合いを持つ神

智学などのオカルティックな活動において、転生への興味が湧いてきたようである。そこには、西洋社会における東洋思想への関心の高まりも関係している。アメリカでは心霊治療家のエドガー・ケイシーによる患者の前世の「霊視」が民衆の耳目を集めた[四]。

前世や死後の体験をめぐる情報は、必ずしも霊能者などの、いわゆる「オカルト」寄りだと考えられている人物によってのみ提供されるものではない。たとえば、一九九四年にはジャーナリストの立花隆が『臨死体験』なる書を著し、一定の売り上げを示したことなども思い出される。立花には、政治や科学に強いジャーナリストといったイメージがあるが、その言論活動は必ずしも科学的な態度に終始しなかった。『臨死体験』は、立花のオカルト趣味が強く出た作品と言えるだろう。

当然のことながら、死後、人間の死体がどうなるかは観察可能な事象なので、周知の事実である。実際に観察しなくとも、観察結果であるところの知識は共有されており、仏教においても死体が朽ち果てる過程を九つの段階に分けて描いた「九相図（くそうず）」（九想図）という絵画が多く作られてきた[五]。

死体の腐敗は、科学の範疇でも確認ができる現象である。ところが、死後の意識がどうなるのかは観察できない。したがって、これは科学の範疇ではない。証明不可能な事象である以上、疑うことを基本姿勢とする科学ではなく、信じることを基本姿勢とする宗教やオカルトの範疇に入ることになるわけである。

一方で、科学技術の進歩による個人の「死」の克服といったテーマも、マスメディアなどではたびたび取り上げられる。クローン、アンドロイド、冷凍保存された脳の情報解析とコンピュータを用いた意識の再生の可能性などは、小説、映画、マンガなどのＳＦ作品のみならず、現実社会における議論の俎上にも載るようになってきている。

個人の脳から再生された意識や記憶を、人間そっくりに作られたアンドロイドに載せ替える、というのが、実現の可能性が高い方法だとも言われる。これが本当に、将来的に実現可能な技術であるかどうか、筆者には分からない。しかし、いわば「能動的な転生」が実現可能かもしれないという話題が、現代人にとっても強い興味関心の対象になっている、ということは分かる。

現代のそれには科学的な装いこそあれ、古代から現代に至るまで、同じ話題が、あいも変わらず延々と繰り返されているわけである。人間が個人の死の克服に捉われ続けているという事実が、現代の世間一般における「死後の世界」への興味の背後にはある。本稿の趣旨とはズレるため、これ以上の深入りは避けるが、「転生」への興味と、「前世」への興味の在り方が、重なりつつも少し方向性を異にしていることにも注意を配っておきたい。

六　語る勝五郎、語らぬ藤蔵

先に述べたように、勝五郎の前世語りに基づく、藤蔵から勝五郎への転生譚は世間話に分類され得るものである。しかし勝五郎の転生譚は、公的資料を含む様々な文献に記載されており、これまで紹介してきたような、数多の転生譚とは一線を画す資料性を備えている。ただし、公的資料に記録されたということから、直接、当時の役人が転生を「事実」として認めていたという理屈に繋げることはできない。それはあくまでも、現在進行形で世間を騒がしている風聞の記録、という意味を持つものであった。

珍しい物事というのは、それを取り沙汰する世間によって、ときに社会問題を引き起こす可能性を孕んでいる。現代においても、珍しい深海生物が水揚げされるたびに地震などの天変地異の噂が出ることを思えばよい。単なる一過性の噂で済めばよいのだが、こうした噂には伝染性があり、場合によっては世の中に無用な混乱をもたらす可能性がある[六]。よって、江戸幕府はこうした話題に関する調査・記録を行なってもいた。

たとえば、双生児の少なかった江戸期、双子や三つ子が誕生すると「鬼子」という不吉な存在として、ときにマイナスの意味を持った噂がささやかれた。そこで幕府は、双子が生まれた情報をキャッチすると、これが鬼子の文脈で解釈される前に金銭などの褒美を与えて顕彰してしまい、プラスの話題に方向付けることがあった[七]。江戸期の為政者たちは、双子たちを長寿者や孝行者と同様の寿ぐべき存在にすることで、民衆の凶兆に繋がる思考回路を断ち、ひいては社会不安をもたらす不吉な噂の流通を封じ込めようとしていたのである。

勝五郎の前世語りや、それに始まる転生騒動が公的な調査の対象となったことには、以上のような歴史的・文化的・政治的背景があることを踏まえておく必要があろう。

さて、勝五郎の転生騒動の発端を一言であらわすと、勝五郎少年による、本人が知り得ないはずの事実を含んだ過去語り、ということになろう。すでに述べたように、勝五郎の前世語りが、共同体によって一応は肯定的に捉えられた時、「転生」という可能性が生じたのである。

逆に言えば、プレ勝五郎たる武州程久保村の須崎藤蔵は、この件に関して一言も語っていないわけである。没後の藤蔵は、勝五郎に〈前世〉の記憶として語られる情報としてのみ存在している。ここには、なぜ世間話における転生譚の多くが前世語りというかたちで発生するのか、という普遍的な問題も含まれていよう。多くの人が、未だ来たらぬ来世を語るのではなく、すでに過ぎ去った前世を語るのはなぜか、という問題である。

合理的に考えると、次のようなことが想定できる。過去に死んだ者の情報は遡及可能だが、これから生まれる者の情報は調べようがない。何らかの方法で、過去に死んだ者の情報を得て、それを自己の過去の記憶と混同して語る、という可能性は低くないだろう。あるいは、いくつかの断片的な偶然の一致を核として、共同体が転生譚を紡いでいく可能性も否定できない。しかし、これらは単なる推論に過ぎない。結局、こうした再現性の低い問題に関する決定的な解釈は施しようがないのである。そしてそれは、当時も現在も、そしておそらくはこれからも変わらないであろう。

七　江戸の知識人と勝五郎の転生譚

以上のような古今東西の「転生」の諸相を踏まえた上で、江戸の知識人が勝五郎の転生譚に対して示していた態度の違いについて述べることとしよう。一口に江戸の知識人と言っても、「転生」などの不確かな情報に対する態度は実に様々であった。ここでとりあげるのは、幽冥界の探究に血道をあげ、『勝五郎再生記聞』をまとめた国学者の平田篤胤（一七七六―一八四三）をはじめとする知識人たちである[八]。

篤胤のほかにも、昌平坂学問所の林大学頭述斎（林述斎）、鳥取藩支藩の藩主だった池田冠山、平戸藩主だった松浦静山、幕府天守番の荻野梅塢らが、直接・間接に勝五郎の転生譚に関わっていたようである。述斎、冠山、静山、梅塢らと、篤胤およびそのシンパであった屋代弘賢などの知識人たちとの関係性は、「転生」や「異世界」の解釈を含む複雑な政治的様相を示していたと考えられるのである[九]。

まずは基本的な事実関係を整理しておく。文政五年（一八二二）、武州中野村の小谷田勝五郎の転生をめぐる世間話が世上を騒がせるようになった。そこで、中野村知行主の多門傳八郎は、勝五郎達に真偽を質した上で公式文書を作成すると、御書院番頭に届け出た。

翌年、多門傳八郎に呼び出されて勝五郎が江戸に赴いた際には、幕臣の荻野梅塢宅をも来訪している。このことは、肥前国平戸藩主だった松浦静山（一七六〇―一八四一）が書き遺した『甲子夜話』正篇巻二十七の五「八歳の児その前世を語る事」からわかる[一〇]。また、続く正篇巻二十七の六には、「同前又一冊」と題して、某老侯より借りたという『武蔵国中野村再生勝五郎前世話』の内容を収めている。この某老侯とは、静山と交流のあった池田冠山ではないかと推察される。冠山については後で述べる。

平戸藩主を辞した後の松浦静山は、本所の下屋敷で過ごすことが多かった。そして、その隣宅には、平田篤胤のもとに寓居する天狗小僧寅吉の異界体験を否定して、激しい論争を繰り広げた荻野梅塢が住んでいた。（この論争は篤胤『仙境異聞』に記録される）

天狗小僧寅吉（仙童寅吉）とは、天狗に連れられて山中の異世界へ行き、神通力を身につけたと公言する少年である。親許を去って、はじめは山崎美成の許にいたが、幕府右筆の屋代弘賢からこの話を聞いた平田篤胤は寅吉に強い興味を示し、半ば強引に自らの屋敷へと連れ帰ったのである。そして様々な問答を重ねた上で、天狗の世界の詳細な記録『仙境異聞』をまとめた。

荻野梅塢は、これまでの研究であまり着目されてこなかった人物である。しかしながら、勝五郎や寅吉といった怪異体験者をめぐる知識人たちの態度を考える上では、非常に重要な位置にいたと言える。

八　平田篤胤と知識人たちの関係性

荻野梅塢（一七八一―一八四三）は本名を八百吉といい、静山より二十歳以上年下の幕臣（天守番）である[一一]。静山とは立場も年齢も大きく異なっていたが、近所のよしみを越えた知的交流を続ける間柄だった。梅塢の役職「天守

番」は江戸城天守の警護職だが、江戸城の天守は明暦の大火（一六五七年）で焼失して以降、再建されていない。実際には閑職であったものと推察される。

ところが、梅塢は天守番をつとめる一方で天台宗の知識に通じており、僧侶でないにも拘らず徳川家の菩提寺である東叡山寛永寺の僧たちに「仏学」を講じるなど、かなりの才人であった。静山以外にも、江戸後期の風俗百科辞典『嬉遊笑覧』著者の喜多村信節（筠庭）や、ベストセラーとなった長編合巻『修紫田舎源氏』著者の柳亭種彦らとも友人であった。とくに柳亭種彦とのつきあいは深く、その没後には『柳亭先生伝』を著してもいる。（神宮文庫所蔵、木村黙老『きくまゝの記』収録）

多門傳八郎が勝五郎を連れてきた時、梅塢は勝五郎を「見るべし」として誘ったが、静山はこれを断って、代わりに家臣を遣わせて記録をとらせた。静山のこうした行動には、平田篤胤およびその周辺の人物に対する強い忌避あるいは警戒があったものと思われる。静山と近しい間柄にあった林述斎やその弟子の佐藤一斎は、平田篤胤の政治的な活動を危険視しており、述斎によるこうした否定的な評価は、後に篤胤が幕府から著述の差し止め処分を受け、江戸を去る遠因ともなる。静山も、述斎らの意向を汲んだ行動をとっていたものと考えられるのである。

松浦静山は、隠居大名仲間で、勝五郎に強い興味を持っていた池田冠山とも親しい間柄であった。因幡国鳥取藩の支藩（のちの若桜藩）藩主を隠居した池田冠山（一七六七―一八三三）の娘である露姫は聡明さで知られていたが、六歳の時に疱瘡で夭逝してしまった。こうした経験から冠山は、露姫と同様の死に方をした藤蔵が転生を遂げたという勝五郎に興味を抱き、自ら直接、勝五郎のもとに赴くことにもなる。

静山と冠山の交流は、池田冠山発松浦静山宛書簡を集めた「無題記」からも窺える[一二]。静山は露姫の追悼に歌を詠んでもいるが、勝五郎の転生に対する態度は真逆だったのである。時代を問わず、オカルティックな情報の受容態度には、個人的な経験が強く影響すると言える。静山と冠山との差異にも、こうした個人的経験の違いが関係しているものと思われる。ただし冠山は、こと勝五郎に関しては執心と呼べるほどの興味を持っていたが、基本的には和漢の学識を備えた理知的な知識人の一人であった。

作家の石川淳は、生前最後となった随想集『夷齋風雅』で、池田冠山の随筆『思ひ出草』続編巻二から確認できる、冠山と林祭酒との間のやりとりについて述べている[一三]。石川はここでの「林祭酒」を「大学頭。おそらく述斎か」とするが、その通りだと考えておいてよい。『思ひ出草』の該当記事は次のようなものである[一四]。

冠山は、徳川五代から七代までの事跡を記した漢文体の書物『三王外記』に関し、徳川家の醜聞を多く含む偽書であるとして、その流通を禁じるべきではないかと述斎に問うたことがあった。述斎はこれに対して、「もしも幕府が禁じてしまえば、世間は、真実が含まれていたからこそ忌まれたのだと解釈することだろう。しかし流通するままにしておけば、いずれ時間が真偽を明らかにしてくれるはずだ」と述べ、冠山はこれに感じ入ったという下りである。石川淳が着目していたように、こういったやりとりからも、世間を行き交う不確かな情報をめぐる、為政者サイドの視点が透けてみえるのである。

さて、梅塢以外にも、修験者の圓明院行智や幕府右筆の屋代弘賢など、篤胤と静山の双方と交流のあった知識人は多かった。松浦静山が平田篤胤を避けていた可能性は限りなく高いものだったとしても、まったく接点がなかったと言えるのだろうか。渡邊金造の研究に依拠して言えば、松浦家と平田篤胤との交流が確認できるのは、篤胤『気吹舎日記』文政十三年（一八三〇）四月十七日の条に見える、松浦熙（静山の息子）との間の書籍の貸借のみである[一五]。

しかし、近年に調査研究の進んだ「平田篤胤関係資料」に目を向けると、これ以外にも若干ではあるが松浦家と気吹舎との間に交渉があったことがわかる。たとえば近年に翻刻された部分の『気吹舎日記』からは、前出の例以外にも気吹舎と松浦熙との間に書物の貸借や書簡のやりとりがあったことを確認できる。年月不詳だが「松浦侯家蔵壹岐国風土記巻三一に載神字」という神字を記した一枚の資料なども、松浦家と気吹舎との交流を示すものであると言えよう[一六]。

また、天保五年十月五日に梅塢は、「荻野弥太郎」名義で篤胤に向けて書簡を発している[一七]。その内容は、隣宅の老侯が、鍋蓋明神のある地名の詳細について頻りに尋ねてくるので、教えては頂けないかというもの。言うまでもなく、隣宅の老侯は松浦静山のことである。面白いことに、翌六日には篤胤のも

とに「松浦静山内吉川東一」として、静山邸からも書簡が出されており、これも同様に鍋蓋明神に関する質問であった[一八]。いずれにせよ、静山から直接、気吹舎へコンタクトをとることは憚られたものと思われる。

『甲子夜話』には、仙童寅吉に関する記述が一切なく、静山は隣宅を訪れた勝五郎についても直接の面会を避けていた。平田篤胤に関しても、林述斎の意向を踏まえた上での否定的な記述が為されるのみである。静山のこうした態度には、林述斎と歩みを揃えるという、政治的な思惑が含まれていたはずである。江戸の知識人が、「転生」などの不確かな情報に対していかなる態度を示していたかという問題には、ときに政治性が関わってもいたのである。

注

一　江戸の知識人と勝五郎との関わりに関する詳細は、以下を参照されたい。今井秀和「江戸の知識人と〈怪異〉への態度　―〝幽冥の談〟を軸に」『アジア遊学　怪異を媒介するもの』勉誠出版、二〇一五年。同『異世界と転生の江戸　平田篤胤と松浦静山』白澤社、二〇一九年。

二　拙稿「犬の伊勢参りと転生」『日本文学研究誌』七輯、大東文化大学日本文学専攻、二〇〇九年。

三　大塚英志「前世を探した一四歳」『「おたく」の精神史　一九八〇年代論』講談社（現代新書）、二〇〇四年。

四　心霊学における転生や前世の記憶などに関しては、以下の書籍における「再生」および「ケイシー、エドガー」の項目を参照。田中千代松編『新・心霊科学事典　人類の本史のために』潮文社、一九八四年。また、エドガー・ケイシーが行なったという自己催眠透視については以下を参照。ジナ・サーミナラ著、多賀瑛訳『転生の秘密　エドガー・ケイシー・レポート』たま出版、一九九二年。

五　九相図をめぐる江戸期以降の文化現象については以下を参照されたい。拙稿「江戸期の妖怪図像に見られる地獄絵・九相図の影響」小松和彦編『怪異・妖怪文化の伝統と創造　―ウチとソトの視点から―』（国際研究集会報告書第四十五号）、国際日本文化研究センター、二〇一五年（国際日文研のウェブサイトでも閲覧可能）。同「夢野久作『ドグラ・マグラ』における日中〝死美人〟説話の摂取　―『九相詩絵巻』から「長恨歌」まで―」『蓮花寺佛教研究所紀要』八号、蓮花寺佛教研究所、二〇一五年。

六　たとえば以下の論考でも扱ったように、戦時下の当局も流言蜚語に関する取り締まりを行なっていた。拙稿「戦時下の世間話　―怪談より怖い〝笑い話〟がもつ意味―」『昭和のくらし研究』第十三号、昭和館、二〇一五年。

七　氏家幹人『江戸の少年』平凡社、一九八九年。平凡社ライブラリー、一九九四年。

八　『勝五郎再生記聞』に関しては以下を参照。平田篤胤著・子安宣邦校注『仙境異聞　勝五郎再生記聞』岩波書店、二〇〇〇年。

九　注一参照。

一〇　ここでは、『甲子夜話』、『甲子夜話続編』、『甲子夜話三篇』の全てをあわせて『甲子夜話』と称する。怪異記事の抽出にあたっては以下拙稿の資料編『甲子夜話』怪異・奇聞一覧（附索引）」を用いた。拙稿『『甲子夜話』怪異・奇聞の研究』（二〇〇八年度大東文化大学提出博士学位論文）。

一一　以下の「仙境異聞」注は梅塢について「祈祷師か」とするが、梅塢は祈祷師ではない。平田篤胤著・子安宣邦校注『仙境異聞　勝五郎再生記聞』岩波書店、二〇〇〇年、注二二。

一二　池田冠山発松浦静山宛書簡（「無題記」）、江東区登録有形文化財（歴史資料）、江東区芭蕉記念館所蔵。

一三　石川淳「偽書」『夷齋風雅』集英社、一九八八年。

一四　池田定常『思ひ出草』国立公文書館所蔵（昌平坂学問所旧蔵）。

一五　渡邊金造『平田篤胤研究』六甲書房、一九四二年、二七四頁。

一六　国立歴史民俗博物館蔵・平田家資料、「冊子」二六二―八。

一七　国立歴史民俗博物館蔵・平田家資料、「書簡」二〇―四。該当の書簡については廣田龍平氏のご教示を賜った。

一八　国立歴史民俗博物館蔵・平田家資料、「書簡」二〇―三。

五　小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）と勝五郎

図1 小泉八雲肖像（小泉八雲記念館所蔵）

ラフカディオ・ハーン（一八五〇―一九〇四）は、明治二十三年（一八九〇）、四月、四十歳の時にアメリカから来日した。高等学校教師、新聞記者などの仕事をしながら、多くの作品を発表した。特に日本の文化、伝承・昔話などに興味を持ち、海外に紹介した。松江・熊本・神戸と居を変えながら、明治二十九年に帰化して小泉八雲となった。同年九月に帝国大学（東京大学）文科大学講師として奉職するため、家族とともに上京、牛込区市谷富久町（新宿区）に居住した。

◆「勝五郎の転生」の執筆　明治三十年九月、八雲はアメリカのホートン・ミフリン社と、イギリスのコンスタブル社から随想集『仏の畠の落穂』を刊行した。「仏の畠（Buddha-Fields）」とは、「仏国土」を意味する。そして、この中の一編として「勝五郎の転生（Rebirth of Katsugoro）」を執筆した。（図2）

『仏の畠の落穂』は創作ではなく、八雲が興味を持った日本人の宗教的な心情を示す事項を、資料に基づいて紹介したものである。「生神」「街火より」「京都紀行」「塵」「日本美術に於ける顔について」「人形の墓」「大阪にて」「日本の民謡に現れた仏教引喩」「涅槃」「勝五郎の転生」「環中流転相」の十一編が収められている。

◆　雨森信成と小泉八雲　大正十四年（一九二五）に最初に刊行された『小泉八雲全集』（第一書房）に収載された「勝五郎の転生」には、

（前略）私の友人雨森氏は日本や支那の珍しい写本をいつも猟って歩く仁（ひと）で、さういふ珍本を掘り出すことにかけては非凡な腕前を持っているやうに見えるが、その仁が、この写本を東京の佐佐木伯爵の書庫で見出したのである。氏はこれを珍しい本だと思ったので、親切にも私にこれを写させてくれた（後略）

と、原資料を入手した経緯が記されている箇所がある（英文の原文にも、他の翻訳にもこの部分の具体的な記述は見られない）。これが、『珎説集記』という、江戸時代の珍しい風聞を書き集めた一冊であった。

友人雨森とは、福井藩出身の雨森信成（あめのもりのぶしげ）のことで、八雲の晩年における最も親しい友人で、「ある保守主義者」（『心』所収）のモデルとなった人物である。彼は、明治の初めに英仏に留学、英独仏の三か国語に堪能で、後には横浜のホテルニューグランドに出入りする洗濯業を営んでいた大変ユニークな人物である。また、佐佐木伯爵とは、土佐藩出身で明治天皇の側近として活躍した佐佐木高行のことで、雨森は、英国留学時代に、高行の長男高美と親しくなった。この縁で、帰国後佐佐木高行が主催していた『明治会叢誌』の編集者となったことから、佐佐木家に出入りしていた。雨森は、八雲没後の明治三十九年『人間ラフカディオ・ハーン』という評伝を英文で執筆しているが、そのなかでも、雨森自身が佐佐木の蔵書を八雲に紹介したことを記している。

◆「勝五郎の転生」の海外への展開　八雲は「勝五郎の転生」のなかで、この資料を読むことで、前世の記憶の可能性を知ることだけでなく、日本人が前世と再生について抱いているごく普通の観念を知ることが出来ると述べている。生まれ変わりの真偽を検証することよりも、これに寄せる日本人の心情を理解することが大切であるとして、八雲もその心情に共感していたことがわかる。

八雲が海外に勝五郎の生まれ変わりを紹介したことで、江戸時代に多摩地域で起こった生まれ変わり騒動は、前世の記憶を持つ少年の事例として、世界中の研究者の目に触れることとなったのである。

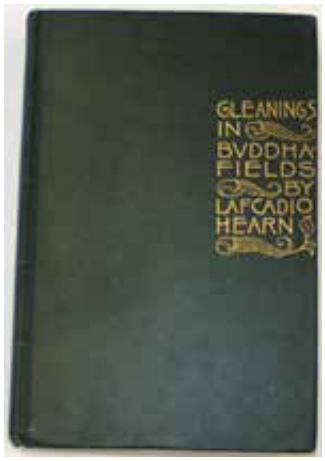


図2 Gleanings in Buddha-Fields
（『仏の畠の落穂』初版本）
1897年（明治30年）、ボストンとニューヨークで刊行された。

（調査報告⑪）

『珎説集記』の発見

北村　澄江

小泉八雲が「勝五郎の転生」を執筆するにあたって資料として用いたものは、江戸時代に書かれた『椿説集記』という書物で、侯爵佐佐木高行の蔵書の中の一冊であったことは、八雲自身が記していることである。同書は、文政六年（一八二三）から天保六年（一八三五）にいたる十三年間にわたり、南仙波氏という江戸芝車町（港区高輪）に住む人物が入手した珍聞・奇聞に類する情報を、記したものだったという。（資料15・論考3　参照）

『椿説集記』は、長らくその行方はわからないとされていたが、平成二十年三月、『佐佐木高行家旧蔵書目録』（國學院大學編、汲古書院）が刊行され、同目録中に、目録№二二六八「文政六未年四月ヨリ天保六年十月迄　珍説集記」写本一冊があったことで、その存在が明らかになった。同目録解説によれば、佐佐木家の蔵書は、大正八年（一九一九）に國學院に寄託されていたが、平成十八年になって、これが寄贈となったことを機に、目録が作成され、刊行されたということである。佐佐木高行・高美・行忠の三代の蔵書を含むものである。

同目録の情報は、平成二十一年五月に調査団の中川和明氏によってもたらされた。その後、なかなか現物を見る機会が訪れなかったが、二十七年三月に、國學院大學図書館貴重書室にて閲覧することが出来た。小口書名は「珎説をも白双紙」「江戸芝車町南仙波氏持主」とある。「椿説」は、「珎説」であることも確認された。南仙波氏は『珎説集記』の持主ではあるが、著述した人物、さらにそれを書写した人物は別人と思われる。（染村絢子『ラフカディオ・ハーンと六人の日本人』（二〇一七年刊）によると、「南仙波氏」は人名ではなく、芝車町一帯で運送業を営んでいた牛持仙波氏一族のなかの「南の仙波氏」を意味するということである。）

『珎説集記』中に、「文政六未年生替物語」七葉があり、左記のような構成である。

① 「和直」なる人物の、泉岳寺貞鈞（ていきん）宛の（文政六年）六月二十一日付けの書簡の写し―和直が、志賀兵左（右）衛門が写した「多門傳八郎届書」を手に入れたので、これを届けるという内容。

② 松平冠山より泉岳寺貞鈞宛の書状の写し（文政六年四月）二十日付―勝五郎の転生の物語を届けるので読んでいただき、お返しくださいという内容。

③ 貞鈞が、序文に書いた内容（文政六年）四月二十一日―冠山から借りた勝五郎の転生の物語を写しておく。冠山侯は、三月二十二日に中野村に行って祖母から直接話を聞き、そのままを記した。四月十四日に泉岳寺にきて、直接この話を語ってくれた。二十日にはその書を読むように勧めてくれたので、写し置くという内容。

④ 多門傳八郎調書の写。

⑤ 冠山が通俗文で書いた物語の写。

最後に「生替物かたり終」とある。

これは、泉岳寺の三十四世住職、大道貞鈞大和尚が、池田冠山から借りて写した「勝五郎再生前生話」を、『珎説集記』の著者が借りて写したものと考えられる。和直と冠山の手紙は、同書に写し置かれていたものであろう。貞鈞は、冠山と親しく交際しており、しばしば冠山の屋敷にも出入りし、露姫との交流もあった（小谷恵造『池田冠山傳』）。貞鈞は玉露童女に追悼の和歌二首を寄せている。また、天保年間に、山門を再建した人物としても知られている。

「文政六年未年生替物語」と、小泉八雲「勝五郎の転生」の内容は、八雲が付けた註を除いてほぼ同じである。但し、八雲が英文で記したものを翻訳している（八雲の帝国大学における弟子であった英文学者金子健二訳）ので、珎説→椿説、貞鈞→貞金、冠山→観山など、固有名詞に誤りがある。元の資料と比較することにより、八雲が書いたことの内容の理解をより明確にできる。

なお、『珎説集記』の「勝五郎生替り物語」の頁には、和紙を裂いてつけた小さな付箋があり、「文政六未年生替物語」と墨書されている。染村氏によると、雨森信成の筆跡に間違いないということである。付箋の箇所は、これ以外にはない。

『珎説集記』末尾には、「西久保　大和屋作次郎方求　明治二巳年二月廿一日」との注記がある（「勝五郎の転生」では「二月」の記載がない）。大和屋作次郎は、幕末・明治に飯倉（港区）で書店業を営んでいた人物であり、西久保は、飯倉を含む愛宕神社西下あたりの地名なので、同書は、明治二年二月二十一日、大和屋にて佐佐木高行が購入したものと考えてよいと思われる。

（論考３）

小泉八雲の勝五郎伝説への貢献

松村　恒

勝五郎伝説には多数の資料があるが、その中で特異なものが小泉八雲によるものである。勝五郎伝説は日野に伝えられるローカルなものであり大半が日本人により記録されたものであるが、八雲のものだけが外国人により英語で書かれたものだからである。このことの意義について若干の文章を草して勝五郎研究がより豊かになっていることを再確認したい。

一　英語で書かれたことによる特質

英語で書かれたために英語読者も勝五郎伝説を知ることとなった。英語の文の執筆者はラフカディオ・ハーンとして意識される。従ってこの場合はハーンと呼ぶこととする。ハーンは八雲に対する英語での呼称であり、日本に帰化してからは小泉八雲が戸籍上の正式名となったのであるから、どちらで呼ぼうと同じ人物を指していることに変わりはない。単に検索の都合で両者を呼び分けているだけで、実質的な違いはない。さて英語による勝五郎伝説はハーンの来日以降のいくつもある再話等の作品集のひとつである『仏国土にての落穂拾い』（平井呈一訳では『仏の畑の落穂』）に収められている。英語原題は *Gleanings in the Buddha-Fields* である。Buddha-fields は仏教術語であり仏教学では仏国土と漢語で訳すのが定番である（仏国土とは仏の意図が行われている空間のこと。大乗文献をも資料としている次を参照。Teresina Rowell, “The Background and Early Use of the Buddha-kṣetra,” *The Eastern Buddhist* (original series) 6-3 (1934. 7) ; 6-4 (1935, 4) ; 7-2 (1937. 6))。日本人的には（方便）化身土を想定してもよいかもしれない。もっとも浄土教学などはもとよりハーンの預かり知らないことではあるかもしれないが。作品集の Gleanings は『旧訳聖書』「ルツ記」によるものであろう。貧しい者たちへ拾わせるためにわざと残り物を片付けないままにしておく古代イスラエルの美風である。それに加えて嫁・姑の確執という永遠の問題を紀元前六～五世紀に既に解決した事例を語る文献である。優しいハーンの胸の内を忖度するとそのような理由で題名に採用したと考えられる。勝五郎の物語に限ってハーンはわざわざ断り書きをつけている。この作品は再話や創作ではなく史料に基づいた正確な翻訳である、と。荒唐無稽な言い伝えと取られることを拒否している。少なくとも現実にある史料を忠実に呈示しようとしている意図は強く表れている。ハーンはアメリカのジャーナリスト時代に霊媒のルポ記事を書いたが、最初から信じるとか頭から嘘であるとか否定してかかる態度を取らず、誰が見てもどこまでが事実であるかわかるようになっている。そうすることでハーンが博捜した史料を基に読者各人が好む方面の結論を導きだすことができるようになっている。またハーンは文筆活動の出発点には翻訳が大きなウェイトを占めていた。翻訳には独自の考えを持っていて、教室で先生に正確に訳しなさい、と言われることがあるが、ハーンの目指す翻訳はそうしたものであった。若い頃はフランス文学の英語訳が主であったが、晩年にいたって日本文英語訳に携わることになった。そこでも翻訳への立場は変わらず、日本語資料の厳密な翻訳を海外に提供した。

とにもかくにもハーンが英語で書いたお蔭で、日本の一地方の言い伝えが海外でも注目されることとなった。恐らくはハーンによる勝五郎再生譚に最初に言及したのはキュルト・デュカスであろう。これが生まれ替わり研究の事例を集めることでは随一であるイアン・スティーヴンスンに継承され、以後日本の生まれ替わりの事例が言及される場合には、例外なくハーンの勝五郎が引かれることとなった（松村恒「生まれ変わりの科学からみた「勝五郎の再生」」（『八雲』27））。ロンドン大のアメリカ研究所の図書を閲覧させてもらった折、ハーンがルイジアナ学やクレオール研究の先駆者とされていることに驚愕したが、現今のパラサイエンスでもまた先鞭を付けたとされるのかもしれない。

ハーンの勝五郎再生譚は特に変わった体裁を取っている。普通の再話作品であれば物語の主筋に読者を引きずり込むのであるが、その前にいささか退屈とも思える史料の羅列が先行する。荒唐無稽な話であると一笑に付されることのないようにとの配慮があったからである。これについてはうしろのパラグラフと資料編で通覧することとする。

二　「勝五郎の再生」が和訳された効用

『仏国土にての落穂拾い』は一八九七年にボストンで出版されたが、当時は

日本の古伝承をわざわざ英語で読む日本人は多くなかったようだ。英語出版の直後に和訳は現れず、少し時間をおいてからのこととなる。大正から昭和にかけて帝大でハーンの授業を直接に受講した聴講生が集まって小泉八雲全集を企画し、多くの英語による作品が和訳されることとなった。『仏国土にての落穂拾い』も企画のうちにはいり「勝五郎の再生」も当然ながら和訳され、勝五郎伝説を知る日本人もあらためてハーンを通じて再読することとなる。第一書房『小泉八雲全集』に携わった弟子の第一世代は喜びを以て師の作品を和訳した意気込みが感じられる。勝五郎を担当した中世英文学を専攻する金子健二は御嶽信仰について小論文ともなり得るようなハーンの長大な注を全訳している(以後の和訳ではすべて省かれている)。これなどは面授の世代の師を思う気持ちの現れだと思う。しかし最初の和訳全集の企画には苦しむこともあった。ハーンがローマ字で書いた日本語・中国語の漢字表記には難渋したらしい。特に中国ものは困難が倍増している。それは中国史料はたいていフランス語訳が用いられており、その場合の中国語名はローマ字転写であった。明治日本では中国語の音読はまだ一般的ではなく、しかもフランス方式のローマ字であった。和訳者はその場合大いに困り、発音表記も漢字復元も不可能であった。ほぼすべての中国語がローマ字のまま訳文中に差し挟まれたままであった。もちろんこれらは和訳本が回を重ねるに従って徐々に改善されていった。勝五郎の場合も関連日本語史料を求めて和訳者たちは努力を重ねていった。

『小泉八雲作品集』三(勝五郎の再生)(河出書房新社 一九七七)「講談社学術文庫に再録」では訳者は努力して江戸時代の写本を探し出し原文と対応する部分を古文で写し、対応しない部分以下は現代語訳している。『新修平田篤胤全集』九巻も岩波文庫も三一書房版も容易に見ることのできる資料的に恵まれた状況になった今では、それは平田篤胤『勝五郎再生記聞』の一節であるとすぐわかるし、一部分だけとはいえハーンの英文とはよく相応する箇所もある。原資料を求めた訳者の営為は正しいし、多くの便宜をもたらした。ハーン自身が翻訳であると自分で断っているし、たとえ翻訳ではなくとも再話であれば日本の依拠資料を探し求めるのはハーン作品の理解には必要な作業である。我々はこうして積み重ねられた先人の努力に負っていることは言うまでもない。もうひとつ和訳本があるが、それは関連資料を探し求める努力をはなから一切放棄して、ハーンの英語を美しい日本語に置き換えるという立場をとっていると豪語するものである。これではハーン作品の真髄に一歩も近づくことはできない誤りである。翻訳者・学者の営みを最初から放棄してしまうのであれば、ハーンなどには最初から近づかない方がよい。それにしても美しい日本語とは一体何なのであろうか。

三　改訂版で増補されたハーン作品

ここで米国出版の書により日野の勝五郎伝説にもう一度立ち返ってみよう。勝五郎の生まれ変わりの言い伝えは広まり、同時代の文人たちの注目を引いた。特にその中の二人が勝五郎あるいはその家族から聞き書きを作り、書き留めることとなった。また問題の地を領している役人も取り調べを行うこととなり調書は公文書ともなった。文人の一人は池田冠山といい、『勝五郎再生前生話』をまとめた。これは多くの書の藍本となった。自らの愛娘を幼くして失った冠山の哀しみに包まれた営みであった。文人大名であり、とくに黄檗宗に深く帰依していて業績をも残している仏教研究者でもあり、単なる大名の手すさびではなかった。

調査団では勝五郎についての文献を博捜し、編者たち自らが翻刻を作成し、一次資料から研究を進めていった。諸資料のひとつに小泉八雲の作品も加えられ、それの解説も付されたが、それに先だって北村澄江「小泉八雲「勝五郎の転生」をめぐる研究課題」(二〇〇八、関係資料一覧参照)があり、詳細な研究が公表された。またハーンの日本ものには必ず出典がある。勝五郎の場合には作品中に直接の依拠資料が明らかにされている。しかしその資料自体は見られる状況にはなかったので、資料名が『ちんせつしゅうき』ということは明かされていても漢字表記は知られていなかった。元資料の所蔵者は著名人であったので、一部ではその資料について知られてはいたらしいが、資料が委託から寄贈へと変わるまでに時がかかり、容易に近づくことはできなかった。やがて事態が好転し、『珎説集記』と書かれることもわかった。その経緯は報告書調査報告⑪に記されている。私がこの資料の再発見について耳にしたのは海外に疎開移住している時であったので、一刻も早く見たいという思いがあったが、簡単に帰国することはできず、この書とハーン作品の照合はしかるべき人士に

よりなされるであろうと半ば諦めていた。とは言うものの私にとって「勝五郎の再生」には惹かれるものがあり、直接の依拠資料が見られないのでそれに近そうな代替物を探していた。あれこれと当たるうちに『視聴草』（資料編９）に引かれている勝五郎再生譚が『珎説集記』のそれに極めて近いものと推定し、それの該当箇所の翻刻を作り、上下段組にし、下段にその翻刻を与え、上段にハーン作品の和訳文を、『視聴草』の文をできるだけ参照しながら作成してみた。その結果『視聴草』の文は『珎説集記』のそれと相当に近いという感触を得た。しかし両者は同一物ではないので、省略された部分もあり、それらについては上下対照訳文から割愛を余儀なくされた。このたび調査団のご厚意により改訂版にてそれを補う機会を頂くという僥倖に恵まれた。前稿にて余儀なく割愛の例に倣った部分をも見ることができ、その欠を補い完成体にすることができたのは大きな喜びである（補えた部分は松村「勝五郎再生」の原典とそれに関わる諸問題」（『八雲』21）。特に和直の人名が登場する資料は他にはないと思う。

そうこうしているうちに報告書（初版）が完成し、『珎説集記』の問題の箇所の翻刻も『視聴草』のそれも作成された。同書はハーン研究者にとってずっとネックであったが、問題の箇所の翻刻は初版で初めて世にでた。解読者は小宮豊・大河内祥行の両名であるが、変体仮名多用の行書体の写本を読むのは容易ではない。仲間内で褒め合うのは適当ではないかもしれないが、よくぞここまでの感がある。例えば『珎説集記』の翻刻中に、「枕（机カ）の上に」（一三九頁下段）と訂正案を提示している。『視聴草』（一三一頁中段）『甲子夜話』（一二九頁下段）の対応箇所では確かに机とあるので一考に価する。私自身は枕が良いと思っているが、絶えず批判的に作業を進めていった翻刻者には脱帽である。この初版がなければ私などは何もできなかったろう。また初版に先立って現れていた北村2008は『珎説集記』の再発見前のハーン作品の抱く問題点を余すところなく指摘していた。またこれとは別途にハーン研究の部門でも北村の業績に呼応する様なものが現れている。

四　隠れていた雨森の資料

数年の疎開移住の外国生活を鋏んで帰国したところ、小泉八雲研究家の染村絢子氏から『珎説集記』とハーン「勝五郎の再生」を対照してみないかと勧められた。それに加えてもうひとつ大きな出来事がある。既に指摘されている様に、ハーンは日本の友人にして最も有力な助力者であった雨森信成の示唆により「勝五郎の再生」に関わることとなった。北陸在住の染村氏は東京の研究グループとはいかほどの交わりがあったかは詳らかではないが、夙に一九九六年の『へるん』誌のコラム欄にてこれらの資料の重要性を指摘し、事情の好転により資料へのアクセスが可能となるやいち早く諸資料の対照を実行され、『ラフカディオ・ハーンと六人の日本人』を刊行された（関係資料一覧参照）。もうするべきことは殆ど残ってはいない。しかし必ずしも誰にでも容易に利用できる資料ではないので、ここには、敢えてその他の勝五郎史料と並べて呈示し、大方の利用の便に供する次第である。

五　ハーン作品の段落構成

ハーン作品はよみものとしての完成を目指したものではなく、物語自体の始まる前に諸種の資料が詰まっている。作者自身が読者にご辛抱願いたいと弁明しているほどである。作者自身が用いた番号付けをそのまま流用し、時には更なる下位区分を施した。その場合は三角括弧を付してオリジナルにはない旨を断った。次にそれを通覧する。

Ⅰ　総序
Ⅱ　各論
　Ⅱ１　多門傳八郎の報告書
　Ⅱ２　和直の書状
　Ⅱ３　冠山の書状
　Ⅱ４　貞鈞の添書
　Ⅱ５　関係者名
　　Ⅱ５〈１〉　勝五郎の家族
　　Ⅱ５〈２〉　藤蔵の家族
　Ⅱ６　勝五郎の再生譚＝物語部分の本篇
　　Ⅱ６〈１〉　勝五郎姉に再生を語る
　　Ⅱ６〈２〉　不審に思った親が姉に問う

Ⅱ6〈3〉　勝五郎親に前世を語る
Ⅱ6〈4〉　勝五郎祖母に詳しく語る
Ⅱ6〈5〉　祖母勝五郎の語ったことを源蔵夫婦に話す
Ⅱ6〈6〉　祖母勝五郎を伴い程久保に行く
Ⅱ6〈7〉　周りの大人勝五郎の再生を確信する
Ⅱ6〈8〉　祖母・孫中野村に帰還
Ⅱ6〈9〉　筆者（＝冠山）勝五郎の両親に善行を尋ねる
Ⅱ7　原典についての訳者（＝ハーン）注記
Ⅲ　訳者（＝ハーン）の後書

おわりに

雨森は英語に堪能であり、読解が困難な日本語資料を英語に訳してハーンに提供した。こうした英語の助力者は雨森の他にもいて、染村絢子さんはこの助力者の研究を貴重な資料を駆使して推進していた。その染村さんが雨森が英語にしてハーンに提供したものの写しを所持しておられ、ある時ハーン作品と『珎説集記』を対照するなら雨森の手控えも参照してみないかとご提案頂いた。染村さんのこれ迄の御論考にも度々述べられているが、ハーンは助力者の存在を公開するのを好まなかった。また助力者達にもその意向を伝えていた。助力者のうち雨森は古武士の気風を持つ人物であり、生前にこのことを口外することは殆どなかった。雨森の他にも陰で助力をした人物もあり、ハーンの長男一雄さんはこれらの人は誠実な人であったと書き残し、父親を援助したことに感謝の念を抱いている。本人も助力者もこのことは伏せておく意向があったのであるが、このまま歴史の闇の中に葬らせてしまうにはあまりにも惜しい。泉下のこれらの方々の意向に反することになるかもしれないが、拝借した資料を翻字して改訂版にこめさせて頂くことにする。先人たちの霊にお詫びをして慰めることをしなければならないのだが、無学のためいかなる経典を読誦すればよいのかわからない。しかし今日まで縁あって若干の新出の経典を校訂出版することがあったので、これらを霊に捧げて、ハーンと助力者の文化への貢献に尊敬を払い、寛恕を請いたいと思う。

図3 雨森信成がハーンに送った『珎説集記』英訳の
自筆原稿（1枚目と6枚目）と封筒（明治29年12月15日付）。
原稿は全部で22枚ある。（染村絢子氏画像提供）

（参考資料）

凡例

1. 以下には左欄に雨森の『珎説集記』の英訳、右欄にはハーン「勝五郎の再生」の英文を対照させる。
2. 左欄は染村絢子さんから提供頂いた写しの転写である。転写にあたり改行には写本転写の常道通りスラッシュを入れた（e.g. W. West, *Textual Criticism and Editorial Technique*. Stuttgart: Teubner, 1973）。
3. 右欄はプロジェクト・グーテンベルク・Eブックから複写したものである。ただし英訳者の注及び注番号は省いてある。
4. 初版復刻シリーズも参照した。グーテンベルクとは表記の違いはあっても、実質的な異読はない。ただ一箇所だけ初刷りと後刷りの場合に大きな違いがある。これは末尾に初刷りの英文を転記しておく。
5. 段落構成の番号付けで三角括弧で包まれたものはすべて編者の付加である。
6. ⅠとⅢは雨森の英訳にはなく、ハーン独自の英文なので、左欄はないので省いた。
7. 日本語のローマ字表記中に同じ語でも長音を示すマクロンがあったりなかったりするが、原資料の表記の通りにしてある。
8. ハーン作品の英文には冒頭の数行を除いて異読はない。その部分の英文と独訳を、また雨森のハーンへの追悼文の関連箇所を参考のために添えた。

Ⅱ.1

/1/ Copy of the Report of Tamon Dempachirō /

Katsugorō /
nine years old
Second son of Genzō, a farmer
Village; Nakano-mura /
District; Tama-gōri
Province; Musashi /
My estate /

Some time during the autumn of the / last year, the above mentioned Katsugorō, / the second son of Genzō, told his elder sister / the details of his former existence and of his / re-birth; but, as it was a child's story, / the girl did not take any heed thereof. / Yet, as Katsugoro told her since the same / story over and again, she thought it strange, / and informed her parents of it.

During the 12th month last year Genzō / himself asked Katsugorō about the matter; /2/ whereupon Katsugoro said that his father in / his former existance was one Kyūbei, a farmer / in the village Hodokubo-mura, within the / jurisdiction of Lord Komiya, in the district / Tamagori, Province Musashi;

that he, the / son of Kyūbei, died of small-pox when / six years old; and that he was re-born in / the family of the aforesaid Genzō. Unbeliev-/-able as this was, the boy gave a detailed ac-/-count thereof with great assurance; therefore / the headman and elders of the village had a / due examination of the ease.

As the rumour / of this had spread, the family of one Hanshirō / of the village Hodokubo-mura heard it, and /

II

1.—COPY OF THE REPORT OF TAMON DEMPACHIRO.

The case of Katsugoro, nine years old, second son of Genzo, a farmer on my estate, dwelling in the Village called Nakano-mura in the District called Tamagori in the Province of Musashi.

Some time during the autumn of last year, the above-mentioned Katsugorō, the son of Genzo, told to his elder sister the story of his previous existence and of his rebirth. But as it seemed to be only the fancy of a child, she gave little heed to it. Afterwards, however, when Katsugoro had told her the same story over and over again, she began to think that it was a strange thing, and she told her parents about it.

During the twelfth month of the past year, Genzo himself questioned Katsugoro about the matter, whereupon Katsugoro declared,—

That he had been in his former existence the son of a certain Kyubei, a farmer of Hodokubo-mura, which is a village within the jurisdiction of the Lord Komiya, in the district called Tamagori, in the province of Musashi;—

That he, Katsugoro, the son of Kyubei, had died of smallpox at the age of six years,—and

That he had been reborn thereafter into the family of the Genzo before-mentioned.

Though this seemed unbelievable, the boy repeated all the circumstances of his story with so much exactness and apparent certainty, that the Headman and the elders of the village made a formal investigation of the case.

As the news of this event soon spread, it was heard by the family of a certain Hanshiro, living in the village called

Hanshiro came to the house of aforesaid / Genzō, a farmer of my estate, and inquired / Genzō of the matter; and found what the / boy had said was true in regard to the facial / characteristics and personal appearance of his / former parents and the aspects of his home / in his former existence. They took Katsugorō / to the house of Hanshirō in Ho-do-kubo-mura; /3/ then the people of the house said he looked / much like Tōzō who died at the age of six / some years ago. Since that time till now / the two families have been in the habit of / exchanging occasional visits. The people / of the villages in the vicinity seem to have / come to know this matter, and now-a-days / persons from various places daily come to see / Katsugorō. /

The above was deposed to me by the / people dwelling in my estate; so, I called / Genzō to my house and examined him, / and his answers were not different from the / above given account. Such a rumour as this above given account. Such a rumour as this / occasionally comes into vogue in this world, / and is indeed hard to believe. But I beg to report the above case, hoping it may reach / your august ear, (and that I may not be / charged with negligence).

(signed) Tamon Dempachirō /
4th month, 6th year of Bunsei (1823)
---------- /4/

Hodokubo-mura; and Hanshiro then came to the house of the Genzo aforesaid, a farmer belonging to my estate, and found that everything was true which the boy had said about the personal appearance and the facial characteristics of his former parents, and about the aspect of the house which had been his home in his previous birth. Katsugoro was then taken to the house of Hanshiro in Hodokubo-mura; and the people there said that he looked very much like their Tozo, who had died a number of years before, at the age of six. Since then the two families have been visiting each other at intervals. The people of other neighboring villages seem to have heard of the matter; and now persons come daily from various places to see Katsugoro.

*

A deposition regarding the above facts having been made before me by persons dwelling on my estate, I summoned the man Genzo to my house, and there examined him. His answers to my questions did not contradict the statements before-mentioned made by other parties.
Occasionally in the world some rumor of such a matter as this spreads among the people. Indeed, it is hard to believe such things. But I beg to make report of the present case, hoping the same will reach your august ear,—so that I may not be charged with negligence.

[Signed] TAMON DEMPACHIRO.
The Fourth Month and the Sixth Year of Bunsei [1823].

Ⅱ.2

Copy of Kazunawo's letter to Teikin, (priest of Sengakuji)

I have been favoured with the accoumpany-/-ing copy of the report of Tamon Dempachirō / by Shiga Hyōëmon Sama, who brought it / to me, and I have the pleasure of showing / it to you. It seems to me advisable for / you to keep it with the writing of Kwanzan / Sama which you showed me the other day. /

(signed) Kazunawo /
21st day, 6th month. /
---------- /

2. —COPY OF LETTER WRITTEN BY KAZUNAWO TO TEIKIN, PRIEST OF SENGAKUJI.

I have been favored with the accompanying copy of the report of Tamon Dempachiro by Shiga Hyoëmon Sama, who brought it to me; and I take great pleasure in sending it to you. I think that it might be well for you to preserve it, together with the writing from Kwan-zan Sama, which you kindly showed me the other day.

[Signed] KAZUNAWO.
The twenty-first day of the Sixth Month. [No other date.]

Ⅱ.3

Copy of Matsudaira Kwanzan's (a daimyō) / letter to the priest Teikin of the temple Sengakuji /
---/

I herewith inclose and show you the / account of the

3.—COPY OF THE LETTER OF MATSUDAIRA KWANZAN [DAIMYO] TO THE PRIEST TEIKIN OF THE TEMPLE CALLED SENGAKUJI.

I herewith enclose and send you the account of the rebirth

re-birth of Katsugorō. I have / written it in popular style, it being a good / means of silencing the unbelievers of the / doctrines of Buddha. As a literary work it is but a miserable thing; I send it to / you just for your amusement. But, so far as the account itself goes, it is without any mistake, for I myself heard it from / Katsugorō's grandmother. When you / have read it, please return it to me.

(Signed) Kwanzan
20th day.
-------- /

of Katsugoro. I have written it in the popular style, thinking that it might have a good effect in helping to silence those who do not believe in the doctrines of the Buddha. As a literary work it is, of course, a wretched thing. I send it to you supposing that it could only amuse you from that point of view. But as for the relation itself, it is without mistake; for I myself heard it from the grandmother of Katsugoro. When you have read it, please return it to me.

[Signed] KWANZAN.
Twentieth day. [No date.]

Ⅱ.4

The Account of the Re-birth of Katsugorō
---------- /
Separate writing /

This Account is of a real fact, / and is without any mistake, because it is / written by Matsudaira Kanzan Sama / of Teppōzu, Yedo, who himself went there, / on the 22nd day, 3rd month, this year, with / the special purpose of inquiring about the / matter; and, after having got a glimpse of /6/ Katsugorō and seen his grandmother, asked / her questions on every item of the subject, and / wrote down her answers just as they were / given. /

After that, the said Kwanzan Sama / condescended to confer the favour of a / visit to this temple on the 14th day, this 4th / month, and told me by his own mouth / about his visit to Katsugorō aforesaid. / Moreover, he condescented to do me the favour / of showing the aforesaid written account / on the 20th day, same month. Availing my-/-self of this opportunity, I have forthwith / copied the written account /

(signed) Teikin Sō {facsimile of the / priest kakihan or seal written by / hand. /
Sengakuji /
21st day, 4th month, 6th year of Bunsei. (1823) /---------- /7/

[COPY.]

RELATION OF THE REBIRTH OF KATSUGORO.

4.—*(Introductory Note by the Priest Teikin.)*

This is the account of a true fact; for it has been written by Matsudaira Kwanzan Sama, who himself went [to Nakano-mura] on the twenty-second day of the third month of this year for the special purpose of inquiring about the matter. After having obtained a glimpse of Katsugoro, he questioned the boy's grandmother as to every particular; and he wrote down her answers exactly as they were given.

Afterwards, the said Kwanzan Sama condescended to honor this temple with a visit on the fourteenth day of this fourth month, and with his own august lips told me about his visit to the family of the aforesaid Katsugoro. Furthermore, he vouchsafed me the favor of permitting me to read the before-mentioned writing, on the twentieth day of this same month. And, availing myself of the privilege, I immediately made a copy of the writing.

[Signed] TEIKIN SO Facsimile of the priest's kakihan, or private sign-manual, made with the brush.

The twenty-first day of the Fourth Month of the Sixth Year of Bunsei [1823]

Ⅱ.5<.1>

Katsugorō
Born 10th day, 10th month, 12th /

[COPY.]
5.—[NAMES OF THE MEMBERS OF THE TWO FAMILIES CONCERNED.]

[*Family of Genzo.*]

KATSUGORO.—Born the 10th day of the 10th month of the twelfth year of Bunkwa [1815]. Nine years old this sixth

year of Bunkwa (1815) /
Nine years old, this 6th year of /
Bunsei (1823) /
The second son of Genzō, a farmer / living in Tanitsuiri, village Nakano-/-mura, district Tama-gōri, province / Musashi. Estate of Tamon / Dempachiro whose yashiki is / in the street Shichikencho, Nedzu, / Yedo. /
Jurisdiction of Yusuki. /

year of Bunsei [1823].[1] Second son of Genzō, a farmer living in Tanitsuiri in Nakano-mura, district of Tamagōri, province of Musashi.—Estate of Tamon Dempachiro, whose yashiki is in the street called Shichikenchō, Nedzu, Yedo.—Jurisdiction of Yusuki.

Genzō
Katsugorō's father. Family name; / Koyada. /
Forty-nine years old, this 6th year / of Bunsei. /
Being poor, he occupies himself in / making baskets, and sells them in / Yedo. The inn where he usually /8/ lodges in Yedo is Sagami-ya /
Kihei's, in the street Bakurō-chō. /

GENZO.—Father of Katsugoro. Family name, Koyada. Forty-nine years old this sixth year of Bunsei. Being poor, he occupies himself with the making of baskets, which he sells in Yedo. The name of the inn at which he lodges while in Yedo is Sagamiya, kept by one Kihei, in Bakuro-cho.

Sei
Genzo's wife and Katsugorō's mother. / Thirty-nine years old, this 6th year / of Bunsei. Daughter of Murata / Kichitaro, a samurai, who once / served, as an archer, the Lord of / Owari. When Sei was twelve / years old, she served as a maid / Honda Dainoshin Dono, it is said. / When she was thirteen years old, her / father Kichitarō was forever dismissed / on a certain account from the service / of Lord of Owari; and he became a / rōnin. He died at the age of / seventy-five on the 25th day, 4th month, / 4th year of Bunkwa (1807). His tomb / is in the graveyard of the temple / Eirinji, of Zenshu Sect, in the / village Shimo-Yusukimura. /9/

SEI.—Wife of Genzo and mother of Katsugoro. Thirty-nine years old this sixth year of Bunsei. Daughter of Murata Kichitaro, samurai,—once an archer in the service of the Lord of Owari. When Sei was twelve years old she was a maid-servant, it is said, in the house of Honda Dainoshin Dono. When she was thirteen years old, her father, Kichitaro was dismissed forever for a certain cause from the service of the Lord of Owari, and he became a ronin.[2] He died at the age of seventy-five, on the twenty-fifth day of the fourth month of the fourth year of Bunkwa [1807]. His grave is in the cemetery of the temple called Eirin-ji, of the Zen sect, in the village of Shimo-Yusuki.

Tsuya /
Katsugorō's grandmother. Seventy-/ two years old, this 6th year of / Bunsei. / When young, she served as a maid / in the household of Matsudaira / Oki-no-kami Dono (a daimyo). /

TSUYA.—Grandmother of Katsugoro. Seventy-two years old this sixth year of Bunsei. When young she served as maid in the household of Matsudaira Oki-no-Kami Dono [Daimyo].

Fusa
Katsugorō's elder sister. Fifteen / years old, this year. /

FUSA.—Elder sister of Katsugoro. Fifteen years old this year.

Otojirō
Katsugorō's elder brother. Fourteen / years old, this year.

OTOJIRO.—Elder brother of Katsugoro. Fourteen years old this year.

Tsune
Katsugorō's yonger sister. / Four years old, this year. /

TSUNÉ.—Younger sister of Katsugoro. Four years old this year.

---------- /10/

Ⅱ.5<.2>

[*Family of Hanshiro.*]

Tōzō
Died at the age of six. /
Village Hodokubo-mura; district / Tama-gōri; province Musashi. / Estate of Nakane Uyemon, whose / yashiki is in the street Atarashi-/-bashi-dori, Shitaya, Yedo. / Jurisdiction of Komiya. / He was born in the 2nd year of / Bunkwa (1805), and died at / about the 4th hour daytime (10 o'/clock A. M.) on the 4th day, 2nd / month, 7th year of Bunkwa(1810). / Sickness of which he died; small-/-pox. Buried in the graveyard / on the hill of the above mentioned / village Hodokubo-mura. / Parochial temple; Iwōji, in the / village Misawa-mura. Sect; / Zenshū. Last year; that is, the / 5th year of Bunkwa (1822) the / Jūsan-kwaiki (ceremony of the /11/ thirteenth years's Mass) was held / for Tōzō. ("Thirteenth year" / including the year wherein a person / died).

TOZO.—Died at the age of six in Hodokubo-mura, in the district called Tamagori in the province of Musashi. Estate of Nakané Uyemon, whose yashiki is in the street Ata-rashi-bashi-dori, Shitaya, Yedo. Jurisdiction of Komiya.—[Tozo] was born in the second year of Bunkwa [1805], and died at about the fourth hour of the day [*10 o'clock in the morning*] on the fourth day of the second month of the seventh year of Bunkwa [1810]. The sickness of which he died was smallpox. Buried in the graveyard on the hill above the village before-mentioned,—Hodokubo-mura.—Parochial temple: Iwoji in Misawa-mura. Sect: Zen-shu. Last year the fifth year of Bunkwa [1822], the jiū-san kwaiki[3] was said for Tozo.

Hanshirō /
Tōzō's step-father. His family-/-name; Susaki. Fifty years old, / this 6th year of Bunsei.

HANSHIRO.—Stepfather of Tozo. Family name: Suzaki. Fifty years old this sixth year of Bunsei.

Shidzu
Tōzō's mother, Forty-nine years / old, this 6th year of Bunsei. /

SHIDZU.—Mother of Tozo. Forty-nine years old this sixth year of Bunsei.

Kyūbei, afterward Tōgorō /
Tōzo's real father. Original name; / Kyūbei, which was changed after-/-ward into Tōgorō, Died at the / age of fourty- eight in the 6th / year of Bunkwa (1809), when / Tōzō was five years old. To / replace him, Hanshirō became / 12/ an iri-muko.

KYUBEI (afterwards TOGORO).—Real father of Tozo. Original name, Kyubei, afterwards changed to Togoro. Died at the age of forty-eight, in the sixth year of Bunkwa [1809], when Tözö was five years old. To replace him, Hanshiro became an iri-muko.[4]

Two youngsters /
Two girls /
These are Tōzō's step brothers and / sisters; (that is, their father is Han-/-shirō, while their mother is the / same as Tōzō's.) /

CHILDREN: TWO BOYS AND TWO GIRLS.—These are Hanshiro's children by the mother of Tozo.

Ⅱ.6<.1>

Sometime in about the 11th month last / year, when Katsugorō was playing with / his elder sister Fusa in the rice-field, he / asked her, "Whence were you come and / born in our household?"/
"How can I know things before I was / born?" said Fusa./
Katsugorō seemed to wonder at this, and / said, "Then you do not know thigs before / your birth?"/
"Do you know?" asked Fusa. /13/
"Of coure I know" said Katsugorō, / "I was the son of

Some time in the eleventh month of the past year, when Katsugoro was playing in the rice-field with his elder sister, Fusa, he asked her,— "Elder Sister, where did you come from before you were born into our household?"
Fusa answered him:—
"How can I know what happened to me before I was born?"
Katsugoro looked surprised and exclaimed:
"Then you cannot remember anything that happened before you were born?"
"Do you remember?" asked Fusa.

Kyūbei San of Hodokubo, / and was called Tōzō; don't you know?" /

"Then. I'll tell it to Papa and Mama,"/ said Fusa. Whereupon Katsugorō burst / into tears and said, "Oh, it won't do to tell it to Papa and Mama."/

"Well, I won't tell them, then," said Fusa. "But if do naughty things, I'll tell them."/

"Indeed I do," replied Katsugoro. "I used to be the son of Kyubei San of Hodo-kubo, and my name was then Tozo—do you not know all that?"

"Ah!" said Fusa, "I shall tell father and mother about it."

But Katsugoro at once began to cry, and said:—

"Please do not tell!—it would not be good to tell father and mother."

Fusa made answer, after a little while:—

"Well, this time I shall not tell. But the next time that you do anything naughty, then I will tell."

Ⅱ.6<.2>

Since that time whenever the sister / and the brother quarrelled, she would threat-/-en him by saying, "Well, well, I'll speak /out that." The he would at once desist / from the quarrel. This happened often, / so that their parents at last overheard them, / and thought Katsugorō must have done / something wrong, and were anxious to know / what he had done. They asked Fusa what / was the matter, and she told them the fact / as it was. Then Genzo and his wife / and Tsuya, Katsugorō's grandmother, thought / it was very strange. They, therefore, called /14/ Katsugorō, and tried to make him tell / the story by all means of coaxing and / threats.

After that day whenever a dispute arose between the two, the sister would threaten the brother, saying, "Very well, then—I shall tell that thing to father and mother." At these words the boy would always yield to his sister. This happened many times; and the parents one day overheard Fusa making her threat. Thinking Katsugoro must have been doing something wrong, they desired to know what the matter was, and Fusa, being questioned, told them the truth. Then Genzo and his wife, and Tsuya, the grandmother of Katsugoro, thought it a very strange thing. They called Katsugoro, therefore; and tried, first by coaxing, and then by threatening, to make him tell what he had meant by those words.

Ⅱ.6<.3>

"Then, I'll tell you," said Katsugorō / at last. "I was the son of Kyūbei San of / Hodokubo, and my mother's name was O-/-Shidzu San. When I was five years old, Kyū-/-bei San died; and in his place came a man / called Hanshirō San, who loved me dearly. / But in the next year when I was six years / old I died of small-pox. In the third year / after that I entered Mama's belly; and / after that I was born."/

His parents and grandmother greatly / wondered at hearing this, and thought they / must inquire by all means after the man / called Hanshirō, of Hodokubo; but, being / engrossed in getting livelihood, they left / their intention rest unaccomplished.

After hesitation, Katsugoro said:—"I will tell you everything. I used to be the son of Kyubei San of Hodokubo, and the name of my mother then was O-Shidzu San. When I was five years old, Kyubei San died; and there came in his place a man called Hanshiro San, who loved me very much. But in the following year, when I was six years old, I died of smallpox. In the third year after that I entered mother's honorable womb, and was born again."

The parents and the grandmother of the boy wondered greatly at hearing this; and they decided to make all possible inquiry as to the man called Hanshiro of Hodokubo. But as they all had to work very hard every day to earn a living, and so could spare but little time for any other matter, they could not at once carry out their intention.

Ⅱ.6<.4>

Now, Katsugorō's mother Shidzu had / to give milk to her daughter Tsune, who was / four years old. So, Katsugorō slept every / 15 / night with his grandmother Tsuya. He used / to talk with her in bed. Therefore, watching / for the happy mood of Katsugorō, the grandmother / asked him of things at the time when he did. / "Till about four years old I well remembered / all things," he said. "But since then I / have gradually forgotten many, many things. / Yet, I still well remember that I died of small-/-pox; that I was put into

Now Sei, the mother of Katsugoro, had nightly to suckle her little daughter Tsuné, who was four years old;—and Katsugoro therefore slept with his grandmother, Tsuya. Sometimes he used to talk to her in bed; and one night when he was in a very confiding mood, she persuaded him to tell her what happened at the time when he had died. Then he said:—"Until I was four years old I used to remember everything; but since then I have become more and more forgetful; and now I forget many, many things. But I still

a jar; and that, when / I was buried on a hill, they dug a hole in / ground, and when they let the jar fall into / the hole, thud, it fell. I remember that sound. / Then I returned to my old home and stopped / on my pillow, when an old man looking like / somebody's grandfather, — who and what he was / I did not know —, came and took me with / him. I walking flew through empty space. / There was neither day nor night; it seemed / always like the time of sun-set, if I remember / right. I did not feel cold, nor hot, nor yet / hungry. However far I went, I could hear / the nembutsu (prayer, Namu Amida-Butsu) /16/ repeated at home and the indistinct voices of / people talking there. And when the people / at home offered hot botamochi in the family / shrine, I felt as if I inhaled the vapour / through the nostril. Therefore, Gran'ma, / don't forget to offer hot things to hotoke-sama; / and don't forget to give things to priests. These / are the best things you can do, I can assure / you. Well, then that old man led me around, and passed, if I remember right, through the / road beyond our street, and, pointing to this / house, said to me, "Be born now in that / house yonder, for it is three years since you / died. The person who shall become your / grandmother is a good-natured old woman; / so, be conceived and be born there." So / saying the old man went away. I stood / under the persimmon tree at the entrance / of this house, where I thought to enter, when / I overheard a consulation within the house. / Papa being very poor, Mama must go to Yedo to serve as servant, it was said. "Well, /17/ I won't enter this house", methought, and / stopped three days in the yard. On the third / day the idea of Mama's going to Yedo was / given up. Therefore, that night I entered this / house through the knot-hole in the window; / and for yet three days I was by the side of / the kamado (Ki[t]chen-range), after which I entered / Mama's belly. I remember that, thinking Ma-/-ma would suffer if I were in the upper part / of the belly, I placed myself at the side. I / remember well that I was born without any / pain whatever. But, Gran'ma, you may / tell this to Papa or Mama, but don't tell it / to any body else." /

remember that I died of smallpox; I remember that I was put into a jar; I remember that I was buried on a hill. There was a hole made in the ground; and the people let the jar drop into that hole. It fell *pon*!—I remember that sound well. Then somehow I returned to the house, and I stopped on my own pillow there. In a short time some old man, —looking like a grandfather—came and took me away. I do not know who or what he was. As I walked I went through empty air as if flying. I remember it was neither night nor day as we went: it was always like sunset-time. I did not feel either warm or cold or hungry. We went very far, I think; but still I could hear always, faintly, the voices of people talking at home; and the sound of the *Nembutsu* being said for me. I remember also that when the people at home set offerings of hot *botamochi* before the household shrine [*butsudan*], I inhaled the vapor of the offerings.... Grandmother, never forget to offer warm food to the honorable dead [Hotoké Sama], and do not forget to give to priests—I am sure it is very good to do these things. ... After that, I only remember that the old man led me by some roundabout way to this place—I remember we passed the road beyond the village. Then we came here, and he pointed to this house, and said to me:—'Now you must be reborn,—for it is three years since you died. You are to be reborn in that house. The person who will become your grandmother is very kind; so it will be well for you to be conceived and born there.' After saying this, the old man went away. I remained a little time under the kaki-tree before the entrance of this house. Then I was going to enter when I heard talking inside: some one said that because father was now earning so little, mother would have to go to service in Yedo. I thought, "I will not go into that house;" and I stopped three days in the garden. On the third clay it was decided that, after all, mother would not have to go to Yedo. The same night I passed into the house through a knot-hole in the sliding-shutters;—and after that I stayed for three days beside the *kamado*. Then I entered mother's honorable womb.... I remember that I was born without any pain at all.—Grandmother, you may tell this to father and mother, but please never tell it to anybody else."

Ⅱ.6〈.5〉

The grandmother told Genzō and his / wife what she had heard from Katsugorō. /Since then Katsugorō frankly talked with his parents about his / former existence; and often / said, "I want to go to Hodokubo. Please / let me visit Kyūbei San's tomb." Genzō / thought that, as Katsugorō was a strange child, / he might die before long, and that therefore /18/ it was desirable to inquire whether or not there / was a man called Hanshirō in Hodokubo. / Yet Genzō feared, since he was a man, other / people might think him rash or inconsiderate, / if he made the inquiry. /

The grandmother told Genzo and his wife what Katsugoro had related to her; and after that the boy was not afraid to speak freely with his parents on the subject of his former existence, and would often say to them: "I want to go to Hodokubo. Please let me make a visit to the tomb of Kyubei San." Genzo thought that Katsugoro, being a strange child, would probably die before long, and that it might therefore be better to make inquiry at once as to whether there really was a man in Hodokubo called Hanshiro. But he did not wish to make the inquiry himself, because for a man to do

So, on the 20th day / of the 1st month this year he requested his / mother Tsuya to take her grandson to Hodo-/-kubo.

so [under such circumstances?] would seem inconsiderate or forward. Therefore, instead of going himself to Hodokubo, he asked his mother Tsuya, on the twentieth day of the first month of this year, to take her grandson there.

Ⅱ.6<.6>

Tsuya went with Katsugorō to Hodokubo. / There she asked him, "Is it this house?" or / "Is that the house?" "No, further on, yet / further on," said Katsugorō, and walked a-/-head. "This is it," exclaimed he, when he / came to the front of a certain house; and, quite / discarding Tsuya, ran into it. Tsuya followed / him, and asked the people there the name of the / master. "Hanshirō" answered one of them. / She asked them the name of Hanshirō's wife. / "Shidzu", was the answer. Then she asked them / whether there ever was a son called Tōzō in the / family. "Yes," they answered, "but the boy died thirteen years ago at the age of six." /19/

Tsuya went with Katsugoro to Hodokubo; and when they entered the village she pointed to the nearer dwellings, and asked the boy, "Which house is it?—is it this house or that one?" "No," answered Katsugoro,—"it is further on—much further,"—and he hurried before her. Reaching a certain dwelling at last, he cried, "This is the house!"—and ran in, without waiting for his grandmother. Tsuya followed him in, and asked the people there what was the name of the owner of the house. "Hanshiro," one of them answered. She asked the name of Hanshiro's wife. "Shidzu," was the reply. Then she asked whether there had ever been a son called Tozo born in that house. "Yes," was the answer; "but that boy died thirteen years ago, when he was six years old."

Ⅱ.6<.7>

Then Tsuya was for the first time convinced of / the truth of what Kasugorō had told her, and / could not help shedding tears, and detailed to the / folks what Katsugorō, remembering his former / existence, had said to her. Hanshirō and his / wife wondered indeed at it. They embraced Ka-/-tsugorō, and wept; and remarked that this boy / as Katsugorō was a degree more handsome than / when he died as Tōzō at the age of six; &c. / Katsugorō looked about, and seeing the roof of / the tabacco-shop opposite Hanshiō's house, / pointed to it and remarked, "That was not / there before. That yonder tree too was not / there." Which was all true. So, Hanshirō / and his wife all the more ga wo orishi, / (broke down their selves; that is, their obstinacy / was broken down, or they were all the more /convinced of the truth of Katsugorō's re-birth). /

Then for the first time Tsuya was convinced that Katsugorō had spoken the truth; and she could not help shedding tears. She related to the people of the house all that Katsugorō had told her about his remembrance of his former birth. Then Hanshirō and his wife wondered greatly. They caressed Katsugorō and wept; and they remarked that he was much handsomer now than he had been as Tözö before dying at the age of six. In the mean time, Katsugorō was looking all about; and seeing the roof of a tobacco shop opposite to the house of Hanshiro, he pointed to it, and said:—"That used not to be there." And he also said,—"The tree yonder used not to be there." All this was true. So from the minds of Hanshiro and his wife every doubt departed [*ga wo orishi*].

Ⅱ.6<.8>

That day Tsuya and Katsugorō re-/-turned to Tanitsuiri, Nakano-mura. After / that Genzō sent Katsugorō to the house of / Hanshirō two or three times, and let him /20/ visit the tomb of Kyūbei, his real father in / his former existence.

Katsugoro occasionally says, "I am a / nono-sama (Hotoké or Kami or a departed soul); / so please show good attention to me." Some-/-times he says to his grandmother "I think / I shall die at the age of sixteen; but, as On-/-Take Sama has taught it, death is nothing / to be dreaded." When his parents say / to him, "Won't you become a priest?" he an-/-swers "I don't like to become a priest."

Nowadays the villagers do not call / him Katsugorō, but have nicknamed him / "Hodokubo-kozō. (Little man of Hodokubo). If / anybody comes to see him, he is very shy, /

On the same day Tsuya and Katsugoro returned to Tanitsuiri, Nakano-mura. Afterwards Genzo sent his son several times to Hanshirō's house, and allowed him to visit the tomb of Kyūbei his real father in his previous existence.

Sometimes Katsugoro says:—"I am a *Nono-Sama*: therefore please be kind to me." Sometimes he also says to his grandmother:—"I think I shall die when I am sixteen; but, as Ontaké Sama has taught us, dying is not a matter to be afraid of." When his parents ask him, "Would you not like to become a priest?" he answers, "I would rather not be a priest."

and runs off into the inner room, and hides / himself there. So, it is not possible to carry / a direct conversation with him. I have / therefore written down this account just / as his grandmother told me.

Ⅱ.6<.9>

I asked whether any one of the three / persons, that is, Genzo, his wife, and Tsuya /21/ remembers having done any virtuous deeds. / The answer was that they have done nothing / particularly virtuous, but that the grandmother / is in the habit of repeating nembutsu every / morning and evening; and that, if there / happens to be a priest or a beggar standing / at the door, she always gives him two mon (smallest piece of coin); besides which she too / has done nothing that can be specially called / a virtuous deed./

End of the Account of Re-birth. /

==========

I asked whether Genzo, his wife, or Tsuya, could any of them remember having done any virtuous deeds. Genzo and his wife said that they had never done anything especially virtuous; but that Tsuya, the grandmother, had always been in the habit of repeating the Nembutsu every morning and evening, and that she never failed to give two mon to any priest or pilgrim who came to the door. But excepting these small matters, she never had done anything which could be called a particularly virtuous act.

(*—This is the End of the Relation of the Rebirth of Katsugoro.*)

Ⅱ.7

The translator begs to say: -/
The above is an extract from a manu-/-script entitled-/
"Chin Setsu Shū Ki /
"From the 4th month, 6th year of Bunsei /
"To the 10th month, 6th year of Tempō."/
"Collection-writing of Uncommon Stories; from / the 4th month, 1823 to the 10th month, 1835." /22/
At the end of the manuscript is written the / following: -/
"From the years of Bunsei /
To the years of Tempō /
Minamisempa /
Owner /
Kurumacho, Shiba /
Yedo."/
and the following:— /
"Bought from /
Yamatoya Sakujiro, /
Nishinokubo. /
21st day, 2nd year of Meiji, (1869) /
From which it is evident that manuscript / was written by Minamisempa, who collected stories / he heard or copied manuscripts he got during / the thirteen years. – 1823 to 1835 inclusive. / In reading the above account one must remember / that, in counting a man age in Japan, the year / in which he was born is counted as one year.

7.—(Note by the Translator.) The foregoing is taken from a manuscript entitled *Chin Setsu Shū Ki;* or, "Manuscript-Collection of Uncommon Stories,"—made between the fourth month of the sixth year of Bunsei and the tenth month of the sixth year of Tempo [1823-1835]. At the end of the manuscript is written,—"*From the years of Bunsei to the years of Tempo.—Minamisempa, Owner: Kurumacho, Shiba, Yedo*" Under this, again, is the following note:—"*Bought from Yamatoya Sakujiro Nishinokubo: twenty-first day [?], Second Year of Meiji* [1869]." From which it would appear that the manuscript had been written by Minamisempa, who collected stories told to him, or copied them from manuscripts obtained by him, during the thirteen years from 1823 to 1835, inclusive.

初刷りの冒頭

The following is not a story, – at least it is not one of my stories. It is only the translation of an old Japanese document – or rather series of documents – very much signed and sealed, and dating back to the early part of the present century. My friend Aménomori, who is always seeking rare Japanese and Chinese MSS., and seems to have some preter – natural power for discovering them, found this one in the library of Count Sasaki in Tōkyō. Thinking it to be a curious thing, he obtained kindly permission to have a copy of it made for me; and from that copy the translation was done. I am responsible for nothing beyond a few notes appended to the text.

初刷りのドイツ語訳

Das Folgende ist keine Geschichte, –wenigstens keine Geschichte von mir. Es ist nur die Übersetzung eines alten japanischen Dokumentes (oder eigentlich einer ganzen Dokumenten-serie, mit vielen Siegeln und Unterschriften aus den Anfängen des vorigen Jahrhunderts. Mein Freund Aménomori, der immer nach seltenen chinesischen und japanischen Dokumenten fahndet und für derartige Entdeckungen mit einer übenatürlichen Kraft begabt scheint, fahndet und für derartige Entdeckungen mit einer übernatürlichen Kraft begabt scheint, fand diese Urkunden in der Bibliothek des Grafen Sasaki in Tōkyō. Da sie ihm sehr seltsam vorkamen, bat er um die Erlaubnis, sie für mich kopieren zu lassen; und nach dieser Kopie wurde die Übersetzung gemacht. Ich bin nur für einige dem Text beigefügte Noten verantwortlich.

(“Katsugorōs Wiedergeburt” In: Lafcadio Hearn, *Buddha: Neue Geschichten und Studien aus Japan,* übst. von Berta Franzos [Frankfurt a. M. : Rütten& Loening, 1922], 221)

＊この段落は、英語の諸版にも僅少で殆ど見ることはできない。本邦初訳の金子訳は、この珍しい版を底本としている。

ドイツにも部数の少なかった初刷り本が伝わっていて、通常みられる英語本と、一段落が丸々違っている（決して誤訳ではない）ことに注意を促すためにここに掲載した。

雨森の追悼文 ..

…...

“What you tell me about Count Sasaki[2] rather surprises me. Of course it will be a great privilege to see him. But If I ever have the pleasure of going with you, you would have to pray him to excuse a man, who, although a Japanese in name, remains a barbarian in manners and total ignorance of etiquette.”

…...

[2] Count Sasaki is the gentleman in whose library I found the original of the story of the rebirth of Katsugoro, which appears in Hearn’s Gleanings in Buddha-Field. The above letter was written in answer to mine, in answer to mine, in which I told Hearn that the count was very desirous to see him, having known him so well by name.

(Nobushige Amenomori, “Lafcadio Hearn, the Man,” *Atlantic Monthly*, vol.96 [Oct. 1905], 520b cum n.2).

六　胎内記憶研究と勝五郎生まれ変わり物語

平成十八年（二〇〇六）七月に、「勝五郎生まれ変わり物語探求調査団」を立ち上げた時、調査団のメンバーのかなりの人たちは、「胎内記憶」という言葉を知らなかった。最初は、調査項目の中にも入っていなかった。その後、イアン・スティーブンソン博士の著書などを読んで、勝五郎の生まれ変わり物語が、この分野の、もっとも古く正確な記録として注目されていることを知った。この十年間の調査活動を通して、勝五郎生まれ変わり物語は、「記録された生まれ変わり物語」であり、当時の一流の文人・学者による、リアルタイムの正確な記録であったことを認識することとなったが、このことが「胎内記憶」の信憑性のある実例として、この分野の研究者たちに注目されている。

（調査報告⑫）
胎内記憶について

鈴木　俊子

三島由紀夫は自伝的小説『仮面の告白』で、「永いあいだ、私は自分が生れたときの光景を見たことがあると言い張っていた。」と記している。そういった誕生時の記憶も含めて、生まれる前の記憶を持つ子どもは三人に一人であるという千人規模の調査結果がある。

「胎内記憶」という世代によっては耳にしたこともないこの言葉は、今や七割以上の妊婦さんが知るまでとなった。生まれる前の記憶は、「胎内記憶」「誕生記憶」「中間生記憶」「過去生記憶」と大きく四つに分けられる。（池川明『子どもは親を選んで生まれてくる』）

胎内記憶研究の第一人者で産科医の池川明博士によると、定義はまだないものの、「胎内記憶」はおなかに宿ってから誕生直前までの記憶、「誕生記憶」は陣痛が始まってから誕生直後までの記憶、「中間生記憶」はおなかに宿る前にいた世界の記憶、「過去生記憶」は過去に別の人物として生きていた記憶をいう。（同『ママを守るために生まれてきたよ！』）

子どもたちが語る記憶はこれらが混在して区別が難しいため、総じて広い意味で「胎内記憶」と呼ぶことが多い。また中間生を中間世、過去生を過去世と書くこともある。

池川博士は、平成十四年に長野県諏訪市のすべての保育園と一部の幼稚園で、翌十五年に長野県塩尻市のすべての保育園で計三千六百一組の親子にアンケートを実施、千六百二十組から回答が得られ、三人に一人の子どもに生まれる前の記憶があることがわかった。子どもが生まれる前のことを話すのは、二歳から四歳が最も多く、六歳を過ぎると記憶の保有率は急に下がるという。（同『子どもは親を選んで生まれてくる』）

大門正幸博士（中部大学教授、バージニア大学客員教授）が平成二十六年にインターネット調査会社を通じて胎内記憶、誕生時記憶、中間生記憶、過去生記憶のいずれかを語ったことがある三～十二歳の子どもを持つ日本人女性約千人に調査を行ったところ、記憶の内訳は各々、八十六・四㌫、四十・七㌫、十五・三㌫、三・八㌫であった。（大門正幸『なぜ人は生まれ、そして死ぬのか』）

「暗くてあたたかかった」「水の中に浮かんでいた」「お母さんの声が聞こえていた」など、語られる記憶は単純な内容が多い。ところが一方で、親しか知り得ない状況を子どもが言い当てる場合がある。

胎動が少なかった理由を「ママが『いたい』って言ったから、かわいそうだったから、動かなかったの」。（四歳）（池川明『胎内記憶』）

妊娠初期に子宮筋腫が見つかった母親に「おなかのなかになにかあったでしょ。それが（略）大きくなってつぶされたらどうしようって思ってこわかったの。ママ、ぶじに生んでくれてありがとう」子宮筋腫のことは夫だけに知らせていたため、とても驚いたそうだ。（六歳）（同）

今から二百年ほど前に書かれた『勝五郎再生記聞』には「腹内にて母の苦しからむと思ふ事のある時は、側のかたへよりて居たる事のありしは覚えたり」と記されている。そこには母親のおなかに入る直前に勝五郎が聞いた、両親しか知らない内容の会話も含まれている。

胎内だけでなく、受精よりさらに前の記憶がある子どももいる。

「中間生記憶」は、別の人間として生きた前世を終えてから、今のお母さんの胎内に宿る前までいた世界、つまり死後の世界での記憶ともいえる。勝五郎が語った多くはこの「中間生記憶」であり、さらに勝五郎の前世、藤蔵だった

時のことを述べた部分は、「過去生記憶」である。

「中間生記憶」には、例えば次のようなものがある。

「雲の上にはこんな小さい子どもがいっぱいいて、これくらいの大きい人がお世話をしてくれてて、小さい子たちは空の上から見てて、あの家にするっておりていくんだ。で、ぼくもお母さんのいるところに決めたんだ」（三歳）（池川明『胎内記憶』）、「パパとママを選んだんだよ。ずっと待っていたんだよ」（二歳、親は結婚後五年間子どもをつくらなかった）（同）、「ぼくね、光やったよ。光のおともだちがたくさんいた。」（四歳）（同）

雲の上のようなところで、神様（のような存在）に守られながら暮らしていて、下界を見て（母）親を選ぶのが、多くの子どもが共通して話す点だという。そこで現在のきょうだいと出会うこともよくあるらしい。

中には、過去生で自分が死ぬ時の様子を具体的に話し、それが当時の検死報告等で事実と確認されたり、勝五郎と同様に、過去生の自分の葬式の様子を語る子どももいる。（ジム・B・タッカー『転生した子どもたち　ヴァージニア大学・40年の「前世」研究』）

こういった生まれる前の記憶は、「魂」の存在を示唆するためか、まったく価値のないオカルトと一蹴する人々も少なくない。

しかしながら学術研究の対象として、前世の記憶を持つ子どもの事例を世界四十か国以上で精査し、二千六百を越えるデータを持つ大学がアメリカにある。バージニア大学医学部知覚研究室である。イアン・スティーブンソン博士が一九六七年に開設し、その慎重な研究手法は一流医学誌での評価も高い。

この名門大学と、勝五郎とは浅からぬ縁があるのをご存知だろうか。スティーブンソン博士が生まれ変わりの研究に専心するきっかけの一つとなったのが、江戸時代に残された勝五郎の記録である。それは小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）によって英訳され、博士の知るところとなり、一九六〇（昭和三十五）年発表の論文“The Evidence for Survival from Claimed Memories of Former Incarnations”（『前世の記憶とされるものによる死後生存の証拠』）でも紹介されている。

バージニア大学が保管する再生事例で、コンピューターにデータベース化された二千三十件中、過去生の人物が特定できたのは七十二・九％にのぼる。（平成二十五年当時）（大門正幸『なぜ人は生まれ、そして死ぬのか』）

アメリカ・オクラホマ州のライアン君は、前世の記憶を繰り返し語るようになり、母親はそれを四年間記録し続けた。ある時ライアン君は前世の自分だとして、一九三〇年代の白黒映画の写真にうつった一人を指差した。バージニア大学の半年にわたる調査の結果、マーティ・マーティンという無名の俳優であることが判明、遺族への聞き取りなどから、ライアン君の発言がマーティ・マーティンと多くの点で一致した。調査が可能だった六十八項目のうち五十四項目が前世の人物と一致したという（ＮＨＫ取材班梅原勇樹・苅田章『ＮＨＫスペシャル　超常現象―科学者たちの挑戦』）。この事例は、ＮＨＫの番組でも扱われ話題となった。（ＮＨＫ　ＢＳ「超常現象」平成二十六年一月放送）

民放では、いわゆるオカルト系の番組も多く放送されてきたが、公共放送であるＮＨＫが、生まれ変わり、心霊現象、テレパシーなどの超常現象を真正面から取り上げたこと自体に驚き、ひとつの世の流れと受け止めた方も少なくなかったのではないだろうか。池川明・大門正幸両博士の次の言葉が印象深い。

「二十一世紀を迎えたいま、多くの人たちが胎内記憶、誕生記憶、ひいては中間生の記憶、過去生の記憶に関心をもつようになったのは、物質文明にどっぷりつかっている現代人に、宇宙の大きな摂理が働いて、「見える世界だけがすべてではないよ」と、教えてくれているのでしょう。おそらく、私たちが魂の成長をとげて、次のステップに進めるようになったときに、人類は（もっと大きい）別の真実を示してもらえるのかもしれません。」（池川明『子どもは親を選んで生まれてくる』）

「かつて自分は地球上の他の国で他の人種として生きたことがあり、これからも他の国で生きる可能性がある、そう意識すれば、ポストモダンの思想家が述べる文化相対主義とは全く異なる意味での他人種や他文化の尊重につながるでしょう。また、地球が死後もまた戻ってくる（可能性のある）場所であることを意識することは、環境保護という点で、どんなエコロジー教育よりも効果的ではないでしょうか。」（大門正幸『スピリチュアリティの研究―異言の分析を通して』）令和三年 PSI-Encyclopedia（『サイ百科事典』）に大門正幸氏による「過去生記憶を語る日本の子どもたち」の記事が掲載され https://psi-encyclopedia.spr.ac.uk/、同『生まれ変わりを科学する』と共に、勝五郎の事例と調査団の活動が紹介されている。

七　勝五郎とその家族

（調査報告⑬）
勝五郎の人物像

北村　澄江

勝五郎は、どのような少年だったのか。文化十二年（一八一五）十月十日に生まれ、八歳で自らの生まれ変わりを語り、気吹舎の門人になり、しばらくの期間（およそ一年ほどではないかといわれている）を気吹舎で過ごしたあと、勝五郎はどのような生涯を送ったのだろうか。『気吹舎日記』にも文政十年七月（勝五郎十三歳）以降の記述は見えないし、その後の勝五郎についての情報は、ほとんど見つかっていない。残されたわずかな資料から、勝五郎の人となりと生涯をたどってみたい。

◆文政六年ごろの勝五郎　『勝五郎再生記聞』（資料６）には、篤胤が、「少しも大人びたところがなく、荒々しい遊びを好み、普通の百姓の家の子どもとしては、賢い子どものようにみえた」と記している。また、肥前平戸藩藩主松浦静山は、その著書『甲子夜話』（資料８）に、「勝五郎は、賤しい百姓の倅に似合わず、いたって行儀がよく、おとなしく（略）、見たところ普通の子どもと少しも変わったところもなく（略）髪はけし坊主に結い、毛は赤く、面長でやせ形、色黒であるが、容姿も見苦しくなく賢い子どもと見受けられた。（略）古い紺立縞の木綿袷を着て、小倉縞木綿の帯を締め、腰には緋縮緬の縁取りのある守り袋を付け、白木綿の鼻緒をかけていた。」と、勝五郎に会った家人の報告を聞いて記している。面長でやせ形のごく普通の、しかしなかなか賢そうな少年という印象が伝わってくる。

日野市内の旧家立川明家文書にある「再生勝五郎覚書」（資料17）は、当時の勝五郎について半四郎の妻（藤蔵の母）から聞いたことの覚書であるが、これによると、勝五郎親子は、江戸に召喚された折に、衣類・帯・菓子などのほか、勝五郎は五両、親は十両の御褒美をもらったとあり、勝五郎は、程久保の半四郎宅に行った折は、夜は実の親子のように抱かれて眠り、半四郎が中野村へ来たときには、酒などを買ってもてなしたとある。また、父の稼業である籠や笊を作るともある。年不詳の資料であるが、文政六年頃の資料と考えられ、地元に伝わった勝五郎に関する伝聞として貴重である。

◆勝五郎の消息を尋ねる書状　安政六年（一八五九）十月二十一日付平田銕胤より鶴舎有節（つるやありよ）ら宛の書簡（『青森県史』資料編近世　学芸関係　五六）には

一寅吉此節の成行御尋、右は常々医卜を業とし、先ツハ塵俗之身ニ候得共、寡欲にして酒を好ミ、人愛を失はさる所、凡人には無之候、
勝五郎も今ニ息災とハ存し候へども、近年の行状承り不申候、近所之もの参り候ハヽ承り置可申候

とある。鶴舎有節は、篤胤没後の平田門人で、青森の門人を統率する立場にあった。青森における門人たちは、江戸に出ることなく、銕胤が注文に応じて送ってくる書物を教材として学んでいたという（同解説による）。同四六（鶴舎宛銕胤書簡）には、送付書物の明細があり、その中に『再生記聞』も含まれている。書簡は、『仙境異聞』や『再生記聞』を読んだ鶴舎たちが、寅吉や勝五郎はその後どうしているかと問い合わせたことに対する返事と思われる。この時、勝五郎は四十五歳になっており、篤胤もすでに亡く、銕胤ら気吹舎の人々には、勝五郎の消息はよくわからなくなっていたことが伺える。

◆永林寺の過去帳　八王子市下柚木の曹洞宗永林寺は、小谷田家の菩提寺であり、現在は勝五郎をはじめとする一族の墓所がある。永林寺の前住職小倉英明氏が、由木郷土研究会に発表された「伝説「勝五郎の再生」についての一考察」には、同寺の過去帳について次のような記載がある。

「（前略）幸い小谷田氏は永林寺の檀家であった関係上まづ昔からの過去帳をしらみつぶしに当っていった。その結果

○　潭底濳（ママ）龍居士　　東中の　　勝五郎事
　　明治二年十二月四日亡　　五十五才
　　山主半乗篭　　先伴僧共五人　伴七人
○　直指單伝信士　　東中の　　源藏事
　　安政二年七月二十三日亡　　八十一才
　　山主忍篭　　先伴僧共三人　僕六人

とあり年代も年令も寸分もまちがいもなかった。山主（永林寺住耘のこと）がお篭にのって葬式に出かけたことを考えると（当時永林寺住耘がお篭に乗っ

て葬式に出かけることはまれであった。）当時勝五郎の家は、前述の「貧のため篭を作って生計をたすけた」とあるが、これは武士階級の人より見た一面であってかなり豊かな生活をしていた事が推察出来る。（後略）」

◆地元の伝承と宗門人別帳の記載　下田九一氏は「資料から見た勝五郎とその周辺」（再録1）で、勝五郎は農業の手伝いに行った地元の者に穀象虫の混じった米飯を出したという話が地元で伝えられていると記している。穀象虫の米飯は古米のたくわえがあった勝五郎の裕福さを示すものだというが、永林寺過去帳の記載とあわせて、勝五郎が農業の傍ら家業の目籠の仲買をして、財を成すだけの才覚を持っていたことがわかる。晩年は耳が遠くなり、甚だしく盗難を恐れ、表座敷の縁側の外に頑丈な格子戸を設け、座敷の天井には隠れるための抜け穴があったと伝えられている。村の道普請の折などに、「勝や、あの話をしてくれや」と生まれ変わりの話を村人にせがまれたとも伝えられているが、勝五郎はどのようなことを語ったのであろうか。

勝五郎は、晩年には妻と離縁し孤独だったと伝えるものもあり、永林寺の墓石には、夫婦二人分の戒名が彫られるようになっているのに、勝五郎だけの戒名しかない。しかし、勝五郎が明治二年十二月四日、五十五歳で亡くなった後、「明治三年中野村平民族戸籍」（国文学研究資料館所蔵富澤家文書）によれば、養子与右衛門二十二歳、妻さく二十二歳、勝五郎妻なみ五十三歳の三人の記載がある。戸籍上は、勝五郎には亡くなるまで妻がいたことになる。勝五郎がなみを娶ったのは嘉永元年（一八四八）十二月のことで、なみは、片倉村（八王子市）の出身である。勝五郎の墓石に妻なみの戒名がないのは、その後養子一家が中野村を離れ、横浜へ出てしまったことと関係があるのかもしれない。養子の与右衛門は、東京牛込神楽坂の吉兵衛の二男で、安政元年（一八五四）八月に勝五郎の養子となった。明治元年十一月に、中野村仲右衛門の妹さくと結婚した。

なお、天保十四年（一八四三）「中野村宗門人別帳」（江戸東京博物館所蔵石井コレクション）には、勝五郎（二十九歳）の妻まん（二十三歳）の記載があり、少なくとも勝五郎には、まんとなみ、二人の妻がいたことになる。地元で伝えられる離縁はまんの事を指すのか、あるいはまんとは死別だったのかは不明である。勝五郎は、生家の近くに屋敷を設け、ずっと中野村で暮らしていた。

報告書（初版）の刊行後、令和四年三月に、八王子市郷土資料館にて、八王子市東中野金子みさを家文書より、数冊の宗門人別帳を閲覧することが出来た。

文化元年（一八〇四）「差上申宗門人別御改一札之事」では、源蔵（三十歳）の下に、ふみ（二十七歳）といね（十三歳）の二人の妹の存在がわかり、まだ妻せいの記載はない。

天保十一年（一八四〇）「宗門人別御改帳」では、源蔵（六十六歳）女房（せい　五十四歳）、音（乙）次郎（二十九歳）、勝五郎（二十五歳）、つね（二十一歳）、あさ（十七歳）、うた（十四歳）の記載がある。すでに嫁いでいるはずの姉ふさの記述はなく、勝五郎の妻の記載もない。勝五郎が「まん」と結婚したのは、天保十一年から十四年の間の事と推察される。また、つねとうたの間に、もう一人の妹「あさ」が存在することがわかった。前述の天保十四年の人別帳には「あさ」の記載はなく、嫁いだのか亡くなったのかは不明である。

元治元年（一八六四）「人別御改帳」には、勝五郎（五十歳）、女房なみ（四十六歳）、鉄太郎（十六歳）の記載がある。鉄太郎は、年齢などから養子与右衛門のことと推察される。

勝五郎の生家跡は、住宅開発のためまったく姿を消してしまい、現在は公園となっている。近くに、調査団のメンバーでもある小谷田忠一良家の屋敷がある。忠一良氏は、勝五郎の祖父勘蔵の兄忠次郎の子孫であり、勝五郎の家からは本家にあたる家である。改修はされているが当時の建物が残されており、勝五郎も度々訪れたことだろう。

なお、勝五郎の生家は、明治七年に中野村の生蘭（せいらん）学校（現在の八王子市立由木東小学校の前身）の校舎として移築、使用された。移築当時は東中野一番地にあった。潰家となった源蔵家を引き継いだ十一屋の小谷田重蔵が、生蘭学校の創設に関ったことと関係するものと考えられる（重蔵の子重助は、明治八年より生蘭学校の訓導となった）。生まれ変わりのあった家は、子どもたちの学び舎となったのである。（宗門人別帳の調査は、片山幸和と北村澄江が担当した）

図1 永林寺移転前の生家近くの墓地にあった源蔵一家の墓

図2 移転前の墓地にあった勝五郎の墓石

図3 東中野の小谷田忠一良家（右端）、左木立の向こう側に勝五郎の生家があった。

図4 中央大学多摩キャンパス構内に残る「勝五郎の道」
東中野から程久保に至る旧道の一部が残っている

（調査報告⑭）

勝五郎の身内調査について

市川　三千代

平成二十年、佐藤彦五郎新選組資料館より「小谷田勝五郎紀念碑」碑文（資料18）などの草稿が発見され、勝五郎の妹「つね」が四谷村（府中市）の「市川万吉」に嫁した事が判明した。子供がいなかった勝五郎は養子を迎えたが、現在はその消息も不明であり、勝五郎の兄弟たちの子孫の消息もわからない。つねの消息がわかり、その子孫の方々に話を聞くことが出来れば、今まで伝えられていない勝五郎の消息や勝五郎の生まれ変わりがどのように伝えられていたかなどがわかる可能性が出てくる。そこで、平成二十一年度よりつねの消息調査を開始した。（152頁系図参照）

◆つねの調査　多摩川沿いの四谷村は市川姓が多いが、その中で屋号「中隠居」と呼ばれ代々太兵衛を名乗る旧家市川家で、「安政六年未三月宗門人別帳控」と「明治六年酉四月戸籍帳」を閲覧させていただいた。（平成二十三年六月）

安政六年の宗門人別帳には、「禅宗寿徳寺　善右衛門地借　萬吉四十二才、女房なか三十五才、倅重三郎十二才、倅貴助八才、娘うた四才、倅亀三郎三才」という、山岸萬吉一家の記載が見つかった。

明治六年の戸籍帳では「十二番屋敷之内借店　酒造渡世　弘化二乙巳年十月三日全戸寄住　越後国頸城郡潟町宿農山岸権六三男　山岸萬吉明治七年五十五年、妻武蔵国多摩郡中野村農小谷田源蔵亡二女なか同四十六年、長男重三郎同二十五年、二男貴輔同二十一年、三男亀三郎同十七年、四男健吾同十四年、長女とめ同十年、長男山岸重三郎妻相州高座郡折戸村年寄安藤庄左衛門三女やす同二十四年、氏神熊野太神、寺越野村禅宗永林寺」と記載されていた。「市川万吉」ではなく「山岸萬吉」であり、妻は「つね」ではなく「なか」となっていたが、市川与一方に寄留していたため苗字を混同したと考えられること、「なか」が中野村源蔵の二女であるならば、「つね」であることは間違いなく、当時は結婚を機に名を変える事は珍しいことではなかったことなどを考えると、「つね」が酒造業を営む山岸萬吉に嫁ぎ、四谷村に居住していたと考えてよいと思われる。また、当時十五歳の二男貴助が佐藤彦五郎新選組資料館所蔵「慶応三年天然理心流門人帳」に名を連ねていることも確認された。十二番屋

敷の近くには、近藤勇が天然理心流を教えに来ていた道場があったと伝わる旧家がある。

十二番屋敷の当主与市（善衛門改）を探し府中市四谷を一軒一軒訪ね歩き、ようやく四谷中通りの屋号中屋と呼ばれる市川家を探し出す事が出来た（現府中市四谷二丁目）。九十八歳のご当主から見せていただいた代官江川太郎左衛門に出した願状には「組頭善衛門」の名があった。過去帳によると与市（善衛門）は七代目で明治三十九年没。調査を始めて二年余、この屋敷で萬吉・つねの家族は酒造りをして暮らしていたことが判明し感慨も一入（ひとしお）だった。しかし子孫の消息は不明のままだった。

さらに長男の妻やすの実家、高座郡折戸村（現在相模原市南区新戸）の安藤庄左衛門家を訪ねた。長い黒塀と立派な冠木門の屋敷は見るからに豪農の趣であった。庄左衛門の肖像画の前で徳富蘇峰が名付親だという現当主から、庄左衛門は貿易商として成功し、九十七歳まで生きたこと、兄も長男も医者で村人から尊敬されていたことを伺ったが、「やす」の消息は不明、庄左衛門の孫が日野の坂田家へ嫁いでいることがわかった。

◆山岸萬吉の調査　平成二十三年八月、越後潟町出身の山岸萬吉の消息を尋ねるため、新潟県上越市へ調査に行った。そして、上越市総合博物館より、萬吉の実家である山岸家本家（潟町の屋号「大和屋」）の資料と杜氏に関する資料を提供していただいた。山岸家本家は、萬吉の兄弟の子孫であることがわかった。また、『吉川町史資料集』三（酒造　平成六年）に収録されている「万延元年六月　関東出稼人別御調御上金引残書上帳」による表（№一八八）に、「四ツ谷村十一屋萬吉」があり、萬吉が四谷村で酒造十一屋を営んでいた事が判明した。勝五郎の生家の隣は中野村名主で酒造十一屋を営む小谷田重蔵家である。潟町出身の萬吉は、十一屋で杜氏として働き、つねと結婚、四谷村で独立し酒造業を営んだものと推察される。明治三年庚午十二月「武蔵国多摩郡中野村平民族戸籍」（国文学研究資料館富沢家文書）にも、十一屋酒造店の奉公人で、潟町出身の人の名前が見える。中野村の十一屋は、代々潟町から蔵人がやってきていたものと思われる。

潟町の山岸家は江戸中期権六の頃より酒・米を商い萬吉の甥留吉は多摩の青梅で造り酒屋を営み、その後埼玉の名栗に移ったという。調査団では、平成二十六年五月、潟町の山岸本家を訪問、大和屋十一代当主らの案内で北国街道に面し萬吉も暮らした古い屋敷を見ることが出来た。

二十四年六月、四谷中隠居市川家の再調査により、同家所蔵の絵図（図5・「乙第三号」とある地番の入った絵図）などに山岸萬吉の名前を発見、四谷に所有地があったことがわかり、萬吉の屋敷の図（六十一番）も見つかった。

同年十二月、三屋（現四谷六丁目）の旧家土方平右衛門家文書調査を府中市郷土の森博物館で行ない、山岸萬吉清酒醸造に係る資料と公務録を閲覧した。明治十四年には減石届が出されていて、当時萬吉は六十四歳、長男重三郎が代理人となっている。明治十五年六月には醸造がうまくいかない旨の上申書が、九月付けで酒造廃業届が出されていることが判明した。

平成二十七年三月、国文学研究資料館にて、和田村石坂家文書の調査を行ない、石坂家に納入していた「四谷十一屋万吉」の酒の通帳・仕入帳を発見した。嘉永六年（一八五三）から文久元年（一八六一）までの七冊が確認され、山岸萬吉が府中四谷で十一屋の屋号で確かに酒造業を営んでいた事が再確認出来た。

◆萬吉・つねの娘とめの調査　平成二十七年二月、日本心霊科学協会発行の『心霊研究』（昭和四十五年二・五月）掲載の、「勝五郎再生の実地調査」（四）（五）を閲覧することが出来た。「勝五郎再生の実地調査」は、心霊科学協会のメンバーが、昭和四十年代に勝五郎の再生を現地調査したもので、いまはもう聞くことが出来ない関係者の聞き取り調査なども記録され、貴重な資料である。（再録2）藤蔵の子孫である小宮家に（一）～（三）まではあったが、（四）（五）の存在は知らず、心霊科学協会のご厚意で、入手することができた。

この調査報告に、「勝五郎の姉フサの嫁ぎ先の子孫が酒屋「くに店」を経営している」と書かれていた。「くに店」は現在も当時と同じ場所（多摩市東寺方）で森澤商店として酒屋を営んでいることがわかり、三月同家を訪問した。当主の森澤國夫氏から伺った話から判断すると、森澤家に嫁いできたのは、ふさではなく、つねの娘「とめ」であることがわかった。とめの実家は、府中の四谷で酒造業を営んでいたが、明治になって廃業したと聞いているということだった。

森澤商店は、明治の初めごろ、森澤國平が興した商店で、酒などの商品を手広く商い、目籠の仲買もやっていた（パルテノン多摩歴史ミュージアム特別展図録『多摩・商店ことはじめ』平成二十三年）。とめは國平と結婚し、國夫氏

は、孫にあたる。國夫氏は、特に家族から勝五郎のことを聞いたことはないということだったが、國夫氏の姉は、心霊科学協会の調査のあと、中野村を訪ね、十一屋の小谷田家のおばあさんに会い、勝五郎の墓参りなどをしたということである。源蔵・勝五郎家が営んでいた目籠の仲買と萬吉・つねが営んでいた酒造業、森澤商店は、両家族の生業と深い関係があり、とめの婚姻は、この生業の縁で行なわれたのではないかと推察される。

さらに、同図録によると、森澤商店は目籠を北海道函館の「山岸商店」に出荷していたということで、國夫氏の話では、この函館山岸商店に、とめの娘の一人が嫁いでおり、とめは、夏になると避暑をかねて、よく函館に行っていたということである。同図録には、函館山岸商店の前で写された葬儀の写真が掲載されているが、この中に「森澤商店」が出した花輪が見える（図6）。私たちはこの函館の山岸商店が、萬吉・つね夫婦の移住先なのではないかと考えている。明治十五年九月の廃業後のつねたちの消息は、いくら調べても、四谷からはなにも見つけることができていない。酒造業廃業後に函館に渡ったと考えると、つねがなぜ勝五郎の記念碑を建立しようとしたのか、その理由が見えてくる。『小谷田異童傳』の奥書に、つねが内藤家の当主に、勝五郎が所有していた「再生記聞」写本の存在を教えたことが書かれている（調査報告⑨）。つねは、勝五郎の生まれ変わりのことに深い思い入れがあったのではないだろうか。そうであれば、生まれ育った多摩の地を去り、遠く北海道に移住するにあたり、兄の記念碑を遺して行きたいと考えることは、納得のいく事柄である。とめは、肖像写真が残っているが、意思の強い、豪快なおばあさんであったということである。（図7）

報告書（初版）の刊行後、調査団では数度の函館調査の他、様々な調査を行なってきた。その結果、明治三十四年「函館商工案内」に、雑貨荒物・東京目籠を商う「山岸多吉商店」があることを発見した。山岸多吉は、萬吉の長男重三郎の子と推察され、多吉にとめの娘ヤスが嫁いだこと、昭和四年山岸商店の当主はとめの孫娘であったことなどが推察される。昭和九年の函館大火後の山岸商店の消息は不明である。とめの孫娘は、平成八年八十二歳で群馬県館林市で亡くなり、同地の山岸家菩提寺には、多吉以降の墓誌がある。調査はまだ未完成なので、詳述は後日を期したいと考えている。

なお、日野市落川の『五十子敬斎（いらこけいさい）日記』大正六年十月二十五日の項に、「函館山岸」へ柿を送ったという記述があり、日野の柿を当地で販売した可能性も考えられる。

◆ふさの調査　平成二十六年に江戸東京博物館所蔵石井コレクションの中に、「天保十四年卯ノ七月宗門人別改帳　武州多摩郡中野村」が存在することがわかった。同人別帳には、「同寺（永林寺）檀那　市郎兵衛五十才、女房ふさ三十五才、さみ七才、えい三才」の記載がある。このふさが勝五郎の姉ふさという確証はないが、文政六年当時に十五才であったふさの年齢と一致する。また、前出の明治三年中野村平民族戸籍には、「伍長小谷田重蔵午四十一歳、妻さみ午三十三歳、倅重助午十九歳、娘いと午七歳」の記載がある。これは、酒造業十一屋の小谷田重蔵家の戸籍であり、妻さみは、先代市郎兵衛娘とある。さみは、天保十四年の人別帳にある市郎兵衛とふさの娘であり、重蔵は宇奈根村（世田谷区）の大場儀右衛門の四男で、嘉永二年八月に市郎兵衛の養子になって、さみと共に十一屋小谷田家を継承した。宇奈根の儀右衛門家は大場代官家の分家であるという。重蔵・さみ夫婦は、明治の初めごろ、家督を息子重助に譲った後、後継ぎがなく潰家となっていた源蔵家を再興している。源蔵（安政二年死去）の墓は、勝五郎が建立しており、兄乙次郎（天保十四年の人別帳には三十二歳の記載がある）は源蔵よりも先に亡くなったものと考えられる。いままで、源蔵家と隣家であり潰家を預かっているという関係だけで、重蔵が源蔵家の再興をはかろうとしたという理由が腑に落ちなかったが、さみがふさの娘であれば、祖父の家であり母親の実家である源蔵家の再興を願うのは、不思議なことではなくなる。なお、関係者の方から教示を得たことであるが、昭和十八年南多摩郡由木村役場「戸籍謄本」に、つねの四男健吾郎（健吾）を、重蔵・さみ夫婦の養子にしたことが記載されている。健吾は、勝五郎の甥、源蔵の孫にあたるので、源蔵家の後継ぎにと考えられたのであろう。残念ながら、健吾は、明治十二年に出奔して函館に渡り、旭町というところで生活し、中野村に戻ることはなかった。明治四十三年函館慈恵院にて五十歳で亡くなった。函館に行ったことは、函館の山岸商店の存在と関係があるのか、ないのか、現在のところは不明である。平成二十五年六月、函館山西側の入船町にある厚生院墓地や船見町の高龍寺（上田大法住職が慈恵院を開設）に行き、健吾

の墓を探したが、手がかりは得られなかった。

◆身内調査でわかったこと　十三年間にわたる調査でわかったことは、勝五郎の兄乙次郎は、天保十四年から安政二年の間に、一家をなさないまま亡くなったこと、姉のふさは、隣家である十一屋に嫁ぎ、娘が二人いたが、嘉永三年八月に亡くなったこと（小谷田重蔵子孫のご教示による）、妹のつねは、十一屋の杜氏だった越後潟町出身の山岸萬吉に嫁ぎ、府中四谷で酒造業を営んでいたこと、明治十五年酒造業廃業後は、函館に渡ったと考えられること、四男一女がおり娘とめは東寺方（多摩市）の森澤商店に嫁ぎそこに子孫がいること、などである。なにも手がかりのないところから、いろいろな情報を見つけて調査したが、萬吉・つねの函館移住については、ほぼ確証を得られたと考えている。

なお、天保十四年中野村宗門人別帳の記載で、文政六年当時は生まれていなかった勝五郎の妹「うた」（当時十七歳）がいることがわかったが、天保十一年「多摩郡柚木領中野村宗門人別御改帳」（八王子市金子みさを家文書）で、うたより三歳年長の妹「あさ」が存在することがわかった。ふさの嫁ぎ先である十一屋小谷田家の子孫は、多摩市に在住している。

（身内を探す調査は、市川三千代・朝倉海玄・片山幸和・大河内祥行・小宮豊・小宮壽子・荻田勝代・髙橋國夫・大窪俊彦・加地勝・川島純・北村澄江が担当した）

図5 山岸萬吉の屋敷が記載されている絵図
（四谷村（府中市）乙壱号字中通字限図部分
中隠居家所蔵）

図7 勝五郎の姪、森澤とめ肖像（同）

図6 函館の山岸商店

昭和４年８月のとめの娘山岸ヤスの葬儀であると推察される。（多摩市　森澤國夫家所蔵
写真提供
パルテノン多摩歴史ミュージアム）

八　その他

（調査報告⑮）

山岸萬吉が寄進した版木

市川　三千代・大河内　祥行

高幡山金剛寺文書「什器帳」（明治二十一年八月二十日、『高幡山金剛寺文書』上　一二七―一）第六項版木之部のなかに、勝五郎妹つねの夫山岸萬吉が寄進した版木の目録がある。

「　百籤版木全備　　十七枚
　　但シ　文久元年九月　寄附主
　　東京鉄砲洲柏屋常吉、四ツ谷村十一屋万吉、
　　中野村十一屋重蔵、大神村土屋（十一屋）平吉、
　　高幡村高橋丈八、高幡村森久保又吉、石田村
　　土方伊十郎、東京三河町一丁目丸屋伊兵衛　」

山岸萬吉の人物像をさぐる手掛かりとして、ここに記載された人物が、どこの誰であるのか、文献や実地調査を行なった。その結果、次のことが判明した。萬吉とは、酒造業などで繋がりがわかる家もあるが、付き合いがあって一緒に寄付したのか、そうではないのかは不明。判明したことのみ報告する。

①　東京鉄砲洲柏屋常吉

江戸時代の沽券図や現代の住宅地図を参考に現地調査をしたが不明である。鉄砲洲（現在の中央区明石町）の南端には池田冠山の屋敷（因幡若桜藩松平淡路守上屋敷）があった。火災後、冠山は深川亀高村（現在の江東区北砂五丁目第四砂町中学校東隣、同下屋敷があった）へ転居している。

②　四ツ谷村十一屋万吉

山岸萬吉。文久元年四十四歳、小谷田勝五郎の妹つねの夫。酒造業。

③　中野村十一屋重蔵

小谷田重蔵。文久元年三十二歳、勝五郎の姉ふさの娘さみの夫、宇奈根村儀右衛門四男、中野村の名主。酒造業。

④　大神村土屋（十一屋）平吉

石川平吉。東京都昭島市大神町の石川家の仏壇に保管されていた寛文年間（一六六一～七三）以降の先祖名一覧表に「平吉」の名が載っている。蚕種の生産・販売をしていた。屋号は「十一屋」であった。

先祖は越後国頸城郡安塚町（現新潟県上越市春日新田町）から出稼ぎとして移住して来たと推測される。

⑤　高幡村高橋丈八

『高幡風土記』（森久保憲治著）に掲載の「慶応三年若宮大明神・本社再建記録」に「金五両高橋丈八」とその名前が見られる。高幡村の新田名主だった家である。

⑥　高幡村森久保又吉

屋号油屋。七生公会堂前にある共同墓地（旧医王寺墓地）に墓がある。「戒名　淳意道彰居士」、明治五年十二月没。

⑦　石田村土方伊十郎

幕末の石田村の名主。長男久蔵は天然理心流に土方歳三と共に入門、娘ナカは歳三の兄喜六の嫁。当時の長屋門が今も残っている。

⑧　東京三河町一丁目丸屋伊兵衛

同所では丸屋伊兵衛という人物の居住を確認出来なかった。

近所には大店として豊島屋（吉村家）がある。同所は通称「鎌倉河岸」と呼ばれ、江戸城への荷揚げ場所として賑わっていた。そこで白酒の製造・販売をして財をなしたのが豊島屋であった。現在は猿楽町に移っている。

当時の賑わいは江戸名所図会巻の一で知ることが出来るが、丸屋との関係は不明である。

（調査報告⑯）

中野村の酒造「十一屋（じゅういちや）」について

矢口　祥有里

「十一屋」の屋号を持つ酒屋は全国各地に見られるが、これは近江商人の流れを汲むという。中でも栃木・群馬・埼玉など北関東では、酒造株を持つ近江商人と実際に酒を製造する越後杜氏とが組んで酒醸造を行なうことが盛んだった。幕末には規制緩和もあって、こうした越後杜氏の中から空き蔵を借り、または買い取って独立して酒造業を営む者が現れたことで知られている。

◆十一屋（小谷田重蔵家）　武蔵国多摩郡中野村（明治二十二年〔一八八九〕から由木村東中野。現八王子市東中野）の勝五郎の生家（小谷田源蔵家・東中野一一九九）の隣家は、小谷田重蔵家（東中野一一九六）といい、「十一屋」の屋号で酒造業を営んでいた。ただし、いつから酒造業を始めたかなど、実態はよくわかっていない。和田村石坂家文書（国文学研究資料館所蔵）の中に、嘉永六年（一八五三）から文久元年（一八六一）の「十一屋重蔵」の酒通帳が残されている。勝五郎の姉「ふさ」は、十一屋の小谷田市郎兵衛に嫁いだ。嘉永二年、市郎兵衛は宇奈根村儀右衛門の四男を養子に迎え、娘の「さみ」と結婚させた。これが小谷田重蔵（芳範）である。重蔵は明治三年四月、跡継ぎのいない小谷田源蔵家を再興した。重蔵家の裏山には墓地があり、ここに源蔵家や勝五郎家の墓もあり、源蔵家の墓の方は重蔵家によって管理されていた。しかし現在は大規模な住宅団地の造成工事によって跡形もない。重蔵家の子孫は多摩市へ移転し、墓も菩提寺の永林寺に移された。数年前まで、十一屋の跡には酒作りに使ったであろう井戸跡が残っていた。

◆大坂屋（松岡酒造）　小谷田重蔵の酒蔵は、元治元年（一八六四）から越後潟町出身の松岡補助（屋号「大坂屋」）が借りて「玉川」という酒を造った。松岡補助は父の代から潟町で酒造業を始めたが、文久二年に故郷潟町を引払い、新天地を求めて関東にやって来たという。はじめ武蔵国府中押立で酒蔵を借りたが不振のため、元治元年に中野村谷津入（やついり）に転居した。明治十一年補助の死後、その長男浅右衛門が跡を継いだ。浅右衛門と妻が明治三十七年に没したとき、長男・次男とも日露戦争で出征中だったので、遺体は小谷田重蔵家の裏山にあった墓地の隣に仮埋葬された。

大正二年（一九一三）、跡を継いだ政次郎の代に、祖父補助の頃から借りていた小谷田重蔵家の蔵を買い取り、新蔵も建設し、酒名を「五大洲」と改めた。大正十年、創業百年祭を挙行した。その際、蔵の老朽化が気になったため、大正十一年に友人の井上連一から土地を買い、酒造蔵と店舗住宅を新築した（東中野一三八〇）。大正十二年八月に完成し、引越しを目前にしていたところ、関東大震災のため旧蔵は全壊、貯蔵酒が流出する被害を受けた。翌十三年に新蔵で出来た清酒は「尾上の松」として発売された。しかし松岡家は、関わった南津電気鉄道敷設計画の不振や政次郎の死などが重なり、昭和十三年に由木村を離れ、日野町へ転居して酒販業を始めた。松岡家は昭和三十年に由木の墓地を菩提寺にまとめたが、この間、小谷田重蔵家の人が墓守をしてくれていたという。（松岡正二郎『松岡本家と大坂屋総本店歴』昭和五十五年　私家版）

◆白春酒造　松岡家の酒造蔵は「三輪さん」という人物に譲られ、昭和二十三年に「白春酒造」が買い取った。「白春」は、日本橋箱崎町の荒井佐五兵衛商店（大正三年創業、現株式会社アライ）という酒類・醤油卸売業の問屋が、大正十年十月に酒造部門を立ち上げて兼業した、いわば自社ブランドである。蒲田の醸造会社を譲り受けて醸造していたが、戦災で蔵が焼けてしまい、戦後の一、二年は埼玉の行田の近くの休醸中の蔵を借りていた。しかし、水が良くなかったため、あちこち探していたところ松岡の蔵を手に入れたとのことである（國府田宏行『東京の地酒』昭和五十五年　婦人生活社）。白春酒造は昭和の末頃に廃業したといい、跡地には住宅が並んでいる。（『新八王子市史民俗調査報告書　第2集　八王子市東部地域　由木の民俗』には、「由木東小学校に近い大栗川流域には、「十一屋」の屋号を持つ造り酒屋「白春酒造」があった。「十一屋」はもと東中野谷津入のセンヤト（千谷戸）で酒造りを行っていたが、良質の水を求めて大栗川流域の低地に移転し、ここに掘り抜き井戸を設けて新たな酒蔵を築いたのである」とあるが、小谷田重蔵家の十一屋と、松岡家の大坂屋と、白春酒造とが混同されてしまっている。）

なお、勝五郎の養子は、明治二年に勝五郎が没すると、横浜へ出て行ってしまったので、井戸上の金子権六が「買い養子」となって空屋敷を譲り請け、小谷田姓を名乗った。小谷田権六は昭和九年に死去したが、子孫は、白春酒造のあった場所の北隣に住んでいる。

（調査報告⑰）

藤蔵の子孫小宮家での伝承

小宮　豊

日野市程久保の小宮豊家は、勝五郎の前世といわれている藤蔵の家を継承している。豊の曽祖父、小宮鏡治郎が養子として迎えられた際に小宮姓に改めたが、それ以前は須崎姓を名乗っていた。多摩都市モノレールの程久保駅から北へ歩いてすぐのところに、子孫は代々居を構えてきた。現在、辺りには家がたくさん建ち並び、様子が変わったが、それでも『勝五郎再生記聞』に記されているように「三軒並んだ真ん中の家で、裏が山に続く」といった当時の面影を多少残している。物語に出てくるむかいの「たばこや」の家も子孫が今も同じ場所に住んでいる。

勝五郎生まれ変わりの話は地元ではどのように語り継がれてきたのか、私が耳にしたのは、おおよそ次のようなものであった。

「程久保で生まれた藤蔵が六歳で亡くなり、三年後（実際は五年後）に隣村の中野村に勝五郎として生まれ変わった。勝五郎が八歳の時、家族に自分の前世を語り、お祖母さんに連れられて程久保村の藤蔵の家を訪れ、『前のたばこやのあの木はなかった』など藤蔵の家の周りの変化を言い当てた。又、勝五郎は、藤蔵だったときに近くの桑畑に小刀を隠して置いたことを思い出し、みんなで桑畑に行ってみると、桑の切り株から錆びた小刀が見つかった。この小刀の発見は、藤蔵でしか知り得ないことである。」

この話も昭和の中頃になると、地元でも誰も語る人がいなくなり、時の流れの行くままに次第に消え失せていってしまった。

しかし、昭和四十年代になってから、勝五郎生まれ変わりの話に興味を持った何組かの人たちが小宮家を訪れるようになった。

昭和四十三年六月、日本心霊科学協会（当時は文京区湯島に本部があったが、現在は新宿区上落合にある）の数人の人たちが小宮家を訪れた。小宮家の先代当主が、自宅近くの山の上にあった墓を案内した時に、藤蔵と藤五郎（初名・久兵衛）の墓石が確認できた（図9）。小宮家ではその時まで、藤蔵・藤五郎の墓石がどの墓石かわからなかったようである。

程久保を調査している時に、上程久保のある家に保存されていた「中興村系図下郷」を発見し、その中に藤蔵の家族が記されているのを発見した。日本心霊科学協会の人たちは、東中野の勝五郎関係の家にも行き、実地調査を行なっている。協会の月刊機関誌『心霊研究』に「勝五郎再生の実地調査」と題して、五回に分けてこの時の調査の様子を掲載している。（再録2）

また、地元の郷土史家であった下田九一氏も小宮家を訪れ、当時の小宮家当主に聞き取り調査を行なっている。昭和四十五年に日野史談会が発行した『日野の歴史と文化』に下田九一氏が著述した「史料から見た勝五郎とその周辺」という記事が掲載されている。そこには、当時江戸の文人たちが勝五郎生まれ変わりの話を著した本の紹介や、勝五郎の晩年の生活振り、物語の背景などが詳細に記述されている。（再録1）

小宮家の現当主である私は、昭和五十年代に入ってから初めてこの日本心霊科学協会の月刊機関誌『心霊研究』と、「史料から見た勝五郎とその周辺」を目にしたが、これは先代の当主が亡くなって遺品を整理している時であった。私はそれまで、生まれ変わりの話にあまり関心がなかったので、父から調査に訪れた人たちの事を詳しく聞いていなかった。

この記述を読んで当家では、眠っていた勝五郎生まれ変わりの話が目を醒ますことになった。そして、松平（池田）冠山・露姫との関わりを知ることが出来た。露姫の位牌も、その時までどこの誰の位牌であるかわかっていなかったのである（図8）。松平（池田）冠山・露姫のことは、三樹書房から出版された小谷惠造著『池田冠山傳』に詳しく記述されているが、露姫の法名が小宮家の仏壇の位牌と同じように、「浄観院殿玉露如泡大童女」であることも確認できた。

図8 小宮豊家にある露姫位牌
元は30cmほどの木製の位牌に法名が書かれていた

図9 藤蔵の墓石
小宮家所有の山の墓地（程久保1丁目23付近）にあったが、昭和40年代後半に高幡不動尊墓地に移転した。

池田冠山は勝五郎生まれ変わりの話を最初に書物に著した人物であるが、露姫も藤蔵のように生まれ変わって欲しいという思いが、小宮家の仏壇にまつられている露姫の位牌から伝わって来るような気がする。

妻の壽子は、実家で自分の妹が叔父の生まれ変わりであるというような経験をしていたので、小宮家に嫁ぎ勝五郎生まれ変わりの話を聞いても、特別に不思議な話とは思わなかったそうである。露姫の位牌がまつられていることを知ると、私よりもこの話に興味を惹かれていったようだった。平成の時代になり、小宮家では、勝五郎生まれ変わりの話の背景をもっと知りたい、そして池田冠山・露姫の墓参りをしたいなどと思うようになり、独自に調査を始めた。

そうこうしているうちに、日野市郷土資料館が程久保にある旧高幡台小学校に移転してきた。平成十八年に、郷土資料館の委託調査事業として「勝五郎生まれ変わり物語探求調査団」が発足することになり、協力を依頼された私どももこれに加わった。

勝五郎調査団は、勝五郎の記録を書いた池田冠山・平田篤胤、小泉八雲を柱として調査を行なってきた。このような調査団の活動により、私どもは念願であった、牛島弘福寺と鳥取の池田家墓所にある池田冠山の墓や、鳥取鹿野の雲龍寺にまつられている露姫の位牌をお参りすることを果たすことが出来た。また、代々木にある平田神社への参拝や、秋田の平田篤胤の生誕祭にも参列することが出来、雑司ヶ谷霊園にある小泉八雲の墓参も済ますことが出来た。また、長らく行き来が途絶えていた小谷田家の一族である小谷田忠一良氏（勝五郎の祖父の兄の子孫）と出会うことが出来、ともに調査団のメンバーとして交流するようになった。

このなかで、藤蔵の母しづの実家、下河原の只右衛門の家が、鈴木姓であり、実在していることもわかり訪問した。残念ながら資料は戦災により残っていなかった。

勝五郎調査団は、小学校への出張授業や夏休み子ども講座などを開催し、地元の子どもたちへ勝五郎生まれ変わりの話を教えている。当家にも小学生が調べ学習に訪れることもある。特別展の開催や、藤蔵・勝五郎生まれ変わり記念日のイベントなど、調査団の活動を通して、この生まれ変わりの話が勝五郎のように再び地元によみがえったように思われ喜ばしく感じている。

地元によみがえった勝五郎生まれ変わりの話が、絶やされることのないように後世へ語り継がれていくことを願っている。

（調査報告⑱）

藤蔵のお墓を訪れる人々

小宮　壽子

図10 藤蔵の墓（左）と、両親（半四郎・しづ）の墓（右）

図11 同墓地にある説明板
（藤蔵没後200年を記念して建立した）

高幡不動尊大日堂奥の墓地に、勝五郎の前世といわれる藤蔵のお墓がある。昭和四十七年に、住宅開発により程久保の小宮家の地所にあった墓地から、改葬されたものである。以前から勝五郎生まれ変わりの話に興味を持った人たちが此処を訪れていたこともあったようであるが、平成二十年に日野市郷土資料館が開催した特別展「ほどくぼ小僧　勝五郎生まれ変わり物語」の開催を契機として、藤蔵のお墓を訪れる人の数が多くなってきた。（図10）

勝五郎調査団は、高幡不動尊の参拝客に一人でも多くの人に藤蔵のお墓を見学して頂きたいと思い、藤蔵の没後二〇〇年を記念して、平成二十二年二月に、案内標識三ヶ所と、お墓の説明板を設置することになった（図11）。高幡不動尊の賛同を得て、川澄貫主様御自ら、案内標識設置の格好の場所を選んで頂いた。更に、お墓には「勝五郎生まれ変わりの話」のミニリーフレットを置くことにした。

このミニリーフレットの補充は藤蔵の家を継ぐ私が行なっているが、配布数からすると、月に数百人の人たちがここを訪れているようである。私がお墓に

いると、何組もの人が入れ替わり立ち替わり訪れ、一時間近くも説明していることが度々ある。その時に交わした会話の中で聞いた、参拝者の人たちの想いをいくつか記してみたいと思う。

＊勝五郎生まれ変わりの話は、子供の頃から八王子にいる実家の母から聞いて知っていました。高幡不動尊に藤蔵君のお墓があると知り、お不動さん参詣の度にお墓に来てお参りをさせて頂いています。

＊友人が高幡不動尊の近くに住んでいてお参りに来たが、偶然藤蔵の墓の案内板を見つけ、「まさか高幡不動尊に生まれ変わりの藤蔵の墓があったとは」と大変驚きました。（この方は名古屋から来た人で、日本心霊科学協会の会員。昭和四〇年代に勝五郎生まれ変わりの調査に来て、藤蔵の墓石を見つけてくれたのが日本心霊科学協会の人たちで、当時この話は聞いていたとのこと。）

＊今日は高尾山に行く予定であったが、腕を骨折して行けなくなったので高幡不動尊にお参りに来ました。生まれ変わりの案内板を見て、何だろうと思ってお墓に来ました。奥様の説明では、露姫様は度々浅草寺をお参りしたこと、池田家の屋敷跡が現在の聖路加病院の付近であると聞いて驚きました。私がころんで骨折したのが浅草で、今治療している病院が聖路加病院なのです。私が腕を骨折したのも、ここに来るようにとのお導きだったのかもしれません。そして生まれ変わりの話のご子孫の方に、今こうしてお会いできるなんて光栄であり、大変な驚きを感じています。（この方は、藤蔵の墓参の事を、翌日自分のブログに掲載された。）

藤蔵のお墓を訪れた人たちの感想がインターネットのブログに数多く掲載されている。そうした人たちの感想もいくつか抜粋して記してみる。

＊藤蔵君のお墓をお参りすることができるなんてすごい話です。このお墓を勝五郎が見た時の気持ちはどのようなものであったでしょうか。どんなに懐かしくスッキリしたことでしょうね。

＊前世の記憶を持っている子供は外国にもかなりの例があるようですが、現代の科学では検証出来ない事例のようです。科学で分析できないから出鱈目だというのはとんでもないことで、もしかしたら、更に二百年後には、ごく当たり前のこととして何の疑いもない事実として認知されているかもしれません。

＊大日堂の横にある案内看板を見てびっくりしました。勝五郎生まれ変わりの話は江原啓之さんの本で知っていたのですが、本にはお墓があるとの記載はなく、突然の遭遇に驚きです。魂は、生き続けることの証明ですね。死して、人は死なないということのように思います。

＊生まれ変わりは本当にあるのですね。しかも藤蔵君は五年くらいで人間に生まれ変わっているので、よほど徳の高い人だったかもしれません。藤蔵君の「もう一度生きたい」という思いが伝わって来て、スピリチュアルとは違う意味で力を与えられた気がします。

他にもたくさんの感想を聞かせて頂き、インターネットという媒体を介して、勝五郎生まれ変わりの話が広がっていくことも、藤蔵の家を継ぐ者として、また勝五郎調査団としてもうれしいことである。

私は今まで墓参りといえば、正月・彼岸・お盆・先祖の命日ぐらいしか行かなかったが、案内板を設置してからミニリーフレットの補充のため、月に数回訪れている。高幡不動尊へ参詣に訪れた人たちが藤蔵のお墓まで訪ねて来て下さり、時にはお花やお線香・お賽銭を供えて下さるので、小宮家・須崎家の御先祖様は大変驚いていることと思う。

僅か六歳で亡くなった藤蔵君が二百年もの時を経て、こんなにも大勢の人たちに手を合わせてもらえることは何て幸せなことかと思い、勝五郎調査団の活動により再び地元に生まれ変わったこの話が、いつまでも語り継がれていくことを願っている。

「藤蔵・勝五郎生まれ変わりゆかりの地記念碑」の建立

小宮　壽子

報告書（初版）刊行後の平成三十年（二〇一八）五月二十日、勝五郎没後百五十年記念事業の一環として、藤蔵・勝五郎生まれ変わり物語が末永く語り継がれることを祈念して、有志の方の浄財により、高幡不動尊境内に記念碑を建立した。碑文の揮毫は、当調査団代表の朝倉海玄によるものである。

明治二十年代に、勝五郎の妹「常（つね）」が兄の顕彰碑を建立しようとしたが、碑はどこにも見当たらないので、建碑には至らなかったと思われる（資料18）。今回の記念碑建立は、形こそ異なるが、「常」の思いを実現したいとい

う調査団一同の気持ちが込められている。

高幡不動尊の境内への建碑をお許しいただいたことは、川澄祐勝前貫主、杉田純一現貫主のご理解とご協力のおかげである。川澄前貫主（平成二十九年十月十日入寂）は、自ら建碑の場所を決めて下さり、その場所は大日堂の脇、小宮家の墓所の手前にあり、奇しくも川澄前貫主の墓所からちょうど見下ろす位置にある。春は桜、秋は紅葉が美しく、貫主様に日々見守っていただいていることを感じられる場所である。

記念碑が、「藤蔵・勝五郎生まれ変わり物語」に関心を持って下さる方々が集える場所として、末永く存続していくことを祈念している（現地で、記念碑リーフレットを配布している）。

図12 藤蔵・勝五郎生まれ変わり
ゆかりの地記念碑と碑文など

・碑の大きさ：縦100㎝　横150㎝
（台座を除く）・御影石製
・碑文の揮毫：朝倉海玄
（勝五郎生まれ変わり物語探求調査団代表）
・平成30年(2018)5月20日除幕
・碑の所在地：東京都日野市高幡733番地
高幡不動尊境内、大日堂脇、六地蔵の隣
・建碑：勝五郎生まれ変わり物語探求調査団ならびに有志の皆様

（碑文）

文政五年（一八二二）、中野村（八王子市東中野）の勝五郎（八歳）は、自分の前世は程久保村（日野市程久保）の藤蔵であると語り評判となり、「ほどくぼ小僧」と呼ばれるようになった。

藤蔵は、文化二年（一八〇五）に生まれ、同七年二月四日疱瘡のため六歳で亡くなった。藤蔵の墓は、高幡山金剛寺墓地にあり、藤蔵の生家は、現在も子孫の小宮豊家が居住し、墓地や位牌などを守っている。

勝五郎は、文化十二年十月十日に生まれ、明治二年（一八六九）十二月四日、五十五歳で亡くなった。墓は、永林寺（八王子市下柚木）にある。

勝五郎の生まれ変わりについては、中野村領主多門伝八郎の調書や、文人大名池田冠山・国学者平田篤胤の同時代の記録が残り、当時の状況を詳細に知ることができる。

日野市郷土資料館では、平成十八年（二〇〇六）より、市民参加の「勝五郎生まれ変わり物語探求調査団」を結成し、調査・研究・普及事業を展開してきた。平成二十七年には、勝五郎生誕二百年記念として、『勝五郎生まれ変わり物語調査報告書』を刊行した。

藤蔵・勝五郎の生まれ変わり物語が、末永く語り継がれることを祈念し、多くの人々の浄財により、ここに碑を建立する。

平成三十年五月吉日
勝五郎生まれ変わり物語探求調査団

（調査報告⑲）

勝五郎が遊び眺めた石仏たち

加地　勝

勝五郎の生家は、八王子市東中野の谷津入（やついり）と呼ばれる地区にあり、現在は野猿街道から中央大学正門に向かうバス通りを進み、途中から西側に入る小高い場所である（図13）。途中には小谷田一族の屋敷が並んでいる。生家のあったあたりは、多摩ニュータウンの開発地に含まれていたため、昭和五十年代に住宅はすべて移転したが、その後開発は中断し、長く空地のまま残っていた。生家の場所の隣は、十一屋という酒蔵で、そこの井戸と思われる井桁が残っていた。しかし、平成二十二年頃から新たな宅地開発が進み、現在は全く面影はなく、単なる戸建造成団地の一角となっている（図14）。地名の「谷津入」は、八つの谷の意味で、白田谷戸・堀田谷戸・梅の木谷戸・戸端谷戸・中谷戸・西の谷戸・大谷戸・千谷戸（先谷戸（せんやと））である。勝五郎の生家は千谷戸にあった。幼年期の勝五郎の遊びの範囲は、当然ながら谷津入を中心とした場所となるだろう。この中で現在も当時の石仏が残る場所は、「谷津入地蔵堂」と「熊野神社」になる（図15～17）。また、西側約二百㍍の高台に「愛宕神社」がある。神社境内に登ると周囲の展望が開かれ特に南方面は野猿街道を眼下に見て、大栗川を挟んで松が谷や別所の丘陵を一望に出来るので、幼い子どもたちの冒険の場所には、絶好の場所であっただろう。

図13 平成23年頃の勝五郎生家跡

図14 勝五郎生家跡地（堀之内東山ふれあい東緑道八王子市堀之内2号192−7）に立つ説明板

図15 塞の神神社と谷津入地蔵堂（写真右下）

図17 熊野神社全景

図16 谷津入地蔵堂の石仏

地蔵堂より野猿街道に出て東に行くと、熊野神社がある。藤蔵は死んだ時に「白いひげに黒い服を着た老人」につれられ、山や川、きれいな花の咲いた野原などをとびまわったが、老人は平田篤胤によれば熊野神社の「産土神（うぶすながみ）」であったという。勝五郎は、老人を思い出すと、村の鎮守である熊野神社を訪れたであろうか。『新編武蔵風土記稿』によると、紀州熊野本宮を勧請したとあるが年代は不詳である。明暦二年（一六五六）の棟札がある。

勝五郎が、程久保の須崎家（現小宮家）と家族付き合いを始めると、当然ながら、現中央大学の山を越えての往復が頻繁に行われた。この道は、一部「勝五郎の道」として構内に保存されているが、高幡不動尊への参拝道であり、日常的に利用されていた道でもある。山中にあった「蚕影神社」は中大の土地買収により、昭和四十一年一月に谷津入に移築されている。

山を越えると日野市で、正面に上程久保の秋葉神社がある。祭礼時には勝五郎少年も立ち寄ったであろう。そこでは、道祖神と庚申塔に会える（図18）。「天明元年（一七八一）男女神双立像の道祖神」である。境内には、「享保九年（一七二四）青面金剛像庚申塔」と「延享二年（一七四五）地蔵像庚申塔」が

あり、庚申講が盛んであったことがわかる。

図18 秋葉神社跡地（現在は神明神社に合祀）と庚申塔

図19 神明神社前に集められた石仏

古道を下ると神明社に出るが、神社へ登る階段の下に観音堂があり、その前に石仏が並んでいる（図19）。「宝永五年（一七〇八）・寛政十二年（一八〇〇）の庚申塔二基と文化元年（一八〇四）の聖観音像」であるが、これらの石仏は観音堂が明治三十八年（一九〇五）四月に建立されたのち、程久保川の対岸の高台に当たる現程久保一丁目の須崎家の付近にあったものを移したとのことである。藤蔵の元の墓の近くであり、墓参りをした時に勝五郎が見たかもしれない。神明社の隣地に廃寺正福寺の墓地が残っている。三沢の医王寺の末寺で元禄年中に草創されたとみられるが、江戸末期に当寺の尼が生身入定したとの伝説がある。古道を進むと、右手に塚（庚申塚）がある。その上に庚申塔と馬頭観音像塔、首欠けの地蔵尊が置かれている。

ここの塚にある安永九年（一七八〇）の舟形馬頭観音塔は、銘文「種子カン奉拝礼西国三十三所霊場／安永九庚子年三月吉日／須崎藤五郎」とあり、日野市内で最古の馬頭観音塔であるが、須崎藤五郎は、藤蔵の実父である。藤五郎は、藤蔵が生まれた翌文化三年（一八〇六）に四十八歳で死去しているが、安永九年には二十二歳であり、若年時の久兵衛の名を藤五郎に改名していることから、家督を継いで西国詣りをしたのであろうか。藤蔵の母しづは日野本郷下河原の只右衛門の娘で藤蔵を生んだのが三十歳、久兵衛没後、平村の半四郎を婿として再婚している。しづは天保十二年（一八四一）に亡くなっており、勝五郎は少なくともこの頃までは家族付き合いをして、この道を往復したであろうし、父の作った馬頭観音像に特別な思いを持ったことであろう。この塚の「享保九年（一七二四）の笠付形青面金剛像庚申塔」の銘文は「皆（時）享保九甲辰二月吉日／武（州）程久保村　敬白　施主（九人の名）」がある。首なしの地蔵の年銘は不明である。（図20・22・23）

更に進むと、藤蔵の生家である。家の前に藤蔵がよく遊んだであろう六地蔵が並んでいる（図21）。寛政七年（一七九五）女念仏講中の建立である。

藤蔵が生まれた時は建てられて十年ほどで、まだ真新しい像塔であったであろう。女念仏講中の人たちは、藤蔵の葬儀でも念仏をあげてくれただろう。勝五郎自身も程久保を訪れる度に、このことを思い出したのではないだろうか。また、高幡不動尊へも参詣に訪れることがあったのではないかと思われる。

図21 程久保六地蔵

図20 庚申塚の石仏群

図23 享保9年の庚申塔

図22 藤五郎が建立した馬頭観音

再録編

調査団発足以前にも、勝五郎の生まれ変わりに興味を持って調査し、記録を残してくれている人々がいる。それらの中から、今では調査することのできない貴重な報告を三編、執筆者・関係機関の了解を得て、再録した。

〈　〉は編者の註

（再録①）

「史料から見た勝五郎とその周辺」

日野史談会々員　下田九一

（日野史談会発行『日野の歴史と文化』第2号～第4号、昭和四十四年三月～四十五年八月）

まえがき

勝五郎の再生物語は、今日も尚謎に包まれたまゝである。本誌創刊号で平義秋氏が物語の内容を紹介されているので、ここでは現存するいくつかの文書、古記録（以下古記録と呼ぶ）が、どんな事情で書かれたか、ということを中心に、この物語の周辺を探ってみることにした。

×　　×　　×

この物語は、江戸文化の爛熟期と謂われる文化・文政年間の出来ごとである。それは多摩丘陵の内側に隣り合わせた二つの谷戸部落、多摩郡程窪村（現日野市程久保）と同郡中野村谷津入（現八王子市東中野谷津入）に起っている。その噂は忽ち拡がって、いち早く江戸表に伝えられたが、江戸に喧伝されることの早かったのは、そのどちらも旗本の知行所だっただけでなく、北には甲州街道の宿駅で知られる日野本郷が、東に四季折々江戸の文人墨客が杖をひく慈岳山松連寺が所在するなど、消息の便にはこと欠かなかったからであろう。そしてこれとは別に、この物語はかなり長い年月（大正はじめ頃まで）口碑として郷土に伝承されていた。

×　　×　　×

この出来ごとが、人々の心をこのようにゆさぶったのは、話題の主が幼児であるのと、死後の世界という、他人ごととうそぶいてもいられない問題が、そこに持ち出されたからに違いない。

小泉八雲（ラフカディオ・ハーン、英国人、日本に帰化）は、この物語の写本の一つを現代文に訳して紹介した。（小泉八雲作品集第八巻）そのまえがきに次の感想を述べている。

（前略）この文章は、人間の前生というものがある場合には記憶していられるものだということのほかに、いろいろそこに暗示されていることが多い。これを読まれると、むかしの日本の封建時代を回顧して見るよすがにもなるし、古い時代の信仰―それも大乗仏教のような高等なものではなく、西欧人にはちょっと垣間見ることのむずかしい、前生とか再生とかいうものに関して、当時の庶民がいだいていた一般通念を回顧してみるという便宜もある。そして、そういう点からみると、当時の奉行所（筆者註・ここでは地頭役宅）の調査がどこまで正確であったか、また証拠がどこまで信用のおけるものであったか、というようなことは、当然、ごく些末な問題になってしまうはずである。（原文のまま）

×　　×　　×

古記録は、どれも江戸人の筆になる聴き書きで、勝五郎ならびに父源蔵のものと、祖母つやのものとに分けられるが、文化文政の頃の貧しい多摩農民の姿を、これほどよく捉えているものも珍らしくそこには郷土の先祖たちの素朴な姿が、つい近年までその辺の畔道などで見かけた野ら着姿の老爺や、日向の縁側でつくろいものをする老婆と二重写しになって、瞼に浮んで来る。そしてその時代の生活ぶりや、信仰の在り方などを探る手がかりが、得られるかも知れないという、思に駈られもしたのである。民俗史料の一つとしてとりあげたのも、このような理由によるものである。

第一章　現存する古記録について

ここに挙げる原本は、国書総目録（第二巻）に収録のものその他で、この出来ごとをとり調べた日次の順に配列した。各書に就て言えることは、写本（筆写）が大へん多かったらしいということで、例えば平田篤胤の再生記聞などは、総目録に載る所蔵部数の他にも、かなりの数が推測される。これは当時の、その内容に対する関心度を示すものであろう。そしてこのことは、この出来ごとの口伝、流布を助けたようにも思える。各記録の内容は再生記聞の追録を除けば大同小異である。尚

内容が他書に転載引用されているものに就ては、書毎に附記することにした。

㈠　多摩郡中野村勝五郎再生前生話

壱冊　文政六年四月二十日

著者　池田冠山（観山とも書く）＝松平定常

今日所在の明らかなものは、早大図書館の版本だけである。巻頭に本書を引用した図書名

甲子夜話　　巻二七　松浦静山著

静山は多門文書の全文と自筆の前書、用人にとらせた調書を副えて「勝五郎再生記抄」の題名を付けて甲子夜話に収録した。

註　中野村谷津入の地頭多門伝八郎が文政六年四月十九日付を以て幕府御書院番番頭佐藤美濃守に届出た勝五郎に関する調書（後述）

小泉八雲作品集　第八巻

写本　椿説聚記　文政六年四月から天保六年十月に至る間の記録を集めたもの。高輪泉岳寺の僧貞金が著者から原本を借りて写本したものを、更に筆写したと思われるもの。小泉八雲はこの椿説聚記から採って載せた。（作品集第八巻）

㈡　多門伝八郎の届書（多門文書）

届書は本文（耳打申達書）と副え書（書付写）其他から成る

壱通　日付　文政六年四月十九日

多摩郡柚木領中野村谷津入の地頭多門伝八郎が、知行所内の出来ごととして、幕府御書院番々頭佐藤美濃守に差出した届書である。池田冠山は右の副え書を、平田篤胤は本文を夫々多門文書から筆写して自著の巻頭に掲げた。

㈢　勝五郎再〈生〉記聞

壱冊　文政六年四月二十九日

著者　平田篤胤

文政六年五月八日付、及び同年六月七日付の追記には聴き書以外の自説を多く載せているほか、巻頭に多門文書の本文を写して掲載している。所在の明らかなものは、国会その他の図書館に各一冊計十七冊あるが、この他にも写本はかなりの数にのぼるものと思われる。

活字本　平田篤胤全集　巻三（平田学会刊）

同　　巻八（内外書籍刊）

㈣　勝五郎前生聞書

壱冊　著作年月日及著者不詳

所在　宮内庁書陵部に写本壱冊あり

㈤　武蔵名勝図絵（会）多摩郡之部　巻六

著者　植田孟縉

昭和四十二年慶友社復刻刊二三一頁に「前生覚知の小童」の記述がある。

第二章　古記録とその著者

一、池田冠山と「再生前世話」

池田冠山（観山とも書く）は、因州鳥取の支藩松平縫殿頭定常その人で、当時大名中での学者・好事家として、冠山の名は江都に高かったと謂われる。国学者平田篤胤とも交渉〈渉〉のあった人で、互にときどき往来したことが気吹舎日記に出て来る。（渡辺金造著平田篤胤研究）

この人が勝五郎再生の話を耳にして、自身中野村に出向いたのは、文政六年（一八二三年）三月二十二日で（後述）江戸人としては最初の調査者であった。この人としてはごく気軽に、松連寺参詣でも兼ねて来訪したのであろうが、訪問を受けた谷津入名主の小谷田重蔵宅や、隣家源蔵方ではあわてたに違いない。このとき祖母のつやが勝五郎に代り、一ぶ始終を語っているが、これが聴き書きとなって後世に残った訳である。このことを最も正確に裏づけるものは、芝高輪泉岳寺僧貞金の書いた文書である。小泉八雲によれば、この書は「勝五郎再生前生話」の写本に付した解説書で、写本と共に椿説聚記と言う古い記録集に載せてあったものを、八雲によって現代文に訳されたものである。以下引用すると、

これは事実あった話である。本年三月二十二日、この事件取調べのために、中野村へ出張された松平観山様が書き綴られたもので、観山様は勝五郎を招見されたのち、勝五郎の祖母に委細を糺問され、そのとき祖母が答えたままを書き取られたのである。その後観山様は、本年四月十四日（筆者註・この頃源蔵と勝五郎は、江戸の地頭宅に滞在中であった）当山に御参詣あり、そのおりおん口ずから、前記勝五郎の家を訪ねられたおりのことどもを愚訥におん物語があった上、同月二十日、その書き綴られた物を愚訥に内見のお許

しがあったので愚訥は御内諾をえて、さっそく、その写しを一通とらせていただいたのである。以上

泉岳寺　僧貞金（花押）

文政六年四月二十一日

小泉八雲作品集　八

（原文のまま）

冠山がなぜこの出来ごとに、これ程の関心を抱いたか、それは必ずしも好事家としての興味からではなかったように思える。冠山はその前年十一月 露姫 という息女（稀代の才媛だったと謂われる）の夭折に会って、悲嘆に暮れその追善供養を怠らなかったと言う（渡辺金造著平田篤胤研究）。その命日は遇〈偶〉然にも勝五郎（八才）が自分の再生児であることを、はじめて口にした月のうちであった。恐らくこの話を冠山が耳にしなかったということはないであろう。この話を冠山がどのような心情で受けとめたかは知る由もないが、ひょっとしたら勝五郎に託して、愛娘の霊の不滅を願望し確かめたかったのではなかろうか。中野村訪問は、その一途な念願の現われと見られぬこともない。江戸に帰った冠山は、この聴き書を整理した上、篤胤はじめ親友・知人に見せている。その一人が、前記の貞金和尚である。徳川親藩という割合自由な立場から出来得たことかも知れないが、見せて貰った篤胤や甲子夜話の著者松浦静山は、遠慮してか遂にこの人の名前を明らかにせず、某老公というふうに書いている。

冠山の中野村訪問の件は、名主からも知らせがあって、地頭を促し、その翌四月はじめには、その役宅からの呼出しによって、源蔵・勝五郎の親子は十里の道を根津七軒町の多門宅へ出向いたのである。その結果ここで又いくつかの記録が生まれることになる。

二、多門伝八郎と多門文書

多門文書の記録者多門伝八郎は幕府御書院番を勤め、中野村谷津入の地頭であった。その知行所内の大きな出来ごとについては、その都度名主から知らせを受けている筈である。今度の出来ごとについても、冠山訪問以前に知っていたと思われるのだが、ことがことだけに中々腰があがらなかったのではあるまいか。そこえ親藩の藩侯〈侯〉自ら調べに乗り出したとあっては、一日も捨て置く訳にはゆかず、急ぎ源蔵親子を呼び寄せる気になった、ということになろう。そして源蔵たちは四月五日（武蔵名勝図絵）に多門宅に着いて以来帰郷する同月二十六日迄、二十一日の間同家に滞在している。とり調べの終ったのは、十七・十八日の頃かと思われる。この地頭はかなり応庸な人物であったと見え、実際には勝五郎の気嫌を損ねないよう随分気を遣いながら、再生の話をひき出すことにつとめ、源蔵が側から補足すると言うふうであった。そして退屈すると菓子を与えたり、源蔵に連れさせて諸所を見物させ、時には自身二人を案内して遠方まで出掛けるなど甚だ悠長な調べかたであった。多門文書のうち四月十九日付届書の副え書の他に、多門宅での覚え書きがある。このとり調べの苦心を物語る一文である。

右勝五郎儀賤敷百姓之倅に不似至て行義能、おとなしく生付も奇麗之旨何を申も漸九歳之れ児故万端委敷承兼強て尋候得ば大きに恐れ答出来兼又者泣出候仕合故菓子杯〈抔〉興〈與〉へ遊ばせ置きだまし尋候故確と難分事も多く（下略）

（原文のまゝ ふりがな筆者）

四月十二日多門は両人を伴って、本所牛島にある旗本荻野梅塢の寓居を訪れている。梅塢名は長、幕府の天守番で平田篤胤とも交渉〈渉〉のあった仏学者・武江年表にも出て来る人物である。多門との関係は詳かでないが、旗本同志昵懇の間柄であったと思われる。遇〈偶〉々梅塢の隣が甲子夜話の著者松浦静山の屋敷であった。この日梅塢宅から、静山の許に、再生を語る勝五郎なる少年の来訪を告げて来た。そのときのことを静山は次のようにしるしている。（甲子夜話巻二七　原文のまま）〃前略隣宅の梅塢がもとに多門が連れ来れるまま予に見るべしと告げたれど幽冥の談を云者を見るべくも非ざれば往かず人を遣して見せたるに書記して復命す〃と

静山は既に池田冠山の「再生前生話」を見ており、ひと通り予備知識を持ち関心もあったに違いないが、自ら本人に会って調べるほどの熱心さはなかったように思われる。その復命書というのは次の通りで、当時の勝五郎の風貌を伝

える唯一のものであろう。（甲子夜話巻二七原文のまま　ふり仮名筆者）

再生小児父差添有レ之尤何辺庭にての儀に有レ之右の小児は起居候所常の小児に聊相替候様子も無レ之私を見懸恥候体にて少し面をうつぶけ其辺を立廻り候様子随分おとなしく相見得申候髪はけし坊主にて毛赤く面長く痩せたる方にて色黒く有レ之候得共容儀も見苦しからず伶俐の小児と見請申候年は何才に相成候やと尋候得共一向答不レ申只恥入様子に相見え候而已〈已〉に候着物は古き紺竪じま木綿袷を着、帯も小竪じま木綿にて腰に古き金入に緋縮緬の縁を取りたる守袋佩で居、白木綿緒の草履を着き居申候親は四十五六才にも可レ有レ之や素より貧しき百姓の体にて別に相替儀無レ之候。

この復命書は、松浦家の用人の手になったものらしく観察は細かい、殊に守袋は印象的である。

四月二十一日勝五郎は源蔵に連れられて駒込の西教寺を訪れている。これは或る人の斡旋によって寺側から招かれたものであろう。ところが元来僧嫌いであった勝五郎は、折角茶菓の饗応を受けながら、何一つ手をつけようとしない素っ気なさに、附添いの源蔵も穴あらば入りたい位に困惑してしまったらしい。西教寺住職としては、前世を語る珍しい少年に会っておきたいと言う程の気持ちであったろうが、それ以上のことは記録にもない。

多門伝八郎の届書写

私知行所武州多摩郡中野村百姓源蔵伜勝五郎去年八才にて秋中より同人姉に向前世生替之始末相咄候得共小児之物語故取用不レ申度々右様之咄候に付不思議成儀に存姉儀父母ゟ相咄候て昨年十二月中改て父源蔵より勝五郎ゟ相尋候処前世父者同国同郡小宮領程窪村百姓久兵衛と申者之伜にて藤蔵と申自分二才之節久兵衛儀者病死仕候間母ゟ後家入にて半四郎と申者後之父に相成居候処右藤蔵儀六才之時疱瘡にて病死仕夫より右源蔵方ゟ生替申候由相答難二取用一筋に者有レ之候得共委敷慥成事共申候に付村役人ゟも申出得と相糺候処世上取沙汰仕り候儀故程窪村半四郎方にても沙汰及承同人儀知行所源蔵方ゟ尋参り候故相糺候処小児勝五郎申候通相違無レ之前世父母面体其外住居等も相咄申候に付程窪村半四郎方へ小児召連候処是又少も違無之家内に対面為致候処先年六才にて病死仕候藤蔵に似合候小児に有レ之其後当春迄に折々懇意に仕候内近村えも相知申候哉此節者日々右勝五郎を見物に所々より参り候者有レ之候に付知行所より訴出候間源蔵勝五郎呼出相糺申候処右之通両人も相答申候尤折々世上にて取沙汰仕候間難取用筋には御座候得共御内々此段御耳打申上候　以上

文政六年四月　多門伝八郎

（原文のままふり仮名　筆者）これは届書の本文と見られるもので、細部に亘る調書はこの後に書かれているが、その内容は「再生前生話」・「再生記聞」等と大差がないので省略する。

暇どった調べも終り、申達書のまとめ―これには難渋した、提出を済ませた多門には、今一つ引き留めておいた源蔵親子のことがあった。その留守は、彼の本家であり隣家でもある名主小谷田重蔵が、ひき受けて呉れてはいる、がそう長く家を明けさせる訳にもゆかない。そこで、既に約束のある、駒込西教寺の訪問だけは済ませ、二三日中に帰郷させる心組みであった。

勝五郎は江戸に来ていく日も経たぬうちに、里心をおこしてしまっていた。彼の心の中には祖母＝彼は根からの婆さん子である。＝と村の自然えの思慕が日増しに膨んでいた。これまで由木谷戸を一歩も出たことのない彼も、この正月には祖母に連れられて、(註1)谷津入坂を越えている、程窪村の(註2)半四郎方を訪れるためであった。その後も二度ほど通ったが、いつも日帰りした。父親附添いとは云え、今度のように半月余も、遠く家を離れた例しはない。

多門屋敷では、皆がよくして呉れたし、色々と気も遣って呉れわ〈は〉したが、一つだけ、自分で話したくない(註3)あのことを根堀〈掘〉り葉掘り聞かれるには内心参っていたが、余り嫌がれば、父親を困らせることが眼に見えていた。屋敷うちだけならまだ我慢も出来た、他所で若しこの質問に会おうものなら、堅く口を閉んで語ろうとはせず、こんな場合はいつも父親が代言した。本所では松浦家の用人に歳を質ねられても〃一向に答え申さず〃だったり、西教寺ではあのようなすね方をしたのも、もとわ〈は〉と云えば、いつまで経ってもうちに帰れない上に、関わりのない他人まで、自分を好寄〈奇〉の対照〈象〉にしたがるこ

とえの忿満が、そうさせたのかも知れない。

源蔵にしても、初めの二三日、骨休め位には考えたろうが、滞在を心から楽しめるどころではなく、勝五郎をなだめるだけでも一と仕事だった、そろそろ麦も刈らずばなるまいし、今年は薩摩苗も植え損なっている。あれやこれやで彼は彼なりに焦っていた。

こんな矢先にもたらされたのが気吹舎からの招きであった。二人の気持ちを察していた多門は、調べの方は出来るだけ早目に切りあげて欲しい旨、用人に念を押させた。篤胤の意気込みでは、天狗小僧寅吉（後述）同様、塾にひき留められはしないか、という懸念もないではなかった。

註1　程窪村＝上分の東端から、谷津入の奥にぬける山道で、巾九尺・中野村から程窪村を経て、高幡村、日野宿等との往来は主にこれによった。

註2　勝五郎の申立てに出て来る。彼の前世に生まれ育った家である。半四郎は彼の前世の継父に当る。実母しづもその頃健在だった。

註3　再生の話。彼が文政五年（一八二二）十一月姉のふさにふいと話したこのことがきっかけで、大きな話題になり、江戸まで上ることになる。

三、(註4)平田篤胤と「再生記聞」

気吹舎日記に

文政六癸未年（篤胤四十八才）

四月廿二日　勝五郎此頃より此方に居とあるのは、源蔵親子が、多門の家人に案内されて、初めて気吹舎を訪れた日のことで、両人は江戸を去る前日の四月廿五日まで、三日ほど、多門屋敷からこの学塾に通っている。

篤胤と勝五郎の出合〈会〉いは、さきに翁が池田冠山の筆記と多門の文書とによって、予備知識を得ていたところえ、(註5)屋代輪池翁や、谷孫兵衛（後出）らの斡旋があり、運んだことで、決して遇〈偶〉然ではなかったが、翁が自らの古道学を大成させるため、長年に亘って幽界（翁自らはこれをかくれざと呼んだ）の研究を手がけて来た人であるだけに、そこに何か宿命のようなものを感じさせる。無論翁はこの出会いによって、勝五郎という少年から、研究の裏づけとなるような重要な傍証乃至は暗示を得られるかも知れないという期待を抱いて、臨んだに違いない。出会い前後の経過については「再生記聞」の追記（同年五月八日附）に明らかなので、その箇所を抄出してみることにした。

（以下原文のまま）

右異童のこと、(註6)或人の筆記を見たりし後に、地頭へ呼出され、吟味ありて、支配頭へ届け書出したるよし、其の写をも見たりけるに、屋代輪池翁の、なほ巳〈已〉にゆきて尋ねよと云るゝによりて、四月廿一日の日に多門主の用人谷孫兵衛という人訪いて聞きけるに、其の日は勝五郎、父源蔵と駒込の西教寺という寺へ、或人の計らひにて、行きたる由にて居合さず、谷氏にあらましを聞て帰れるが、同人の計らひにて、翌廿二日に、源蔵勝五郎を連れ来りしかば、屋代翁へも知らせたるに、翁も来らる、まづ妻と娘と嘉津間とに云ひつけて、（嘉津間と云うは、もと寅吉と云ひしが故ありて名を改めたるなり）色々とう羅かし（註　慰め又は楽しませ）つゝ咄させたるを、物かげにて聞きたれど問洩せる事多かりけるに　―下略―

この日はこの位にして終った模様である、と云うのは、再生のことを人に問われるのをひどく嫌った勝五郎は、そのために他所え出かけることも喜ばない風であった。案の定その朝も、気吹舎に行くことをしきりにすね拒んだのを、ほんの一刻顔を出すだけでよいからと、なだめすかしてようやく連れ出した次第を聞かされて、篤胤も余り急いては失敗すると考えたからであろう。強いて問い質そうとはせず、家人、門人達にも云い含めて、意のままに遊ばせながら、折を見ては少しづつ問いかけて答を得るよう配慮した。それが気に入ってか、終日遊び戯れて今夜はここに泊る、とまで云い出すほどのうち融けようであった。気吹舎泊りのことは多門屋敷から、勝五郎の帰宅を待つ来客があるからと、使いのものをよこしたので、実現しなかったが、翌廿三日朝には谷氏自身附添って訪れた。気吹舎にはその日奥州秋田から出て来た篤胤の実兄渡辺正胤も居あわせた、この日は同氏をはじめ門人の国友能当、五十嵐常雄、志賀錦麻呂、細貝篤資の諸氏が交々質問に当るというふうに、前日の打診から一歩を進めて、調べは幾分本格化した趣きが見られる。翌廿四日は双方とも

無理強いを避けたか休ませ、廿五日早朝には、源蔵が勝五郎を連れ三度び訪れる、そして明日郷え帰ること、その暇乞いに参じた旨を告げた。篤胤にとっては、調べの途中でまだ質していないこともあるし、肝腎な機微な点には触れるまでに至っていない、このまま去られたのでは折角の機会を失うことになろう。是非今日一日だけは辛抱して貰いたかった。律義な源蔵も翁の懇請を断わりきれなかっ〈た〉であろう。斯うして三日目には、来塾した(註7)堤朝風・(註8)立入事負・(註9)国友恒足らが額を集めて、どのような方法で調べを進めるべきかを相談した。その結果、人員は翁と事負と嘉津間の三人だけと云うことになり、その案に従った。ところが勝五郎は、余人の聞かぬ処なら話すと云う、そこで翁は庭に連れ出て自身彼を抱き上げ、菓子など与えながら、事負と様々に問い質すのに向って、小声で訥々と再生の顛末を語った ＝ このところを「再生記聞追記」

事負と能能とへば、いともしどけなき詞にて極めて小声にて語れる趣曰

と記している ＝その内容は、嘗って寝物語りに祖母に聞かせたものに近かったであろう、これを事負が断片を綜合し、首尾を整えて、とも角一文にまとめあげることが出来た。このとき、前記の人々の他、土屋清道、矢沢希賢 ＝ 気吹舎の門人と思われる ＝ らも物蔭からこれに耳を傾けていた。

（以上「再生記聞追記」による）

註4　平田篤胤・江戸後期の国学者、国学の四大人の一人、大和〈大和田〉氏後に平田氏、号 気吹之舎（いぶきのや）秋田の人、本居宣長没後の門人として古道の学に志し、古典の研究に力を注ぎ、神代文字日文（ひふみ）の存在を主張した。門人に人材が多い。著「古史微」「古道大意」「神学日文伝」「気吹舎歌集」など、天保十四年没（一七七六～一八四三）

註5　屋代弘賢・塙保己一の門人で有名な蔵書家、幕府の祐筆所詰支配勘定役を勤める。篤胤の才能を認めて何かと援助を与えた国学の先輩、篤胤とは親類同様の交際があった。当 六二才

註6　或人、池田冠山を指す。

註7　堤朝風・幕府御台様御用人を勤める、本居宣長の門人・特に有職故実の学に精しく篤胤にとって屋代弘賢に次ぐ後援者であった。

註8　立入事負・気吹舎門人と見られる。「再生記聞」本文をまとめた。

註9　国友恒足・「再生記聞」追記には、同姓「能当」なる人も出て来るが同一人と思われる、近江の人、鉄砲鍛冶、文化三年気吹舎入門、篤胤とは意気投合して共に天狗小僧寅吉の調べもした。

僅か三日の短い期間ではあったが、気吹舎では篤胤はじめ、先輩、知友、門人達がこの少年の内に秘められた特異さ、異常な経験の実態を捉えるために、全神経を集めた。そして当然これまでの研究対照〈象〉だった嘉津間（寅吉）と比較されもした。人々の印象に残ったものは、その性格も言動も殆んど異質とも云える両者の相違であった。寅吉に見られるものは、大人を大人とも思わぬような悪ずれである、これは、彼幼い頃からの境遇が、その人となりをゆがめたのによるだろう、がその言動が一々奇想天外で誇張もあるところから、〝こ奴大人を誑かす積りだ〟と警戒もされた。一方の勝五郎は、家こそ貧しいが世の荒波には揉まれず、幼童のよさをそのままに育ったうぶな子に過ぎない、きかれれば唯自分の記憶を渋々と話すだけで、これを人が信じようが信じまいがどちらでもよかった、だから気が向かなければ、口をつぐんで話そうとしない、調べるには手数がかかり捗らなかったが、反って信頼されたように思われる。

斯うして、気吹舎での調べは四月廿五日をもってうちきられた、その翌廿六日早朝源蔵親子は多門屋敷を辞して、帰郷した、これについては記録もない。土産の風呂敷包を、首根っこに結んだ尻端折りの源蔵、今朝は結つけ草履も軽い芥子坊主の勝五郎、二人は胸を過った感慨もじきに忘れて、家路を急いだ。府中から甲州街道を左にそれたあたり、もう田麦は大分刈られ、苗も伸びていた。源蔵は明日からの仕事を思った、うんと稼いで三七日の遅れをとり戻さねばならない。一の宮の渡しを過ぎたあたりで薄暗くなった。残照が苗代の水面だけ光らせる田圃路で、源蔵がボソリ云っ

た、〃だしぬけに帰って驚くべえナア〃これは実感であった、勝五郎もそう思い、祖母の顔をハッキリと思い浮べた。中野村まであと一息だ。

△　△　△

その後文政十年（一八二七）の夏までは、時たま源蔵、勝五郎らの訪問が気吹舎日記に散見される。その二回目の訪問は最初のときから三月後の七月・これは日記には載っていないが、「再生記聞追記」の上欄に追補されている。（以下原文のまま）

篤胤云此七月九日に源蔵また先頃江戸へ出たりし時家々に礼を申さむ為に来れりとて勝五郎を伴い姉ふさ兄乙次郎をも連来れり折しも巳〈己〉ハ越谷へおのせる〇也しかど三夜ばかり家々に止まりて在りたるに日〈曰〉々

このときも留学していた太田朝文や増田成則らが、勝五郎を相手に問答したことが記されている。以下源蔵・勝五郎に就ての記事を気吹舎日記に拾ってみる。

文政八乙酉年（篤胤五十才）

八月廿六日、源蔵・勝五郎を連て来、この日勝五郎は、気吹舎門人帳にその名を加えられている。記録にはないが、彼はこの日以来某期間気吹舎に寄食したようにも受けとれる。

気吹舎門人帳に

文政八年八月廿六日

多摩郡中野村源蔵男小谷田勝五郎　十一才

文政九丙戌年

三月廿五日曇 ―上略 ― 内蔵助（養子鉄胤）勝五郎（小谷田勝五郎）勇太郎を連れ越ヶ谷へ行く ― 下略 ―

と、彼の滞在を思わせる日記文が見られる。

文政丁亥年

七月廿一日天気 ― 上略 ― 勝五郎（再生児）来― 下略 ―

既に勝五郎も十三才になっており、江戸とも何回か往復しているので、この時は独り出て来たものであろう。

文政十二巳〈己〉丑年

〇月七日― 上略 ― 中野村の源蔵来る

このときは勝五郎を伴っていない、この後は、気吹舎日記にも両人の記事は見当らない。池田冠山の「再生前生話」冒頭の人別書によれば、源蔵は身すぎのために竹籠を造って、江戸市中を売り歩いており、同人の常宿は、馬喰町相模屋喜兵衛方ということになっている。これは季節的に彼が行った、土地産の目笊（ざる）の仲買い仕事を指すものと思われる。源蔵と江戸の街との因縁は、次回に述べる積りだが、江戸に出ても気吹舎には顔を出したり、出さなかったりであったようすである。篤胤は天保十二年（一八四一）一月（六六才）江戸を引き払い、秋田に移住しているので、源蔵も文政十二年（一八二九）を最後に、篤胤とは会えず終いになったのではないかと思われる。勝五郎にしても同様である。

△　△　△

気吹舎での後日譚は別にもあった。それは篤胤の上洛にまつわるものだが、「再生記聞」とも無関係ではないので略記しておきたい。

篤胤が「再生記聞」全篇を書きあげたのは、その年六月七日で、これを他書とともに携えて上洛したのが八月に入ってからである。（江戸を発ったのが七月二十日）この上洛は篤胤の生涯中一回だけのもので、上洛の目的は翁がこれまで心血を濺いだ著書の主なものを、禁裏に献上すること、本居宣長の継嗣大平と春庭とに面接すること、先師宣長の墓前に詣でることの三つであった。この重要な日程は恐らく前々から思い立っていたことだったであろう。そして遇々この四月勝五郎に会い、「再生記聞」の著述をも得たので、これを献上書冊に加える気になったものと考えられる。献上書については滞京中富小路卿の手を経て、八月十四日仙洞御所（光格上皇）のお手許に奉ることを得ている。このことは、後日「再生記聞」巻頭に掲げた篤胤の文政六年十二月十三日附文書に明らかである。御所では写本をとられ、原本を富小路卿に返されたのは十月四日であった。上洛目的であったあとの二件も滞りなく果たすことが出来たのは、云うまでもない。（この項・平田学会刊・平田篤胤全集巻三による）

追　補

篤胤の幽界に就ての研究は、翁が畢生の努力を傾けた古道学大成の要請から生まれ、既に文化二年（一八〇五）の鬼神新論の執筆から、文政四年（一八二一）の古今妖魅考の執筆まで関係六書をものにするに至っている。今では翁の信念とまで

なっている幽界存在説を裏づけ、確かなものにするためには、その幽界の消息にも通ずると云った謂わば霊能者 ＝ 特異人格 ＝ を得たかった、この意味で先の天狗小僧寅吉は、その資格を具えるものとして翁に迎えられ、文政三年（一八二〇）十月以来気吹舎を訪れた際、出て来た嘉津間なる少年がそれである。嘉津間当時十五才、そのあだ名の示すように、五六才の頃から様々な予言を行ったり、多くの幻覚を体験した異常心理の持主であったと謂われる。勝五郎が篤胤によって見出されたのは、このような経緯のあった後なのである。この天狗小僧寅吉を迎えてうち込んだ篤胤の学究方法は、当時から讃〈賛〉否両論を招いたけれども、翁はその方法を捨てなかったようである。

（この項「平田篤胤研究」昭和十七年十二月十四日六甲書房刊・による）

四、 山崎美成と「勝五郎前生聞き書」

宮内庁書陵部に標題の写本一冊があり、その著者が明らかでない旨は、第一章中に触れたが、実はその写本の内容を確めておきたかったので、昨秋国書研究所の岡山泰四氏の紹介をいただいた機会に、書陵部で借覧した。ところが、それは池田冠山の「勝五郎前生話（ぜんしょうばなし）」の写本で、筆写の主は著名の国学者であり、篤胤とも交友のあった山崎美成（文久三年二月七日六十七才で歿）であることが判った。さきに述べた天狗小僧寅吉は、はじめ美成の家に寄食していたのを、篤胤が請うて気吹舎に連れて来た、という縁故もある。この写本は「前生話（ぜんしょうばなし）」の写し半紙七枚十四頁と、多門文書半紙二枚三頁からなるもので、次のような美成のあと書きがあり、冠山の中野村訪問の事実を裏書きするものが、ここにもあることを知った。以下原文のまま、

右は冠山老侯自ら彼地に至りて源蔵の家御尋に成勝五郎をも御覧の上祖母津やの物語を直々相為聞御自身に御筆記遊され候を老侯より直々御話伺ひ且御筆を拝借して書写する者也。

文政六年癸未五月十八日　山崎美成識

五、 植田孟縉と武蔵名勝図絵（会）多摩郡之部の中「前生覚知の小童」

文政年間、多摩郡の片隅で起きた勝五郎の一件を、当の地元で記録に残したのは、植田孟縉であった。これよりさき、新編武蔵風土記稿の編纂を企画した江戸幕府は、文化十年（一八一三）多摩、高麗、秩父三郡の地誌捜索（調査）を八王子千人頭の原半左衛門に命じた、配下の孟縉翁は、同僚と共にこれに協力して、遍く現地を調査し、文政五年には多摩郡の部を、続いて高麗郡の部を、同七年には秩父郡の部を完成した。「武蔵名勝図絵多摩郡之部十二巻」は実にこの調査中に得た副産物であり、翁の努力の結晶でもあったと見られている。

同図絵は三郡の地誌完成に先立って、文政三年（一八二〇）には一応脱稿したが（昭和四二・一・三一慶友社刊武蔵名勝図絵解説による）、翁は公命である三郡地誌調査の眼鼻がつくまで、敢へて発表をさし控へたのであろう、幕府昌平黌に献上したのは文政六年であった。

勝五郎の件は、文政六年の早春には、翁の耳にも届いたであろうが、話を聴いただけではこの記事にはならなかったかも知れない、翁のことであるから、一度調査して歩いた中野村を再び訪問して、ことのあらましを源蔵家の家人から聴いたと思われる。唯この記事を見る限り翁は余り細微のことまで、ほじくり返すことはしなかったのではないか、という気がする。翁にしてみれば、割愛するには余りの奇事と考へたに違いない、そこで既に脱稿していた「名勝図絵多摩郡之部巻六」のうちに、追記されたということになろう。とすればこの「前生覚知の小童」は名勝図絵にとっては、最も新らしい而も最終の資料になった、と云えるかも知れない。

第三章　この物語りに関係のある半四郎家と源蔵家に就て

この両家の人別については、夫々の名主の調べによったものであろう、多門文書、冠山の「前生話（ぜんしょうばなし）」、篤胤の「再生記聞」のいずれにも掲載されているが、「前生話」に載るものが稍詳しいので、ここでは小泉八雲作品集（第八巻）のものを引用した。

一、　半四郎の家族

藤蔵―中根宇右衛門知行所内、武蔵国多摩郡程窪村において、六才のおり死去。（中根宇右衛門屋敷は、小宮支配、江戸下谷

新橋通にある）藤蔵は文化二年（一八〇五）に生まれ、文化七年（一八一〇）二月四日四ッの刻に死去した。病名は疱瘡である。前記程窪村山手の墓に葬られた。菩提寺は三沢村医王寺で、去る文政五年（一八二二）が十三回忌であった。

半四郎―藤蔵の継父。須崎氏。文政六年、五十才。

しづ―藤蔵の母。文政六年、四十九才。

久兵衛―藤蔵の実父。本名、久兵衛。後に藤五郎と改名。文化三年（一八〇六）藤蔵二才のおりに、四十八才で死去。半四郎はそのあとへ入婿したのである。

こども―男二人、女二人。いずれも藤蔵の生母と半四郎の間に生まれた子である。

程久保杉本富雄氏の家に伝わる中興村系図（下郷）のうちに半四郎家の家系がのっている。この「村系図」は文化十三年（一八一六）当時程久保村上分―旗本曾雌市之丞知行所―の名主（杉本富雄氏の先祖）が筆を起し、富雄氏の祖父益太郎氏の代まで書き継がれた村内各家の系図で、村人土着の時代や、分地の概要などを知る、手がかりともなる資料である。

須崎五兵衛（安永三・十二・一九歿）
同人　妻細田利兵衛娘
同人　後妻平山村小林佐五右衛門娘
同人　男子一名
須崎藤五郎（文化三・八・二七歿四十八才）
同人　妻離縁　八王子新町太兵衛養娘
同人　後妻　しづ（天保一二・一二・二〇歿六三才）日野下川原只右衛門娘
入婿　半四郎（天保九・四・一九歿六二才）平村伝六弟
同人　子　藤蔵
同　彦次郎
聟　元五郎　芋久保新田与八男
同　妻
元五郎養子
小宮鏡治郎　当村小宮虎吉二男
（鏡治郎氏の養子入は元治元年（一八六四）以前でこのとき小宮姓に改む）
同妻　ハマ　元五郎長女
鏡治郎長男
小宮総之丞―（当主　稔氏）

註　括弧内は筆者加筆。

二、源蔵の家族

勝五郎―文化十二年（一八一五）十月十日生れ。文政六年（一八二三）当九才。武蔵国多摩郡中野村谷津入、多門伝八郎知行所内百姓源蔵の二男。（伝八郎は、江戸根津七軒町、柞木（柚木）地所内に役宅がある。）

源蔵―勝五郎の父。[註1]小谷氏。文政六年、当四十九才。家が貧しく、身すぎのために[註2]竹籠を造って、江戸市中を売り歩いている。同人の江戸の常宿は、馬喰町相模屋喜兵衛方である。

せい―源蔵の妻で、勝五郎の母、文政六年、当三十九才。尾張藩士村田吉太郎の娘。せいは十二才の時に、本多大之進殿の屋敷へ奉公に上がった。十三才のとき、父吉太郎は故あって尾張侯の扶持をはなれて、浪人となった。文化四年（一八〇七）歿　七十五才。墓は下柞木村、永林寺墓地内にある。

つや―勝五郎の祖母。文政六年、当七十二才。若いころ、松平隠岐守殿屋敷へ奉公に上がったことがある。

ふさ―勝五郎の姉。当十五才。

乙二郎―勝五郎の兄。当十四才。

つね―勝五郎の妹。当四才。

註1　小谷田が正しい。

註2　竹籠（土地ではめかいと云う）、野生の篠竹を材料とする目笊のこと、中野村をはじめ近くの村々で、農閑期の副業に目笊の手細工が行はれた。

三、程久保村下分と

半四郎家についての覚え書き

旗本中根宇右衛門の知行所、程久保村下分は、この谷戸のほぼ〈ぼ〉央以東を占め、谷戸川の南北に点在する農家は、すべて十五戸、耕作は主に台上の畑と谷戸田で、田の方は新たに開発の余地もなかったので、三沢村や高幡村など、谷戸外の

田を耕作する家も出ていた。

当時養蚕も一部では行われる他、殆んどの家が、薪炭を焼いてその生計を助けたことが、風土記稿にも見える。屋内の採煖〈暖〉用として迎えられた木炭は需要も多く、焼き上ると馬の背につけて日野、府中、八王子の諸宿に運び売却された。前記目笊の副業も、一部では行はれたふしがある。これは婚姻によって、中野村地方から齎されたものであろう。

半四郎の家敷は、程久保道（巾九尺）に沿う北側の小高みにあり、背戸は雑木山であった。この点今日でも余り変化がない。前の道端に、この家敷と向い合うように(註)六地蔵が建てられていた。

石仏の刻銘は

寛政七乙卯年（一七九五）十月吉日
武州多摩郡程久保村　女念仏講中

註　この六地蔵はもと屋敷側土手の裾に在ったが、倒れる心配から今の場所に移されたと伝へられる。（小宮稔氏談）尚最近更に路角に移され、向きも東北に変っている。二年程前その一体を何者かに持ち去られたが、再び戻り、一度は近くの溝に拾〈捨〉てられてあったのを、探し出して来たとの話である。

ここから爪先上り一〇〇米ほど西へ行ったところ、右側の小高みに、戦後間もなくとり毀されて今はないが、炭焼かまどがあり、その向い側に庚申塚がある。（須崎晃氏所有地）石仏五基のうち、現在碑面の略完全なものは二基のみで、他は欠損がひどく文字の判読を許さない。文字の読める庚申塔は、享保九甲辰年二月吉日（一七二四）に建てられ、台石正面に、これを建てた施主八人の名が刻まれている。他の一基は、この物語りに関係のある前記藤五郎（藤蔵の実父）の建立で、

奉拝礼西国三十三所霊場
安永九庚子年（一七八〇）五月吉日
須崎藤五郎

と刻まれ、これを某日、通りがかりの地元の老女が〝うちでもヨ、上方へお詣にでも行って、帰ったときに建てたもんだんべなんて、話したことがあったっけ〟と云った。齢を繰ってみると、藤五郎二十二才のときのものである。

半四郎家から巽に当る家（当主須崎晃氏）を、いつの頃からかたぼこやと呼ぶ、勝五郎の祖母の話に出て来る向いのたばこやである。この家敷の前を谷戸川が流れ、板橋を渡ったところに、今は跡だけだが、化政の頃にはまだ、半四郎家の祖五兵衛の代に分家した屋敷があり、西側の径をそのまま登れば、程久保村で最も広い（約五万坪）くろどん台畑に至るが、その屋敷の東側に、風土記稿にもある敷地六十坪、四間に三間の地蔵堂があった。三沢村医王寺持ちで、毎年十月二十三日のお籠りには、地元の老若男女の他、近村の老媼たちも集まり、露店の商やなども出て大いに賑わったが、明治初年、上分にある正福寺（現在の中程久保、これも医王寺末）とともにとり毀された。跡は水田となり地蔵田と呼ばれていたが、多摩動物公園の開設後間もなく、バス道の下に埋没してしまった。前記庚申塔、六地蔵と云い、谷戸川、くろどん台畑、と云い、この地蔵堂の庭と云い、幼い藤蔵らにとっては格構の遊び場であったに違いない。

半四郎の家でも、春秋蚕を飼い、桑畑があった。春蚕時近所の子供らと桑の実（土地でドドメと云う）採りにでも行ったときのことであろう、こんなときは大低〈抵〉は足で、藤蔵は持って行った小刀を、桑の木の株に置き忘れて来て、そのままになっていた。後年勝五郎が前生を語るとき、これを思い出してか、こがたなのことを話した。〝うそだと思うなら行って見ナ〟と云い、源蔵が程久保を訪れた折、半四郎とその畑へ行って見た、半信半疑で捜すうち、赤錆びた小刀が桑の木株に置かれていたのには、二人とも肝をつぶしたという。この話は既に程久保には伝わらず、谷津入元名主小谷田家の祖母からきいた話である。

須崎家の墓地は、地蔵堂の直ぐ上の東寄り台上にある。稔氏の夫人に案内されて、藤五郎はじめ故人たちの墓前にぬかづいたのはこの五月五日午後のことであった。藤蔵の墓石は、数年前大田区の人が尋ねて見えた際、苔むして判じ難くなっていたのを、土や苔をおとしてやっと藤蔵のものと判ったという話をされた。一尺三寸ほどの墓石には

文化七庚午天
頓悟童子　位
二月四日　半四良建之

と刻まれてあった。半四郎は藤蔵のごく幼い頃か

らの養い父だが、心から藤蔵を愛していたようで、その死をいたむ心が、このささやかな墓〈墓〉石ににじんでいるように思えた。藤蔵の死後足かけ十四年を経た、文政六年正月二十二日、半四郎家には谷津入から来客があった。祖母つやに連れられた九才の勝五郎である。高幡不動尊へお詣りかたがたとつぜんにお寄りしたと祖母が述べ、今日訪れた次第を語った。同家ではかねて知らされていたとは云へ、目のあたりにこの珍客の来訪を受けて、深く感動した様子が古記録にも書き残されている。

四、　谷津入と源蔵家敷

　中野村にある三つの小名―集落―のうち、村の西北を占める谷津入は、その名が示すように、多摩丘陵の山ひだの間に、深く入り込んだ谷戸部落を指すが、谷戸の奥を源とする小流は、谷戸口を出ると八王子―川崎街道（旧）に沿って向きを東に変え大栗川に注ぐ、これとは逆に、街道から岐れた[註]谷津入道は谷戸の東側を北上して、丘陵の尾根を越え程久保村に通じていた。

　註　この道も谷戸の奥が大学の敷地に変ったとき、山路にかかる辺からその姿を消してしまった。文政六年正月祖母に連れられた勝五郎が初めて越えた山路も、今では程久保側の半分を残すのみとなった。

　農家戸数十四・五のうち、半数はその中程に集まり、残る半数が谷戸口の東西に散在する。畑の多くは台上や尾根裾に、水田は谷戸川の低地から谷戸口の外まで耕作されていた。源蔵の屋敷は、谷戸口の西、千谷戸（せんやと）の奥にあった。千谷戸の名は知る人も少いと思われるが、明治大正の頃、この奥に十字屋〈十一屋〉又は大酒や〈大坂屋〉という、地酒の造り酒屋のあったことは広く知られていた。

　爪先上りの路は二〇〇米ほどで、元名主屋敷（当主小谷田重男氏）につき当る。源蔵の屋敷跡はその南側の崖下に、稍長めの二〇〇余坪を占め、前の谷戸田を見おろす東向きの家であったことを想像させる。荒れた屋敷跡には柿の古木が一本、わびしげに残っていた。

　ここに立ったとき、あたりが巷の騒音からは遥かに遠く、都市化の波に巻き込まれて、すっかり落ち着きを失っている多摩丘陵のうちに、このような静けさの残っていることが、むしろ不思議に思える程であった。十数年前（昭和三十一年秋彼岸）に、ここを訪れたときにはなかった住宅が、二、三新らしく建てられてはいたが、千谷戸全体の自然は、そのときと殆んど変りがないほど、よく保存されていた。或は源蔵ら在世の頃以来余り変化がないのではないかとさえ思えた。

　源蔵はじめ家族達の眠る墓地は裏山の中腹にあった。その近くの台地に畑が展け、その畔に孤立するように勝五郎の墓がある。

　この頃の記事は、五月九日三度目の訪問より帰ってからのもので、この前訪れた折、色々話をして下さった元名主小谷田家の祖母は、元気だったが腰を痛め休んでおられたので、長居を避け、二・三聞き漏らしていたことをお質ねしただけで辞去した。源蔵家の墓地に参りたい申出を快諾され、末孫を案内によこして下さった。

　この日勝五郎の墓には、時間の都合無沙汰した、このあと、教えられた源蔵[註]あらくを見た。

　源蔵屋敷の上あたりが荒れているほか、その広い畑は今日尚作る人があってよく耕されていた。

　註　あらく ― 山林や荒地を開墾して作り上げた畑

五、　源蔵の家族

　元名主小谷田家の古文書の多くは、明治以後散逸して、分家源蔵家のくらしを知る資料は何もないが、源蔵夫婦が江戸から戻った、文化六年（一八〇九）ごろから、末娘の　つね　出生の文政二年（一八一九）ごろまで十年ほどの間が、くらしの比較的苦しい時代ではなかったかと想像される、これは家内の労働力の多寡や、病人の有無によっても左右されることであろう。が上の子供二人が十四、五才に成長した文政六年（一八二三）頃には、くらし向きもようやく楽になったらしく思われる節もある。珍しくこの家の大人達は、そろって若い頃、江戸で暮らした経験の持ち主だったけれども、それは折り節、内々（うちうち）の話題になる位のものになり、歳月と谷津入の自然とは、この人達をも完全に谷津入の百姓源さん一家に変えていた。

　老母の津やは、性格が明るく、思い遣りの深い

人だったようで、娘時代松平様（隠岐守）のお屋敷へ奉公に上ったことが、時折り自慢話に出た。

嫁のせいは、よくよく苦労の多い星の下に生れた人とでも云うのか、貧しい下級侍の家庭に、一人娘として生まれ育った。幼時母を亡い父親の手一つで育てられた。十二才になるや、旗本本多某の屋敷へ奉公に上げられた。これは父親の無慈悲というより、母親に代る躾だけはという、思い遣りからでもあったろう。その父親も翌年には扶持を離れて浪人し、文化四年（一八〇七）七二才でこの世を去っていた。天涯孤独となったせいは、以来十四年間、青春を楽しむ余裕もなく、主家で働らき暮らしてしまった。性格は控へ目でおとなしい反面、心の確りした人であったようだ。勝五郎は多分に、この母親の気質を享け継いでいるようであった。

源蔵は百姓家のあととりとして、子供の頃から父勘蔵に仕込まれたが、どんな訳があってか、中途から江戸に出て、他家へ奉公するようになってしまった。文化の初頃であろう、せいと識り合ったのはその頃で、彼が文政六年四月篤胤に語ったところ（再生記聞追記）によれば、長女ふさの生まれたときは、小石川の氷川明神近くに世帯を持っていたと云う、それは文化六年源蔵三十五才、せい二十五才のときである。結婚はその前年あたりであったろう、源蔵は朴訥な働き者で未だ独身であり、せいも当時としてはとうに婚期を過ぎる年になっていた、奉公中識り合った二人をとりもつ人達によって、結ばれたものと思われる。二人にとっては、最も希望に満ちた一とときであったろうが、源蔵らはこの新居での生活を長く続けている訳にはゆかず、生後間もないふさを連れて、中野村へ帰って来たということになろう。両親も既に田畑仕事には無理がきかぬ齢になっていたし、源蔵の他にあとを継ぐものがいなかったからで、そのことでは名主重蔵も、地頭屋敷へ顔を出した序でにでも、口添えしたものであろう。村え帰った源蔵は、そのまめな体に一層精出して働らいた。今も彼の屋敷跡の近くの台地に、源蔵あらくの名で呼ばれる六段歩ほどの畑がある。全部ではないにせよ、その時分源蔵がとり組んで開墾した広い丘畑である。源蔵の稼ぎぶりを伝へる記念碑でもあるように思えた。

せいは源蔵と共にここに戻るについては、あれこれ案じて、ふんぎりがつき兼ねたであろう。鎌一つ持ったこともない町ば育ちで、農婦のつとめに耐えられるかどうか、老母とうまく折り合ってゆけるかなど、不安は拭いきれなかったろうが、津やの気さくでものに拘わらないおおらかさが、それらの懸念をき憂に終らせたようであった。これは、せいの素直さによるところも多かったに違いないしお互いの屋敷奉公の経験が、初めから親近感を抱かせたことにもあろう。

せいにとって何よりも有難かったのは、そこには格式ばりのない自由さと、飾り気のない、温かな人の心の触れ合いがあることであったろう。そのうちに長男乙次郎が生まれ、五年後には勝五郎の出生を迎えることになるが、困ったことにその一年ほど前になって、源蔵夫婦の間にいさかい（争い）が起きた。それはせいが江戸へ出て再び奉公に上りたいと云いだしたことからのようだが、子供をおいて家を出るなど、よくせきのことでなければ出来ないし、それが老母の大きな負担になる位のことは、せいだって解らぬ筈はない、それをも敢えて辞さなかったのは暮しの苦しさからであったらしい。（再生記聞、再生前生話）源蔵にはせいの気持ちが解らぬではなかったが、おいそれと許す訳にもゆかず、とどのつまりいさかいとなった訳だが、せいの決意は固く遂に源蔵も折れて、せいの江戸行きが実現する。ところが、やがてせいの妊娠のことが知れ、家に戻された、この年生れたのが勝五郎であった。若しせいが身ごもることなく、奉公を続けていたら源蔵の家はどうなったか、幸いにこの一家をおそった危機も、せいの帰宅によって避けられ、その後はせいも、子供達の成長に励まされ、再び立直る勇気を与えられたようであった。

六、　源蔵家の副業

前にも触れたように、ここ中野村地方には、いつの頃からか、農閑期を利用した目笊造りの副業が盛んに行われた。これに使われる材料は野生の篠竹で、多く山峡の荒蕪地や川岸の藪から得られ、主に男手によって截り集められた、持ち帰った篠竹は。所要の長さに截り揃え、小刀でその皮質部の薄皮を剥ぎ、日乾した後編みにかかる、口で云えば簡単だが、根も要り熟練を要する仕事であっ

た。毎年田畑の収獲〈穫〉から調製が終る晩秋の頃始められ、春耕の季節まで続くこの仕事も、暮から早春にかけての最盛期には、殆んど一家総がかりの忙しさで、それだけに日銭にもなった。

源蔵の家でも、源蔵が截り出しの役、老母津やから孫達まで、この仕事にたずさわる風であった。勝五郎なども五六才の頃から、見よう見真似で習い覚え、八九才の頃には、その手器用さも手伝って、余ほど上達していたらしく、文政六年四月地頭屋敷での、源蔵の口述もこれに触れて、

〃一体籠細工を親共細工に致し候処勝五郎籠細工上手にて至って手奇麗に出来候て昼夜精を出し拵へ夫而已〈已〉かかり居候〃（多門文書、原文のまま）

この目笊は、甚だ素朴で丈夫な上使い良かったので、見てくれよりは丈夫一式を喜ぶ農家に迎えられ、台所用から繭容れなどにまで愛用された。春先婦女子が田畑の畔で摘む、芹や餅草（よもぎ）容れにもなり、節分の日、とんぼ口に懸ける四つめど（四つ目籠）の代りもつとめるという風であった。江戸の町々でも、炊具の足しや八百屋の店頭にも並べ使われたであろう、その需要はばかにならぬものがあった。

源蔵は、家で慥らえたものは仲買人に渡さず、自ら江戸に運んで市中に売り捌く方法を選んだ、前に江戸で奉公するうち、眼を着けていたことかも知れない。これが案外うまみのあるところから、次第に近隣のものまで買い集め、出荷する仲買人となって、江戸との往復も度重なることになった。無論これも季節の商売で、生産の端境期は農繁期でもあったので、勢い兼業の方が割に合い、都合もよかった。

後年勝五郎も、父のそのやり方を学び、殆んど終生、兼業農家の道を歩んだように伝へられている。

七、源蔵とその家族の信仰

中野村の街道から千谷戸に向う途中、路の左側丘上に駒形社がある、風土記稿にも

駒形社　無年貢地凡九坪字谷戸入ニアリ小社ニテ覆屋アリ古碑アリ上ニ悉曇ヲ彫テ其下ニ応仁元八月十五日トアリコレモ神体ト云ニハアラザルベシ村民ノモチナリ。

とあり、石段下の路傍に二基の石仏がある。一は観音像と見られ宝暦九戊〈戊〉午年の建立、一は文化二年丑年十月谷入念仏講によって建てられた地蔵尊、源蔵の家からは三百米ほどしか離れていない。この路といい、この地蔵尊といい、源蔵の家族にとっても、きわめて身近かなものであったろう。まだ小さかった勝五郎を連れて、祖母の津やが、この石仏の前で手を合せる姿が眼に浮んで来る。谷津入の念仏は百万遍で、これに用いる大きな珠づは、今も残されている。又源蔵の家族が、産土神にお百度詣りしたことが「再生記聞追記」に見えるが、このことも、この地方一般の信仰の一端を語るもので、この風習は昭和の初め頃迄伝承されていた。

勝五郎の再生の真相をつきとめようとした篤胤は、源蔵とその家族達の信仰については、特に入念に調べた形跡がある。「再生記聞追記」に、彼らの産土神信仰を中心にした記事が多いことからも、そのおおよそをうかがうことが出来るが、このことは同時に篤胤がこの謎の解明のよりどころを、宗教、就中産土神信仰のうちに求めたことを、物語ってはいないだろうか。いづれにせよ次の一節は、源蔵とその家族の信仰を知る上に、大事な資料であり、この地方農家の人達の信仰生活を知る、手がかりになるものと考えて以下原文のまま引用した。

―前略―(註1)或人の記に勝五郎おりおり我ハのの様なれバ大事にし給ハれといひ、また早く死ぬことも有むと云ひ、また僧に布施することハ、いとよき事だと云へる由見えたり、また汝ハ仏道を信仰せるにやと問うに、源蔵答へて云く、勝五郎が伝へることハ、人に物を施すことハよき事なりと申したるハ聞て侍れど、其ノ段のことハ、祖母に申したるか、我レ等ハ聞たること侍らず、さて己は仏道を深く信仰と申すにてハ無れども、父の時より乞食道心者などの門口に立があれバ、少ずゝの施物を遣しぬ、是ハ後世を願ふなどの意にはあらず、只彼レ等が物を乞ふを憐れむのミなり、家内の者ども、(註2)朔望式日などに、(註3)鎮守ノ神に参詣し侍るを己は日々に詣で神々をたふとみ、仏閣といへども縁あれば詣でて、捨ることなし、然れども、只今日の無事を祈ることをのみ心とせり、

己が村の辺は謂ゆる徳本が流の念仏講流行り侍れど、其講にも入らず。―下略―

註1　池田冠山著「多摩郡中野村勝五郎前生話」を指す

註2　朔、望―一日、十五日これに廿八日を加え三日とする村もある。高幡村がその例

註3　中野村の産土神熊野社を指す

八、祖母津やと勝五郎

家庭での勝五郎にとって、一番のよき話相手は祖母津やであった。妹つねが産まれて、母親の手を離れたこの孫を、津やは吾が子以上に慈しみ育てた。勝五郎も自分を手塩にかけて呉れたこの祖母に深くなつき、自然おばあさん子になっていた。彼は両親には話せないことでも、祖母にだけは何でも打ちあけた。八才になるまで誰にも話そうとしなかった再生のことも、はじめにこれを打ち明けられたのは祖母一人であった。〃おらあ十六になったら死ぬんだ〃そんな予言めいたことまで祖母に話して、津やの心を暗くした。津やはこの孫の背負わされた宿命のようなものを感じとって、なぜかこの〃勝〃が哀れに思えてならなかった。だから勝五郎の話は、どんな些細なことにも耳を傾けてやり、聞き流しにしなかった。彼から聞いた一ぶ始終を、驚くほどよく覚えていたのも、そのためであったろう。

第四章　その後

一、源蔵家のその後について

源蔵の妻せいは、三十四年の間連れ添い、苦楽を共にした源蔵に先立って、天保十四卯年（一八四三）五十九才でこの世を去り、源蔵も安政二乙卯年（一八五五）八十才で亡くなっている。せいの墓石は源蔵が、源蔵の墓石は勝五郎が施主となって建てている。津やは、生前に夫勘蔵―文政四辛己〈巳〉年四月廿七日歿―の石碑を建て、これに自分の戒名も刻み逆修している、津やの亡くなったのは、天保五年九月廿一日である。次男の勝五郎は分家したので墓は別であるが、父源蔵供養の施主になっているところを見ると、長男乙次郎は安政以前に早世した様子であるが、彼の墓石はない。ふさ、つねについての消息も不明である。このように源蔵家は、安政二年源蔵の死を最後に、分家した勝五郎を残して絶えてしまった。

二、源蔵家の再興

東中野千百九拾九番地

平民

前戸主　小谷田　源蔵

明治参年四月拾五日

小谷田重助父他家再興す

亡父　儀兵衛　四男

小谷田　重蔵

天保元年拾月拾日生

右の抄本写は、小谷田重男氏方に保存されているもので、名主重蔵の養子は、世田谷代官の分家より養子入りして、重蔵を襲名したもの、儀兵衛はその実父であろう。この重蔵は明治三年、家督を嗣子重助に譲り、自らは安政年間に絶えた源蔵家を再興した、という重男氏の老母の言に一致する。けれどもこれも重蔵一代で終り、重蔵歿後は源蔵家の菩提は本家の重男氏方によって守られている。

三、勝五郎の晩年

勝五郎は成人後、分家して、居を谷津入口―谷津入道が街道から岐れるところ、谷戸川岸―に定めた。やがて由井領片倉村から妻をめとったが、子供がなく、その妻とも後に離別した様子である。

彼が独立の折、どれ程の田畑を分地されたか資料はない。その屋敷地と田畑若干というところであろうが、後年彼は家敷地内に土蔵をも建て、農事の手伝いに行った地元の者に、穀象虫の混った米飯を出した、と云う話が残っている。この逸話は古米の貯えすらあった彼の裕福さを示すものだが、この富は何によって得られたのであろう、前述のように、彼は農業の傍ら、父源蔵から学んだ目笊の仲買いを行い、これを江戸に運んでは売り捌いた。脚を棒にしなければ出来ない仕事だが、これが思いがけない利潤を生んだのではなかろうか、江戸の町の地理については、文政六年四月以来、たびたび気吹舎に通っているうちに、明るくなったものであろう。この兼業はかなり晩年まで続けられたようである。

養子与右ヱ門夫婦は、この江戸との往来のうち、世話する者があって、彼地から入れたものと伝えられる。ところがこの養子夫婦の選択は勝五郎一代の失策だったようで、与右ヱ門らには初めから、一生この中野村に落ち着く気はなかったらしく、まして百姓仕事を習い覚えようとする殊勝な心懸けすら見られない、多年勝五郎が貯えた折角の財を売り食いすると云う不甲斐(ママ)ない者達であった。晩年勝五郎は耳が遠くなり、殆んどかなつんぼに近かった、と伝えられる。そして時折り幻覚にでもおそわれるのか、甚だしく盗人(ぬすっと)を恐れ、座敷の天井に抜け穴を設けていたと云う。少年の頃、世間からは〝再生児〟と云われ、気吹舎では天狗小僧と並んで異童の扱いを受けた勝五郎だが、成人後は、とりわけて変ったところも見えず、再びその話に触れることもなかった。ごくおだやかな目立つこともない一人の農民としてその生涯をとぢたようである。その墓は、彼の生家の裏山、雑木林の畔りにある、墓石の表面には

帰元潭底潜龍居士位

田谷小(台石)

向って右横面に明治二己巳年十二月四日、

台石向って左側に、施主与右ヱ門とある。

斯うして、彼は再び多摩丘陵の赤土に還ったのである。その後与右ヱ門夫婦はこの地を立退き、横浜へ移住して畢った。子女は三人あったがその消息も定かではない。

勝五郎の晩年の話は、主に小谷〈田〉良作翁から聴いたところで、良作翁の父権六氏は、中野村井戸之上金子家の出、勝五郎の家がその歿後与右ヱ門の代に没落、横浜に移る際に、買養子となって家屋敷を譲り受けた（買養子の道を選んだのは当時の徴兵のがれのためであったという、当時の金で百円）、以来小谷田姓を名乗り、塔〈菩〉提を守っている。

権六氏は暫らく谷津入口の屋敷に住まっていたが、ここが地相に合わないと云う理由から、その巽にあたる、大栗川に近い路沿いに土地を求め、移り住んだ、筆者が良作翁（三十一年算へ七二才酉）を訪ねたのは、この方のうちであった。この母家は元屋敷から移したもので、勝五郎が生涯を終った家だが、権六氏は買いとった後、多少改造して（裏手の八帖二間を各々四帖宛にし、土間の部分は全部新らしくしたと云う）いるので、昔の規模とは違うところもあった訳だが、その黒光りする柱や梁、鴨居、建具造作などは一切、そのまま残されていた。

尚良作翁の話によれば、表座敷の縁側の外には、雨戸の他に、頑丈な格子戸まであったそうで、これは不便なのでとり外したとのこと。戸棚の上の天井には天井裏に出る抜け穴のあったことは前述の通りで、これらは例の盗人(ぬすっと)対策であったらしい。この家もその後建て替えられ、これらの話をして下さった良作翁も今は亡い、中野村も急ぎ足で変りつつあるようであった。

むすび

多摩の近郷近在から、遠く江戸表にまで反響を呼んだこの出来ごとも当の両家の肉親達にとっては、宿命の哀れさと、戸惑いの念(おもい)の方が深かったに違いない。そこには松の巨木が至るところに茂る多摩丘陵の懐(ふところ)、そこで暮した者でなければ想像しようもしない、―鼻をつままれるまでは解らないほどの― 夜の闇(やみ)に包まれる、谷戸村という背景のあったことも見逃せないだろう。

何か知れないが、眼に見えない大きな力に向って、人々が抱くおそれやうやまい、このような日常の信仰生活のうちに、遇々このような出来ごとがあって、その肉親達を、狽(ろうばい)させたということにもなりそうである。

このことに関(かか)わりのあった名主小谷田重蔵は、役目柄何ほどかの記録は残したに違いない、その中には、源蔵家の暮し向きを知る資料もあったと思われるが、これらの古文書は、明治になってから尽く逸散して残るものがない。この家の老媼に、源蔵家の暮し向きについて、或は云い伝えのようなものでもあろうかと質ねたことがある。

〝中野村でも中より少しばかり上ぐらいのところではなかったでしょうかネ〟と云う返事だった。これはもの（田畑）もちというほどの意味で、というふうにとれた。無論老媼の推測は正鵠とは云へないかも知れない、が真相に近いもののようにも思えた。ものはあっても、暮し向きは楽ではない、と云う例は農村では決して珍らしいことではなかった。

× × ×

前にも述べたように、古記録はどれも百姓の生活には疎い筈の人達の手になったものでありながら、よく当時の多摩農民の姿を捉えて物語りの全貌を伝へていると思われたし、地元では古くからの語り伝へをよく覚へていて、語って呉れる年寄りにも巡りあえた、この二つの支へがあったればこそ、この稿も進めることが出来たと思う。

ともあれこの稿の目的は、これらの古記録や、地元の伝承口碑をたよりに、郷土の古い民俗の一端を探ることにあった。ところが結果は、物語りから派生した裏話しや、寄り道に暇どって、肝腎な目的にはほど遠い、謂わば資料という窓から、わずかにその内側を窺き見したに過ぎないものになってしまった。歳月の厚い扉を開いて、その時代の民俗というほどの実態を見究めるには、もっと周到な用意と学習とが要請される。筆者にはそれらが甚だ不足していたようで、資料を十分生かせなかった原因も、このへんにあったと思う、中途半端な稿に終ったことを深くお詫び致したい。

（再録②）

勝五郎再生の実地調査（一）～（五）

勝五郎研究グループ

（財）日本心霊科学協会発行『心霊研究』二十三巻一～三、二十四巻二・五　昭和四十四年一月～四十五年五月）

勝五郎の実地調査（一）

心霊研究二〇八号「一九六四年六月号」に宮沢先生が執筆されている「心霊の常識」の中の「再生に就いて」に勝五郎の再生の話がでている。これは今から約百五十年前武州多摩郡柚木領中野村八津入に起きた誠に不思議なる生れ替りの話である。

当時の国学者、平田篤胤が、勝五郎の噂を聞き調査し記録したものが現在平田篤胤全集第三巻に「勝五郎再生記聞」として残っている。また小泉八雲の書いたものも小泉八雲集下巻に「勝五郎の転生」として残されている。

昭和四十一年四月、雑誌「世界の秘境」に板谷理事は「勝五郎の再生」について書かれ、参謀本部の地図から発見した現地附近の地図を掲載されて、いつか行って調べて見たいといわれていた。

同年九月、精神統一研修会の若手数名が集まり多摩丘陵へピクニックに行く相談をしたとき、ドライブを兼ねて勝五郎の調査を試みようという事になった。ところがこの話が板谷理事の耳に入り、先生も大乗気で先生を中心にすぐさま実行されることとなった。

昭和四十一年九月十六日（日曜日）は天候に恵まれ朝八時、新宿駅南口に全員集合、二台の車に板谷、斉藤、吉川、千田、田中、松川、夕張の八〈七〉名が分乗出発した。

エンジンの調子は良好、天気快晴、車中は和気あいあいでドライブ・アンド・ピクニックの感じが旺盛、アッと言う間に深大寺に着いた。

参拝と昼食をすませ、武蔵野の面影こい境内の森を散策する。ここ深大寺裏の家畜〈畜〉納骨堂には板谷先生の愛犬〇〇〇の遺骨が安置されてあるとの事である。先生自身は多忙を極め、未だに尋ねた事もないとの事なので、ついでにお参りをして行く事になり納骨堂へ向う。平日は勝手に納骨堂内部には入れないそうであるが、この日は運よく供養落成記念日の為、自由に入る事ができた。

納骨堂は、供養塔を中心に左右に別れており、入口は左右各一ケ所で何処の入口から入ってよいのか迷った。ふと先生を見ると普段の先生と少し変っている……と思った瞬間納骨堂の右入口に向って足早に歩き始められた。我々もつられて中をのぞいてビックリ、壁に添って本棚式に組まれた納骨棚には拳大の骨壺が約五〇〇〇箇、整然と安置されてあった。

五〇〇〇箇余りもある中から先生の愛犬の骨壺を探しあてるのは一仕事だと思っていると、先生はづかづかと、ある方向に一直線に進まれ、

「あった！　これです！」

といって一個の壺を手に持たれた。

位牌には墨痕鮮かに「板谷松樹之愛犬〇〇〇号

之霊」と書かれてある。

「先生御存知だったのですか」誰かが聞いた。

「いや始めて来たんです」

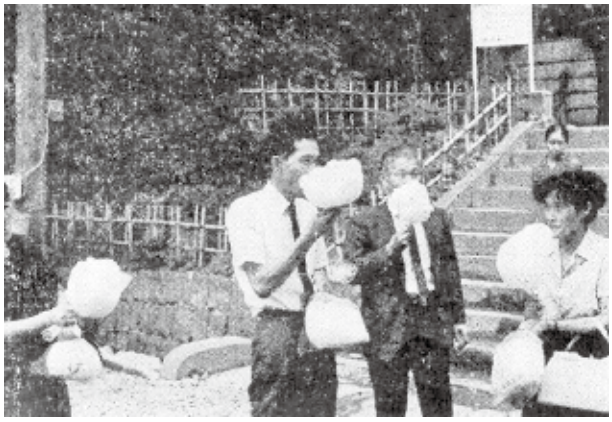
五〇〇〇箇もある中からどの様な方法で探そうかと思っていた矢先の発見だけに先生始め全員一瞬ポカーンとしてしまった。暫くして

「今思えば供養塔を前にした時、何者かに引き寄せられる様な感じでした」

と、ポツンといわれ

「良かった。来て良かった」

と一人言。我々全員も我にかえり、改めて愛犬の冥福を祈る。



童心にかえって、綿飴をたべる左から
千田、斉藤、板谷、吉川の各氏

再び車中の人となり高幡不動に向う。車中は目前に見た、奇蹟にも近い一発で愛犬の骨壺を探し当てた先生の霊能の話で持ち切り、今日の調査は幸先良いぞと一同張り切るうちに高幡不動に着いたのは、午後一時過ぎであったろうか。

勝五郎が再生する前の藤蔵の菩提寺は三沢村の医王寺で当時は有名な寺だったが、現在は高幡不動金剛寺に合併され廃寺になっており、医王寺の過去帖等は金剛寺に移されている事を前もって調べておいたからである。この金剛寺は僧行基が建てたという真言宗智山派の古寺で、重要文化財の仁王門や不動堂で知られ観光客で賑わっていた。

寺の受付で勝五郎調査について夕張が話したところ暫くして中年の僧侶が出て来て、寺を訪ねた理由、勝五郎再生調査の目的等を聞き、興味を覚えたらしく、それらしき時代の大冊の過去帳を何冊か奥から事務所に運んできて下れた。

過去帳を調べて行くうちに

「あっ、これだ！」

と記録を見つけられた先生のうれしそうな声が聞かれた。

それは藤蔵の両親須崎藤五郎としずの記録であった。勝五郎再生前の藤蔵の記録は金剛寺の過去帳から発見できなかったが、両親の死亡年月日や戒名が判ったことは貴重な手掛りだった。

僧侶から須崎家の子孫の方が現在は小宮と姓を名のり、多摩動物園の近くに住んでいる事を教えられ早速出発、約三十分で探し当てた。

当主らしき人から勝五郎再生の話は年寄から聞いた事がある。また、この先の杉本という家が、昔寺小（子）屋の先生をしていたので色々な記録が保存されているという話だという事を聞き出した。

日も西に傾き少し肌寒い中を車は急ぎ杉本家へ向う。幸いすぐ判り、手拭をかぶった農家の主婦らしい婦人が出て来て、いぶかしそうに我々一行を見た。

始めのうちは迷惑顔で

「主人が不在だから」とか「わからない」

と躊躇していたが、先生を始め一行の熱意と真剣さに動かされ、我々一行が何者であるか何の目的で来たかを理解し始め、だんだんに打ちとけてきた。

そして奥の部室から古びた密〈蜜〉柑箱を出して来て中から字を書いた和紙のとじたのを二、三冊出してくれた。その内の一冊の表紙には中興村系図と書いてあったが、もしやと、期待をもって先生が頁をくるのをじっと見守った。

約百五十年前の代物（しろもの）だけに、シミ、虫喰いだらけの行間に全員の目が集中し、一瞬の間……息をのんだ。

「あった！」皆が見た……。

須崎藤五郎、同妻、入聟の半四郎、同人の子藤蔵、彦次郎、元五郎等の性名、がはっきりと記録されていた。ここの家は建替えられたばかりで、その際、物置にあった古い本をだいぶ焼却したとの事であるが、この記録が処分されずに残っていた事は誠に幸いであった。

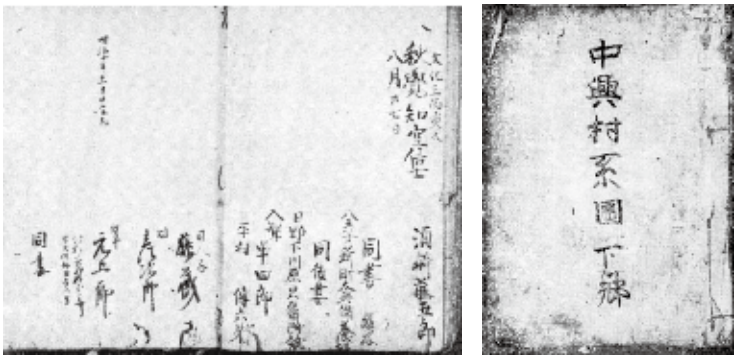
杉本家の主婦も我々の態度からこの古びた冊子の重要さを認識したらしく縁側の我々に茶菓子の接待をしてくれるまで、好意的になった。

うちとけた雰囲気の中に話がはずんだが、「子供の頃、親から聞かされた記憶はあります」程度の内容にとどまり、参考までに杉本の墓地を見せてもらったが、何の手掛りも得られなかった。

すっかり暗くなった多摩の山々に残り少ない命を鳴きつくすセミの声がひときわはげしくなる中を厚く好意を謝し、杉本家をあとに、一路車を東京に進めた。

初秋の風に心よい疲れを感じながら過去帖発見の感慨を胸に再度の調査を期して楽しかった貴重な一日を終えたのである。

（つづく）



中興村系図の内容

勝五郎再生の実地調査 ㈡

前回の調査（昭和四十一年九月）に引続き、昭和四十三年六月三十日、第二回目の勝五郎再生実地調査を行なった。

今回は自動車が一台しか都合つかず、人員も、小川、斎藤、夕張、伊藤の、四名の少人数だった。

前回の調査で得た経験を生かし、綿密なる計画のもとに、調査四項目を作り、各人の調査区分を決め、二人ずつの二斑〈班〉を作り、調査活動がスムーズに行なえるようにした。

調査四項目

一、中興村系図の再調査と複写
一、小宮家と須崎家の縁と子孫の調査
一、須崎藤五郎、藤蔵の墓の発見
一、勝五郎の墓の発見

前回から二年余の歳月が経過していたが、今回の調査により四項目についての調査は、一応達せられた。

今回の調査で確認できた墓地、小宮家、勝五郎の住居跡等を、A、B、Cの記号で、二万五千分の一の地図上に印したので、地図を参考に本文を読んでいただければ、中野村の勝五郎が、祖母のつやに、手を引かれて何の辺りの山を越て、程久保に居る半四郎の許へ辿り着いたかが良く分って戴けると思う。

A―高幡山明王院金剛寺、真言宗智山派
　現住所　日野市高幡
B―杉本富雄家「中興村系図下郷」所持
　現住所　日野市程久保一八六
C―小宮稔家（須崎藤五郎の縁者）
　現住所　日野市程久保七四二
　（旧　武州多摩郡柚木領（小宮領）程窪）
D―須崎藤五郎、せい（しづ）、藤蔵、の墓地
　場所　日野市七生村大字程久保
　十四号七四九
E―小谷田重男家（源蔵、勝五郎の縁者）
　現住所　八王子市東中野一一九六
　小谷田源蔵、勝五郎の墓地
　小谷田家の裏山に有り
F―平林寺（永林寺）曹洞宗　小谷田家の菩提寺
　現住所　八王子市〈下〉柚木町

今回は車のトランクの中に資料の採集に必要な複写機、照明器具一式、カメラ、テープレコーダ等の器材を満載して、曇り勝ちの空の下、雨を気にしながら協会を出発した。京王線百草園駅を過ぎる頃より山々の木々の緑も一段と鮮やかに冴えてきた。

杉本家に向って道路の右側は、畠とタンボ、そして緑蔭に見え隠れに人家の屋根瓦がキラキラと光って見える。左側は小高い山で、この森の中に、藤五郎、藤蔵の墓地、光って見えた屋根瓦の一軒の家が、藤蔵の生家とは露知らず我々一行を乗せた車は補装された道を、エンジンの音も軽く、前回訪れた杉本家に向って走った。

いまにも泣きだしそうだった空模様も、雲が切れて、気持良く日が射してきた。道が大きく右にカーブしたところで杉本家が見えてきた。車を降りて杉本家の玄関に立った時、でてこられた奥さんは一瞬怪訝な顔をされたが、二年前の事を思いだされたのか、我々一行を心良く迎えてくれた。

残念なことに、今回も御主人は不在であった。御主人なら、勝五郎再生の話を、奥さんより詳しく知っておるのではないかと期待していた目算は、脆くも崩れてしまった。

早速、奥さんの許可を得て、中興村系図の調査と、複写作業に掛かる。前回の時は、さほど気にもならなかった、中興村系図の虫喰も、レンズを透して視るとひどいもので、それに、カビの匂が鼻を刺す。やはり百五十年前の代物だなと、あらためて認識させられる。一ページ、一駒、念には念を入れ、慎重に複写作業を続ける。一時間は要したであろうか、無事複写作業も終りあと片付をする。（藤五郎一家の家族名の出ている貢〈貢〉の写真は十一月号に掲載ずみ）お茶をすすりながら、中興村系図のページをくっていると、須崎家と、小宮家がページを挟んで続いて記録されている事に気付いた。須崎藤五郎、同妻、入聟の半四郎、同人の子藤蔵、彦次郎、元五郎等の姓名、ページをめくって

元五郎養子
小宮鏡治郎

当村小宮虎吉二男
妻　ハマ

元五郎の長女
鏡治郎長男
小宮総之丞

等の姓名が記録されてあった。

早速、奥さんに、小宮総之丞さんの近況、住所等を聞くと「この辺は、小宮、須崎姓の家は多数あります。小宮さんで古いと云われるのは、多摩動物園より一キロメートル先で、タクシー会社を経営している小宮さんと聞いております」と、云われたときは本当に嬉しかった。

複写中の伊藤氏

照明器具、複写機、カメラ等を車のトランクに納め、奥さんに厚く好意を謝し、杉本家をあとに、小宮家へ向ったのは勿論のことである。

小宮家と墓地

タクシー会社の小宮さんはすぐ見つかった。

「私の家では、分らない。旧道へ入った所の小宮さんで聞いたら」

と、会社の娘さんは、次の小宮家を教えてくれた。二番目の小宮家では、

「ああその話（勝五郎の再生）なら、稔さんの家のことだ、此の旧道を、三百メートル先へ行った所の左側に石垣を積だ新しい家がある　道は一本道だからすぐに分る」

と親切に教えてくれた。ジャリ道をノロノロと車は走る。あと一息で目的の小宮家へと思うと、車のスピードの、ノロさが気になる。車で三分も走ったであろうか左前方に石垣が見えた。家は屋根しか見えないが石垣の端下に車を止めて全員車から降りる。石垣の端の坂道を登り、玄関前に立って表札を見ると、小宮稔と書れてあった。夕張氏が緊張した面持ちで玄関の戸に手を掛けて案内を乞うた。暫くして、当家の主婦と思われる素朴な感じの奥さんがでてこられた。夕張氏が我々が辿った今までの経過を詳細に話されて、奥さんの返事をまった。期待と不安が重なり合って、奥さんの第一声までの間が途轍もないほど長く感じられた。

「前にも皆様と同じようなお話しで来られた方がありました。古い話は良く分りませんが、再生の話は主人から聞いて知っております。確かにお墓もありますが、何れが誰のやらお恥しいことで

すが私共には分りません」

奥さんの返事をきいて我々は自分達の顔が弛み微笑みころぶのがよく分った。長い間かかって一歩一歩調査してきた努力と、そして苦労が一ぺんにすっとんでしまったようだった。

小　宮　家

生憎と小宮さんとこも、御主人は不在で、奥さんと、子供さんと二人だけであったが、奥さんは、我々一行を墓地まで案内してくださった。大きな柿の木の下を通り、新道へ出て、驚いた。この道は数回にわたり住〈往〉復した道路だったのだ。右へ行けば杉本家左へ行けば金剛寺へ出る。近い所に目的の家があったんだなと思いながら、奥さんのあとに続く。

新道を横ぎり小型自動車一台がやっと通れそうな細いジャリ道を山に向って登る。途中に、京王電鉄多摩動物園線が走っている踏切を渡ると道は右に曲り細く急坂になっている。三分程登ったところ、視界が開け、右に広々とした桑畠が見えてきた。桑畠の端の細道をL字型に進み、こんもりと茂った森の中へ入って行った。五十米も進んだであろうか奥まった所に、百平方米ぐらいの墓地が見えた。今、歩いてきた道も、この墓地で行き止まりになっている。

木々の間から奥を覗こうと足を一歩前へ踏みだしたところ墓石の裏側は、三十糎ほどの余地を残して急勾配になっていて墓のあるところは、崖の上といった所だった。森の中だけにまわりの景色はよく見えず、うす暗い感じであるが何んとなく和やかな温かさのある場所だった。墓石は、ざっと十数石、数えられた。大きくて立派な墓石、小さくても、年代を過ぎた風格のある墓石など整然と並んでいた。

小宮家の墓

これらの墓の銘を一つ一つ写真にとったが、端の方に小さく右方へ傾いた墓石が目に止った。あとで此の墓石は藤五郎のであるのが判明した。

須崎藤五郎の墓

また空模様が怪しくなりだし写真撮影等の作業が終る頃とうとう雨になり、急ぎ器材を仕舞い山を下りて、小宮さん宅へ駆込んだ時は、雨は本降りになってしまった。縁側に腰をおろしてお茶を戴いていると、雨の中を小宮家の主人が野良から帰って来た。一同主人に御挨拶し、今日来た目的を話した。主人も心良く

「私が父母から聞いて知っているだけの話でよかったら」と、有意義なお話を多く聞かせてくれた。本当に古い話を知っておられ、我々には大変参考になった。特に、板谷、宮沢両理事が執筆されている「霊魂の世界」にでている「勝五郎の住所を、八王子市中野町」とされてあるが、主人のお話で、八王子市東中野谷津入である事が判ったことは大変な収穫であった。

庭先から東南の方角に見える山を指差して

「父から聞いた話だが、あの山を越て来たそうだ。あの山を越えりや、中野村からなら四キロメートル程のもんかな」

とのことであった（平田篤胤全集にも、中野村からの距離は一里とある）

色々話を聞いている間に雨も上がったので小宮家を中心に、柿の木、タバコ屋等の実地調査に移った。

柿の木

斜め前の道を曲った所に当時の物と思われる大きな柿の木を確認する事ができた。この柿の木が口をきく事ができたら当時の模様が手に取る様に分るのにと思いながらカメラのシャッターを切った。

タバコ屋

現在タバコ屋は無く少しの空地とガレージの立ってある所がタバコ屋のあった所とのことである。

タバコ屋の主婦については、柚〈由〉木郷土研究会で調査した会誌に『タバコ屋の、おばあさんは、道の北側の墓地にあり、「戒名は、自覚妙安信女」文政十一年八月二十三日亡』と報告されてあるが、我々は時間の都合上、調査確認する事はできなかった。小宮家は山裾に三軒並んだ真中の家で、家の裏側から、すぐ山へ入れる事も、確認する事ができた。長時間小宮家で色々、お話を聞き、調査をさせてもらったが、話はつきないので潮時をみて我々は腰を上げた。雨はすっかり上り、日がまぶしく射す。雨に濡れた木々の葉が日に照らされ青々と光っていた。主人、奥さんに、厚く好意を謝し我々一行は次の調査地へ車を走らせた。

（つづく）

勝五郎再生の実地調査 ㈢

小谷田家

小宮さんの御主人に東中野は山の裏側と聞いただけで捜す相手の住所・氏名も分らないのに、どんどん車を走らせた。十五分も走ったであろうか、交番が見えたので車を止めて、夕張が聞きに入り、暫くして戻ってきた夕張は、「行きすぎらしいです……」と、今来た道を引き返す。

「アッそうだ、小谷田とか云ったな……」夕張はスットン狂な声をだす。平田篤胤全集にたしか「勝五郎、父小谷田氏云々、と書かれてあったっけ」と云ってるうちに東中野の交番に着いてしまった。

交渉係は常に夕張で、交番から戻ってきて「交番の脇の細道を奥へ入った所に一番古いと云われている小谷田さんの家があるから、そこへ行けば分る」とのことだった。

車がやっと通れる細道を行くとT字型になった道の突当りに門構えの立派な屋敷があり、表札を見ると小谷田と書かれてあった。

玄関へ入って当家の方らしい人に、今までの経過を話したところ、「私はその方面の趣味はないし、また信じられない。この奥にそんな話をするおばあさんがいるからそちらへ行ったら」と誠に素気ない返事であった。

這々の態で車に戻りT字型の道を左に曲ると、道はますます細く登坂となり両側の木の枝が車の窓を敲く、木の枝のトンネルを抜けると左側は一面の田圃で、坂を登りきった所は、小谷田家の庭になっていた。家の裏側は山で、庭の前面は畠と田圃で、田圃は先へ行くにしたがって末広がりに一段々々下っている。畠と田圃との境に一本の畦道があり、その奥に一軒のボロ家が立っている。ボロ家の前面は、約二百坪はゆうにある空地で、井戸らしきものも見える。あとで知ったのだが此の空地が、源蔵、勝五郎親子の住んでいた屋敷跡で、井戸は今はかれて使用できない様子だった。

目を畠に向けると誰もいないと思っていた畠に一人の老婆が立っていた。我々が手を振ったり声を張り上げても、キョトンとした顔をして一向に我々の存在を認めてくれない。仕方がないので母屋の方へ歩きかけたとき、体格のガッチリした男の人がでて来た。当家の御主人小谷田重男さんであった。

源蔵一家の屋敷跡

交渉係の夕張が今までの経過を話したところ、源蔵、勝五郎の血筋の人であることが確認され、全員ホッとした気持になる。

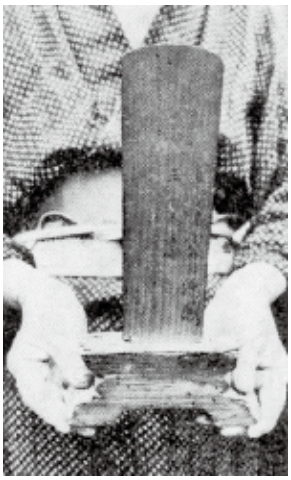
早速、見せてもらった位牌の表には、

直指単伝信士、安政二年七月二十三日
先祖代々諸精霊
生室妙光信女、天保十四年五月十九日

と読まれ、裏面には、

直　俗名　小谷田源蔵
生　同　人　妻

とあり、早速庭に出て、おばあさんと、位牌の写真を撮る。



勝五郎両親の位牌

「勝五郎さんの位牌は」と聞くと、

「勝チャンや、兄弟達のは無いんです。何故残っていないのか、私には分りません。源蔵さんの位牌しか残っていません」

「それでは、お墓を見せていただけませんか」

「ご案内しましょう……皮靴では行かれませんから」

と、我々全員にゴム長靴を貸して下さった。ゴム長靴に穿きかえるのを待って、重男氏を先頭に我々も続いて裏山に入って行った。

小谷田家の墓地

少し進むと道らしい道は無くなり、草の背が我々より高くのびていて草を掻き分けながら前を歩く人の背中を見失わないように注意しながら山道を登る。草の背が短くなり視界が広がり、あたりの景色が見えだすと、見渡すかぎり畠で、先頭を行く小谷田さんが、左に曲ると再び草の中に姿は一つ一つ消えていった。

「左の足元に注意して下さい」

の声を聞きながら草を分けて下を見てドッキとした。左側は崖であった。崖端を暫く進むと草も短かくなり、山の中腹へ着いた。急斜面を木に手をかけて登った所に、山の中腹を整地した様な感じのする三十坪ほどの墓地があった。山側に沿って安置された墓は木々におおわれて日光は全然当りそうにもない。墓は七基数えられ、墓石の区別は、小谷田家の当主にも判然としなかったが一応全部写真に収めた。

小谷田家の墓地

「勝五郎さんの墓は」と聞くと、

「勝ちゃんは分家したので、もっと奥の墓地にある」と云って、今来た道を戻り、奥の山に向って歩いた。

「ここが勝ちゃん達の墓地です」

着いて見ると墓地らしくない山裾の傾斜地に、やや大きな墓地を中心にして五つ程の墓石が並んでいた。

勝五郎の墓といわれた墓石には潭底潜竜居士とあり、これは勝五郎の戒名で、また没年明治二年十二月四日とあり、これも我々が調べて行ったその通りだった。重男氏が墓石を横にたおし、泥を

落すと、施主与衛門と読めた。

これで各自の分担作業を終りとし全員で冥福を祈り山をおりた。

一同疲れた身体を小谷田家の内玄関に休息する。疲れた身体に心づくしのお茶が美味しく、一休みしたところで話を続ける。おばあさん初め重男氏の話は、次から次へと飛び、方言も加わり話しの意味が理解しにくく何度も聞き返しながら二人の話をメモする。時計を見ると針は七時を過ぎている。夢中で過してきたので時間の経つのもすっかり忘れていたが、未だ小谷田家の菩提寺、永林寺へ行って過去帳を見せてもらう仕事が残っていたので、

「まだいいでしょう」

と、引止めるおばあさんの親切を後に次回の日を約束して、小谷田家をあとに急ぎ永林寺へ向ったが、生憎、住職が不在のため、これで引揚げる事とした。

多摩川を渡った頃から急に空腹を感じだす。朝食から数えて十四時間も食べず茶腹ですごしていたのだから腹の空くのも無理はなかった。

途中食事をすませ東京へ着いたのは十一時を過ぎていた。ごくろうさま、さようならの声をあとに家路についた。

（つづく）

勝五郎再生の実地調査 (四)

永林寺住職と由木郷土研究会

昭和四十三年七月三日、夕張は所用で永林寺の近くへ行った機会に同寺の住職を尋ねた。永林寺は格式の高い寺と聞いていただけに立派で大きな寺だった。

幸い住職の小倉英明氏は在宅で夕張を心よく迎えてくれ、話はスムーズにはこばれた。というのは小倉氏は「由木郷土研究会」の会員で、かつて橋本徹馬氏著「霊感と奇蹟の話」を読んだとき、文中に永林寺の檀家である小谷田家の祖先勝五郎の再生の話が載っているのを見て興味を感じ、寺の過去帳を調べて、勝五郎関係者一同の名前を発見し、「伝説勝五郎の再生についての一考察」という小文を由木郷土研究会に発表されていたからである。小倉氏の話は続き、

「私は小谷田家について調べ、間違いないことを知りました。墓地も東中野谷津入に確認することが出来たので、郷土研究会に発表したようなわけです」

と語り、由木郷土研究会に提出した刷物をくれた。これには小泉八雲が書いた記事や前記、橋本徹馬氏の著書の内容、更に小倉氏が永林寺の過去帳から発見した勝五郎とその父の法名や昭和三十九年、大丸の太田昌義氏が発見した藤蔵の墓碑の事などが記されており、今後の調査の、よい手掛りとなった。

確認行一

勝五郎再生に関する事蹟を後世の同好の志のために明確にしておくため、昭和四十三年九月十五日、午後一時、板谷、斉藤、夕張、伊藤の四人は協会を出発した。墓石を洗って拓本をとるため今日はバケツ、タワシ、雑布等も持参する。

「これからの仕事が大切なのです」

という板谷理事の一言に、にわかに心が引きしまるのを覚える。

三時三十分頃まづ日野市程久保七四二番地の勝手知った小宮稔氏宅に到着し、藤蔵（勝五郎が再生する前の名）一族の墓の確認をさせて貰いたい由を申込む。今回も生憎御主人は留守だったが、親切な奥さんは再び一行を小宮家の墓地まで案内してくれる。途中の農家で水を貰い墓地に着くと、

墓地に向う一行

夏を越して茂るにまかせた丈の高い雑草や垂れ下った大木の葉の繁みに被われて、墓地内はフラッシュをたかなければ写真もうつらぬほど暗い。

前回の調査で大体の事は判っていたが、木の葉からの雨だれのはねかえりが運ぶ泥で被われて、墓石の細い字は読みとれない。奥さんの許可を得

て板谷理事が先頭をきり、腰を屈めて懸命に墓石をタワシで洗い泥を流すと、判然と読み取ることが出来た。これは前記の太田昌義氏が記録の死亡月日と墓石に刻まれている死亡月日との一致から発見した藤蔵の墓である。二年目には勝五郎の墓を見つける事が出来、今また藤蔵の墓と云われている墓石を確認することが出来た。長い間この瞬間を待焦がれていたが、思っていた程の感激は湧いて来ず、むしろ淡淡たる心境だった。

藤蔵（勝五郎の前身）の墓

お墓が一応綺麗になったところで全員心静かに、藤五郎、藤蔵を始め、須崎家、小宮両家の御先祖の方々の冥福を祈る。一休して、打合せどうり二班に別れて作業にかかる。

板谷理事組は拓本作業、我々は写真の撮影にかかった。カメラのピントを合せようとしたところ、チクリと強烈な痛みを足に感じた。いるいる藪虻（ママ）の大軍、拓本どりで夢中になっていた、板谷理事組も悲鳴をあげた。この状態で作業を続けることは困難なので、一人が雑誌、ハンカチ等で藪虻を追払いその間に一人が手早く作業を進めることにした。

此の作戦は上々で一時はどうなるかと心配したが作業は順調にはかどり思ったほど時間はかからずに調査を終える事ができた。

墓石を確認する一同

作業が終ったとき、奥さんから「今日は九月十五日で祖父、鏡次郎の祥月命日なのです」と教えられた。〈九月十五日は父・総之丞の祥月命日〉

午前中に墓参りを済ませた事には一言もふれず、再び我々一行を墓地まで案内してくれた奥さんの親切はうれしかった。これから未だ小谷田家の墓地と、永林寺へ行って過去帳の調査する仕事が残っているので、親切な奥さんに厚く好意を謝し、小宮家をあとに、小谷田家へ向った。小谷田家へ着いた頃は五時を廻っており森の中は暗く作業は思うにまかせず、

「これ以上作業を進めても無駄です。次回にしましょう」という板谷理事の声に作業を中止して小谷田家の内玄間で休息する。

小谷田家を辞する時は、日も落ちて、山道を下る車のライトがひときは明るく見えた。

永林寺の玄関に立ち住職の在宅を知った時はうれしかった。

七月の中旬に夕張が一度尋ねてあったので、話はスムーズに進み、住職が調べられた、過去帳を早速見せて戴き、源蔵、勝五郎の記載されているページをカメラに写し撮った。

住職はなかなか話し上手で、永林寺の履歴、格式等、北条時代から徳川に天下が移り行く時代の永林寺の処遇、江戸城修改築に使用した木材は永林寺の山森の木を使用したとか、色々話がでて、ついつい長時間すごしてしまった。

住職に来客が見えたのを潮どきに、厚く礼をのべて永林寺をあとに一路東京に向った。

途中、府中で車を止めて、食堂に入りビールをあけながら調査の整理法、今後の問題等を話し合い、反省会、兼夕食となった。

天婦羅、うな重で満腹になった処で疲労と酔いも手伝ってか、目がしょぼついてくる。

「府中に来たのだから大国魂神社を参拝しなければ申し訳ない」と板谷理事のかけ声で神社に向う。

拝殿のかすかな灯をたよりに歩く我々四人の靴音だけが深閑とした境内にこだまする。参拝をすませて、再び車中の人となり今日の調査結果をみやげに東京へ着いたのは十二時近かかった。

確認行 二

前回の四十三年九月の調査で得た、資料を整理、検討してる間に六ケ月があっと云うまに過ぎてしまった。

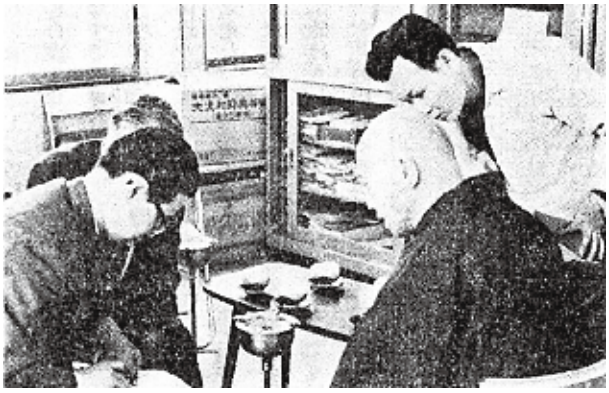
四十三年六月の調査で、藤蔵の「墓」は発見していたが色々な文献に残されてる記録の死亡年月日と墓石に刻まれている年月日が同一であると云う事だけで戒名の「頓吾〈悟〉童子」の出所については未確認の形で処理して来た。

そして何故未確認として来たかと云うと、勝五郎再生の資料を数多く集めた中に、藤蔵の戒名を書き残した文献が一件もなかったからである。

そこで、更に調査を続けるため昭和四十四年四月二十九日板谷、夕張、斉藤、伊藤の計四名は、朝七時協会を出発した。

通いなれ勝手知った甲州街道は早朝のせいか行き交う車の数も少なく快適に車は流れて行く。予定時間よりだいぶ早く高幡不動金剛寺に着く。

早速、寺の事ム所で係の僧に取次いでもらう。三年前の事を記憶していた坊さんは医王寺時代の壇〈檀〉家の過去帳を見せてくれたが目的の物が見当らずがっかりしてしまった。しかし、我々の熱意に動かされた別の僧侶が奥の部屋から、数冊の過去帳を持ってきてくれたうちの一冊に「明治三十九年八月、医王寺を金剛寺に合寺時に当り、医王寺壇〈檀〉家兼各自所蔵の過去帳に因り戒名を調査し操、位碑及本過去帳を作った」と書かれた表紙の綺麗な過去帳のページをめくって行ったところ、「秋覚智空信士文化三年八月小宮藤五郎」とあり、また命日四日と記されているページを見ると「頓吾〈悟〉童子文化七年十二月小宮半四郎子」と書き込まれてあるのを発見した。記録には二月四日とあるのを過去帳には十二月四日となっているが、藤蔵（勝五郎の再生前の名）の戒名が「頓吾〈悟〉童子」である事はこれで確認されたのである。



金剛寺における過去帳の調査

藤蔵の戒名（右端）

それからは関を切ったように次々、資料との照合が判然と進行した。坊さんの許可を得て過去帳の複写にかかったが、枚数が以外に多く思わぬ時間を使い予定の調査時間を超過してしまった。複写の終ったところで坊さんを囲んで程久保、三沢村の話を聞き、最後に医王寺のあった所は現在ガソリンスタンドになっている事等を教えてもらい金剛寺を出た。時計を見たら十二時を過ぎていたので近くの食堂に入り昼食を摂りながら午後の行動予定を話しあう。

多摩動物園線のガード下を通って暫く行くと左側に「共同石油」のガソリンスタンドが見えた。車を止めてスタンドの人に聞くと此処に昔、医王寺のあった事とガソリンスタンドの裏側に墓地があった事を丁寧に説明してくれた。此の間に斉藤氏はガソリンスタンドの全景写真を撮った。時間の都合上調査時間を二十分で切上げ小宮家へ急いだ。

医王寺跡のガソリンスタンド

集めた資料を二、三左記にあげてみる。

一、平田篤胤全集第三巻「勝五郎再生記聞」文中の藤蔵について

中根守右衛門殿知行所
武州多摩郡小宮領程窪村百姓
実父藤五郎継父半四郎
藤蔵

文化二乙丑年出生す。同七庚午二月疱瘡を病て。四日四時頃死去す。当時六才なり。葬地は同村の山なり。菩提所は同領三沢村醫王寺なり。去る文政五年壬午年十三回忌なり。

とあり、出生、死亡年月日については記載されているが戒名はどこにも見あたらない。

二、小泉八雲集下巻「勝五郎の転生」の文中にも藤蔵の戒名を記したケ所は無く平田篤胤全集と似たり寄ったりであるし確かめた上で判然りさせるべきだと云ふ結論に達したので、未確認として、再度調査する事になった。

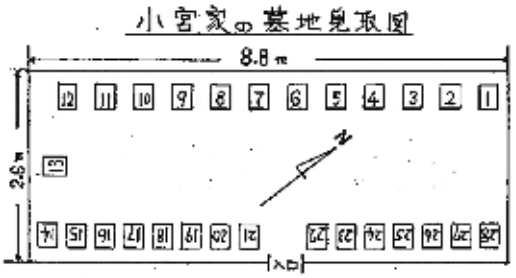
勝五郎再生の実地調査㈤

墓地の現状

小宮藤蔵（前地の勝五郎の名）の戒名も金剛寺の過去帖で確認でき、その菩提寺の医王寺のあった場所も確認できたので、再び勝手知った小宮家の墓地に向う。調査は今日で最後にするつもりなのである。

小宮家の墓地

墓地は木でまわりを被われていたので小さく見えたが巻尺で計ってみたら以外に広く、奥行二・六米、横幅八・八米あった。調べた二十八の基（墓）の内五つは風化破損がきびしく読みとる事ができなかったが、あとの分はその後の調べで全部判明した。藤蔵の墓は図の3番で右肩が欠けている。（前回の写真参照）調査の終ったのは三時を廻っていただろうか小宮家に調査の終った礼をのべ急ぎ小谷田家へ向う。



小宮家の墓地見取図、14が藤五郎、3が藤蔵の墓

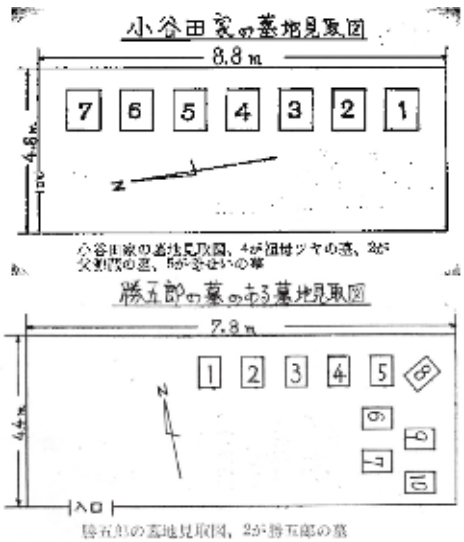
小谷田家の墓地

小谷田家の墓地は全部で三カ所あり、一カ所は勝五郎の両親、祖母等の墓、もう一カ所は勝五郎その他の墓、残りの一カ所は現在の小谷田氏の内墓地になっている。

勝五郎の両親、祖母の墓地は、横八・八米、縦四・六米で前にも書いたが山の中腹を平にしたようなところにある。

墓石は全部で七つ、一列横体に墓と墓の間隔を広びろと取り整然と据てある。

勝五郎の父源蔵の墓は図2番、祖母ツヤの墓は図4番である。



勝五郎の墓地見取図、2が勝五郎の墓

勝五郎の墓地

勝五郎の墓地は此れより約三百米ほど奥へ入った右側の山麓を四米ぐらい登った所を、横七・八米、縦四・四米、を平にし墓地にしている。

墓石は「形に並べてあり墓石の裏は、土がくずれて緩やかな傾斜になっているが、よく見ると二段に墓石を並べた形跡が残っている。

ここでも墓石の泥を丁寧に落とし一字も見落しのないよう丹念に調査した。調査して行くうちに我々の下調べの中にもなかった名前、戒名等がでてきたが、後日全部判明した。

勝五郎の墓は図2番である。

調査が終ってから小谷田家の内玄関でお茶を飲みながら一休みする。我々が、勝五郎再生の調査に取組でから小谷田家を尋ねたのは、今日で三度目になる。

回を重ねるごとにおばあさんの口から新しい話を聞かされ走り廻ったが、今日もまた面白い話がとびだすのではないかとおばあさんの話を聞くうち、結婚した勝五郎は実家をはなれた街道の傍に世帯を持ち、その家が今もその藁葺屋根の家があるはず、また姉のフサか妹のツネか聞き漏らしたが、嫁つぎ先の子孫が現在「**くに店**」と云って酒屋を経営している事等の話がとびだし挨拶もそこそこに大急ぎ小谷田家をあとに藁葺屋根の家を捜しに車へ飛び乗った。

藁葺屋根の家

山道を車で下り街道へ出て道を左に走りバス停東中野から車のスピードを落し、左側を注意しながら大きな梅の木のある藁葺屋根の家を捜す。

日も落ちて辺りが薄暗くなってきた、駄目かなと思ったとき、ぼろぼろになり今にも潰れそうな藁葺屋根の家を見つけた。全員車を降りて近よる。

街道から田圃を横切りどぶ川を渡った所に草の生えるにまかせた約百坪ほどの敷地の中に見る影もないほど朽ち果てて立っている。

中を覗くと埃と塵の山、手の付けようもないくらい荒れ放題に荒れ、屋根はペンペン草がのびていた。雨戸は腐れ落ち壁土は剥れ木舞だけが細々としがみついていた。入口に誰が立て掛けたのか一枚のガラス戸があわれさを一層引立て冷たく光っていた。余りのひどさに茫然として顔を見合せていたが、我に返り、調査への目が醒め、はたして勝五郎の屋敷跡なのか、現在は誰の持ち物なのかと、少し離れた所にプレハブの住宅が目に入ったので、夕張が聞きにいった。

「家主さんならわかるでしょう」

と百米程はなれた家主の峰岸宅をお知〈教〉えてくれた。

確認行

案内を乞い、挨拶に出られたもの静な立派な紳士に今までの経過をざっと話したところ

「おじいさんなら良く知っております、今風呂に入っておりますので暫くお休み下さい」

と我々一行を親切にもてなしてくれた。

休んでいる間に小学校の社会科の本に勝五郎再生の話が記載されているのを見せてくれ驚いた。板谷理事ともの静かな紳士との対話中に静かな紳士は御主人の峰岸敬次郎さんで、日野市第六小学校の校長さんであることがわかり、あらためて挨拶をかわした。十五分も過ぎたであろうか、風呂から上ったおじいさんが出て来た。名前は浦吉さん、年は八十六歳との事、恰幅がよく顔の色艶もよく元気そうで、とても歳には見えなかった。

「親から聞いた話だが」と前置して

『あれは勝五郎さんの屋敷跡ですよ。様子は昔と違うようだが、屋敷の中は広いんですよ。十畳に八畳、六畳が二室かな、台所は広くここで目竜（目籠）や菓子等を作って横浜まで売りに行ったそうだ。それに耳が遠くなってからは「**つんぼ勝**」などと云われていたそうだ』と歯切れのよい言葉でポンポンと語ってくれた。

やはり勝五郎の屋敷跡であったかと、今見てきたばかりの屋敷を目で追いやりながら又の機会を約束し、厚く礼を述べて峰岸家を後に酒屋さんを捜しに車を走らせた。

藁葺屋根の家

く に 店

東中野のバス停から数えて三つ目のバス停「和田」の斜め前の右側の道を曲って五百米も走ったT字路の突当りに、酒屋と乾物屋を合せたような店が目に入った。店より二十米前で車を降りて夕張が

「くに店さんですか」

と聞くと

「そうです何か御用で」
と若い男性の声が奥から返ってきた。
峰岸宅と同じような経過を話すと、始めは警戒心と我々が何者であるか判断に途惑とっているようであった。急に見も知らずの人間達に先祖の話を聞かされ信じろと云う方が無理かも知れない。
丁度、来合せていた店主の姉らしい婦人も加わり話が進むにつれて、我々の計画を理解し始め、
「自分達身内の者でさえ先祖の事をよく知な〈ら〉ないのに他人様の方がよく知っているなんて恥かしい、ましてそんな立派な人が先祖にいたとはねー」
と以外な発見にビックリ、
「そう云えばこれが勝さんからの手紙だと云うのを見たような気〈記〉憶がある」
「先祖からの古い寺は遠いので四ツ谷の寺へ先祖の墓を移したので詳しい事は寺へ行って調べれば分るのではないか」
と大乗気。
話の内容をよく聞くと曽祖母は勝五郎の姉フサの事らしく「くに店」の現在の人達は勝五郎の姉のフサの直系の子孫のように思えた。
店先で客を相手にしながらの話なので細かい点までは話し合えず、まだ調べなければならない問題は残されていたが、日もトップリと暮れ、時間もだいぶ遅いので、今回は一応の足掛りがついたことで満足し、次回の機会を約束して酒屋さんをあとに一路東京へ向って車を走らせた。
勝五郎再生の実地調査に入ってから三年の年月が流れたが調査の回数が重なるにつれて記録にない新事実が判り、調査の回数は積み重ねられた。
今回の調査で一応のピリオドを打つ予定ではいたがこの調子でいくとあと二、二度は調査の足を運ぶ事になるのではないかと思はれる。
藤蔵と勝五郎（再生した藤蔵）に直接関係ある者の戒名と墓の所在場所は次の通りである。

○ 藤蔵の墓　小宮家の墓地の③（日野市程久保七四二、小宮稔氏宅と多摩自然動（物）園への広い道を隔てた岡の上にある）
頓悟童子　文化7庚午2月4日亡

○ 藤蔵の実父須崎藤五郎の墓、同⑭
秋覚智空信士　文化3丙寅8月27日亡

○ 藤蔵の義父半四郎および母しずの墓、同㉓
智空即證信士　天保9戊戌4月19日亡
妙心雪躰信女　天保12辛丑12月20日亡

○ 藤蔵の妹ブンとその聟元五郎の墓、同㉔
真理道規信士　明治9丙子11月22日亡
花散妙阿信女　元治元甲子3月29日亡
なお小宮家の当主小宮稔氏はブンの娘ハマの曽孫（孫）に当る。

○ 勝五郎の墓、八王子市東中野一一九六小谷田重男氏（小谷田家の本家の子孫）宅の裏山への道路三〇〇米先右へ登る勝五郎の墓のある墓地の②
潭底潜竜居士　明治2巳（己）巳12月4日亡

○ 勝五郎の祖父母、小谷田勘蔵ツヤの墓
小谷田家の墓④
本明慈性禅定門　文政4辛巳4月27日
大法妙憧禅定尼　天保5甲午9月12日

○ 勝五郎の父小谷田源蔵の墓同②
直（眞）指単伝信士
文政（安政）2乙卯7月23日亡

○ 勝五郎の母せいの墓、同⑤
玉（眞玉）室妙光信女　天保14癸卯5月19日亡

（注記）小谷田源蔵家墓地の墓誌によれば、
源　蔵…眞指単伝信士　安政二年七月二十三日
※文政二年は己卯年であり間違い。
戒名については、永林寺前住職小倉英明氏著書「伝説勝五郎の再生についての一考察」には心霊研究の記載通り『直指単伝信士』と記されている。
源蔵妻…眞玉室妙光信女　天保十四年五月十九日

（この回おわり）

（再録③）

蘇（よみがえ）った勝五郎

―他者に生まれ替った男―

中嶋繁雄（歴史研究家）

（『歴史と旅』昭和五十年六月号）

驚愕の事実

この記録を綴るに当たって筆者が最も懼れるのは、この記録を超能力（オカルト）現象と同一視されはしないかということである。

小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）もその「勝五郎の転生」の冒頭で「これから書き下す事柄は作り物語ではない」と断わっている。

妖異譚、伝説の類と一線を画するため、いささかの文飾、フィクションをも避けて、事実だけを述べていきたいとおもう。

その事件は、江戸時代の末期、武蔵野の一角で起こっている。

武蔵国多摩郡中野村――いまの東京都八王子市東中野地区である。

勝五郎の事件が公式の文書に登場するのは文政六年（一八二三）四月十九日である。

中野村に知行所を持つ旗本多門（おかど）伝八郎（御書院番）が、御書院番頭佐藤美濃守へ提出した文書である。その書状によって事件の概要を述べると――。

中野村の百姓源蔵の忰（せがれ）勝五郎が、去年八歳の秋から奇異なことを物語りはじめたのである。それは届書によれば、

「前世、（勝五郎は）父は同国同郡小宮領程窪村百姓久兵衛（後に藤五郎に改名）と申す者の忰にて、藤蔵と申し、二歳の節、（父の）久兵衛儀は病死仕り候間、母の後家入り（養夫とり）にて半四郎と申す者の（が）父に相成居り候処、右藤蔵儀は六歳の時、疱瘡（ほうそう）にて病死仕り、それより右の源蔵方え生替り候」

※注／原文意訳および（　）内は筆者

つまり、久兵衛の子である藤蔵が死んで、源蔵の子勝五郎として生まれ替ったという、不思議な事実である。

しかも、調べてみると、勝五郎の告げた事実は、たとえば勝五郎自身は、見たこともない前世の父母の面体、住居などが、勝五郎が咄すことと全く符合するなど、すべて真実であることが判明したのである。

やがて、勝五郎と半四郎一家が対面という劇的な情景（シーン）を展開するのだが、そこで藤蔵の生母のせい〈しづ〉は、勝五郎を見て吃驚（びっくり）してしまう。去年十三回忌をすませたばかりの我が子藤蔵に生き写しなのである。

近村一帯に及ぶ大変な評判になって、勝五郎の顔を一目見たいという見物人で大騒ぎになってしまった。

こう評判になっては、地頭の多門伝八郎も黙殺するわけにはいかず、文政六年四月五日に、根津七軒町の自分の屋敷へ源蔵親子を呼び出している。源蔵・勝五郎親子は、四月五日から二十六日まで滞在したというから、伝八郎の取調べは相当念が入っている。

伝八郎のそのときの心情は複雑なものがあったと推察される。幕府の官僚の一人である自分は、こんな事実を信じるわけにはいかないのだが、調べれば調べるほどその信憑性に疑問が無くなってくるのである。届書の最後の条（くだり）がよくその間のジレンマを説明している。

「……難取用筋（とりもちいぶたき）にはござ候えども、御内々にこの段御耳いれ申しあげ候」

真相の究明

――さて、実際にそんなことが起こったのだろうか。現地へ行って、この眼でこの耳で確かめたかった。

筆者はまず、勝五郎の最初の生、つまり藤蔵として育った程窪村を訪ねてみることにした。現在の日野市程久保である。

最初に筆者が訪ねたのは、郷土史家下田九一氏である。

「私の小さい頃は、勝五郎さんの話は誰もが知ってましたよ」

下田氏は現在七十歳、少年期といえば大正の初めである。氏の話ははなはだヴィヴィッド（真に迫った）な雰囲気を伝える。

「当時はまだまだ江戸時代の名残りが遺ってましたよ。丁髷（ちょんまげ）の人が村に三人もいました。食物もヒキワリ飯で、モノ日（休日）にしか白い御飯は食えなかったもんです。服装も家織（うちおり）（自家の手織）の和服姿で江戸時代とさして変らん生活でした。だから、勝五郎さんのことは、身近に感じられた

もんです」

下田氏は、勝五郎の再生については並々ならぬ情熱を注いでおられる。

「――私は、神田の古本屋でこれを見つけたときは、非常な興奮を覚えましてねえ」

下田氏は奥から一冊の写本を持ち出してきて見せた。草書体で書かれた和綴の本だ。島田蕃根蔵本と自署してある。平田篤胤の弟子の一人だという。

勝五郎再生についての写本は、江戸時代当時、相当流布されたようである。下田氏によれば、最初にこれを記録にのせたのは、因州若桜藩主松平（池田）縫殿頭定常（鳥取三十二万石池田家の支藩）で、多門伝八郎よりも早く、文政六年三月二十二日には自身で現地へ足を運んで調査している。これが小泉八雲の「勝五郎の転生」の元本となっている。

他に著名なのは、肥前平戸藩主松浦静山（清）著わすところの『甲子夜話』所収の「勝五郎再生記抄」、それに江戸時代屈指の国学者平田篤胤も「勝五郎再生記聞」を記録している。これは後に仙洞御所（光格上皇）の叡覧に供し宮廷でも大評判になっている。

下田九一氏に教えられて次に訪ねたのは、同じ在所の小宮稔氏（六五）の家であった。藤蔵（勝五郎の前世）の生家須崎家の子孫に当たるという。屋敷も、文政六年当時と全く同じ場所に建っているというのである。

ここで筆者は、当主稔氏の口から思いがけない事実を聴くことができた。藤蔵の墓が現存しているというのだ。筆者は急いでその所在を訊いた。

「高幡不動の私共の墓地にあるんです」

昭和四十八年の暮までは、この家の前の台という丘陵地にあったのである。半ば土に埋もれて苔むしていたのを、洗い落して判明したという。

筆者はいったん高幡不動へ戻って、本堂の裏の墓地へ登った。そして隅っこにそれを発見した。高さ四十㌢ばかりの、うっかりすると見落してしまいそうな小さな墓石である。

その碑面には「文化庚午天　頓悟童子位二月四日　半四良建之」と刻まれているのがはっきりと判った。

建立者の半四良は、もちろん先にかかげた多門伝八郎の届書に出てくる藤蔵の継父半四郎である。程久保に戻ると、小宮家の前の六地蔵を見た。当時からの遺物で、藤蔵も朝夕手を合わせたお地蔵さんだ。よく見ると、なかに実父藤五郎の刻銘のあるのが見つかった。

ここで筆者は、いま一つの面から藤蔵（勝五郎）の実在を追求してみることにした。

それは、戸籍である。

小宮家の系譜を遡ってみると、次のように確かに藤蔵の名が載っているのが判った。

須崎藤五郎　藤蔵　　元五郎養子
　後妻しづ―　彦次郎　―　小宮鏡治郎―
入婿半四郎　　賀元五郎（この時より小宮姓に改む）
鏡治郎長男
小宮総之丞　―　小宮稔

勝五郎談「死後の世界」

小宮家を辞去すると、筆者は足を急がせた。早く山を越えた向うの中野村（八王子市東中野）へ行きたかった。

筆者の脳裡に一つの刻印を打った下田九一氏の言葉が蘇ってくる。

「勝五郎さんは、明治二年に五十四歳で亡くなっているんですよ」

そして次にいった言葉が衝撃だった。

「再生した勝五郎が棲んだ家の跡があるんです。そこに、明治の初めに生まれたお婆さんがいるんです。一番近い親戚で、勝五郎のことを伝える唯一の人なんです」

いま勝五郎はカビ臭いなかから抜け出し、生きて動き出そうとしている―。

筆者は、かつて勝五郎が中野村から程窪村への往き来に通った道を歩きはじめた。バス道路から丘陵地へ入った全く人影の絶えた山道である。勝五郎が歩いた当時とほとんど変わっていないのではないだろうか。

その深閑とした山道を辿っていると、筆者の脳裡に、「勝五郎再生記聞」（平田篤胤述）の文章がナマナマしく蘇ってくる。

勝五郎が語るみずからの死んだときの情景だ。

「息の絶る時は何の苦しみも無りしが、其の後しばしがほど苦しかりき。其後はいささかも苦しき事もあらず。さて体を桶の中へつよく押入るるとき飛出て傍にをり。山へ葬りにもて行ときは、白く覆たる龕（仏を安置する小さな箱）の上に乗

りて行たり。さて其の桶を穴へおとし入れたるとき、其の音のひびきたること、心にこたへて今もよく覚えたり」

―死後の世界へ入った勝五郎は、「白髪を長く打垂れて、黒き衣服を着たる翁」に伴われて、花々が咲きほこる綺麗な芝原で遊ぶ。やがて、何時の間にか我が家へ来ている。お経を読む声が聴える。仏壇に供えた食物の香気が何ともいえず旨かったのを覚えている。

…三年経った。老人と勝五郎は、中野村の源蔵の家の傍を通り過ぎようとしていた。老人はふと立ち止まり、源蔵の家を指差して、

「あれなる家に入て生れよ」という。そこで老人と別れた。勝五郎は庭の柿の木の下に三日の間佇んでなかを窺っていた。

窓の節穴から家のなかへ入ると、源蔵夫婦が閨で何やら話し合っているのが耳に入ってきた。妻のせい（転生後の勝五郎の母）を江戸へ奉公に出す話だ。

こうして勝五郎は、三日ばかり夫婦の動静を仔細に窺って母親（せい）の胎内へ入ったのである。

勝五郎の面影

――羊腸とくねる山路を行くこと一時間半ようやく前方に八王子市東中野の聚落が見えてきた。旧谷津入の界隈に入ると、東京の郊外とはおもえぬほどの静けさ、まさに山奥の里といった感が深い。前述の山道と同じく、勝五郎生存当時から村の姿は変化していないのではないかとおもわれる。

鉤の手の往還を少し丘陵地の方へ爪先上りに登ると、小谷田重男さんの家にぶつかる。

この家と向かい合った下手の畠が勝五郎の屋敷跡である。いま小谷田さんの庭先からこれを望むと、廃屋が一軒と柿の古木が一本ぽつんと立っている。周囲から孤立した廃墟の感じが、かえってそこに江戸時代の面影を濃厚にダブらせているようだ。

この小谷田重男氏の家は、勝五郎とははなはだ因縁が深い。最も近い親戚といっていいくらいである。すなわち、同家に保存されている明治の戸籍抄本写によると、

東中野千百九拾九番地

平民　前戸主　小谷田源蔵

明治参年四月拾五日　小谷田重助父他家再興す

亡父儀兵衛四男　小谷田重蔵

天保元年拾月拾日生

このように、源蔵（勝五郎の父）家を再興した重蔵の子が重助で、その四男が瀏、そしてその子息が現当主重男氏なのである。源蔵家の菩提も同家が守り伝えている。

ここで筆者は、ついに今年八十三歳になる小谷田たまさん（瀏氏夫人）に会うことができたのである。

聴きとりにくい言葉を耳にしていると、勝五郎が生きていて、あの廃屋から野良着姿で出て来るような錯覚に襲われる。

――たまさんは勝五郎の生活ぶりから語りはじめた。

「勝っつぁんは工面が良かったでよう、土蔵を建てたほどだ。目笊の内職で金をためたようだで……」

これについては多門文書も「籠細工上手にて…」と触れている。勝五郎は、自分で編んで直接江戸市中を売り歩いている。

商売熱心で、しかも節約家の半面もあった。客に虫の入ったヒネ米を出すこともあったという。

たまさんの実家の祖父細谷半七さんは、勝五郎と一緒に田畑へよく行った。勝っつぁんが馬の鼻取りをし、祖父さんが鋤を持つというふうに、よくコンビを組んだものだ。

勝五郎の再生についてもたまさんは、父親から色々と聴かされている。

その一つにこんな話がある。

勝五郎は、前世の藤蔵時代に桑畑の木の株の上に愛用の小刀を忘れたことを憶い出したという。

勝五郎の二人の父親源蔵と半四郎は、さっそく実地検分に出かけた。教えられた通りの道を辿って、件の場所へ行って見ると、二人は自分の眼を疑った。

木の株の上にちゃんと小刀があったのだ。しかも、勝五郎が置いたことを証拠だてるように赤茶色に錆ついていたのである。

ところで、子供の頃の勝五郎ばかり世に喧伝されて、大人になってからのことは知られていない。

いま、その空白の部分をたまさんの話によって埋めてみよう。

勝五郎は大人になると源蔵家から分家したのであるが、その後は養子与右衛門が継いでいる。し

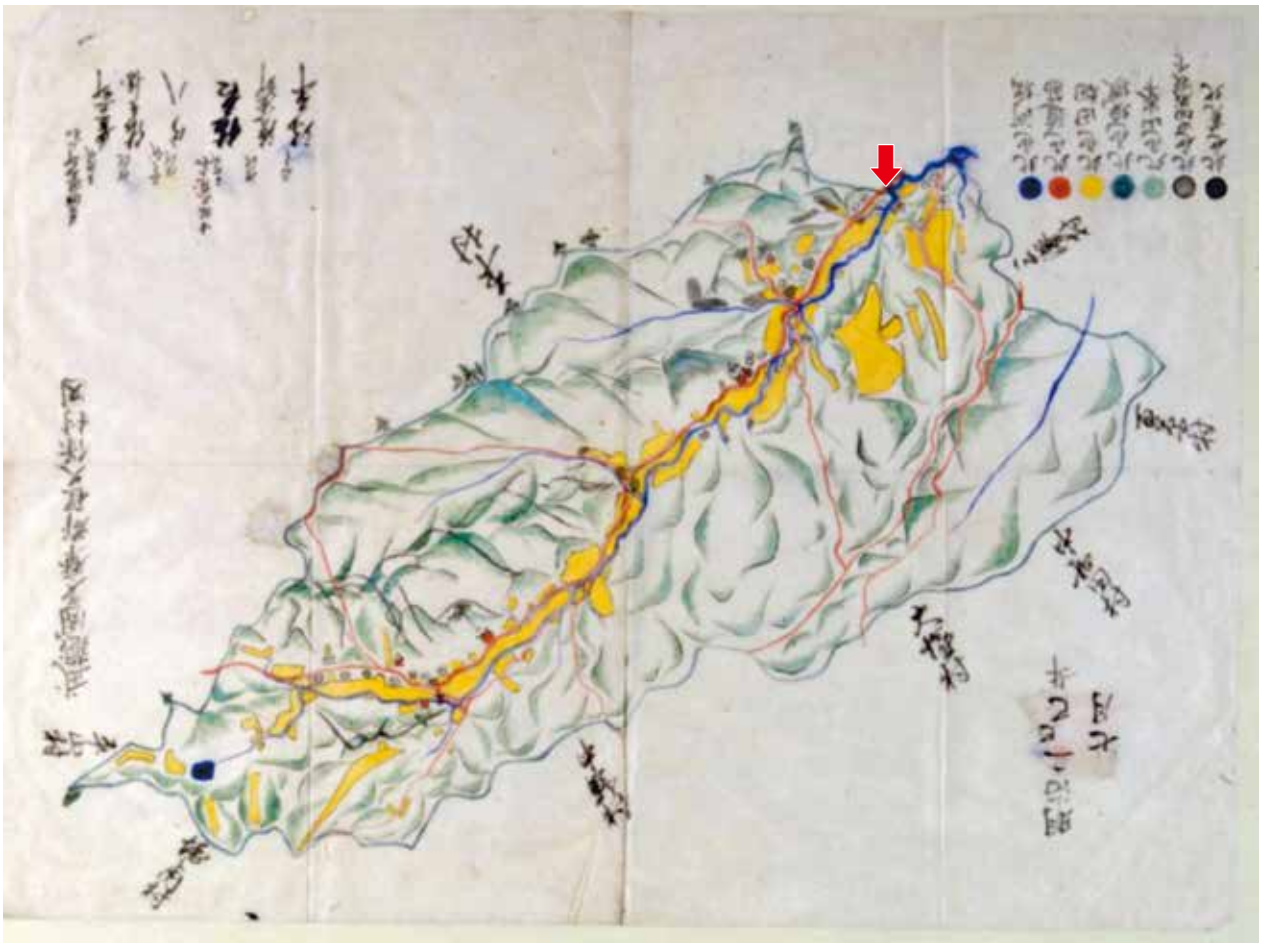
かしこれは横浜へ出て行方知れずになってしまった。そのため、勝五郎の家屋敷は買養子として入った小谷田権六氏が譲りうけている。現在その子孫の松之助氏（五二）が、もとの場所から六百メートルほど離れた大栗川に近い所に家を構えている。昭和三十年代までは勝五郎の家屋の柱や梁、鴨居、建具造作が使われていたという。

筆者は、小谷田たまさんの話を聴き終えると、裏山の小谷田家の墓地へ登ってみた。多摩丘陵の尾根が伸びた裾であった。雑木林は翳って昼なお暗い。ひっそりと山蔭に蹲まるように建っていた勝五郎の墓石の表面には、

帰元潭底潜竜居士位

と刻まれており、向かって右横面に明治二己巳年十二月四日、台石向かって左側に施主与右衛門と彫ってあるのが辛うじて読めた。

――山を降りはじめた時、筆者は何故か、道の向こうから勝五郎が馬の口を取りながら歩いて来るような気がしてならなかった。（了）



程久保村絵図（明治2年　日野市郷土資料館　井上恒正コレクション　北を上に配置）
絵図右上の村境の家（⬇）が藤蔵の生家

資料編

・勝五郎の生まれ変わりに関して記録された主要な資料を掲載した。
・解読は、「花月日記」・『甲子夜話』・『藤岡屋日記』を除き、調査団で行なった。
・二行割は〔　〕で示した。合字ゟは「より」とした。
・資料により適宜、句読点を補った。
・（　）は、編者の注記である。

1　武州多摩郡中野村勝五郎再生前生話

多門傳八郎知行所
武州多摩郡柚木領中野村　小名　谷津入
百姓　源蔵次男
文化十二乙亥年十月十日出生　勝五郎
当未　九才
父　苗字小谷田　源　蔵
同　四十九才
貧窮ニ付籠細工いたし江戸ニ商ウ、宿所　馬喰町
相模屋喜兵衛方
母　やい
源蔵（妻せい）父　尾州家士村田吉太郎尾州ニて
御弓役相勤候、やい十二才之時本多大之進殿ニ奉
公スト云、やい十三才之時故有て浪人ト成ル、寛
政四年四月二十七日七十五ニ而病死、墓所禅宗ゑ
いれん寺
祖母　つや
若年之時　松平隠岐守殿ニ奉公ス
姉　ふさ
当未十五才
兄　乙次郎
同　十四才
妹　つね
同　四才
中根宇右衛門知行所
武州多摩郡小宮領程窪村　実父藤五郎死ス
百姓半四郎忰　六才ニて死　藤　蔵
文化二乙丑年生、同七庚午年二月四日昼四時頃死
去、病症疱瘡、葬地同村之山、菩提所同領三沢村
禅宗医王寺と云、文政五午年十三回忌也
藤蔵養父苗字須崎
半四郎
当未五十才
藤蔵　母　しつ
同　四十九才
藤蔵実父　藤五郎　死
初名久兵衛といふ、文化五戊年藤蔵四才之時四十
八才ニて死去、此跡へ半四郎入夫ニ候由、尤文政
三辰年十三回忌也
藤蔵胤替り兄弟
半四郎倅　両人
同人娘　両人

去ル午年十一月の頃　勝五郎　姉ふさと　たんぼに
て遊ひをるが　勝五郎姉に向ひ　あねさんハ　どこ
から此家へ　生れて来たと　問ふ　どふして生れて
来た先が知れるものかと　姉いへば　勝五郎あやし
けなる躰にて　そんならおまへハ　生れぬ先の事ハ
知らぬか　と問ふ　姉　手まへハ　知て居るかと　い
へば　勝五郎　知てゐるのさ　おらあ　あの程久保の
久兵衛さんの子で　藤蔵と　いったヨ　姉　そんなら
おとつさん　と　おつかさんに　いわふと　いへば
勝五郎泣出し　おとつさんと　おつかさんに　いつ
ちやアわるい　姉　そんならいふまい　わるい事を
すると　いつつけるそ　と迚　其後兄弟喧嘩などす
れバ　かの事をいわふといふ　直にやめる事度々な
れバ　両親是を聞つけ　いかなる悪事を成せしやと
案事　娘ふさに　責とひけれバ　房　止事を得ず　あ
りのまゝに告るに　源蔵夫婦　つやも甚不審に　おも
もひ　勝五郎をすかして　色々と　せめ尋ねけれバ
そんならいはふ迚　おらア　程窪の久兵衛さんの子
で　おつかさんの名ハ　おしつさんといつた　おら
が五ツの時　久兵衛さんハ　死んで　其跡に半四郎
さんと云が来て　おれを　かあひがつてくれたが
おらア　其あくる年六ツで　疱瘡で死で　夫から三
年めに　おつかさんの腹に　はいつて　それから　生
れたと云ふ　両親祖母　是を聞て　大に驚き　どふぞ
して程窪の半四郎といふ者を尋て見んと思へども
身すごしに紛れ其儘に　打捨置候に母　やいは　四
ツなる娘を常に乳を飲するゆへ　勝五郎ハ祖母つ
やにだかれて毎夜〳〵物語りするゆへ　勝五郎が
機嫌を見合セその死セし時の事を尋問に　勝五郎
四ツ位迄ハよく覚て居たが段々と忘れたが疱瘡で
死んで壷に入られ山に葬られた時　穴を掘て壷を

落し候時 とんといつた音は能覚てゐる それから内に帰つて 机の上にとまつていたら なんともしれぬじいさまのよふな人が来てつれて行と空を飛であるいて ひるも夜もなく いつも日暮方のよふだつけ 寒くもひだるくもなかつた いくら遠くにいつても 内で念仏を唱へる声と 何か話す声が聞へた 内で あつたい牡丹餅を供ると 鼻から烟を飲やうであつたから おばあさん仏様には あつたい物をすへるが いゝよ そして僧様に ものをやらしやいよ 是が いつちいゝ事だよ 夫からそのじい様がつれて 此内の向ふの路を通ると思ふたが じい様が もふ死でから三年立たから あの向ふの家に生れろ 我がばあさまになる人は気のいゝばア様だから あそこにやどれといつて じひ様ハ 先にいつてしまつたから おらあ此家に はひらふと思ふて 門口に居たら 内に何か おつかさんが家貧乏で おつかさんが 江戸へ奉公に出ずハなるまいといふ 其相談があつたから マア 這入まいと庭に 三日止まつて居た 三日めに江戸へ出る相談が やんだから夫から 其夜雨戸のふし穴から 内へはいつて 竈の側に又三日居て夫から おつかさんの腹に はいつた 腹のうへのほふにゐたらせつなからうと おもつて脇の方に寄て居た事もよく覚てゐる 生れた時苦労のなかつた事もよふ覚ている おとつさんと おつかさんには いゝが 外の人にハ云なさんなと云 祖母 此よし 源蔵夫婦に告る 夫より後ハ 両親に前生の事共有之儘に 語り 夫より後には程窪に行たい 久兵衛さんの墓に やつておくれと 度々いふ事なれば 源蔵 おもふよふ 勝五郎 希有の子なれバ もしも其内死ましき物にも あらず 成程 程窪の半四郎といふもの ありやなしやを 尋ね度ものなれ共 男の身として 余り跡先の考なきやうに人のおもわくもいかゞと 当正月廿日 祖母つやに 勝五郎をつれて行べしといゝ それより つや 勝五郎をつれて 程窪村に行に 此家かといへば 勝五郎 まだ先〳〵といひ 先に立て行程に 此家だとつやにかまハず駆込ゆく つやも続てはいり先ツ 主人の名を問ふに 半四郎と答る 妻の名をとへば しづと答ふ 此内に藤蔵といふ子が有しや無やといへば 十四年跡 六ツの年 疱瘡でなくなりましたと云ばつやハ初て 勝五郎が云し事の誠なる事をそんじ涙セきあへず 勝五郎が前生を覚へ話する事を 具に話しけれバ 半四郎夫婦も 誠に奇異のおもひをなし 勝五郎をいだき倶に 涙にしづミ 前生藤蔵を見て 六ツの時より顔色きりよふ一段あがりたりと云に 勝五郎ハ 向の烟草屋の屋根をゆびさしまへかたハ なかつたの あの木も無つたの抔といふに 皆其通りなれバ 半四郎夫婦も弥我を折しと也 偖 其日ハ谷津入に帰りしが 其後も二三度 半四郎方へ遣し 実父久兵衛墓へも 参りしと也 勝五郎 時々 おらあの丶様だからア 大事にしておくれといゝ 又祖母に向ひ おらア 十六で死ぬであろふ 御嶽様のおしやさしつたが 死ぬはこわひことではなひと云ひしとぞ 両親 勝五郎に 手まへハ 坊様にならぬかと いへば おらあ坊様になる事ハ いやと 云し

近頃 村中にてハ勝五郎といはず程窪小僧とあだ名を呼び 外村よりも見に来る人も あれバ はづかしがりて やにわに かくれるにより 勝五郎が直咄しハ 聞事不叶 祖母つやの物語りにて 是を書留る也 扨又 源蔵夫婦祖母つやの内に 何か ぼだひをセし覚有やととふに 何も さのミ施事もせず 祖母つや 明暮 念仏をとのふ 出家乞食の門口に立時あらば いつも銭二文ツヽ放捨をする外には 善事といふ程の事も セざりしといふ

右は冠山老侯自ら彼地へ至りて源蔵の家御尋被成 勝五郎をも御覧の上祖母つやの物語りを直に被為聞 御自身に御筆記遊され候を 老侯より直に御話伺ひ 且 御筆記を拝借して 書写するものなり

文政六未年三月八日　　誌置

（早稲田大学図書館所蔵）

《解説》池田冠山が勝五郎の祖母の聞書きをまとめたもの。調査団で閲覧した写本は、①早稲田大学図書館所蔵本（武州多摩郡中野村勝五郎再生前生話）②宮内庁書陵部所蔵本（勝五郎前世聞書）③個人蔵本（冠山老公御筆記武州程窪村再生勝五郎前生話、佐竹家由来）④鳥取県立図書館所蔵本（冠山老公御筆記ほどくぼ小僧前世話）⑤佐渡市相川金毘羅神社文書（武蔵国多摩郡程窪村　沙門廉順所持）の五冊と、⑥宮崎成身『視聴草』に収載（武州程窪村小児前生話）⑦『近世百物語』九巻に収載（農児語前世）⑧

『珎説集記』に収載（文政六未年生替物語、資料15）の八種類である。

写本間の異同について、左に示す。

（1）勝五郎の母の名前　①②は「やい」③④⑥⑦⑧は、「せい・セイ」。「せい」が正しい。

（2）「せい」の父吉太郎が浪人になった時の「せい」の年齢　①④⑧は、「十三歳」、③と⑥は、「三歳」。十三歳が正しい。なお、②には「せい」の父に関する記述はなく、⑦には詳しい家族の記述そのものがない。

（3）吉太郎の没年　③④⑥は文政四年、①は寛政四年、⑧は文化四年。②⑦にはこの部分の記述はない。文政四年が正しい。

（4）藤五郎（藤蔵の父）の十三回忌の年　①②は文政三年、③④⑥⑧は文政五年とある。⑦には記載がない。文政五年は、藤蔵の十三回忌であり、藤五郎ではない。藤蔵の子孫である小宮家の過去帳によれば、藤五郎（久兵衛）の没年は文化三年であり、十三回忌は文政元年となる。

なお、②は、文末に「文政六年癸未三月拾八日山崎美成識」とある。また、②③は巻末に「多門傳八郎届書」写を、⑧は文頭に付す。③は最後から二丁目が欠となっている。

（解説・解読　小宮　豊）

2　六とせの夢（『玉露童女行状』より）

服部脩蔵謹記

浄観院殿玉露如泡大童女、御名ハ都由子と申奉る。我が大殿の第十六の御むすめにてわたらせ給ふ。柿沼氏の女なる、おたへの御はらなり。文化十四年丁丑十一月二日辛丑、辰の刻といふに、江戸の邸にうまれ給ふ。おたへ御子多かりけるに、いつも五ツ月、六ツ月がほどより、胸いたミ、しはぶきがちにてくるしがり給ひけるを、大童女をはらミまゐらせてより、いささかのなやミもなく、うまれ出させ給ふをりからも、ことに安らかにおはしましけり。

同十五年戊寅、御年二にならせ給ひし二月、文政と改元あり。夏のころより、御めのとなるたつが乳のとぼしくなりけれバ、更にひとり召出されしに、それにハ寄添ひ給ハで、たつをはなち給ハざりしかバ、やゝつぎ〳〵にやつれ給ふ御けしきを、大殿ふかくうれひ給ひて、雑司谷なる鬼子母神に祈らせ給ひしに、やがてかの乳ぶさはりいでゝ、其後絶ることなかりき。

同二年己卯、御とし三にならせ給ひし夏、右の御手の中指にちひさき瘡いできて、日をへて左右の御ゆびことゞ〳〵くいたみ給へるによりて、柴田芸庵に見せ給ふに、代指疽にもならせ給ハゞ、かろからぬ御病なりと申けれバ、御薬を奉らせ、外治をバ小堀祐真にゆだね給ふ。円明院法印行智ハもとより、大殿の御もとにねんごろにまゐりけれバ、御平愈の為とて、準泥（准胝）観音の法を修し、その符をたてまつるに、大童女つつしミていたゞき給ひ、朝夕御ミづからこれをもて十の御ゆびを撫さすり給ひぬ。御やまひ癒させ給ひて後、御もと人御守袋をひらくことありしに、曽て入置給ひし準泥の絵像、四がひとつたゞれ裂けて、その紙さへうせにたり。まことに代受苦の誓むなしからざりけることよと、ミな人たふとみあへり。この年の冬のころ、弘福寺の鶴峯和尚を大殿のまねき給ひしに、大童女出むかへて礼拝し給ひて、和尚にしたしミ給ハんとの御こゝろばへにや、御もて遊びにし給ふ、きさごといふ貝をとりいで給ひて、和尚とはじきてあそバんとのたまふ。和尚うちゑミて、おのれこのとしまでいまだかゝる遊びせしこと候ハず、願くハ御をしへ給ハれとて、しばしが間はじきたハふれ給へバ、大童女ことによろこばせ給ふ事かぎりなし。すべてよのつねの御客にハ、ミだりに出であひ給ハねど、僧徒の御客なりと申上れバ、はぢらふことなくわたらせおはしますこと常なりき。

同三年庚辰、御としよつにならせ給ふ。卯月の頃、泉岳寺の貞鈞和尚、大殿のかたに来臨あり。大童女も御対面ありしに、和尚いとほしがり給ひて、永く疳虫のうれひなきやうにとて、懇に加持し給ひけれバ、大童女拝して内に入らせ給ひて、やがて御手あそびの品を持出給ひ、和尚にまゐらせてその恩にむくい給ふ。和尚、又両殿および御姉君がたに、三帰戒をさづけ給ひ、その後に法華経の妙荘厳王品を講ぜられしに、大童女ハ御姉君がたのしりへにおはして聴聞し給ひけるが、その講終るまで少しも倦給ふ御けしきましまさゞりき。此ことを、西の海の大国を領ぜさせ給ふ君の北の方

聞しめし、御賞嘆のあまりに、ひめおき給へる唐磁の観世音の像を、大童女へおくりおこせ給ひ、大殿への御消息の中に、かゝる応現童女を得給ふこと浅からず歓喜いたし候、右御女子の末たのもしく、ありがたき御ことども感涙やまず、数年所持の大悲尊を御ゆづり申候、ふとかゝる御かたへ因縁相むすひ候も、ひとへに信心の奇特とぞんじ候とまであそバしけりとなん、ほのかにつたへうけ給ハりぬる。さてその御はこをひらき見給へる時、御もと人たちハ、たゞにやきものの人ぎやうなりと思ひたるに、大童女ハはやくこれハ観音さまなりとのたまひながら、両の御手を合せ恭敬瞻礼し給ひけり。それより後ハ、日々に御ミづから茶果を供へ、香花をたむけ、御庭にてつませ給へる草花をバ、先この観世音にさゝげ給ひて、其あまりをもて、御ひゝなあそびの料になし給へり。その後、脩蔵が妻のさとよりもち来りし、堂のかたちに作りたる厨子やうのものを、御もて遊びにとて奉りけれバ、大童女御よろこびありて、たゞちにその屋根をとりはなちて、かの像をその中にをさめたまひて、もとの如く屋根をおほひ給へるに、大きささながらこの像の為にことさらにつくりたるかとあやしまる。大殿はじめこれを見給ひて、よのつねのものなりとおぼしゝが、よく〳〵見給へバ、清水寺の観音堂をうつしとりたるなりとて、いとゞ随喜し給ふ。また大童女つねにのたまふハ、もし火事があつたらバ、おもちやハ、ときとたつと、もつてにげろ、くわんおん様ハ、つうさまがおんぶしてにげるよと仰られし。大童女つねに書画をこのミ給ひ、ミづからもあそバし、人にもかゝしめて、なぐさミ給ふ。又絵本を見給ふにも、聖賢・仏菩薩の像あるをこのませ給ひ、大殿にそのミ名を問ひ給ふ。しか〴〵と教へ給へバ、ことによろこび給ふ。又人物・鳥獣・魚虫・草木・器財などの画は、おもと人にその名をとひ給ふに、しりまゐらせずとこたへ奉れバ、そのまゝになしおき給ハで、大殿につきて尋ね問給ひつゝ、その名を御心にしめてよくおぼえさせ給ひき。又折々の御遊びに、歌がるた・たとへがるた・きさごはじき・竹がへしなどやうの遊びごとせさせ給へるにも、人にかつことをこのミ給ハず。そのよくせざる輩にハ、かたハらよりたすけやりて、御かたきになし給ひき。又、御長屋よりまうのぼれる御伽の子ども、おりにふれていさかひなどする事あれバ、御こころわるげなる御けしきにてかれこれとなだめこしらへ給ひてのち、おの〳〵の家におくりやらせ給ふ。ある時、大殿外よりまゐらせし蜆を、左右の人に命じて、しりへなる川にはなたせ給ふを、大童女つく〳〵と御らんじけるが、それより後ハ、蜆・はまぐりすべて生けるたぐひを御めにふれさせ給へバ、かならずはやく放ちやれとぞの給ひし。

同四年辛巳、御としいつゝにならせ給ふ。四月、おたへ殿にしたがひ奉りて、いなばの国にゆき給ひけるに、大童女別を惜ミ給ひて、いでたちし夕づかた、御馬場に出てあそバせ給ひて、御こゑをあげて、たへ〳〵と呼給ひ、御かたハらの人に向ひ、こゝで呼んだら、たへが方へ聞えやうかとの給ひき。此御言葉の切なるに、人々皆なミだとゞめあへず。ある時、御もと人たちハむれに、おたへハこゝろづよくもいとほしき君を置奉りて、御国へハ参られしことよと聞えけれバ、大童女聞給ひ、御兄さまから御供を仰つけられたから、つうさまをおいて行たのに、そのやうなことをいふなとの給ふ。おもと人、さらバ何とて君ハもろともに御出あそバされぬぞと申上けれバ、おとうさまが御いでなされたら、つうさまも御供をして行う、おとうさまがいらしやらねバ、つうさまハ御そバに居て、御伽をせねバならぬぞとのたまひき。その冬、神無月廿二日のことなるに、大童女御もと人に向ひ給ひて、今が来年ならバよいとのたまふ。これハ、おたへこんとしにならバ御国よりかへるべしと、こゝろもとなくまちかね給ひて、それとなく仰せられし御心の深きことを大殿感じ給ひて、月日を書とめおかせられ、御国までも仰つかハされたりとぞ。今おもひ奉るに、かく御こと〴〵につけて月日をしるしおかバ、ほいあらんものをとおもふもかひなし。

同五年壬午、御としむつにならせ給ふ。三月、殿御国よりいたらせ給へバ、大童女御よろこびかぎりなく、朝ゆふ御休息の間にさふらひ給ふ。殿もことにいとほしミ給ふ。おほやけごとなどにて御出ありて、かへらせ給へバ、その御つかれをなぐさめ給ハんとてさま〴〵の御たハふれごとなどなし給ふ。つねに両殿・御姉君をうやまひたふとミ給ふことふかく、御礼儀おろそかならず。ならびゐたまひて、御膳めさるゝ時、大童女の好ませ

給ふ品をうへ〳〵よりわかち加へ給へバ、御坐をたゝせられてうけ給ひ、はるかに下りて拝し給ふ。又大殿の御側にさふらハせ給ふ時、ものたまひて、これハめづらしき品なり、そこにてまゐれとの給へバ、ミなさまを御呼申さんとて、御奥にはしり入給ひ、御つどひのうへならでハきこしめし給ハず。又くだものなどを奉るものあれバ、御ミづから大殿の御かたへもちいでゝ奉り給ひ、それより殿・姉君に御わかちありて、次に老女をはじめ御かたハらにさふらふ人にわかちたまひ、さてその後にきこしめしつ。又御膳部にやはらかなる品つきたる時ハ、たれがしハとしよりだからこれをやれとて給ふこと、常の御ことなり。又折にふれ御飯をのこさせ給へる時ハ、犬にやれ、豕にやれ、雀になげてやれよなどのたまふ。

大殿酒をたし（な）ミ給ひ、程にすぎ給ひて煩ひ給ふことしば〳〵なりけれバ、すぎなんときハかたハらよりとゞめくれよと、常に仰ありけれども、興に入らせ給ひてハ、誰々も御けしきをはゞかりて口をつぐミをるに、大童女ことにきづかハせ給ひて、御酔のすゝませ給ふ頃にハ、はしり出給ひて何ぐれととゞめ給ふ。又外より帰らせ給ふこと遅き時ハ、いといたうくるしがり給ふこと、ひとかたならず。御むかへにだれぞやれ、御文を上けやうかとのたまふ。ある時おもと人、父君ハおそろしとおぼすやと問ひ奉れバ、わるいことせねバこハひことハないと仰られき。

大殿より疱瘡のうれひのがるへき御薬なりとてまゐらせられしを、おたへの持いでゝすゝめまゐらするに、味のいと苦けれバ、ねんじてきこしめしつゝ、脩蔵を見給ひて、良薬口に苦しとハこのことだのとのたまひき。その時、脩蔵ハおそろしきまで覚えて何と御こたへ申上べきやうもなかりき。

ある時、おたへの部屋に蟻の上り集りて、はひあるきけれバ、かたへの人わき湯をそゝがんと湯桶を持来りしに、大童女いたくこれをとゞめ給ひて、湯をかけたらミんな死ぬだろう、かあいそうに、箒でそっとはき出すがよいとのたまひき。

ある時、老女たちこぞりて、何がしもなくなりたり、たれがしもはてたりと打なげきかたり合ふを、大童女つく〴〵と聞しめして、しばらくありて御坐をたゝせ給ひながら、人間ハいやなものだとのたまふ。老女たち、かゝる御言葉のいとけなき御口よりいでつるをあやしがりてかたりき。

これよりさき、ふたつになり給ふ御とき、はじめで雑司谷にまうでさせ給ひて、その後ハ浅草でらをはじめ、ここかしこの神社仏閣にも大殿の御さしづにていらせ給ひしに、とかく浅草と雑司谷へハ御心より思ひおこして大殿に乞ハせ給ひて、たび〳〵まうで給ひぬ。此春、浅草寺より弘福寺にまうでさせ給ひしに、雨そぼふりて、御なぐさミもなかりつるに、弘福寺ハ御心おきなうおぼしけるにや、雨をもいとはせ給ハで、庭にてのどかに遊び給ひき。秋になりて、又浅草寺にまうでさせ給ひ、木下川の薬師にも、大殿の仰にて入れまゐらせ給ひき。すべて神社仏閣にまうで給へバ、御手を合せまめやかに拝ミ給ふこと、おとなび給へり。ことし秋も末になりけれバ、又雑司谷にまうでんとの給ひしが、御供の人をいたハり給ふ御心にてや、その御ことやミにき。ある時、ふと御出ありたしとのたまひけれバ、老女たちいづかたへいらせられたきと問ひ奉れハ、弘福寺に行たいと仰られき。

その後、おたへにむかひ給ひて、大殿のねんごろにし給ふ人々の名をかぞへ給ひて、何がしハどういふわけで御心やすいぞ、たれがしハどういふわけで御扶持を下さるぞと、こととこまやかに尋ねさせ給ひきとぞ。

神無月のころにや、おたへのはからひにて、御姉君がたの御れうにと、色よき絹どもくさ〴〵とりまじへて、かれこれと見せ奉るに、大童女ハこれほしともものたまハで、その中にかきつばたのもやうをそめたる絹を御らんじながら、

むらさきにさいてうつくしかきつばた

と即興し給ひきとなり。

十一月八日に、大殿より曽て進せられし御ふミを御手づから封じさせ給ひて、御うハ書に、たいしのものおとうさまいたゝいた御書と遊し、おたへにあづけ給ひぬ。又はやくより持せ給へる御鏡を姉君にまゐらせられて、この鏡ハもういらないから、おはるさまに上ますとの給ひしかバ、御姉君それハたへが奉りし御鏡ならんを、永くもち給へかしとのたまひけるに、そんなら御あづけ申上ますとのたまひながら、さしおきて帰らせ給ふ。又この日、御手あそびの品々をこと〴〵く御坐敷にならべたて給ひて、御あそびがたきのをさなきものにわかちとらせ給ひ、そのやぶれ損たるをバ川

へながせと仰られきとぞ。これも御命期をしろしめされて、とく人々にさとし給ひけんと今ぞおもひあハせられける。

常ハ御すぐよかにまし〳〵て、少しの御なやミもおハさざりしに、九日のゆふべより、御熱おこりてうちふし給ふ。この頃、世にもがさのはやりけれバ、その御きざしにもやと、大殿のあわてさせ給ふことひとかたならねバ、とのゐの御医師島村貞庵にうかゞハせ給ふ。いまだその御きざしとも定めがたきよしを申上けるに、大童女大殿の御心づかひをおしはかり給ひて、しバしも安くせんとおぼしけるか、又この世の御なごりに、くさ〴〵の御手わざを見せ奉らんとおぼしけるか、つとめて起あがらせ給ひて、たとへがるた・竹がへし・きさごはじき・縁むすびなどの御あそびし給ひて、大殿をなぐさめ給ひ、又ものの本の絵のゆゑよしをとひきゝ給ひて、夜中すぐる頃まで御しんならず。翌る十日にハ、御医師鳥養元叔、貞庵と同じくうかゞひて、もがさの御もよほしにまぎれあるまじきよし申上しかバ、大殿の御さしづにて御療治を柴田芸庵にゆだね給ふ。是日ミづから御ふミをかき給ひ、いとけなき御姉君がたに、びいどろにて作りたる御かんざしをそへてまゐらせられ、又殿のめしつかハるゝ霞にも御もて遊びのしなをたまひぬ。十一日より、もがさあらハれ、かろからぬ御症なりと、貞庵元叔のふたりハすでに眉をぞひそめける。大殿をはじめ殿・姉君がたもおとろき給ひて、御心をいため給ふことかぎりなし。芸庵ハもとより暇なき身ながら、昼夜となくまゐきてうかゞひ奉り、御家のくすしハいふに及バず、生田英碩にも治術をはかり、力をつくし技をきハめけるに、日に〳〵よからぬ御ことともまさせ給ふ。英碩ハ、両殿もとより御むつびふかけれバ、大童女も御心おきなくおぼしたのミ給へるを、おしはかりて、夜な〳〵やどにも帰らで、しば〳〵御脈をうかゞひ奉れり。廿二日、御さりゆといふ期なれど、いまだ潅膿（ほうのうミ）せざるもあれハ、いまだ起（そ）脹（ろひ）にだにいたらざるもありて、もろ〳〵のくすしかしらをかたむけ、手をこまぬきてぞ居ける。大殿また丸山岱淵を招きよせて、御脈をうかゞハせらるゝに、大童女御なじミうすけれバ、誰なるらんとはゞからせ給ふミけしきありけれバ、御かたハらの人、これハ芸庵の兄岱淵にて候と申上けれバ、さうかとて御こゝろよくうかゞハせ給ふ。大殿ハもがさの御眼に入なんことをふかく御心にくるしませ給ひ、行徳玄格をまねきて、その御用意などなさしめ給ふ。わづらひ始め給ひし日より、両殿・御姉君がた、よる昼となく御そバにつきそひ給ひ、御かんびやうせさせ給へバ、御医師ハ肝胆をくだき、おたへ及びとき・たつのふたりハ申もさらなり。御くすりにさふらふわれ〳〵までも、寝食をわすれ、身の労をしらず。外のかたのけいし、雑々の人ハ、かげながらくるしがりて、神に仏にいのり、朝ゆふのミけしきをうかゞひ、少しかハらせ給ふとあれバ、色をうしなひ力をおとしぬ。上と下とのなからひなれバ、かくあるべきことにハあれど、ちかき遠きのへだてなく思ひよせ奉ることハ、かねて御いつくしミのかげひなたなくわたらせ給ふゆゑにてそ。さても御やまひ日々に重らせ給ひ、御くるしミの御中にも、尊卑の礼をうしなハせ給ハず。御眼もふたがり、御口もかわき、御こゑかすかにならせ給ひても、両殿・御姉君御くすりをすゝめ給へバ、常のごとくにいらへし給ひ、御精神ミだれ給ハず。御かたへの人々をもよくわかちしり給ふ。御うハ言などハ、かりにもきこえ給ハねど、たゞはやく雑司谷にゆきたい、御供ハそろうたかとの給ふことしば〳〵なりけり。廿六日の夜ハ、御つかれもまさり給ひて、御脈もかひなうならせ給ひけれバ、ふたりの御くすしらハ、御臨終遠からじとうかゞひけり。

廿七日のあかつきにいたりてハ、御心よげにすや〳〵御しんならせ給ふやうなれバ、人々御くすりをすゝむることをもしばしひかへ、御次にさむらひけるに、御伝のときハ目もはなたず、御顔ばせをまもり居しが、辰の刻すぐるほどにたえ入給ひぬ。両殿・御姉君・おたへをはじめ、御かん病の人々にすら御名残をしめし給ハざるハ、いかさま権化の御はからひにや、凡慮に察し奉りがたし。

さて、上々の御なげきハ申もおろか、御もと人より末々の輩までも、この君のかくれさせ給ふときゝ奉りてハ、涙に袖をしぼらぬハなく、殊による の鶴の御心の中おもひやり奉れバ、はらわたをたつばかりになん。すでに御枕を北になし、右脇にふさしめ奉りけれバ、御水たむけまゐらするさへ手ふるへ、涙せきとめがたく、よるひるのわかちさへおぼへざりけり。さてしもあらねバ、牛島の御寺へ人をはせて、鶴峯和尚にかくと告まゐらす

れバ、和尚もかねていとほしがり給ひける君にしあれバミづからとくまゐらまほしけれど、老の身の病がちなれバとて、淀の君の御たま屋守る毒龍師をおこせ給ひて、御なきがらの御もとにて、よもすがら御経よませまゐらす。翌る廿八日にハ、与板の君の御たま屋守る拙堂師をかハりにおこせ給ふ。これも、夜昼御経よミまゐらす。廿九日ハ、御沐浴まいらせよと、両殿の仰をうけ給ハり、とき・たつのふたりの介錯にて、井村正蔵と脩蔵とつかへまつれり。大殿もその場にのぞミたまふ。御瓦棺にをさめ奉る時ハ、両殿をはじめ御姉君がたも打よらせ給ひて、御なきがらを拝がませ給ふ。大童女の御為に書せ給ふ経文・仏名・題目などにて御かたちをかくしまゐらせ、御もと人よりわれ〳〵が輩まで書写し奉りし経文などをもてをさめ奉る。御もと人ハ、つねに愛し給ひし御手遊のたぐひを御棺に入れんと乞ひけれども、大殿かたく制し給ふ。御柩にをさめ奉る時も、両殿・御姉君がた打よらせ給ひて、御手づから炭をもて御棺のめぐりをつめさせ給ふ。およそ上つかたにハ、かゝるためしをいまだきかず。これも、かねての御孝悌に感ぜさせ給ひ、かくまでもあつき御はからひにやと、いと有がたくぞおぼえける。此夕づかた、御剃度の式を行ハせ給ふ。御戒師ハ、大和国高取の光雲寺の楊州和尚なり。この和尚ハ、いぬるとし、大童女の御姉君慈光院殿のかくれさせ給ひし時も、しばらく弘福を監寺せられける折にて、御剃度をなしまゐらせられしに、こたびも宇治の万福寺の御つかひとして、しばし牛島にとゞまり給ひて、おもひよらずまたこの式を行ひ給へること、深き御因縁にやとおの〳〵したにさゝやぎたり。御たま屋守の台岳師も、楊州和尚とともに来りて、此式をたすけられ、拙堂師にかハりて、よもすがら御経をよまる。翌る卅日にハ、酉の刻を期として御出棺あり。台岳師すなハち御ともに従ハる。殿よりハ神戸左橘、御姉君がたよりハ井村正蔵をして、御柩にしたがハせ給ふ。大殿ハ、御ミづ からミ送らんと、少し御跡より脩蔵を御供にて出させ給ふ。御柩に供奉せざりしこと、いとほいなく思ひ給へしを、大殿ミちをかへさせて、御先に牛島のミ寺にいたりつかせ、まちまうけ給へバ、御柩を迎へ拝ミ奉ることを、かなしきなかにもよろこびぬ。さて御葬礼の御道すぢハ、大殿の御はからひにて、大童女のかねてふかく信ぜさせ給ひし御ことなれバとて、ことさらに浅草寺の前をわたし、かミなり門にむかひ、御柩をしばしすゑまゐらせ、大童女にかハりて、御供なるb橘栄助をして、遥にかの御本尊を拝ませらる。げにや生死のへだてなく大慈大悲の御ミちびきたのミある御事なれバ、大殿の御はからひ、大童女のミこゝろに叶ひなんとぞおほえける。さて御寺につき給へバ、御柩をかり屋にすゑ奉り、鶴峯和尚御導師として御法あり。すでにして、巳の刻の下りに、御柩を御先塋のうちにかき入奉る。大殿もその場にのぞませ給ひ、御掩土おハるまでミそなハし給ひけり。御供の人々ハ、たゞこゝろたましひもうせはて、すミだ川を南にむなしく御館にかへりぬ。またなく、かなしさいはんかたなし。大殿ハ、御かへりに、又浅草でらにまうで給ひぬ。こハ、大童女をして、はちすのうてなにはやうむかへとり給へとの御いのりなるべしとおしはかり奉れバ、いとゞ涙せきとめがたし。さても、とき・たつのふたりハ、日ごとに御墓参りかくことなく、雨をかし、雪をいとハず、二里ばかりがミちをしばしがほどに行かへり、よるひる御位牌の前に侍りて、いまそかりし御時のごとく、ねんごろにつかへ奉りぬ。七日〳〵の御あたり日ハ、いつも日和よく、まうづる人々も道のうれひなかりしなり。師走も廿八日なれバ、おたへをはじめ、とき・たつの二人、御手遊びのしな〴〵を見わきけるに、御つくゑの引出しの筥より、御遺書とおぼしくて、はん紙をよこに折らせ給ひ、御うハ書に、とき・たつとならべて、ふたりが名をかねて、その下にさまとかゝせ給ひ、六ツつゆとあそバし、うちに御歌、

ゑんありてたつときわれにつかわれしいくとしへてもわすれたもふな

とあそバし給ひぬ。

立かへる春の元日ハ、御三十五日にあたらせ給へバ、大殿ハ御祝ひをもかへり見給ハで、牛島の御てらにまうで、御仏事をおこなハせ給ふ。御やかたの中のさびしさ、御事々につけても、去年のはるハかくあらせ給ひしなどかたりあひて、打なげくのミなり。八日ハ、六七日にあたらせ給へバ、御姉君がたハ、すぎし御事どもことさらにおぼしめしつゞけて、大童女の持給へる御たんすの中なるものなど御覧じ給ふに、左り封じにせさせ給ひ、

御うハがき、あてなしと遊したる一通の御書出たり。開き見給ふに、御はながミに、十一月御きうそくてかくと御はし書ありて、蝶と桜と雨とを絵がゝせ給ひ、蝶の下にハ、

おのかみのすへをしらすにもふこてう

桜の下にハ、

つゆほとの花のさかりやちこさくら

雨の下にハ、

あめつちのおんハわすれしちゝとはゝ

と遊し、六ツつゆとしるさせ給ふ。又、十一日のことなるに、御伝のとき、大殿の仰によりて、物もとむることあり。御手あそびの箱をひらきけるに、又左封じにせさせ給ふ御書一通出たり。御うハがきに、上あけるつゆとなされたれバ、すなハち大殿に奉る。大殿ひらき見給ふに、

おいとたからこしゆあかるな、つゆかおねかい

申ます、めてたくかしく、おとうさま、まつたいらつゆ

とあそバされたり。十四日ハ七々日の御たい夜なれバ、殊さらにすぎし御こといひつゞくる。折ふしあらせ給ひしとき、おたへに給ひし、おたへさまつゆと遊したる御文、その時ハあやなき御たハふれとおぼして、さながらうちおかれしを、もしゆゑある御ふミにもやと、御姉君がたに見せ奉るに、

まておくれといつてしらぬかほてはしかたかないわなきのとくたよのちにきなかあさまもとのいいおこてこさおとまあいらしやいこいまにはとかきますむともよひにせのちにこおとゆめんとおたからのなににかみいいこりましたはおしまりますさにと書くだし給ふ。上下の文字をひろひてよミ給へバ、

まてしはしなきよのなかのいとまこいむとせのゆめのなこりおしさに

といふ御歌になんありし。

きさらぎ七日のことなるに、翌ハきしも神の御えん日なり。かねて御まゐりのこと、しば〳〵仰ありし御ことなれバとて、とき・たつふたり、御かハりにざうしがやにまうでんとて、御生前にいろ〳〵の絹にてくゝり猿をぬハしめ給ひ、をさめさせ給ハんとて、紙袋にたくハへおき給ひしを、かたむけうつしゝに、袋のうらに、ゑにしふかきかゆへにちちとなし、こころミちあるゆへにははとなし、おんをうけ、おんをゑんとしてミちひくと遊されて、

むまれてておやよりおもしミづのおん　つゆ

と御発句を題せられたり。

同き廿八日のことなるに、大童女のもたせ給へる御紙入を、おたへのあづかりゐ給ひしを、いつまでかとて、なミだながらにひらき見給ふに、ちひさくとぢたるさうし二冊あり。はじめに両殿・御姉君がたの御名をしるし給ひ、次に江戸御国の御家老をはじめとしてミきゝ給ふ男女一百人の名をあげ給ひて、御なかやのなのしれぬひとみんな、しんへやの人のこらす、つゆ、たいかうふつ、たいかうふつ、おかしい〳〵ときかわらいます、たつもわらいますとあそバし、又前に書残し給ふ御家の子と御出入する輩と、あはせて十四人の名をあげ給ひて、とりや〳〵かわいかつてやりましよ、みんなか御けらい、たんとた〳〵と遊し、その次に、

うたかいのふかきしゆしようをしめさんとつたなきふてにかきのこしけり

かミほとけへたてぬようにこゝろもてこのよハさかへこせハあんらく

こしようをハねかわすとてもたいいちハじひとなさけとほとこしとミち

しうとなりけらいとなしたそのほかもきせん上下のへたてなくたすけてやろうこころひとつてこれハミんなほんのことうたかいふかいとしやとうといふ　つゆ

となんかゝせ給ひぬ。かれといひ、これといひ、一かたならぬ御うまれつきハ、かうやうの御歌にてもしるかりけり。脩蔵ハ、このとし月あけくれちかうめされて、御終焉のあかつきまでも人々のしりへに従ひて御床のほとりに侍りしかバ、御言行のあらましをもうかゞひ奉れど、その百分が一をもしるし得ず。とてもミじかきさへの及ぶべきにあらねども、せめてそのかたはしだにもつたへずてやミなんハ、いと口をしくおぼえぬるまゝ、なミだの雨に筆をそゝぎて、おろ〳〵しるしおくになん。

山崎美成拝書

牛島弘福
禅寺蔵板

（鳥取県立図書館所蔵）

（解読　上野さだ子・大窪俊彦・髙橋國夫）

3　花月日記　　松平定信自筆本

（天理大学附属天理図書館所蔵）

（「翻刻『花月日記松平定信自筆』（二十五）」
『ビブリア』一四一号より転載）

（文政六年　きさらぎ）

十九日　又おり〳〵雪打まじりたるが、ひるよりハはだれにふる。例のわたをうちゝらしたらんやうに、おもげにふる。けふきけり。このあたりの冠山のむすめ、つゆ子といふ、ことし六ツになりしが、むまれてよりいとさとく、ことに玉子むきたらんやうに、たれミても打ゑまるゝ斗なり。さるに、きさらぎのはじめより、もがさにかゝり給ひたるが、くすしも見そんじけん、いとおもかりし。冠山さま〴〵心つくし給ひたるが、つゐにうせ給ひしとなり。それより、つねもち給ふ手箱などミれバ、さま〴〵のことかいたるに、かたミとてこの品ハたれかしと、いつか札などもつけ置給ひ、哥・発句などをもかい置給ふ。冠山つねに酒をこのミ給ふが、病とやなりなんなど思ひ給ふにやありけん、酒のミ給ハざらんやうになど、かい置しもありしとぞ。それより冠山も酒やめ給ひし。その哥・発句かいたるを、いさゝかこの末にうつし置ぬ。これら神童とやいふべき。冠山近きころ仏者となり給ひしが、それらのえにしで、かゝるもの生れこしやなど人々いふ。

桜のやうなるものかい給ひて
　つゆほどのはなのさかりやちござくら

あめのふるやうなることかい給ひて
　あめつちの恩ハわすれぬちゝとはゝ

其余、ほうごのやうに
　おいとだから、ごしゅあがるな、つゆがおねがい申ます、めでたくかしく
　おとうさまあげる　　つゆ

とき・たつといふ、ふたりのをうな、このつゆ子のもりなりしが、それへ

ゑんありてたつときわれにつかハれし
　いくとしへてもわすれたもふな

てふのやうなるもの、かいて
　おのがミの末をしらずもまふ小てう

又

　まてしばしなきよの中のいとまごひ
　　むとせの夢のなごりおしさに

などありけり。冠山いかにかありけん、かくものも打なきぬ。

（同　やよひ）

四日　かのつゆ子のかいたるものをミせ給ひて、哥をこひ給ふれバ、盆花まいらせて、哥をもべちにまいらす。

　かい残し給ふものをミ侍りて
かしこさのたぐひ渚のさよちどり
　むなしくあとをミるぞ悲しき

今更にとへどこたへず小笹原
　玉の光を跡に残して

　とぶらハんことばもなミだにて
よそにきく袖にもかけて思ふ哉
　本の雫のたえぬ歎を

　されどまた
とくちるもはかなからずよ代ゝ遠く
　おしむを花の盛と思へバ

などかいてものす。

《解説》

松平定信＝宝暦八年（一七五八）御三卿田安宗武の七男。安永三年（一七七四）奥州白河藩主松平定邦の養嗣となり、天明三年（一七八三）藩主となる。同七年老中に就き、老中首座、将軍補佐役として寛政の改革を断行した。寛政五年（一七九三）老中を辞任。文化九年（一八一二）白河藩主を致仕、家督を嫡子定永に譲り、以後築地藩邸下屋敷に移り、楽翁、花月老人と称した。

**　下屋敷は二万坪の広大な庭園で「浴恩園」と呼ばれ、定信はここで文筆活動や園内を逍遥して花鳥風月を楽しむ生活を送った。又浴恩園を舞台に多方面の交友関係を持ち、林述斎・堀田正敦（下野佐野藩主）・屋代弘賢・谷文晁・北村季吟・松浦静山・塙保己一・池田冠山等を見ることができる。**

**　この「花月日記」は、文化九年四月六日白河藩主を致仕した日から始まり、亡くなる前年の文政十一年（一八二八）十二月まで書き綴られている。日記には多くの歌が詠みこまれ歌日記の様相を呈している。**

**　文政六年二月十九日の日記には、前年に亡くなった池田冠山の娘つゆ子（露姫）が生前書き残した遺墨を書写し、「これら神童とやいふべき」と感嘆している。また、三月四日の日記にはつゆ子のために冠山から歌を請われ、盆の花とともに四**

首の追悼の歌を送っている。

この四首の歌は、冠山がつゆ子の菩提を弔うために多くの知人やゆかりの人々に追悼文や詩歌を乞うたものの一部で、後、冠山はこれらを三十巻の巻子に仕立て、つゆ子ゆかりの寺、浅草寺におさめているが、定信の送ったこれらの歌も、第一巻目に納められている。このように実際に冠山が歌などを所望した記録が残り、それらが巻子に納められているのは、非常に稀有な例であり、貴重な史料と云える。

（解説　鈴木淳世）

4　池田冠山公墨蹟

（1）浮筏丈宛池田冠山書状

浮筏丈

猶々其御地も当年ハことの外之暑気之由、当表なとハ五十年已来之暑と申候、折よく御自重専一ニ存候、文左衛門・久七・たへも先々無別条候由、たへよりも此ほとハ忠左衛門江伝言いたし子供へ其御地の扇子・かんさし等差こし申候、江戸のとハ流儀違之品ニ而却而珍敷悦ひ申候、おつゆも存外おとなしく此御地かん〳〵おとり流行候に付、日々おとり申候

当年之暑にて表の植木よほと枯れそうに成り、平五郎へミやく見せ候所、むつかしく申候、何レ我等も差扣へとう〳〵と存候、関東筋日照り三廻りの前之田なと残らす枯申候、其御地ハ豊年のよし、先々目出度事ニ存候、猶追々可申遣返事ハ、封しニ而差越可被申候、藤大夫・千蔵扨々残念なる事ニ存候、以上

むさし野に引かへて見る峯の月

去留

注　文政四年五月冠山の六男鳥取西館藩主定保が生母たえとともに鳥取に帰国した際、家臣の浮筏（磯村作左衛門）に出した書状。

（2）大雲上人宛池田冠山書状

小簡、拝啓酷寒之節先以　法侯弥御清健被成御津梁欽喜之至ニ候、誠ニ御一別以来ハ背本意御無音打過申候段御海恕可被下候、然は先達而法華経開板之儀に付、四民勧化御頼申候処、格別之御世話を以随喜之者多、右喜捨之品も差越被下、千万辱、御礼申尽かたく候、右板本も今度清書ニ取かゝり候迄ニ相成申候、急なる事にてハ無之候得共出来之上ハ早速呈上可仕候、且又先頃亡女浄観院遺筆入貴覧候、何とそ御一首之御追福相願申候、等地上人よりハ御一首被下候、千万忝存候段御序ニ宜被仰述可被下候、決而急キ候事ニ而ハ無之候得共、上人にも是非御恵投被下候様希申候、小子事も無異儀時々神祠仏閣へ参詣等遊行仕り候、東叡松林院なと江先達而も伝言ニ而参申候、当夏天王寺開帳於当所回向院有之、二舎利法印へ相たのミ太子御所持之御経をも拝見、内々ニ而校合致し何も右御挨拶旁得貴意度、艸々如此御座候、猶期後音之時候、恐惶謹言

蝋月廿二日

松平冠山

定常（花押）

大雲鎮上人

猊坐下

二白、寒成折角、御自重可被成候、此書物二部任到来、御慰ニ致呈上候、御笑留可被下候、心経ハ弘法大師真跡之映写にて、是又進呈いたし候、御受納可被下候、

以上

注　大雲院は、慶安三年（一六五〇）鳥取初代藩主池田光仲が東照宮を祀り、その別当寺として建立した天台宗の寺院。また、歴代徳川将軍の位牌安置所、藩主の祈願所でもあった。

（3）興禅寺塔中天沢院住僧宛池田冠山書状

興禅寺塔中天沢院宜戒恵所蔵

〔天保十四年癸卯当住僧〕

追啓　御偈中為霜為雪ノ四字

僕曽テ玉露童女へ与ヘシ俳句ニ暗合ス

亦奇トスベシ

文政五年十一月二日露児誕生日を賀ス

露といふ名のはかなきも又めてたし

雪霜と成り川となる露の玉

玉露童女かへし

ゆきしもやつゆとかそへるたのしみも

かわのなか(ぶ)れのすへをしらすや

右のかへし歌は僕がつかハせし短冊のうらにしるしてありしを死後に文庫のうちより見つけし也、

前書に
おとうさまいたゝいたたんざくかいてもいゝしかるな
と自筆にてしるし有之候、以上

（鳥取県立図書館所蔵）

注　興禅寺（鳥取市）は黄檗宗の寺院で、鳥取池田藩の菩提寺。

（解読　鈴木淳世）

5　雲龍寺覚書

覚

冠山様御末女於露様御六歳去年十一月廿七日御疱瘡ニ而御逝去被成候、御病前御書置被成候御書・御歌御発句御逝去後、御手遊之箪笥より出申候、一通は、冠山様江御酒ヲ御とめ被成候御文、一通は御実母たへ江御残シ被成候御歌、一通ハ御附之婦人とき・たつ江御残シ被成候御歌、一通は長門守様御休息之御間ニ而御認被成候御画賛ニ御座候、冠山様御愁傷之余り右四通板行ニ被仰付、為御菩提御法号御添、六拾余州霊地江御納被成候、依之御国内之儀ニ付、其御寺江も右四通御納被成候段被仰付越候

（鳥取市　雲龍寺所蔵）

注　雲龍寺には覚書の中にある露姫の遺墨四枚と、「文政五年壬午　松平冠山女
浄観院殿玉露如泡大童女
十一月廿七日　つゆ子」と露姫の法号の書かれた紙を貼った位牌が現在も残されている。（調査報告①参照）

（解読　鈴木淳世）

6　勝五郎再生記聞　平田篤胤

（表紙）
「文政仙洞叡覧本
勝五郎再生記聞　評論條々」

（貼紙・読み下し）
○北窓瑣談　五ノ十四丁　文政十二年ニ刊ナレル
随筆也
孤樹裒談ニ菽園雑記ヲ引テ明英宗ノ時嘗テ人有り、刑に臨んで三たび覆奏するを以て免かるゝを得タリ。或ひは問ふ、此の時に当り、自ら心神の如何なるかを覚えたるやと。云はく、既ニ昏然として之く所無し、但記ス、自ら屋背上に座し、下に一人面、我ヲ縛し、妻子親戚皆傍らに在るを見る。少頃くして報至ル、寸カニ屋ヲ下ルコトヲ得たり、云々。
これ再生紀（記）聞のたまの身をはなるゝ一証となすへし。

（朱書）
この再生紀（記）聞の本は文政六年六月の末に清書しをへていまだ表紙も付さるを、七月廿二日に江戸を立て京にまゐ上りける時に携へゆき、八月六日に京につきて宿れるほど、冨小路治部卿殿へしば〳〵召れて出けるに、此事を聞え申したれバ其書見まほしと宣ふにぞ、十三日のよるもて参りて見せ参らするに、御前にあるほどとみに読はたし給ひて、こハいと面白き物なれバ仙洞の叡覧に入れ奉らバ如何あらむ、かつハ其方（ソナタ）の名を聞えあぐる便ともなりなむと宣ふに、畏りてともかくもと申たりけれバ、其あくる日の院参し給ふをりに叡覧にそなへ奉り給ひしかバ、甚く大御心にかなひ反さへ御読まして、大宮御所へも御覧ぜさせられ、雲のうへ人たちにもをり〳〵かゝる珍しき事ありて、江戸なる篤胤といふもの記しつと御物語ありしこと、余のいとやごとなき御あたりより慥にきゝ伝へたり。さて女房たちにおほせごとありて写さしめ給ひ、五十日ばかり御許にとめ置たまひて此本を治部卿どのへ下給へるハ十月四日の日にぞ有ける。こゝかしこ折目の付たるハ仙洞の読さしましてしをりし給へるなりと伺ひつれバ、いとも畏くて朱もてしるしの系をひきつ。さて江戸にもて帰りて此表紙を付たるなり。たま〳〵も読見む人はその心してこの本ハおろそかになあつかひそよ、あなかしこ

未十二月十三日　篤胤　花押

文政六癸未年四月十九日御書院番頭
佐藤美濃守殿江届書写し
私知行所武州多摩郡中野村百姓源蔵悴勝五郎去ル午年八歳にて秋中より同人姉ニ向ひ前世生替し始末相咄候得共、小児之物語故取用不申、度々右様之咄申候ニ付、不思儀成義ニ存、姉儀父母江相咄

候而、此年十二月中改而父源蔵より勝五郎江相尋候所、前世之父は同国同郡小宮領程窪村百姓久兵衛と申者之忰ニ而藤蔵と申、自分ニ歳之節久兵衛儀は病死仕候間、母江後家入ニ而半四郎と申者後之父ニ相成居候処、右藤蔵儀六歳之時疱瘡にて病死仕り、夫より右源蔵方江生替申候由相答へ、委敷慥成事ども申候ニ付、村役人江も申出、得と相糺候処、世上取沙汰仕候故、程窪村半四郎方ニ而も沙汰承及、同人儀知行所源蔵方江尋参り候故相糺候処、小児勝五郎申候通相違無之、前世父母面躰其外住居等も相咄申候ニ付程窪村半四郎方江小児召連候処、是又少も違無之、家内ニ対面為致候処、先年六歳ニ而病死仕候藤蔵ニ似合候小児ニ有之、其後当春迄ニ折々懇意ニ仕候内、近村江も相知申候哉、此節は日々右勝五郎を見物ニ所々より参候もの有之候ニ付、知行所より訴出候間、源蔵勝五郎呼出相糺申候処、右之通両人も相答申候、尤折々世上ニ而取沙汰仕候間、難取用筋ニは御座候得共、御内々此段御耳打申上置候、以上

四月　　多門傳八郎

○

中根宇右衛門殿知行所

武州多摩郡小宮領程窪村百姓

実父藤五郎　継父半四郎　　藤蔵

文化二乙丑年出生す。同七庚午年二月疱瘡を病て、四日昼四時頃死去す。于時六歳なり。葬地は同村の山なり。菩提所は同領三沢村禅宗医王寺なり。去ル文政五壬午年十三回忌なり。

藤蔵継父　当未五十歳　半四郎

藤蔵母　当未四十九歳　しづ

半四郎子藤蔵異父弟妹　男子二人　女子二人

藤蔵実父　藤五郎

若年の時の名を久兵衛と云ふ。文化三丙寅年藤蔵二歳の時四十八歳にて死去す。半四郎古藤五郎が妻しつが入夫となり家を相続す。

○

多門(オカド)傳八郎殿知行所

武州多摩郡柚木(ユギ)領中野村百姓源蔵次男　当未九歳　勝五郎

文化十二乙亥年十月十日再生す。前生ハ程窪村藤五郎初名久兵衛が子にて藤蔵といひしが、六歳の時疱瘡にて死去せること前文に記すが如し。文化七年に死去せるより六年めなり。

勝五郎父小谷(田脱)氏ト云　当未四十九歳　源蔵

源蔵妻勝五郎らが母　当未三十九歳　せい

せいが父は、尾州の家士にて、村田吉太郎といひしが、せい三歳の時に、吉太郎故ありて浪人となり、文政四年四月廿七日七十五歳にて死去すと云フ。

（貼紙・異筆）

「村田吉太郎ハ織田遠江殿組にて侍の所行ニあらざる事ありて寛政元酉年十月廿一日追放　仰付られしとある書ニみえたり。後に丹羽家へ「左京太夫との」かゝへられしと或人いへり

をはり人某花押

かゝれハせいが五才の時浪人となりたるなり。本書とたかへり」

源蔵母勝五郎らが祖母　当未七十二歳　つや

源蔵娘勝五郎姉　当未十五歳　ふさ

源蔵長子勝五郎兄　当未十四歳　乙次郎

源蔵娘勝五郎妹　当未四歳　つね

○

去ぬる文政五壬午年十一月のころ、右勝五郎八歳にて、姉ふさ兄乙次郎と、田のほとりにて遊び居つゝ、ふと兄に向ひて、おまへハもと何処(イヅコ)の誰(タ)が子にて、こちの家へ生(ウマ)れ来(キタ)れると問ふ。兄きゝて我(ワレ)ハさる事をしらずと云へバ、また姉に向ひて同じさまに問ふ。ふさ答へて何処(イヅコ)の誰(タ)が子にして生(ウマ)れ来れると云こと、如何(イカニ)して知らるべき。笑(ヲカ)しき事を問へるものかなと嘲(アザ)けるを、勝五郎きゝていと心得がたく思(おも)へる体にて、然らバおまへハ生れぬ先(サキ)のことハ知ざるかと云ふ。ふさ然らばそちハ知りて居(ヲ)れるかと問へバ、勝五郎云く、我はよく知れり。本ハ程窪村の久兵衛といふ人の子に、藤蔵といひし者なりと語るを、姉いとあやし、然ら

バ其ノ事父母に告げむと云へバ、勝五郎いたくわびて、親たちに勿云ひそとて泣悲しミければ、然らバ云ふまじ、但しあしき行ひするを、制めてきかざる時は、かならず告てむと云ひてやミぬ。かくて喧ごとなどするをり〳〵、彼事を告むといへバ直にやめたりければ、両親祖母もこれを聞あやしみて、ふさに問へどゝみて云ず。さてハいかなる悪き事をかしつると心ならず、密にふさにせめ問ければ、止事を得ずありのまゝに語るにぞ、両親また祖母もいたく不審に思ひ、勝五郎をいろ〳〵とすかし拵へて尋けるに、しぶ〳〵語り出けるハ、我はもと程窪の久兵衛の子にて、母の名ハおしづといふ。我がちひさき時に久兵衛ハ死て、その後に半四郎と云が来て父となり、我を愛養ひけるに、我ハ六歳になりける時に死たるが、後にこの家の母の腹に入りて生れたりと云ふ。されども小児のしどけなき詞にて、余りに奇しき物語なれバ、容易にとり上べき事にも非ずと思ひて打過ける。さて彼が母せいは、四歳なる娘に乳を飲する故に、勝五郎をバ祖母つや夜ごとに添寝しけるが、或ル夜に勝五郎、程窪の半四郎方へ連行てたべ、彼ノ方の両親にも逢まほしと云を、祖母もけしかる事におもひ、打まぎらかし置つるに、其後ハ夜な〳〵同じ様に行まほしがるによりて、然らバこゝへ生れ来つる始より、委く語るべしとさま〴〵拵へ問ければ、いとしどけなき詞ながら、有来し趣を委しく語りてこハ父母をおきてハ、堅く人に語り給ふなと返ス〳〵いへりとぞ。〔此物語ハ、四月二十五日気吹能屋にて聞たり。前に或人のつやに問ひて、記されたる物のあるを見置たりけれど、今度さらに源蔵勝五郎に始終を問て、答へたる趣なり。〕勝五郎云ふ前生のこと、四歳ばかりまでは、よく覚えて有しが、漸〳〵に忘れたり。死ぬ命にてハ無りしかど、薬を食せざる故に死たるなり。〔疱瘡を病たりしと云ことハ知らず、後に人のしか云をきゝて知れりと云へり。此死たりと云フ時ハ、文化七年二月四日に当れり。〕息の絶る時は、何の苦みも無りしが、其ノ後しばしがほど苦しかりき。其後はいさゝかも苦しき事もあらず。さて體を桶の中へつよく押入るゝとき飛出て傍にをり、山へ葬りにもて行ときは、白く覆たる龕の上に乗りて行たり。さて其ノ桶を穴へおとし入レたるとき、其ノ音のひゞきたること、心にこたへて今もよく覚えたり。さて僧共が経をよめども何にもならず、すべて彼等ハ、銭金をたぶらかし取らむとするわざのみにて、益なきものなれば、悪く厭ハしく思はれて、家に帰り、〔僧ハ尊きものにて、経よみ念仏申せば、よき国へ生るときく。さて地獄極楽など云へる国ハしらずやと問しによりて、僧のことをかくいへり。〕机の上に居たるが、人に物をいひかけても聞つけず。其ノ時に白髪を長く打垂れて、黒き衣服着たる翁の、こなたへとて、誘なハるゝに従ひて、何処とも知らず、段々に高き、奇麗なる芝原に行て遊びあるけり。花の盛なる所にあそびたるとき、其ノ枝を折らむとするに、小さき烏の出来りて、いたく威の出たると云につきて、幽に思ひ合さるゝことあり。〕またしか遊ありくほど、我が家にて、親たちのもの云ふことも聞え、経誦む声も聞えたれど、吾は既に云へる如く、僧ハにくゝ思ゆるのみなり。食物を供たるも、食ふことハ為ざれど、中に温なるものハ、其ノ烟気の香ひて甘く覚えたりき。七月には庭火をたくとき家へ帰りたるに、団子などを備へてありき。斯てあそびて有経るほど、或とき彼ノ翁と家の向ひの路を通るとき、〔家とハ源蔵が家をいへり。〕翁この家を指て、あれなる家に入て生れよといふ。教のまゝに翁に別れて、庭の柿ノ木の下にたゝずみて、三日伺ひ居て、窓の穴より家ノ内に入り、竈の側にまた三日をれるほど、母の何処ならむ、遠き処へ別れ行給はむことを、父と語らひ給ふ事を聞たりき。〔源蔵云、勝五郎が生れたる年の正月の事なりき。或ル夜閨中にて夫婦相語らひて云く。かく家貧きに、子さへ二人ありて、老母を養ふに侘しければ、妻を来む三月より江戸へ奉公といふ事に出さむと云ヒ合せたる事あり。されど其ノ比ハ老母にも語らで有しを、二月になりて母にも告て、三月に至りて妻を奉公に出し遣たりしに、既に懐胎たりしこと、詳に知られたりければ、主に暇をこひて家に帰りたり。其妊たるは即正月にて、月満て、同十月十日に勝五郎生れたり。此事ハ、かつて夫婦をおきてハ、知べからぬ物語なるを、彼が知たりしハ、奇しくおぼゆといへり。さて懐胎のほど、また生るゝ時も、其後も奇しき事ハなかりきといへり。〕其後母の腹内へ入たりと思ハるれど、よく

も覚えず。さて腹内にて、母の苦しからむと思ふ事のある時は、側のかたへよりて居たる事のありしハ覚えたり。さて生るゝ時は何の苦しき事も無りき。〔程窪村にて藤蔵と云て、文化七年に死たりしより六年めにあたれり。〕此ノ外何くれの事ども、四つ五つになるまでハ、よく覚えて有しかど、漸々に忘れたりと云へり。〔以上、直話をつゞりなせるなり。〕其後祖母ます〳〵奇しく思ひて在りけるに、或ル時ものへ行て、同じ嫗どち集へる処にて、もし程窪村にて、久兵衛といふ人ありと知給へる人やおハすと云フに、一人がいふ己ハ知らざれど、彼村に因あれば問合せて参らせむ。さるにても、如何なる事にて問給ふにやといふに黙止かねて、勝五郎が事をあら〳〵語りけり。さるほどに此正月七日に、程窪村より何某といふ老人来りて云く。己ハ程窪の半四郎といふ者に親しき者なり。久兵衛といふハいと若き程の名にて、後に名を藤五郎と改メたりしが、十五年前に身まかりて、今ハ程窪に、久兵衛と云し名を知たる者もなし。其が妻の後夫を半四郎といふ。此ころ人づてにきけバ、此ノ家に生れたる子の、もと其ノ久兵衛が子なりし藤蔵と云へるが、六歳にて身まかりて後に、此家に生れたりと聞伝へたるが、余りに打合て奇しく聞ゆれバ、問きかまほしがりて、まづ己にあとらへて遣せたるなりと云ふに、上ノ件の事ども語りて、相互に奇しミつゝ、かの老人は帰りけるとぞ。かゝりしかバ此事終に人あまた知て、見に来る人もあり。勝五郎外に出れバ、人珍しがりて、程窪小僧など仇名をつけて、言囃す事となりしかバ、恥かしがりて、其後は外に出ず。父母に、かゝれバこそ、人に語り給ふなと云ヒてしに、人に語り給へる故にこそかゝれと云て、恨かこちけるとぞ。斯てのち勝五郎、半四郎が方へ行まほしがること弥まさりけるが、又後にハ何となく夜すがら泣いさつを、夜明てその由を云へバ都て知らずと云。夜な〳〵かくすること転有けれバ、祖母わびて、こハ謂ゆる半四郎が許へ行まほしがりて思ひ入たる故なるべし。よしや非ぬ虚事なりとも、男ならバこそあれ、我老女の身として、連行たらむには、人のあざけり笑はむもさて有べし、連行なむやと云フに、源蔵もさる事なり、いさ給へとて遣けるは、正月二十日になむ有ける。祖母ハ勝五郎をつれて、程窪村に至り、〔程窪と中野村とハ山一つへだてゝ其間一里半ばかりありとぞ。〕この家か彼ノ家かといふに、勝五郎まださき也まださきなりと云つゝ、先に立て行ほどに、此家なりと、祖母より先にかけ入る故に、祖母もつゞきて這入りぬ。〔是より前に勝五郎、程くぼの半四郎が家ハ、三軒ならびたる中の引キ入たる家にて、裏口より山につゞきたる家なりと云けるが、果して其ノ言の如くなりしとぞ。〕まづあろじが名を問ふに、半四郎と答ふ。妻の名をとへバしづといふ。半四郎夫婦は、かねて人づてに聞居たる事にハあれど、なほ祖母が物語を聞て或ハ奇しミ或は悲しみ、共に涙にしづみ、勝五郎をいだき上てつく〴〵と顔をうち守りて亡なりし藤蔵が六歳のときの面ざしに、よく似てありなど様々かきくどき居るに勝五郎懐かれながら、向ひの烟草屋の屋根を指さし、まへ方ハあの屋根無りし、あの木も無りしなど云に、皆その如くなれば、何れもます〳〵驚ける。半四郎が家の親族どもゝ寄リ来れる中に、久兵衛が妹の嫗ありて、久兵衛にさへ似たりと泣しほたれしとぞ。扨其日は中野村に帰りしが、其後も程窪へ行まほし、久兵衛の墓参りせまほしと云を、源蔵いひまぎらし、日を延て有けるに、廿七日にふりはへて、彼ノ半四郎をとこ、源蔵に近付にとて来りしが、勝五郎に程窪へ行ぬかと云しかば、久兵衛の墓参せむと悦びて、伴ハれ行て、その事とげぬとて夕さり帰りけり。かくて後ハ、父に半四郎がもとへ連行て、いかで彼ノ家と、親類の結びをなして給はれと云をきゝ受て、暇あらむ時に連行むと思ふほど、地頭より召れて参りぬと、父源蔵語りけり。

文政六年四月二十九日　　立入事負記

右異童のこと、或人の筆記を見たりし後に、地頭へ呼出され、吟味ありて、支配頭へ届ケ書出たるよし、其ノ写をも見たりけるに、屋代輪池翁の、なほ己にゆきて尋ねよと云るゝによりて、四月二十一日の日に多門主の、用人谷孫兵衛といふ人を訪ひて問きゝけるに、其日ハ勝五郎、父源蔵と、駒込の西教寺といふ寺へ、或人の計らひにて行たる由にて居合さず。谷氏にあらましを問て帰れるが、同人の計らひにて、翌二十二日に、源蔵勝五郎を連来りしかバ、屋代翁へも知らせたるに、翁も来らる。まづ妻と娘と嘉津間とに云ヒつけて、〔嘉津間と云はもと寅吉と云ひしが故ありて名を

改めたるなり。」色々とうらかしつゝ咄させたるを、物かげにて聞たれど、問洩せる事多かりけるに、二十三日に秋田なる我兄渡邉正胤の来れるに、国友能当風炮を持来りて、此をうつ状をまねび見せて在リけるに、かの谷氏の来りしかバ、勝五郎また伴ハれ来りぬ。さるハ此童子本文に事負が記せる如く、再生の事を人に問はるゝ事をいたく否みて、何方へも往ことを嫌ふ由にて、我が許へはじめて来る時なども、甚タすまへるを、しばしと云て連来れる由なれば、其ノ意を得てあながちにハ問はず。者どもに云つけて、只心まゝに遊バしめ、折を見て少かつゝ問たりしかバ、いたく心に叶ひて、終日あそび戯れて、今夜ハ御許に止宿てましなど云ひしかど、谷氏の方に、童子の帰りを待つ人ありと云ひ遣せたりしかバ、本意なく帰れる故に、けふまた来れるなりけり。此ノ日居リあひて見もし問もしつるハ、我兄なる人と、国友能当、五十嵐常雄、志賀綿麻呂、細貝篤資などなりき。斯て二十五日にも源蔵また勝五郎を伴ひ来り明日なむ郷へ罷れば御暇申さむために来侍りと云ふ。此日来相たるは、堤朝風、立入事負、国友恒足などなり。又さま〴〵にすかし拵へて、己と事負と嘉津間と三人にて問ふに、余人のきかぬ所にて語らむと云フまゝに、庭につれ出て、己いだき上て、なり菓物などとり与へつゝ、事負と能能とへバ、いともしどけなき詞にて、極めて小声にて語れる趣の条々を推問て、前後をとりつゞけて、事負が右のごとく書とれるものにてかつてこの記せる如く、首尾をとゝのへて語れるにハ非ず。此時物かげにて聞たる人々ハ、堤朝風、国友恒足、土屋清道、矢澤希賢などなり。少かも長びたる事なく、荒々しき遊びをこのみ、尋常の百姓の子に比べてハ、さどき方に見ゆ。雄々しき事を好みて、武士にならまほしと常に云フよし、既に谷氏の語れるに違ハず。太刀刀をこのみ、是をさして武士にならまほしと云へるによりて、大小の刀をとり〳〵取出て、ぬき放し見せなどすれバ、甚く喜ぶを、やがて長人になりたらバ是をとらせむに、物語せよと計りこしらへたるに依リて、然らバとて物語する事となりぬ。わざと僧等がことを尊き物にいへバ、いたく腹立きらひて、彼レ等は人を誑かし物をとらむと計るわろ者なりといふ。然も有べけれと死てのちハ、彼等に経を誦せて、地獄などへは行かず、極楽といふよき国へ生れむと思ふなど、色々よさまに執なしいへど、おまへ好ならむにハ心にまかせ給へ、我はきらひなり、極楽など云フことハみな偽りなりと益々嫌へり。凡て嘉津間が、始めて山より帰りし時のさまと、異にして似たるところあり。

○伴ひたる翁のこと、或人の記せるにハ、爺さまのやうなる人の来て云々とあるが、甚々ゆかしくて、坊様なりしかと問ふに頭をふる。然らバ我が頭のごときかと事負が問ふに、かぶを振リて、篤胤が頭を指さして、御前の頭のごとくにて、長く垂たりと云フ。また烏のこと樹にとまれるを指さして、あれと同じことにやと問へば、彼よりハ小さくて、眼ざしハ恐しかりきと云へり。按ふに世の諺に、死て往たるさきにハ、御前烏と、〔また目前烏といふ人もあり。〕云がありと云フも、旧く再生せるもの、又ハ蘇生せる者などの、然る事を語りたるが有リしを、語り伝へたるにや有む。烏と鵄のことに就てハ、おのれ年ごろ考へたる説もあれど、此にハ記さず。

（欄外）

篤胤云、此七月九日に、源蔵また先頃江戸へ出たりし時に参れる家々に礼を申さむ為に来れりとて勝五郎を伴ひ、姉ふさ兄乙二郎をも連来れり。折しも己ハ越谷へものせる程なりしかど、三夜ばかり我家に止りて在けるに、太田朝恭増田成則など留学せれバ、此翁のさまを委く問けるに、白髪を長くうち垂れ白き髭長く生たり。白絹の衣服の上に黒き紋ぢらしある袖の大きなる羽織のごとき物に、後に長く垂れたる上服を着て、くゝり袴を着し、足にハ外黒く内赤く塗たる丸き物の足の甲までかゝるを履たりしと云へりとぞ。

○父源蔵、勝五郎がいたく仏事僧等をきらふ由を語りて、去ぬる二十一日に、或ル寺へ往たるに、〔故ありて寺号をしるさず。〕茶よ菓子よともて囃し侍れど、寺の物ハきたなしと云て一トつだに食ハず、いたく心苦しき思ひをしはべり。彼が僧徒をかく悪ひ侍ることハ、去々年わが許に源七とて、すこしの縁ある者の病めるをおきて侍るに、それが死たる時に、弔ひ来れる僧の布施に、銭をつゝみて遣たるを、勝五郎見て、何とていつも門にたつ僧に物をあたへ、今またあの僧に銭をとらせたると問ふ故に、僧といふ者ハ、人に物こひて世す

ぎをする物ゆゑに、呉るゝことぞと申して侍れば、僧といふ者は、人の物をほしがる悪しき者ぞと申せるが、夫より後きらひに成りたるやうに覚え侍ると語るを、勝五郎きゝ果さず、イナ然にハ非ず、きらひなる故ありて、元より嫌ひなりと、言葉に力をいれて断りぬ。其ノ元より嫌ひなりと云ふ由を問ぬれども、憎きもの也とのミ云ひて、他事にまぎらハして答へざりき。

○源蔵また語りけるハ、勝五郎生れつきて少しも化物幽霊など云フを恐るゝ事をしらず。右申せる源七が病ハ、狂気にて侍りしかバ、別に放ちて小屋をたて入れ置たるに、死べき前になりて、顔色恐ろしげになりたる故に、姉兄などハ恐れて小屋のほとりへも近よらず。然るに勝五郎のみハ、彼ノ源七ハ間なく死べく見して哀なり、薬も食物もよく調へてやり給へ。いつにても我もち行て与へむとて、夜中といへども持行て与へ、死て後ハ、姉兄などは恐れて厠へも行がてにするを、死たる人の何か恐しき事あらむと少しも恐れず。また自分の死ぬと云ことをも、少か恐れずと云にぞ。勝五郎に、などて死ることを恐れざると問へバ、我を死たりと人の云ひし故に、死たると心付たれバ、亡骸も見えしかど、其時みづからハ、死たりとも思はざりき。其死たりと云フときも、人の見る目ほどハ苦しくハなき物なり。死てさきに居たるほどハ、腹飽きて暑しとも寒しとも思はず。また夜とてもさばかり闇からず。ありきにありけども疲るゝことなく翁のもとにだに居れバ、何も恐ろしき事ハなかりき。六年めに生れたると人ハ云へども、彼方にてハしばしの間と覚えたりと云ふ。また御嶽さまの死ぬ事ハこはい物でハないと宣へると語れるよし御嶽様とハいかにして見奉れると問へど例の他事にまぎらハして答へず。

○或人の記に、勝五郎をり〳〵、我ハのゝ様なれバ、大事にして給ハれといひ、また早く死ぬことも有むと云ひ、また僧に布施することハ、いとよき事ぞと云へるよし見えたり。また汝ハ仏道を信仰せるにやと問ふに、源蔵答へて云く。勝五郎が云ることハ、人に物を施すことハ、よき事なりと申したるハ聞て侍れど、其ノ余のことハ祖母に申したるか、我等ハ聞たること侍らず。さて己は仏道を深く信仰と申すにてハ無れども、父の時より乞食道心者などの門口に立があれバ、少つゝの施物を遣しぬ。是ハ後世を願ふなどの意にはあらず。只彼等が物を乞ふを憐れむのミなり。家内の者どもハ、朔望式日などに、鎮守ノ神に参詣し侍るを、己ハ日々に詣で神々をたふとみ、仏閣といへども縁あれバ詣でゝ、捨ることなし。然れども只今日の無事を祈ることをのみ心とせり。己が村の辺ハ、謂ゆる徳本が流の念仏講流行り侍れど、其講にも入らず。勝五郎が事をきゝ伝へて、出家たち弟子にせまほしとて、所々より申し来りしが、中にハかく奇しき童子を農人とせむこと、仏の罰やあらむなど申せるも有しかど、当人いたく出家をきらひ、己も好まざる故に、農人となりて宜からぬ者ならむにハ、我が子にハ生れ来まじきを、農人の己が子と生れ来つる上に、当人も出家をきらへバ、農人となさむも苦しからじと断りを立たりしかバ、其後ハ出家たちのこひに来る者なしと云へり。

○こゝに我も人も、しか産土神をねむごろにすと聞くにつけて思へば、彼ノ勝五郎を伴ひたる翁といへるこそ、疑なく産土ノ神にて在けめと云ふに、源蔵云く、其ノ事ハこのほど西教寺へものしける時に、彼所にても然云れたりき。或ハ其ノ翁をかの久兵衛ならむなど云ふ人もあれど、産土ノ神ならむと言ふにつきて、いさゝか思ひ当れる事のあるを、今日まで人に語れること無れど、深切に物とひ給へバとて、又云けらく。勝五郎が姉ふさと申すハ、今年十五歳になり侍り。去々年の事なりき。疱（庖）丁刀を失ひたることの有けるに、彼が母いたく叱りたるに其後また庖丁刀を失ひたり。此度ハます〳〵叱られむ事をおもひて、本居神熊野宮へ詣でゝ失ひつる庖丁刀のあり処を、さとし顕ハし給へ、然らバ百度詣し奉らむ、と祈りたりける夜の夢に、髪長く垂れて山伏と云ものゝ如き頭の、翁なる人枕上に立て、失ひたる庖丁刀は、それの処の田の草かげに、刃の上にむきて有むをとり来るべしと告たまへるに依りて、夙めて行て見るに、果してその如く在けりとて、取り帰りてのち、夜べの夢の告を、はじめて云々と語りはべり。其母これを聞て、こやつさばかりの物の失たらむに、本居神などに、こひ祈申すべき事かハ、いと有まじき事なり、よく〳〵其罪を謝して、とく賽しの百度詣し奉るべしとて詣させき。また其後ふさ、或日の朝さめ〴〵と泣うれふる状あり。父母その故を問ふに、さおとつ夜より、夜べまで三夜つづけて、いと悲しき夢を見たり。一ト夜ば

かりハ、思ハぬ夢を見るも常なるを、かく三夜つゞけて同じ夢を見しハ、神の御誨しなりけりとて、又さらに泣を、よく〳〵問へバ、さおとつ夜の夢に、また彼ノ山伏のごとき翁と、今一人枕上に来て、汝ハむかし悪き事したる男なり。今かくて有れど、能せずハ此家に在がたくて、苦しき目見るべしと告へり。されどおろそかに心得て在し、次の夜も夜べも、正しく同じ夢を見はべり。さて彼ノ山伏のごとき人ハ、何とも物のたまハず。今一人の男の、件の事を告たまひて、吾は蛇躰の者なりと曰へり。かゝる夢見しことハ徒事にあらじ、いかなる憂目をか見むと悲しくて泣なりといふに、元来さる跡なし事の夢見たるが心にかゝりて、又次々に同じ夢を見たるなめり、心になかけそとなぐさめ置たりき。其後勝五郎が物語に、髪を垂たまへる老人のしか〳〵と云ふが似たるを思へば、先に庖丁刀を失ひつる時に、山伏の如く見え給へる翁も、同じ類の神にこそおはすらめ。かく同じ趣なる事のありしを思ひ合すれば、娘がすぎにし夢の告も、今さら奇しく覚え侍りと語りて。さて今かく物語るに付てふと思ひよれることハ、己もと此ノ江戸の小石川に、夫婦住たりける時に、ふさ生れたり。其ノ処の本居神ハ氷川大明神なり。今一人の男の我ハ蛇躰の者なりと曰ひしハ、若くハ氷川大明神にもやおはしけむと、密に思ハると語るに、堤朝風その座にありて、是をきゝて云く、氷川大明神ハ龍体の神なりと云ひ伝ふる由は、早く聞居れりと云ふにぞ、益々に思ひ合せられたり。そも〳〵氷川大明神と申すハ、延喜の神名式に、武蔵ノ国足立ノ郡に氷川神社〔名神大月次新嘗〕とある社の神を、所々にうつし祝ひたるが多かる中の一ツにて、氷川神社の祭神ハ、一ノ宮記に素盞烏尊と見え、今もしか云ひ伝へて一ノ宮といふ。江戸砂子といふ物に、小石川なるも一ノ宮を勧請し龍女を祝へるよし見えたり。按ふに素盞烏ノ尊出雲ノ国簸川上にて八俣の大蛇を斬給ひしに依リて、彼処に樋ノ神社とて式内にてあり。されバ遠呂智ハ素盞烏尊に斬られたれば、その霊を使はしめと祝へるを龍女と誤り伝へたりけむ。さてこの武蔵国に、この御社のある由ハ、此国の国造は、成務天皇の御世に、出雲ノ国の国造より別ち定め給へれバ、其本国の神なる故に、樋ノ神社を移し祭れるなるべし。委くハ別に考へ記せる物あり。さて熊野ノ神も、まことハ素盞烏尊の御霊を祭れるなれバ、殊に由ありて覚ゆ。されバ勝五郎が再生のことハ、程窪村の鎮守ノ神ハ何神と云こと未聞ざれど、中野村の鎮守ノ神と御語らひ坐て、計らひ給へる事なるへし然るハ人によりて其生れたる所を去りて、他所に移リ住するも多かるを、さる人をバ本生の所の神と、今住する所の鎮守ノ神と、互に守護し給ふこと、己近きころ見聞つる正しき証のあれバなり。抑々かゝる事どもをさへに云フを、神の道を知ざらむ人ハ、心得がてに怪しみ思ふめれば、委く云ハま欲けれど事長けれバ此にハもらしつ。

○再生の事ハ、和漢古今にいとあまた聞ゆる事なるが、見識せまき漢意の学者たちの、此理をつや〳〵得知らで、有まじき事のごとく強説すめれど、前に鬼神新論を著して云へれバ、さる倫ハ今さら論ふにたらず。また仏者にはやゝ其ノ旨を得たる説どもゝ聞ゆれども、余りにさだし過て、なべて再生転生する事のごとく云フめり。誠ハ人の世に生れ出ることハ、神の産霊によりて一日に千人死れば新に千五百人生るゝ由縁なる中に、いと希々に、人を物とも、物を人とも、また人を人とも、再生せしめ給ふ事もあるなるを、仏者のその希なる事を常にとりて、然は論ふなりけり。さて然やうに再生転生せしめ給ふこともある物から、其事を再生転生の人ごとにハ知らしめざるハ、神の幽事の中の秘事なるを、いと希希に知しめ給ふこともあるハ、幽き由ある事とハ通ゆれども、凡人の何ちふ御心と言フことハ測り知るべき事にあらず。さて再生とハ云へど、前生を知ざりしかぎりは除て、正しく其前生を知りたりし事どもの漢籍に見えたるハ、晋の羊祜が前世ハ李家の子なるが、前に弄べる金環の在所を記臆（憶）せる。鮑靚といふ者の、前生に井に落て死たる事を記えたる。唐の孫緬といふ者の奴が、前生に狸なりし事を知れる。崔顔武といふ者、前生に杜明福といへるが妻なりし事を覚えたる類は、あまたの書に見えて数へも尽されず。人のあまねく知れる事なるが中に、勝五郎が事に思ひ合さるゝ事どもを記さバ、酉陽雑俎に、顧況といふ者、年老て十七歳になる一子を喪ひけるに、其ノ子の魂、恍惚として夢のごとく、其ノ家を離れざりけり。かくて其父悲傷止がたく詩を作りて、

「老人一子ヲ喪シ、日暮レ泣血ヲ成ス、心ハ断猿

ヲ遂テ驚キ、跡ハ飛鳥ニ随テ滅ユ、老人年七十、多時ノ別ヲ作サズ」と吟じけるを其ノ子の魂これを聞て感働し、もしまた人となる事あらバ、再この家に生れむと誓ひけるに、日を経て人に執へられて一処に至れバ、県吏のごとき者ありて、また顧況が家に託生せしむと思へる後は、すべて覚えざりしが、後に忽に心醒て、眼を開きて見れば吾が元の家にて、兄弟親愛ミな側にあり、然れども語ること能ハず。其生れたる後は、其ノ年を記えざりけるに、七歳になりける時、その兄戯れに批たりしかバ、忽に云けらく、我ハこれ汝が兄なり、何故に我を批つと云フにぞ。一家驚き異ミて問へバ、前事を叙るにいさゝかも誤らざりき。後に進士顧非熊と云へるハ是なりと見え、また増補夷堅志に、代州崞県に、盧忻といふ者あり。生れて三歳にして能言ひて其ノ母に告て云く。我が前生ハ回北村なる趙氏の子なるが、十九歳になりける時、牛を山下に牧ひけるに、秋雨にて草滑なりしかバ、岸下に墜たり。身を奮ひて起て見れば、一人ありて傍に臥せり。意に我と同じ牧子の墜たるならむと謂ひて、大にこれを呼ぶに応へず。久しくして此を見れば、すなハち自身なり。これに投らむと欲ふに入こと能ハず。これを捨むと欲ふに忍がたくて、左右に盤旋しけるに、翌日父母来りて慟哭するに、我これを告れども答へず。遂に火を挙て吾が体を焚く。そのとき我を焼べからずと云へどもまた応へす焚をはり骨を収めて去る我これに随はむと欲して、父母を見れば身ミな丈余にて、懼しき故に随ひ往こと能ハず。傍徨として帰なく一月余りも在けるに、忽に一老人ありて、我レ爾を引キて帰せしめむ、と云に随ひて行けバ、一ツノ家に至る。老人指さして此汝が家なりと云ひて此に生れしむこれ今の吾が身なり。我昨日の夜の夢中に往て、前身の父母に告たれば、明日まさに来て我を看るべし。我が家に一ノ白馬あり。かならず其に騎りて来るべしと云ふ。其ノ母これを異しみつゝ、明日門に候けるに、果して白馬を馳せて来者あり。児これを望見て欣び躍りて、吾が父来れりと云ふ。既に見て大に哭して其ノ旧事を詢ふに知ざる事なし。是より二家ともに其子を養ひけり、と有など甚よく似たる事なり。県吏のごとき者といひ、老人と云へるハ、唐土にも城隍廟とて、産土ノ神のごときを、所々の鎮守と祀りて在れバ、其ノ神なるべく覚ゆ。そも〳〵再生のこと、和漢にいと多かるを、弘く採並べて考ふるに、顧況ハ長子の顧非熊と生れ、趙氏が子の盧忻と生れ、程窪の藤蔵が今の勝五郎と生れたるなどハ、本居ノ神漢国にて謂ゆる城隍神のわざと知られて、正しく聞ゆれども、此ノ外に、妖魔のわざと、再生転生せしむる事ハ殊に多かり。こは古今妖魔考と号たる書の中に別に委く論ひ置たり。さて大かたの人の妖魔に率られざるかぎりの魂ハ、其ノ所々の鎮守ノ神の掌りて、かもかくも治むる事と思ハるゝが中に、其道の上首たる神霊の、幽に鎮まる所に帰して、其ノ治めを受るも多かりと知らる。そハまた漢籍どもに、宋の王曽字ハ孝先といふ者の父が、年の高きに孔子の神霊夢に託して、曽参を生れしめて、門戸を顕さむと云へるが、幾ならず果して男子を生りしかバ、王曽と名けたるが、後に宋の宰相となれる。宋ノ高宗が夢に、関羽が霊あらはれて、張飛を相州岳家の子に生れしむる由を託せるに、岳飛が父の夢に、張飛託生すと見て、男子を生たる故に岳飛と名けたるなどの類ハ、その上首たる神霊の所に帰して在しが、再生しつるなること疑なし。

○世人の死て往なる幽冥の事の本ハ、神世に天照大御神、産霊大神の詔命によりて、杵築大社にしづまり坐す大国主神の、無窮に治め給ふ御業なることハ、神典どもに委しく記し伝へて明なるを、なほ其ノ古伝に本づき熟々に推究め考ふるに、そハ幽冥の事の大本を統領給ふにこそあれ、末々の事に至りてハ、神々の持分けて掌り給ふべき理あり。さるハ凡てこの現世の上に大君おはし坐て、御政事の大本を統治め給ひ、国々所々をバ、そを分ち司る人々を任して、治めしめ給ふが如く、幽冥の事の大本ハ大国主神統治め給ひ其ノ末々はまた国々所々の鎮守ノ神、氏神、産土ノ神など世に申す神たちの持分けて司たまひ、人民の世にある間は更にも云はず、生れ来し前も身退りて後も、治め給ふ趣なり。其を細密に説はむハ言長けれバ此にいはず中ツ世よりこなたの古事の証となるべきを、一トつ二タつ記しいでば、古今著聞集神祇部に、仁安三年四月二十一日、吉田祭にて有けるに、伊予ノ守信隆ノ朝臣、氏人ながら神事もせで、仁王講を行ひけるに、御あかしの火障子にもえつきて、其ノ夜やけにけり。大炊御門室町なり。その隣ハ民部卿光忠ノ卿の家なり。神事にて

有ければ、火移らざりけり。恐るべき事にやと見え〔吉田ノ社ハ藤原氏の氏神なり。〕また藤原重澄若かりける時に、兵衛尉にならむとて、稲荷の氏子と有ながら、加茂に仕へ奉りて、土屋を造進したりけり。〔稲荷は神名式に山城ノ国紀伊ノ郡に稲荷神社三座並名神大月次新嘗とある御社を申せり。三座ハ中座宇迦之御魂神、左右ハ猿田毘古神、大宮能売ノ神なりと書どもに見えたり。加茂ハ同式に愛宕郡に加茂別雷ノ神ノ社名神大月次相嘗新嘗とある社なり。〕厳重の成功にて、社家推挙しければ、外るべきやうも無りけるに、度々の除目に漏にけり。重澄社の師なる者に申し付て、除目の祈請させける間に、まとろみたる夢に、稲荷より御使に参りたる者あり。人出あひて是をきくに、かの御使の申けるハ、重澄が所望殊更に任ぜらるべからず。我が膝元にて生れながら、我を忘れたる者なりと申けれバ、申次の、大明神に申し入るゝ由にて、度々御問答ありけり。さらバ此ノ度ハなされずして、思ひしらせて、後の度の除目になさるべしと申しければ、御使帰りぬ。師おどろきて急ぎ重澄がもとへ行て、此由を語りて奇しむ程に、其夜の除目にハはづれにけり。此夢の誡をしらむが為に、稲荷へ参りて、次の度の除目にハ、申しも出さゞりけれども、相違なくなされにけりと有り。かゝる心ばへのことなほ何くれの書どもに見えたり。これらの事どもを思ひわたして、鎮守ノ神氏神などの、其ノ所々の人を持分けて治め給ふことを弁へ、寛平七年十二月三日の官符に、諸人ノ氏神多ク畿内ニ在リ、毎年二月四月十一月ニ何ソ先祖ノ常祀ヲ廃セン。若シ申請フ者有ラハ直ニ宦宣ヲ下サン。とありて氏神の祀を大切にすべきよし勅へる例にならひて、産土ノ神の祀りを大切にすべき物なり。また塵添壒嚢抄にも、神に仕ふる心向の事を論ひて、まづ其所の神明に慇懃に奉仕して、その余暇にハ他所の霊験をも仰ぐべし。其趣きハ神宮雑事といふ秘記にも、人間の例を引て、我が主をさし置て他人に随ふに譬へたり。何の故にか白地にも我が神をさし置て、他所の利益を仰ぎ奉らむ。もし他所を伺ふとも、主君を背きて他所に参るは、不当なりと覚し食すべし。然れば狭小の所におハすとも、其恩徳を忽にすべからず。社の損ハれたらむにハ何なる弊衣をまとひ着ても餓死せむを期として奉仕すべきなり。〔今案ふに、世に仏の事としいへば、弊衣をまとひ命をもかけて、物する人多かれど、我が身の本たる神の事に然する人のなきこそいとも〳〵悲しけれ。〕もし当所の神、不信の者の失を咎めて祟りおはし坐さバ、いかに憑み奉るとも、他所の神さらに助け給ふべからず。若余社の祟ハ、我が神の恵みにてハ宥め給ハむ。此ノ心をもて仕ふべきなり、と云へるハよく神の情状を窺ひ得たる説にて、法師にとりては殊に感べき論ひなり。なほ此ノ因に法師の中にもたま〳〵に情ありし倫をいはゞ、新拾遺集の神祇に、法印源深、「後の世も此ノ世も神にまかするや、おろかなる身の頼なるらむ。」〔同集に、藤原雅朝朝臣「さりともとねても覚ても頼むかな、おろかなる身を神にまかせて」、続後拾遺集為世卿の歌に、「後の世も此ノ世も神のしるべにて、おろかなる身のまよはずもがな」、とあるも同じ心ばへの歌どもなり。〕また無住法師が砂（沙）石集に、三井寺の公顕僧正と申し候ハ、顕密の学匠にて、道心ある人と聞えければ、高野の明遍僧都、その行業をゆかしく思ひ、善阿弥陀仏といふ遁世者をかたらひて、彼ノ人の行儀を見せられける。善阿かの坊へゆきて、高野ひがさに脛高なる黒衣きて、別やうなりければ、しか〳〵と申入たりければ、高野ひじりと聞て、よび入れて通夜物語せられけり。さて其朝浄衣をき幣をもちて、一ト間なる所の帳かけたる所に向ひて、所作せられけるを、善阿思ハずの作法かなと見けり。三日が程かはる事なし。さて事の体能々見て、朝の御所作こそ異やうに見奉れ、いかなる御行ひにかと申ければ、進ミても申たく侍るに、問たまへるこそ本意なれ。都の中の大小の神祇ハ申すに及バず。辺地辺国までも聞及ぶにしたがひて、日本国中の大小の諸神の御名をかき奉りて、此ノ一ト間なる所に請じ置奉りて、心経神呪など誦して、出離生死の要道を祈リ申すの外別の行業なし。我国は神国として、我等のなかの孫裔なり。気を同くする因縁浅からず。此ノ外の本尊をたづねバ、還て感応へだたりぬべし。仍てかくの如くの行儀ことやうなれども、年久しくしつけ侍ると語らる。善阿誠にたとき御意楽なりと随喜して、帰りて僧都に申ければ、智者なれば、おろかの行業あらじと思ひつるに合せて、いみじく思ひはかられたりとて、随喜の涙を流されけるとぞ。青ハ藍より出て藍よりも青きが如く、仏より

出て仏よりも尊きハ神明の利益の色なり。彼ノ僧正の意楽かゝるおもむきにこそ、心あらむ人かの迹をまなび給ふべしとあるハ、共に情ある法師たちなりけり。然ハあれど、かく神の仏にまされる御徳はかつ〴〵弁へつゝも、なほ仏者にて終りけるこそ哀なれ。さるハそのかみいまだ真の道の学びも委しからず、世にあまねき仏教も捨がてなるが上に、その仏経とてもてはやせるも多くハ後世の杜撰なりとしも思ひたらず。其ノ垣内に迷惑して、神を仏の垂跡と思へる故の失にぞ有ける。さて嵯嚢抄に、白地にも我が神をさし置て、他所の利益を仰ぎ奉らむ、もし当所の神不信の者を咎めまさバ、他処の神をいかに憑み奉るとも更に助給ふべからずと云へるハ然る言ながら、物部ノ大連尾輿、中臣ノ連鎌子の仏を退けむとせる時の語に、我カ国家者恒ニ天地社稷百八十ノ神ノ祭ヲ以テ事ト為ス。改メテ蕃神ヲ拝マバ、恐クハ国ノ神之怒ヲ致サム、と云れたる大なる理をバ得思ひたらで、なほ仏にも諂ひて、僧にて世を尽せるハいと哀なり。〔また物部の守屋ノ大連中臣ノ勝海ノ連の語にハ、何ソ我カ国ノ神ニ背テ他神ヲ敬セム也、由来、斯若キ事ヲ識ラズ矣ともあり。蕃神といひ他神といへるハ仏のことなり。〕また無住法師が、心あらむ人は、公顕僧正の迹を学び給へと云へるハさる説ながら、旬子なる譬を引キて、神を仏より出たる垂跡なりと思へるハ、法師の常の心ながら、実にハ国土人民草木ハさらなり。釈迦も達磨も猫も杓子も悉皆神の垂跡にて、神ハ万づの本地としも知ざるハ、いとも憐れむべき事なりかし。抑々仏を本地、神を垂跡といへる説は、林羅山先生の語に、其異端、我ヲ離レテ立難キヲ以テノ故ニ、左道之説ヲ設ケテ曰ク、日ノ神ハ大日也、或ハ其ノ本地ハ仏ニシ而垂跡ハ神也ト。時之王公大人信伏シテ悟ラズ。遂ニ神社ト仏寺混雑シテ疑ハ不ラ令ルニ至ル。書ヲ読ミ理ヲ知ル之人ハ少ク覚シツ可シ也。庸人ノ為ニ之ヲ言フニ非スと云れたるが如し。然るを法師ばらハ更なり。世の痴人らも、仏ハ本地、神は垂跡と常言にいへど、もし此ノ言のごとくハ、神は仏の心任になるべきに制すること能ハず。仏祖その身をはじめ、神の随意に人身を造しめて、魔てふ名を専と負するばかりの悪物をつけて婬情あらしめ、其ノ物ゆゑに修道をさまたげ悪道におとすや。仏祖もかの一物ありしことハ、妻を三人もちて子をも三人生せたるにて論ひなし。彼一物のあるが故に婬欲の心のあるなるを、其を神の産霊のまに〳〵造らしめて、僧道に不婬の戒を立たるハ、深井を堀りて水の出るを憎むにひとしき痴態ならずや。此ノ一トつをもても、神は天地万物の本地なることを弁ふべし。此ハいともをさなき論なれども、世の痴人らに示せむと、古今妖魔（魅）考に委しく記せるを因にいさゝか其ノ端を記しつ。さて勝五郎がことの如きも、法師たち、また法師ならぬも、仏意にしみたる人々ハ、くさ〴〵其ノ方ざまに思ひよせて、仏経説の証となさま欲がり、旧くも今もかゝる事としいへば、仏の異験のごとく心得て、其ノ事を記すにも、しひて其ノ趣にかき取らむとするハ常なれども、凡て天堂地獄再生転生因果報応などの趣は、その伝への精粗こそハあれ、何れの国にも本より有来し事にて、仏祖のはじめて云ひ教へたる説にハ非ず。また元より仏に係れる事にも非ざるを、たゞ元よりある事実に、くさ〴〵附会の説を増して、仏経どもの次々に多く出来れるなるを、然る本の由をバよくも尋ねず、多かる経説のかたへを見て迷惑したる、世の仏学者たちの失にぞ有ける。そハいまだ仏説のワたり来ざりし以前の、和漢の書の古事を委くよミ味ひて思ひ弁ふべき事ぞかし。

文政六癸未年五月八日

伊吹廼屋のあるじ記

上ノ件の如く論ひとぢめてハ有れど、なほ足ずまに、産土神の事につきて、また近ごろ見聞たる事の、思ひ合さるゝ事どもを、二タつ三つ記しつぎてむ。倉橋與四郎ぬしの来まして語られけるハ、文化十二年の事なるが、小石川戸崎町なる、石屋ノ長左衛門といふ石工の弟子丑之助といふ者、おもき瘡毒をわづらひて、医師らも愈るまじき由をいひしかバ、此ノ男元よりいみじき大酒飲にて有りけるが、讃岐ノ国象頭山の神に立願して、酒を禁けるに、然ばかり重き病のやう〳〵に愈けり。然るに元より酒は何よりも好物なる故に、得禁じがてに、折々ハ酒しほと号けて菜物にひたし、飲ことなども有しとぞ。〔因に記す、讃岐ノ国象頭山と云フは、彼ノ山の別当、金光院正伝の秘事として記せる物を見るに、元は琴平といひて、大国主ノ神の奇魂大物主ノ神を祭れりしを、天竺の金毘

羅神といふに、形勢感応似たる故に、混合して金毘羅と改めたる由見えたり。こハ比叡ノ山に大宮とて、三輪の大物主ノ神を祭りて在けるに、かの金毘羅神を混合せるに倣ひてにや。然ればこそ金光院の秘書にも、出雲ノ大社、大和ノ三輪、日吉ノ大宮の祭神と同じといへり。なほ此ノ後に白峯より、崇徳天皇の御霊を遷して配祭せるよし、正に聞たる説ども有れど、書に見えたる事無れバ、今ハ漏しつ。されど此ハ世ノ人の口実にもあまねく云フハ、やがて神の御心なるべく覚ゆれば、其ノ正説の世に知らるゝ時もこそあらめ。然れバ金毘羅とまをす名こそ仏なれ。神実ハいともやごとなき神に御坐せば、おろそかに思ひ奉るべき事にハあらずかし。さて俗の神道者修験者など云ふ輩の、金山彦命といふは、金ノ字より思ひ付たる杜撰にて、さらに謂なき妄リ事なり。」かくて其ノ年の九月十日は、例のごとく処の鎮守氷川大明神の祭日なりしが、其前日に処の若者ども、かの丑之助男に云へるハ、和主ハ狂踊を上手なれバ、例のごとく明日はかの踊をせよと云ふに、丑之助云けらく、我ハ瘡毒にて愈まじかりしを、金毘羅ノ神に立願して、酒を禁たりしかバ愈たることハわぬしらも知るごとくなり。酔のしれ心ならで、彼をどりせらるべきかと云フに、皆々云へるハ、明日ハ鎮守ノ神の祭リなれバ、常とハ異なり、酒もの、ミ踊もせよと強にいへバ、丑之助男もげにもと云て、当日ハ朝より友どちと酒飲ミ遊び、酔狂れて在リけるに、巳ノ時ばかりより、忽に大熱さして、あらあつや堪がたや、金毘羅さま免しおはしませと云フに、皆々驚きて如何と問へバ、庭の空を指さして、人々にハ見えざるか、金毘羅さまのあれにおはし坐すものをといふ。皆々見れど、目にかゝる物もなければ、如何なる御有状にておはし坐ぞと問ふに、丑之助火のごとき息をつきて、御神ハ御黒髪長く垂れて、冠装束を召れて、雲の上に立たまひ、いとあまたの御供つき従ひ、爪折の緋がさを差かけ奉り、御前に鬼神のごとき力士ありて、その仰せを承ハり、汝が病きハめて愈まじかりつるを、強に祈り申せる故に愈し給ふ所なり。然るに折々ひそかに、少づゝ酒を飲たるだにあるに、今日は朝より思ふまゝに酒飲て、酔狂るゝこと、憎く思食すによりて、手足の指をミな折しめ給ふ由なり、と言ひもはてぬに、早うつ伏にふして、免し給へと、大汗を流して泣叫ぶ有さま、物の為におし伏られて、其ノ足の指を折るゝ状にて、恐ろしなど云むもおろかなり。然れども若き者ども心を励まし、諸ともに引起さむと立よるに、物に投らるゝ如く覚え、うち倒されて近づくこと能ハず。その有さまいと物すごく恐しけれバ、日比は鬼をも挫ぎてむと競ひたるをのこども、皆逃のきて慄き居たるに、片足の指ハミな折たると思ふほどに、丑之助また、鎮守氷川明神入らせ給へりと云て声をあげ、この御罰を救ハせ給へと叫びけるが、稍ありてまた、多久蔵主稲荷来リたまへりと云ヒて、人々に近よること勿れと制しつゝ、起直り畏まりてしばし在けるが、腹這ながら庭に出てひれ伏し、神々を送り奉る状しけるが、物狂はしき状ハ止たり。かくて人々うち寄て其ノ由をとへバ、金毘羅ノ神の怒り給へる御気色、申すも中々恐ある御事なるが、雲の上に坐まして、我が方を流し目に一ト目見返り給ふごとに、我をおし伏たるかの力士、己が足の指を一づゝ折たり。左リの足の指ハミな折たると思ふほどに、鎮守ノ神、これも供人あまた供して、束帯にて入らせ給ひ、金毘羅ノ神に向ひて宣へるハ、此奴、その御前に祈白して酒を断たる故に、病を愈し給へることを忘れ、今日いたく酒飲たるを祟め給ふハ然ことながら、元より我が氏子として、殊に己が祭日なる故に我をなぐさむる態仕むとて、人々にそゝのかされて、酒ハたうべたるなり。然れバ免し給ふかたも有むを、たとへ祟め給はむにも、一応我にその事を宣ひてこそ、兎もかくも罰め給ふべきワざなめれ。然る事もなく、我が氏子を思召すまゝに、御罰あらせらるゝ事こそ心得られねと宣ふにぞ。金毘羅ノ神けにもと思召せる御有状ながら、何のいらへもなく、互ににらみ相ておはしける処に、伝通院の多久蔵司稲荷ノ神来り給へり。此ハ僧体のごとく見え給ふ。浅黄の深頭巾をかぶりたるが、〔案にこの稲荷ノ神のことは、其ノ縁起を見るに、当社は駒込吉祥寺、和田倉御門の内に有し時より、其ノ地に鎮坐ありしが、伝通院の中興廓山上人の時に、学寮に極山和尚といふ所化あり。元和四年四月ある夜に、山主上人を始め、極山和尚、同学の僧の夢中に、一僧見えて入学せむことを思へバ、明朝登山すべしと告あり。翌朝極山和尚の寮へ、一僧来りて謁見あり。此ノ事を山主へ申せば、夢に合せて不思儀なることに思ひ、入寺

を許して、多久蔵司とぞ名づけられける。然るに多久蔵司の智徳他に勝れ、諸人尊敬しけるに、其ノ後三箇年の学席を経て、或ル夜の夢に、我は誠は吉祥寺なる稲荷ノ神なり。小社を作り給ひてよ、永く当山の守護神となるべしと誨し、白狐の形を顕はして去ると見しかバ、境内に鎮座するよし見えて、狐神を祭りたるなるが、人の稲荷と名づけて祭る故に、みづからも稲荷と名告なりけり。実ハ稲荷ノ神あに狐ならむや。こハ別に委く考へ記せる物あり。さて此ノ狐神の僧体なりしと云フこと、いかにぞや思ふ人も有べけれど、伊勢ノ国にて、或ル男に老狐のつきて、種々の事ども語りけるに、稲荷と号けし狐神ども、俗家に祭れるハ俗形なるが、寺に祭れるはみな法躰にて、各々其主人の格位によりて、狐神の格位もそなハる事ぞと云へるよし、小竹真棹にかねて聞たるに符へり。〔御二方の間に平伏して、いたく恐慎める状にて申すやうは、己は伝通院の多久蔵主にはべり、金毘羅宮の御怒り、氷川明神の仰せともに　ありて承り候。かく承り候も、元こやつが怠より事起り侍れバ、とにもかくにも罰め給ふべきを、此奴をり〳〵我が許へも詣で来て、身の上の事を祈りつるを聞たもち侍れバ、此所へ参り侍り。いかで御双方の御怒りハ、我等に給ひて、こやつが罪を免し給へ。さらバ我等相計らひ、金毘羅宮の御許へハ、こやつを賽しに参詣しめ奉らむと申されしかば、二柱ノ神はそれに御心を和し給へるさまにて、互に式代して、いつ〳〵しく立別れ給ひつと、大息つき振ひわなゝきてぞ語りける。かくて左リの足の指三本ハ、骨うち折れて痿れけり、人々始メよりの有状をよく見たりければ、恐怖るゝこと限なく、打よりて路用をとゝのへ寿へて、丑之助を象頭山の御社に参詣せしめけるに、折たる指も本のごとく愈りしとぞ。然れば産土ノ神の守護あるにハ、他ノ神のたゝりも遁るゝ事あるにや、と語らるゝに就て、おのれも云けらく。松村完平が物語に、大坂に声いと善くて、今様の長謡といふ物を謡ひて業とする男ありき。或日ものへ行く途にて、山伏体なる男あへり。行違ひながら、そなたの声のめでたきを、しばし我に借てよと云フを、道行ぶりのされ言と思ひて、笑ひつゝ唯といひて行過けるが、三日ばかり有リていたハる事もなきに、ひしと声かれて出ず。されど彼ノ異人に声を借たる事につゆ心つかず、住吉ノ神社は産土ノ神なれバ、祈らむと思ひて出行ける途にて、また彼ノ山伏体なる人来りあへり。先つころ我が請へるごとく声を借ながら、そを忘れて、産土ノ神に申し祈らむとするこそ心得られね。汝かしこに祈らバ、決めて我を罪し給はむ。然もあらば、我また汝にからき目見せむ物ぞ、然らむよりハ、しばしの間なれバ、まげて借てよと云ふに、始めて先に声を借らむと云ひし時に、唯しつる事を思ひ出して、卒に恐ろしくなりて、決めて産土ノ神に祈るまじと、堅く約りて途より立帰りけり。さて三十日ばかり有リて、物へゆく途にて、また彼ノ異人行逢けるに、其方の声は今返すべし、受取てよと云ふに、はや声本のごとくになりぬ。斯て異人この報を為べしとて、呪禁のわざを授たるが、万づの病に験ありて、後にハ謡うたひの業を止めて、此ノ呪禁のみして、世をやすく送りしと云ひ。〔案に声を借たりと云フこと、疑ひ思ふ人も有べけれど、上総ノ国東金といふ所の、孫兵衛と云し者、異人に口と耳とを借られて、三年がほど耳しひ唖になりて在し例もあれバ、准へて弁ふべし。此孫兵衛がことハ別に記せる物あり。〕また今井秀文が、或侯の語り給へるを聞て語れるハ、其ノ侯の治たまふ所の或童子の、異人に誘ハれて行方しれざりしかバ、両親いたく泣歎きて産土ノ神に祈りけるに、四五日ありて、帰り来たりて語りけるハ、伴ハれたる処ハ何処とも知らぬ山なるが、異人おほく居て、剣術などならひて在しが、折折酒を飲かハす事もありて、其ノ盃を、とほく谷を隔たる山の頂などに投て、そを取来れといふ故に、我いかで取得むと辞むに、怒りて谷底におし落したると思ふに、何の事もなく忽に其ノ山に至り、盃をとりて異人たちの前に至る。凡てかゝる状に役ハれたるが、昨日の言に汝が親どもの、ねむごろに願へバとて。産土ノ神の、とく汝を返すべしと申さるれバ、留がたしとて送り返されたりと語れるとぞ。また備後ノ国なる、稲生平太郎といふ者の許へ来れる、山本五郎左衛門と名告れる妖物と、平太郎が応対せる時に、産土ノ神身を顕はして、平太郎にそひ守られける故に、平太郎その妖気に痒ざりし事あり。これらを思ふに、妖物の人につきて、禍害をなすが如き小事ハ産土ノ神たちの主と掌り守護り遂退たまふ御事なり。さればとて、其神を信申さゞらむ者ハ、おの

づから御守護も厚からざる趣あり。この心バへを覚るべき事なり。已この説を述て、寅吉に問試みけるに、「こハ幼きときより、神仙の使はしめとなりて、奥山に年ごろ在たりしものにて、神の情状を窺ひたる者なればなり。此がことハ仙境異聞とて、別に委しく記せる物あり。」答けらく。誠に言ふごとく、山にても其ノ事をきゝて侍り。妖魔にまれ何にまれ、産土ノ神のあつく守護たまふ人にハ、禍事をなすこと能ハず。適に神の守護なき間を伺ひて勾引たるも、親などの丹誠をこらして神に祈るときは、返さでハ叶ハぬものとぞ。然れど殊によりてハ、其ノ界の事を世に漏すまじき為に、痴人のごとくなして返すことも多かり。神の御力にもさる事までハ、制し給ひがたき事もあるにや。又いかに丹誠をこらして祈れども、帰らぬ人もあるハ、神どち相議りて、召寄せて使ハしめ給ふことも有げなれバ、祈りて験なき事もあるべしと語れり。此ノ言につきて、また思ひ合さるゝ事なむ有リける。そハ我が許に来通ひて物問ふ、野山又兵衛種麻呂といふをのこあり。家ハ江戸南鐳町といふ所なり。これが子に多四郎といふあり。十五歳にて文化十三年のころ芝口日蔭町といふ所なる、萬屋安兵衛といふ者ハ、多四郎が母の甥にて有けれバ、其が所に滞留しけるほど、失ちて釘をふミ貫き、病臥して在けるに、五月十五日の事なり、既に燈火をともせるころ、痛む足にしひて木履をはきて、裡なる便所に立ながら尿して居けるが、アツと叫ぶ声しける故に、家内より出て見るに、多四郎ハ見えず、衣服の片袖ちぎれ落てあるに、其はきたる木履屋ノ上におちたり。人々おどろきて声々に名を呼ハれど音もなし。されバ是ぞ天狗の伴ひたるなめりと。人を走らせて父又兵衛が許へ告おこせたり。又兵衛いそぎ行て有リける趣を尋ぬるに、安兵衛が同じ長屋の者ども、頼もしく打よりて例のごとく、太鼓鉦など打て、呼に出むと噪ぐほどなり。爰に又兵衛云けらくハ、此はまさに謂ゆる天狗のわざと覚ゆれバ、常のごとく呼たりとも出べくも非ず。いたづらに、人々を労し参らせむこと、心苦しけれバまづ止まり給へと云ふに、噪ぎ立たる倣ひにしあれバ、止まらず出行ける。又兵衛ハ家に帰りて、家内の者どもの泣倒れて在けるに其由を委しく語り、我今祈り返してむ、勿泣そとなぐさめて、髪かき乱し井辺に行キて水をあみ、二階なる神の御欅の前に畏りて、既におのが教へ置つる意ばへもて、祝詞申せりとぞ。其ノ申せる趣はまづ龍田ノ神に、今天神地神に祈り申す事を、御耳いや高に、疾く聞え上たまへと云フことを、返々祈り申して。さて、天津神千五百万、国津神千五百万の大神たち、辞別てハ、幽事しろし看す大国主大神、産土ノ大神の和魂ハ静まり荒魂は悉くにより給ひて聞し食せ。我卑しくも、深く神世の道をたふとみ、神の恩頼をかたじけなミ、心を正しくする事ハ更にも云ハず。一日も神拝おこたる事なく、祈り信奉りてあるに、今わが子にかゝる災害ありてハ、憑なきことに侍り。かつは痴者どもが、後指さゝむも恥かし。されば奴吾が恥ハ神の道の恥ならずや。明日とハ云ハじ、今速く我が子を返さしめたべと、大声に諄かへし〳〵汗水になりて、をどり上り〳〵、三時がほど祈り申したるとぞ。余りに祈りこうじて暁かたになりて、物のほしくなりけれバ、階子を下りてみづから飯櫃とり出て、飯二椀くひける所に、周章しく門をたゝく音す。誰ぞと問へバ、安兵衛が許より来れり、多四郎今帰りつ。されど気絶て見ゆれバ、早く来り給へと云すてゝ立帰りぬ。又兵衛いたく歓び、神々に謝申して、近きわたりなる医師を伴ひ、いすゝき走りて、安兵衛がり行て見るに、多四郎は死たるが如くなるを、人々とりまとひ、名を呼て有リ。まづいかにやと問ふに、長屋の者どもの尋ねに出けるのち、家内の者ハ、たゞあきれ果て顔見合せ居たるに、七ツの鐘うつころ、長屋のうちぐわら〳〵と震動して、空より此家なる門口に、したゝかなる物をうち付たる如き音すると等しく、ウンと云ふ声す。おどろき急ぎ戸を開たれバ多四郎なり。やがて庭にころび入リて、かく現心なしと云にぞ、面に水そゝぎ、医師に気付の薬など含めしめて、やゝ身動きするを待て、多四郎いかに心を慥にもちてよ、父なるハと三声ばかり呼けるに、くわと眼をあきて父を見つけて、あら辱なしや、今帰り来れることハ、偏に父の御恵なりと云ふ。其ノ由ハと問へバ、恐ろしさに、今ハ語りがたしと戦き云にぞ、さも有べしとて、労ハり寝しめけるに、二日二夜ばかりは疲れ寝けるが折々目をあきて、アラ恐ろしかりしとぞ云ひける。かくて正気になりて後に、能々問へバ、かの夜痛き足を爪立て、何心なく尿して居けるに、何処よりとも知らず、大男の髪を

垂たるがつと来りて、いさと云ひさま、厳しく腕をとれる故に、ふり放ちたれば、小ざかしとて、両手にて首筋をとらへて、屋ノ上より空に上りぬ。今ハ叶ハしと息をつめて有リけるに、たゞしばしの間に何処かしらぬ清げなる山に至れば、寺のごとき所あり。其ノ時ハすでにこゝハ日暮たりけるに、彼処に至れバなほ明き頃なりき。眼をあきて熟見めぐらせバ、物すさまじきこと云むかた無れば、よくも見留ざれど、山伏のごとき人また法師、或ハ俗形の人なども並居たる中に、上座なるハ別に眼ざし恐ろしき老法師なりき。かの伴ひたる男末座に我を具して、しひて頭を低させたり。此ノ時我のミならず、十二三歳なる童子を、二人伴ひ来れる男どもありき。此所ハかならず天狗の住所なるべく思ひて、泣悲みつゝ、返し給ハれと、声をたゝず額突けるに、かの伴へる男、わが頭をおさへて、ダマレ〳〵と頻にいふを、耳にも聞入れず、操返し云ひしかと、ふと頭を上て、上座の老法師を見れバ、甚く恐れたる状に頭をかたむけ、心耳をすまして、何やらむ聞をる体なりしが、我を伴ひたる男に、童子らを用ふる事ありて、彼をも伴はしめたれど、彼が父の神たちへ厳しく祈り申す声、遠音に聞ゆれば、やがて神のおほせ有べしと云ふにぞ。始めて我も耳をすまして聞けバ、父の神を祈り給ふ声、風にひゞきてよく聞えたり。伴ひたる男の、我にダマレと頻に云ヒしハ、老僧の耳ひき立てきゝをるに、我がもの云ふ声の妨となればなりけり。さて老僧のかく言を頼みに、なほ帰し給ハれと返す〳〵言ふに、並居たる中に、年のころ五十歳余りに見ゆる人と、二十四五歳に見ゆる人と並びたりしが、五十歳余なる人手をつきて、是ハ我等がゆかりの者に侍れバ、いかで返し遣たまへと願ひけるに、老僧我に、さらバ帰るべしと云ふ。我何として、独は得帰らむと云へバ、彼ノ伴ひたる男に、送りてとらせよと云ふに、彼ノ男すなハち我を引たてゝ、大空に上りたるまでハ覚えたれど、其後ハしらずとぞ語りける。多四郎が母また安兵衛も、この事をきゝて、その五十歳余りと見えし男のありける形容を委く尋ねて、大きに驚きて、母がいへるハ、今より二十年さき、寛政九年の事なりき。我が姉聟なる萬ツ屋万右衛門といふ者、その頃はいさらご台町といふ所に住き。すなはち今の安兵衛が父なり。九月二十四日の夕つかた、安兵衛が弟に藤蔵とて、七歳なりける子を連て、芝の愛宕山へ詣たるが、往方しらずなりぬ。銭弐百文より外に、つゆの物も持たず出たるに、幼き子をさへに連たれバ、旅に出べくも非ざるに、遂に帰らずなりぬ。其ノ後巫に口をよせて問けるに、今ハ二人とも、人の得見ざる所に使ハれて帰ること叶ハす。折々そなたの人々を見れども、詞をかはさぬ定めなれバ、さて在るなりと云へり。齢のほど其ノ形容をもて考ふるに、五十歳余かと見つるハ、決めて吾兄なるべし。また二十四五歳と見えしハ、藤蔵が成人になれるなるべし。然らバ多四郎がをぢと、いとこなる故に、ゆかりの者とハ云へるならむと云へバ、人々も殊にいたく驚きて、誠に其なるべしと思ひ合せけり。さて其ノ後ハ多四郎、龍田ノ神をことに信じ奉りて、一日も拝を闕ことなしとぞ。此は又兵衛安兵衛をはじめ、其ノ時の事を、目のあたり見たる者どもの、委しく語るを、なほ反さへ問証したる趣なり。さて案ふに、安兵衛が家を燈火つくる頃に誘ハれ出て、行つきたる所の、なほ明かりしと云へバ、百里余りハ西にあたる国なりけむ。然るを江戸にて祈れる父が声の聞えたりと云フを、神の道をしらざる人ハ、いと有まじき事と怪しみ思ふめれど、熟く神の道の理を弁へたらむ人ハ、奇しとハ思はざらまし。正しき神の守護まして、御稜威をふるひ幸はへ給ふにハ、妖鬼の類の恐怖るゝこと、此ノ多四郎が一事をもても証し暁りつべきを、漢国意に化りて心遅き輩の、奇しき事とてはなき事なるを云々など、例の青々しき見識もて論はむかし。凡て世にくさ〴〵聞ゆる奇しき事どもに、信ずまじきあり。信ずまじきを信ずるハ尋常の人なり。信ずべきあり。信ずまじきを信ぜざるハ漢国意に化れる人にて、共に思慮の至らざるなりけり。然れバ此等の事ども其ノ人に非ざるにハ、謾に語るべからぬ事なれど然のミハ黙止がたくてなむ。

文政六癸未年六月七日　　伊吹舎主又記印

（裏表紙見返し羽田野敬雄の貼紙は省略）

（国立歴史民俗博物館所蔵）

（論考1参照、解読　上野さだ子・大窪俊彦・髙橋國夫）

7「上京日記　上・下」（抄録）

文政六年　平田篤胤

（上）

せゝらきに　くもを起して　飛龍
の　雲居に登る　時は来
にけり　時にそあへる

文政六　癸未年七月十八日　（篤胤花押）

また　飛さかる雲居の龍よ
天かけり　とほの
朝廷に　はやかへりこね　とくかへりませ

（七月）

○廿二日　ヒル七時前出立、品川村田屋傳左衛門方ニとまる

（八月）

○六日　五半時過キ、又兵へを江戸氏へ手紙もたせ遣す、予と太田四時過キ出立、大津宿より大雨に逢ふ

○心ある雨にもあるか大津辺に旅の
けがれを洗ひこそすれ

○やよ牛よ汝のミ行か牛道を
吾をもうしと人ハいふをや

さてけあげと云所に待合すれバ、紅吉迎ニ来ル、丹後ハ家内をつれて、但馬の湯へ出立せる由也故まづ吉兵へと同道して其宿に至る、弐百疋出す、河村・湯浅恒山来ル

○七日　半雨、戒屋ヌテノヤ〔水月・市右衛門などニ逢ふ〕、出雲寺・穂井田誓願寺ニ居す持明院どの・湯浅、是より湯浅同道にて下賀茂社吉田家へ行く、帰りて食事、大雨あり、夜に入り湯浅方へ行キ、同道ニて冨小路どのへ参殿、色々御馳走あり、真顔手紙、開題記、ミはしら、御伝記、金弐百疋上る、藤本日匠へ弐朱遣す、夜七時帰る、太田へ第二帙遣す、三百疋かゝる、みノ吉へ一、湯浅へ一、天神紀遣す

○八日　雨天、太田ことくらま口国やしきへ行く、所々への手紙カク、松屋より手紙・花子をこす、湯浅こと冨様へ御礼ニ上る

○十日　半雨、太田ハ御やしきへ行く、吉兵へをよびて食事の相談す、紅吉ハ男也けり、江戸・小原・すんぶ・ダテ方・ほりを・関・紀ノ国石井氏・びぜんへ手紙出す、別ニ吉田殿と所司代屋しきへ手紙遣し、湯浅・ヌテノヤ・箕田へ使遣し、かりもの返し礼をいハす、吉田どの山田宰記より返書来る、暮相よりゆあさ大和来ル、銀杏（鴨脚）イセノ守来ルベシト也、

○十三日　大雨、やう〳〵髪結、昼飯後よりヌテノヤへ行キ、再生記をとり〔中ツネ来ル〕冨様へ参上、高はし若狭守ニ初対面〔みヅシ所也〕、湯浅同道也、吉田タマモノ花子持参、御茶をはじめ色々御馳走、御かこひニて也、〔アユタイアカイ〕、夜八時すき帰る

細ばしらしこけき小屋のくたれ屋をヌテノヤトシモいふぞをこなる

○十八日〔天気くもり〕、昼まへ清水・八坂・安井等へ行く、帰れバ向日神社神主六人部縫殿是（ヨシ）香（カ）と云人来れり、廿六才のよし、父ヲ六人部右衛門節香（トキカ）トて、衣ノ店通り二条下ル処、始ハアテノ宮づき円乗院ト云、当時大宮さま付也、是ハ是香ガ叔母にて実ハ実母也トぞ、今日湯浅方へ行く、御霊祭ニよりて招き也、種々馳走也、土御門どの雑掌学頭小嶋典膳ト云人ニ逢ふ、仏国…弁蒙作者也、石見国より来れる渡辺要人とか云人も来れり、

○十九日　天気、今朝腹痛ナリ、四時すぎ直る、昼後より出宅、まづ誓願寺へ行キ、穂井田并ニ方丈に逢ふ、西山流の本寺也、しばらく語る、細工人にアフ、土御門家出入のよし、夫より衣ノ店通り二条下ル処六人部氏へ行く、留守也、弟子云、今朝より御待申たるが、只今一寸出たりと云、よバんと云しかど、帰りにと云て所司代屋しき吉田氏へ行く、留守也、いひ置て二条御城を見て、七半時衣店に来れバ、右衛門子帰り居れり、至てよき人かつ真才の人也、種々馳走、鯉のすいもの、茶わんむし、とりざかな、両御所の御こハめしなど色々手あつし、密談して夜四時すき帰る、献上一件なり、今日六日切の手紙出す、又兵へ供待ノ間ニ行く、廿日出日のよし

○廿日　雨ふる、又兵衛を河南儀兵へ并に仕立やへ遣す、江戸より十日出八日切の手紙着く、まづ安心、六人部氏に見する書を案文す、夕方にふくろや左七と云仕立や来ル、直シのこと掛合遣す、今日ハ誰も来らず〔ミノヤガ天狗説ナホシニカヽル〕

○廿一日　きのふより大雨ふりつゞく、朝より献

上本の丁数をアラタムル、さて昼飯後より又兵衛供ニつれ袋屋へ本持参、能々たのミ、夫より湯浅へ行き妻に紙二帖遣す、湯浅ハ吾が許へ来れる由にて留守也、是より冨小路様へ行き、藤本と逢て帰らむと思ふに、御逢可被成との事にて、羽織ながら見へ奉る、御かこひニて御手前の御茶被下、そうめんの御馳走也〔カマボコ、アヲミ、イモガシラ入ル〕、献上の密談申上、種々御咄し申上る、四時すぎ御暇申す、藤本へ天神記遣す、夜に帰りごろはるゝ

○廿二日〔天気少々ふる〕、又兵へ仕立やへ遣す、書林の奥付をとれと云遣す、廿五日ニ出来と也、夫より六人部へ手紙遣す、そハ冨小路様御うけよろしき故に、まづ六人べを見合せんとの事也、返事来ル、但シウタヘル由也、神たち事あらしめ給ふな、子共へ天神記、六人部主ニ文晁画盃遣す、八時に吉兵へ来り、色々咄しの所へ、吉田どの山田宰記より手紙ニて、旅中御尋の由にて、壱尺五六寸ある鯛と生大ゑび五つ贈らる、礼の返事遣す、使に百文とらす、是より七時ニまづ中庸方へ右の肴をもち行て相談して、土山へやらふか冨様へかと云へバ、余り善すぎるから冨様へやれといふ、藤本へ手紙かき、時候御きげん伺と称して贈る、返事来ル、水月仕度し置て飯を出す、またうで豆を出す、食して同道土山へ行く、出がけに千楯方へ酒の礼により、夫より土山ニ至る、上百万遍屋しきに武家がまへの大家也、来あへる人々、松田越中守、鴨脚(イテウ)イセノ守、山田阿波ノ介、無言の人など也、種々義論雅談、四時過ニ帰る、老人水月四条通りまで伴ふてわかる、松田著述言バの直路、土山著述千一(チヾソ)言二巻かりて帰る、水月がよろこびアハレ也、此老人長クハ生マイカト思ハレテカナシキコトに思ヒツヽカヘル、息ヅカヒワロシ、先生が出たからオノレハ死んでもモウヨシと云てゐるがアハレ也

△土山へ行く道ニて湯浅カ我許ニ来らんとするに逢ふ、今日白川様上レルコトヲ御そんして、予ガ御噂アリシトゾ、アハレ

○廿三日　天気ナリ、去る十四日に湯に入れるまゝなる故に、からだ甚くさくてたまらず、拠なく町の洗湯へ行く、女十七八人、男二人ゐたり、予と又兵と男四人なり、よミへ行たるこゝちす、尤も上りに水あミて清め帰る、ひる飯後より吉田どのへ御礼に出る、紋付かたびら上下なり、三本入扇子箱台付持参、水谷一角と云取次なり、山田宰記方へも行て逢ふ、何のこともなし、味なき人なり、南禅寺・智恩院を見て、七時に帰れハ、大和と六人部右衛門子来居たり、右衛門子円乗院よりの手紙見する、上首尾ニて冷泉様廿一日にぼんの御礼ニ而被罷出之所、主上へ直に申上たれバ、早々献上せよとの勅也とアリ、右ニ付キ色々相談、酒肴飯等相すむ所へ、水月来ル、鴨脚へ行くに、一人ハいかゞ案じる故に、湯浅に同道させんとの事なり、さて湯浅ハ九時ニ帰る、六人部・水月のこり、種々相談手次き、本仕立等のこと也、さて学問談ニ及ひ、夜明て六半時帰る

○廿四日　天気、今日ひるね也、又平ヲ仕立へ表紙付ること見合に遣、四時ニ六人部弟子伊藤来ル、昨日六人部の在所より妻病気の飛脚両人ツヾけ来れるよし、是ニ付右衛門帰ると直に立たるよし、大まんぢう三ツ、ようかん一さほ贈らる、冨様へしれざる様との由急の使なり、昼飯後ちきりや来ル、カマボコ持参せり、イテウ感心之よし物語れりとそ、又平共ニて仕立やへ行く、ついでに紅屋へ行き、カマボコ遣す、表紙以の外わろき故に、仕立やより本ども持帰る、夜に入り湯浅来ル、四時帰る、丹後妻宮木カへル、吉兵へムカヒに行たり

○廿五日　天気、水月より心付の手紙こす、又平つれて、アサ宮木ニアフ、ミノヤへ立より出雲寺へ行き、本どもとり番頭弁蔵ニ仕立のこと相談、明日朝同道せんとの事也、返々たのミ置て湯浅へ行キ、ひるめしふるまハれ、同道して北野へ参り、上乗防にあひ、洗米ミキなどいたゞき伝記略遣す約束也、平野へ参り、又々湯浅へ帰り、また夕めしふるまハれ、七半時同道にて鴨脚イセノ守方へ行く、出席人土山駿州、上カモ松田越中介、鴨脚摂津守、越中守伯父ト、北大路下総守、南大路大和守、山本雅二郎其外両三人なり、帰宅すれハ七時也、来月二日松田ニての約束也、千切屋始め下人十六七人アリ

△二帙共ニ持参也、いづもじ弁蔵、仕立や四条堀川下ル西ニて河内や清兵へを伴ひ来ル、相談イタシ遣す

○廿六日〔天気夕大雨〕、今朝ミノ吉来り、昨日

山ノ上の怒りの内談、色々居を転ずる相談也、宝光院を見にゆく、かさずとのこと也、夜ニならバ山ノ神行ベシとのこと也、△ひる飯後に備前国志賀宇右衛門が許より手紙とゞく、是非にまち居よとのこと也、是より六人部へ行く、右衛門いまだ帰らず、さだもなき由也、弟子伊藤賢蔵と色々咄し、其内弁蔵外出ニて、円乗院をりよく来り合ひて出逢ふ、よく縫殿に似たり、いと和かなる髪切なり、うしろ帯也、しひたけたぼ、ほそ帯、もよふ着物也、色々大内のこと尋ぬ

仙洞御后大宮様ハ後桃園帝の姫宮なり、其皇子アテノ宮ニ円乗院御もりに付て〔六才ニてれいり也〕、宮薨じ給ひ、後に尼を命ぜらる、御目見以上の人也、当時大宮付也、大宮の両御局と云ハ冷泉どの〔正親町三条どのヒメ也、五十余り、正親町三条どのハ当時幼少也〕高辻どのと云〔廣はし家のヒメ也〕、筆頭第一ニて表ヘカヽリ、武家ニも此二人ノ局あひ給ふこと也、仙洞様の御局頭をバ御上廊さまと云ふ、新大納言〔ソノ様ヒメ子〕権中納言〔クワンジュ寺ノヒメ子也〕、小侍従様ハ中老といふ也

禁庭ニハ長はしの御局第一也、其以下内侍方色々禁庭さま御学問ずきニて、此節日本紀御校合也、夫故三御所ともに日本紀ハヤルとぞ、右衛門佐と云女中など、すめぬとてこまり居らるゝこと、冷泉さまハ殊の外の学者ニて、どふぞ進る書物が仮名付なれバよいが、ミなに見するによいものをとて居給ふ由也、大宮さまハ亥の御年ニて、今年四十五才ニなり給ふとぞ、主上ハ廿六才ニならせ給ふとぞ、盆の御礼ニおそく出給ふ由をとへバ、御さし支なき日を見て某々へ被仰下、次々に出て色々御馳走いたゞく事とぞ、三御所御タガヒ也（略）

○廿七日　クモリ、又平を仕立やへ仕立本手紙もたせ遣す、六人部氏へよせる二ツの入れもの返す、いまだかえらずト□、円乗院ト賢蔵ト同道、在所へ行たるとぞ、湯浅来る、講談きける人々みな感心のよし、千切や其夜より神参けいにまハりて、未帰らずとぞ、賢蔵来ル、今日途まで行たるに先より人来れり、夫に円乗院を託し遣す、途より帰る、明日右衛門ぬひ同道にて帰るよし、病人もよき故に案じ給ふなといひ遣せたり、湯浅、ミノ吉、賢蔵、又平をつれて宿見に出る、遅くて見当らず

（下）

（八月）

○廿八日　雲気也、（中略）又平を宿見に出す、相応の所なしとて帰る、表紙屋より外題もち来り、たち合せのこと談じに手代来ル、水月も来ル、近藤ト婦ニ千楯が底入のはなし色々あり、七時過より水月と伴ひ又兵をつれず出て、水月立てよれと云故によれバ、飯をふるまふ、是よりちやうちんに水月と共六人部へ行けバ、二人共に帰りをれり、縫殿ふミ抜して出かねたる由也、是より使をやりて中嶋文吉をよぶ、棕軒と云よし、外題かくこと頼む、また筥を二ツ、さし物をよびて右衛門子たのむ、一ツ十匁ヅヽのよし、明日夜四時までに出来の約束也、是より酒飯を出して雅談ニて、水月・中嶋八時に帰る、立てとまれと云故にとまる、ねたるハ七時過也、湯浅が来れるよし、二日か間ミノ吉ニアハズ、今日思ふ旨ありて、へうごろもちかきつかミたる屎とびがそらとぶわしに心こそおけ

○廿九日　天気、今日ハ天恩日なる故に、まづ上て朔日も天恩日なる故に、まづ上て朔日も天恩なる故に上り度と思ふよりいそぎたり、今日四時に又平むかひに来ル、つれて九時に帰り、飯くひて七時過までねる、

起て又平つれ、冷泉様へ上るみはしら・開題記もちて六人部へゆけバ外題出来てあり、但シ十まい計り書損シたり、六人部氏大さわぎにて、ぬめをかひ、うらうちたち合せたりとぞ、気の毒なり、よく出来たり、又平に外題をもたせて仕立屋へやる、さてアスの献上ハ御上に御さし支ある故に、二三日のびる由六人部語る、是より一人水月へ行く、近藤吉左衛門が様子をきかんと也、近藤風邪にて延たりとぞ、水月方に辻土佐守と云蘭学者来りをれり、かねて石井傳左衛門と懇志の人ニて、子を安芸守と云フ、また小嶋典膳とも懇志ニて、予が事ハ委くきゝしれりと云、至てよき人と見ゆ、寅吉がこと色々たづぬ、早々にして帰る、また馳走ニならむ事を恐れて也、水月云、まづ店をかりること見合せよとのこと也、又平五時過に帰る、アス四時に仕立やよりもち来るとの事なり、今夜山神色々

の咄しあり

九月　朔日　夜より大雨なり〔夕方よりハルヽ〕、今朝まどより見れバ、ぎをんへ参詣多し、ミな帰りに松とさかきをかひて帰る体也、若狭小だいの焼物にて飯くふ、又平ゆふべかひて帰れりとぞ、序文草稿真字ニうつす、少しのこる、仕立やより本出来もち来ル、いとよく出来たり、然るに並より三分小さくなると、先日人をこして申せる故に、其心得ニて筥をあつらへたる所、一分ばかりならでつまらず、然れハ筥間にあふまじと大心配、ひる飯後右出来本二部、外ニ冨小路様への成文・徴をも持参、又平共にて出て、まづ水月庵へ立よる、そハ必今日我が方へ来る由とめて我来むと云て、昨日帰りつれバ也、近藤吉左衛門、大はし九右衛門が咄也、水月か所に我をおきて両人にて饗応せんとのこと也、水月心配云ばかりなし、紅吉と相談の上挨拶に及バんと云て別れ、是より六人部へ行けバ筥出来てあり、まづうちより本をいれて見るに妙に入たり、大安心、是非に今日ハ日がよき故に上て給ハれと云へバ、六人部親子大に承知、両人の心配云ばかりなく、まづ壱両あづけおく、右衛門連て冨様へも今日出せと云ふ、是より出て冨様へゆけバ、御客来ニて御書院にて御逢あり、まづ成文の一帙をさし上る、御悦也、次に仙洞献上の御本を出せハ、御手水を御つかひニて御うけ取被成、御まんぞく至極也、さて先日は女房奉書ハ相来らぬよし申たなれども勘弁したる所、出来よしとのこと也、されど余り世にひろくしれぬ様、かつ関東の察を恐れ給ふよし、返々返々御しんしやく也、さてまた序文のこと申たれバ、此節殊の外に繁多故、其方のことをそなたがほこるハ書にくかるべけれど、遠慮なく存分にしたゝめ来れとの御事也、大内わたり、苦しからずとの御事也、此事すミて御暇申せバ、只今客来なれども押付帰る故に、いづこへか行ならバ帰りに是非よれとの御事なり、また再生記を仙洞様・女房衆まで差出し置たり、そなたの事を上に聞え上むとの心也と宣へり、御暇申て湯浅へゆけバ日くれたり、橋元安芸と云人来り居たり、よさそうな人也、非蔵人をつとめて冨小路様と相番になりて懇志、宮中ニて君をしらぬ人なしと噂也、再生記のこと、寅吉がこと、岩笛のことも宮中ニてきく、又講釈の妙なることも聞たりとのこと也、湯浅と盛に噂の所へおもほえず行たる故に大悦の様子也、さて食事を達てすゝむるを辞して、ちやうちんをかりて出て、道より又平ハ六人部へまいる、ひるあづけ置たる柳ごり・からかさを取らんと也、予一人帰る、初夜半なるべし（略）

〇二日　天気也、今夕松田へ行く心組の所、五時に水月庵より尼を使にて密書来ル、是によりて松田へハ行まじき心組なり、湯浅へ手紙遣し断ハる、然る所ゆあさより断ハること気のどくの由ニて、鴨脚イセノ守へ、又平ニ手紙もたせ遣し、イセより松田へ断りやる、又平行く、然る所松田留守故、状をとなりへ頼ミ来れりとぞ、今日志賀と業合右仲着く、三条大はし〔津国や東南がハ〕といふ宿方に宿るよし也、小谷真蔵清遠と云人とり次入門、弐百疋たす、業合と両人之うけひ持参也、なり合肴代二朱也、業合ハ疑なく物になる男也、三十三才のよし、真蔵と云ハ五十才余にて、オフ郡土戸八幡宮の神ぬしの由也、さてミノ吉また公事出来て断の手紙たす、湯を立置たれバ早く来り給へと両度使也、業合と志賀と留守に置てゆく、色々其咄を父と妻よりきく、今夜丹後帰る、一寸逢、なり合・志賀ハ宿へゆく、右の仕合故、今日も宿見に出ず、さて今日より序文草稿にかゝる、今日紀国石井氏より返書来ル、辻あキ守・山田伊豆・木村太兵へ尉への手紙トヾケを申来ル、皆予がこの由也

〇三日　天気也、前夜大雨なり、序文清書す、夕八半時より業合・志賀来ル、又平をもつれて、安井、大仏、三十三軒堂、両本願寺を見て東寺観智院へ行く、院主ハ病気にて相ず、雑掌四五日ヲオキテ来レト也、岡本出雲法橋出合ふ、ずんと落付たる法師ニてわきざしにて逢ふ、中山平四郎、ツガルヤ奥田伴などがこと委く知れり、東宮切韻、交替式、山家要略のこと頼ミ帰ル（略）

〇八日　天気也、朝飯後より業相ばかり連て、六人部へ行く、縫殿いまだ帰らず、右衛門と近付にして帰る、冷泉様銀を受給ハずとの咄し、また女房奉書ハ六ヶしけれど、考へ見むとの御こと也とぞ（略）

〇九日　天気、早朝に志賀来ル、今日愛宕参りの

約したれバ也、然れども昨夜の手紙によりて、大坂へ飛脚にたのむ、又平紋付取に行く、出来たり、当今様千鳥の御製、村千鳥声うちむれてむれ来るハ沖の小嶋に波たつらしも
湯浅妻に髪ゆひもらひに行く、くれ相に帰る、冨小路様より御花子下さる、ミノ吉節句礼に来ル

○十日　くもり　水月・六人部へ長手紙遣し冨様より頂戴の花子遣す、六人部よりのしめかりる、冨様参上、ひる御留守也、夫より湯浅へ行き初夜頃ニ又参る、御逢また〳〵色々御馳走、仙洞様いたく喜び給へる也、そなたの噂高しと御咄し也、冷泉様より冨様御姉様を以て、予が書献上してもよからんかと、御尋なされ候也、さて序文稿さし出す、御喜び也

●十八日　終日雨天、夕方ハるゝ、ひる飯後より山崎帯刀来ル、初夜頃帰る、江戸より書物・封物・書状来ル、九時なるべし、石川書面を山崎と丹後と写す、早速冨小路様へ二通共に御覧に入れ、かつ御催促申候所、御返事来ル、御序文出来なれハ明日取ニ来れと也、御奉書ハ一両日ノ中ニ埒明べしと申越さる、吉兵へ平茸を持参ニて料理也、九時ニ帰る、ひるも朝より来て長談、昨日六人部行て頼める事を云ひニ来れる也、真の入門せんとの事也

●十九日　天気也、吉田へ手紙もたせ遣す、尤催促なり、廿日廿一日両日遠足のよし申遣す、返事来ル、ミノ吉朝より来て憶良哥抜書す、六人部来て江戸よりの書状うつす、イテウイセの守来ル、杉原と寒雪とう持参、廿六日に南大路へ請持也、六人部と近付ニなる、長談アり、六人部と向明神へ行く約束也、今日主人ひる後より他出也、くれより冨小路様へ行き御序文いたゞき、道にて御目ニ懸ル、夜に入れり、六人部へ行き見せ、夫より水月へ行て見する

○廿二日　くもり也、四時に出立也、円乗院より肘掛、女紙入とたばこ入賜ふ、娘へとて也、途ニて右衛門宅よりの飛脚に逢ふ、右衛門熱病のよし也、いそぎ帰る、東寺の空海堂、清涼殿也と云故に見る、一条天神、菅神降誕の天神を拝す、四条末より六人部にわかれ又平を水月へよせて様子をきかせ、一人帰ル、ミノ吉へよれバ病て床ニあり、妻云、きのふ湯浅来れりとぞ、そハ今日御神楽拝見の事なり、宿ニ帰れバ九半すぎ也、食事しばし休ミて七時前より冨小路様へ行く、千匹御礼持参、藤本へ弐朱遣す、まつ〳〵喜べり、櫛笥右中将殿御供雑色となりて御神楽拝見、主上出御なし、是に依て四時くしげ殿へ帰り、冨様へ行けバ御待兼の由ニて御逢、寒からんと思ひて酒を用意したりとて御馳走いたゞく、御花押とゞく、哥道御破門の意味合御咄しあり、立入が悪行、廣橋が悪行、阿波介が予ヲそしれること等の御心付アリ、丹さくのことを願ひ置て帰る、時ハ九時也、迎来らず、ちやうちんかりて湯浅へ行く、既に寝たるがおきて語る、茶漬を出す、八時すぎに帰せバ七時に宿に入ル、今日丹後より本代トル

○廿三日　天気也、志賀来ル、上田宗兵衛、吾を招待せんと也、晩に行くべき由約して帰す、ミノ吉来り、御序文写す、歯いたミ終日ねる、又平を六人部へ様子尋ねに遣す、夜に入り志賀同道にて上田へ行く、息子を宗五郎と云、九時かへる

○廿五日　天気也、丹後子ニ髪月代してもらひ湯に入りミノ吉へよりわさび七本遣し、水月へ行て見、夫より六人部へゆき、様子をきゝ、昼飯して土山へ行き、物語りする所へ湯浅、冨小路様よりの御手紙持参也、四時すぎに帰る、六人部へわさび弐本遣す

○廿六日　天気也、昼飯後出宅、上田へより日野様より召れのこと故大人様ノコトナド也、東坊城のことなど頼ミ、土山へ開題記・成文ニ手紙添て遣し、神拝式、江戸絵進物す、返事来ル
冨様へわさび十一本・屋代扇子・たんさく二枚上る、外ニ丹さく十枚上ケおく、昨日の御礼、御門玄関にて申おくこと、是より湯浅へより、同道ニて下賀茂南大路へ行く、心一ぱいの馳走也、内方も出逢ふ〔タイ、ムクドリ、カキ、ヒトツマツ竹〕、夜九時かへる、始終御祖社のことの頼ミ也、カモ川石のすゞりくれる也、留守へ吉田太左衛門・志賀宇右衛門来れりとぞ

○十月一日　夜より雨天也、ミノ吉ヲ招キの手紙、六人部へ近日出立の手紙、出雲寺へ払ひ、山崎帯刀へ本屋の所きくニ、水月へ途中の書付・のりともらひニ遣す、冨小路様へ丹さくの催促ニ遣す、六人部より並河帯刀手紙・進物来ル、水月より尼使ニ来ル、ミノ吉丹後へ水の伝受也、

山崎帯刀来ル、御神号のすりものかし遣す、神拝式やる

○四日くもり也、今日九時に穂井田帰る、出雲寺来ル、花子持参也、今夜冨小路様へ参上、九時御暇乞申す、帰りに湯浅へゆきて五日季鷹会へ出席のこと断ハる、湯浅きかず、留守の内に水月来れりと云フ、其わけハ会のこと也

（国立歴史民俗博物館所蔵）

（調査報告⑥参照、解読　鈴木淳世）

8　甲子夜話　巻二十七　　松浦静山

○この頃生れ替りてこの世に來れる小兒と人の云はやすことあり。

文政六癸未年四月多門傳八郎知行所百姓之悴生替り前世之事共覺居物語致候奇談所々專之風説故右百姓親子共傳八郎方ゑ呼出相糺候所相違無レ之未曾有之珍事故同人組頭衆迄耳打申達候書付寫

私知行所武州多摩郡中野村百姓源蔵悴勝五郎去午年八歳にて秋中より同人姉に向前世生替之始末相咄候得共小兒之物語故取用不レ申度々右様之咄申候に付不思議成儀に存姉儀父母ゑ相咄候て昨年十二月中改て父源蔵より勝五郎ゑ相尋候處前世父者同国同郡小宮領程窪村百姓久兵衛と申者之悴にて藤蔵と申自分二歳之節久兵衛儀者病死仕候間母ゑ後家入にて半四郎と申者後之父に相成居候處右藤蔵儀六歳之時疱瘡にて病死仕夫より右源蔵方ゑ生替申候由相答難二取用一筋に者有レ之候得共委敷慥成事共申候に付村役人ゑも申出得と相糺候處世上取沙汰仕候儀故程窪村半四郎方にても沙汰及レ承同人儀知行所源蔵方ゑ尋參り候故相糺候處小兒勝五郎申候通相違無レ之前世父母面體其外住居等も相咄申候に付程窪村半四郎方へ小兒召連候處是又少も違無レ之家内に對面爲レ致候處先年六歳にて病死仕候藤蔵に似合候小兒に有レ之其後当春迄に折々懇意に仕候内近村えも相知申候哉此節者日々右勝五郎を見物に所々より參り候者有レ之候に付知行所より訴出候間源蔵勝五郎呼出相糺申候處右之通兩人も相答申候尤折々世上にて取沙汰仕候間難二取用一筋には御座候得共御内々此段御耳打申上候以上

四月　　多門傳八郎

前世疱瘡にて相煩候節田舎之儀殊に貧窮の百姓之事故藥用も不レ致病死致し候由尤父は随分勞り遣し候由葬送之節瓶え入棺え入葬候節者棺之上えあがり見物いたし居、瓶計埋候由夫より大造成廣野原え出候へば此所に地蔵菩薩幷老人罷在出合、兩人にて所々連歩行四季之草花有レ之山谷海川絶景言語に難レ及所所連歩行見物致させ扨三ヶ年過最早生れ替らせ可レ申拾六歳に相成候はゞ亦々此方へ立戻可レ申夫迄生替居可レ申為二申聞一中野源蔵家之前ゑ連行置候て地蔵老人者帰候間源蔵内え這入候處其節源蔵夫婦殊之外いさかひ致居候間胎内え難レ入暫いさかひも相濟候間胎内え入候旨右いさかひ之譯も荒増覺居候由半四郎儀今に繁昌にて源蔵より承候處少も相違無レ之趣申候由其外色々不思議共有レ之候得共一夕に承盡兼荒増書寫畢

右勝五郎儀賤敷百姓之悴に不二似合一至て行義能、おとなしく生付も奇麗之旨何を申も漸九歳之小兒故萬端委敷承兼強て尋候得ば大きに恐れ答出来兼又者泣出候仕合故菓子抔與へ遊ばせ置きだまし〳〵尋候故確と難レ分事も多く前世病死後地蔵之手元に罷在候三ヶ年之内之事共は二度目出生之節家内騒々敷に紛、多亡却致し候由申レ之十六歳迄に者死候事故只今之内親之為仕事致し溜置候とて一體籠細工を親共細工に致し候處勝五郎籠細工上手にて至て手奇麗に出来候て晝夜精を出し拵へ夫而已かゝり居候由平生至て小食にて一度者漸一椀位にて餘者不レ食魚類は何にても一切給べ不レ申菓子類少々喰候由なり

右の體にて隣宅の梅塢がもとに多門が連れ來れるまま予に見るべしと告たれど幽冥の談を云者を見るべくも非ざれば往かず人を遣して見せたるに書記して復命す

再生小兒父差添有レ之尤何所庭にての儀に有レ之右の小兒は起居候所常の小兒に聊相替候様子も無レ之私を見懸恥候體にて少し面をうつぶけ其邊を立廻り候様子随分おとなしく相見得申候髪はけし坊主にて毛赤く面長く痩せたる方にて色黒く有レ之候得共容儀も見苦しからず伶俐の小兒と見請申候年は何歳に相成候やと尋候得共一向答不レ申只恥入候様子に相見へ候而已に候着物は古き紺竪じま木綿袷を着、帯も小倉じま木綿にて腰に古き金入に緋縮緬の縁を取たる守袋を佩び居、白木綿緒の草履を著き居申候親は四十五六歳にも可レ有レ

之や素より貧しき百姓の體にて別に相替儀無」之候

四月十二日

○某老侯より一冊を示さる前事なれども小異、詳文とも覺ゆれば又載す要するに冥怪のみ

〔武蔵国中野村〕再生勝五郎前生話

武州多磨郡柚木領中野村小名谷津(やつ)入

根津七軒町多門傳八郎知行所

文化十二〔乙亥〕亥年十月十日生　百姓源蔵次男

〔當未九歳〕勝五郎

父苗字小谷田(こやた)當未四十九歳　源　蔵

母　同　三十九歳　せ　い

祖母　同　七十二歳　つ　や

祖父死　勘　臓

姉　同　十五歳　ふ　さ

兄　同　十四歳　乙次郎

妹　同　四歳　つ　ね

武州多磨郡小宮領（程）窪村

〔下谷和泉橋通中根宇右衛門知行所〕百姓半四郎忰

實父　藤五郎忰　六歳にて死　藤　蔵

右文化二乙丑年生、同七庚午二月四日晝四つ時死、病症疱瘡、葬地同村之山菩提所同領三澤村禪宗醫王寺

昨文政五午年十三回忌也

藤蔵養父苗字須崎　當未五十歳　半四郎

母　同　四十九歳　し　づ

〔文化五戊辰年藤蔵五歳之時四十八歳にて死去此跡ニ半四郎入候由去文政五壬午年十三回忌〕

藤蔵実父　藤五郎

初久兵衛と申候

藤蔵種替之兄弟　半四郎忰両人　同娘両人

去午年十一月の頃、勝五郎姉ふさとたんぼにて遊ひながら勝五郎姉に向ひ兄さんはどこからこつちの内に生れて来たととふ、姉どふして生れた先がしれるものかといへば勝五郎あやしけなる體にてそんならおまへも生れぬさきの事はしらぬかといふ姉てまへはしつているのか、おらアあの程久保の久兵衛さんの子で、藤蔵といつたよ、姉そんならおとつさんとおつかさんに云はふといへば勝五郎泣出しおとつさんとおつかさんにいつちやアわるい、姉そんならいふまいわるい事するといつつけるぞよとて其後兄弟けんくわなどすれば、かの事を云はふといふとぢきにやめる事たひ〳〵なれは両親是を聞つけ、いかなる悪事をなせしやとあんじ、娘ふさにせめとひけれは、ふさやむ事を得ずありのまゝに告るに源蔵夫婦祖母つやも尤ふしぎにおもひ勝五郎をすかしていろ〳〵とせめ尋ねければ、そんなら云はふとて、おらア程久保の久兵衛さんの子で、おつかさんの名はおしづさんといつた、おらア五つの時九兵衛さんは死んで其跡に半四郎さんといふが來て、おれをかわゐがつてくれたが、おらアそのあくる年六つで疱瘡で死んだ、それから三年めにおつかさんの腹にはいつて、それから生れたとよといふ、両親祖母此を聞て大に驚き、どうぞして程久保の半四郎といふものを尋ねて見んと思へども身すきにまぎれそのまゝにうちすておきしに、母しづは四つなる娘常に乳をのまする故、勝五郎は祖母つやにだかれて毎夜々々ねものがたりするゆへつや勝五郎がきげんを見合せその死せし時の事を尋ね問ふに勝五郎四つぐらいの時まではよくおぼへていたが、だん〳〵わすれたが、疱瘡て死んでつぼに入れられ山にほうむられたとき、穴をほつてつぼをおとした時どんといつた音はよくおぼへている、夫から内にかへつて机の上にとまつていたら、なんともしれぬぢいさまのやうな人か來てつれてゆくと、空を飛んであるいて、晝も夜もなしにいつも日暮かたのやうだつけ、さむくもあつくもひだるくもなかつた、いくらとうくにいつても、内でねんぶつをいふこゑと、なにかはなすこゑが聞えた、うちであつたかいぼたもちをすへると、はなからけぶを呑むやうであつたから、おばアさん、ほとけさまにハあついものをすへなさいよ。そしてぼうさまに、ものをやらつしやいよ、これかいつちい、事だよ、それからそのぢいさまがつれてこのうちの向ふのみちを通るとおもつたが、ぢいさま、もう死んでから三年たつたから、あの向ふのうちに生れろ、われがばアさまになる人は、きのいゝばアさまだから、あそこにやどれといつて、ぢいさまは先にいつてしまつて、おらアこの内にはいろうとおもつて門口にいたら、内になにか、おつかさんが、内がびんぼうで、おつかさんが江戸に奉公に出ずばなるまいといふ相談があつたから、まアはいるまいと庭に三日とまつていたが、三日め

に江戸へ出るそうだんがやんだから、夫から其夜あの窓のふし穴から内へはいつて、へつついのわきに又三日居て、夫からおつかさんのおなかにはいつた、おなかのうへのほうにいたら、せつなかろうとおもつて、わきのほうによつていた事もおぼへている、生れた時くろうのなかつた事もよくおぼへているが、おとつさんとおつかさんにはいゝが、外の人には云いなさんなといふ、祖母此よし源蔵夫婦に話る、夫から後は両親に前生の事共ありのまゝ語り、程久保にいきたい、久兵衛さんの墓にやつておくれと度々いふ事なれば源蔵おもふやう、勝五郎希有なる事なれば、もしもその内に死ぬまじきものにもあらねば、なるほど程久保に半四郎といふもの、ありなしを尋ねたきものなれど、男の身として、あまりあとさきのかんがへなきやうに、人のおもわくもいかゞなればと、當正月廿日つやに勝五郎をつれてゆくべしといゝければ、つや勝五郎をつれて程久保村にゆき、此家かあの家かといへば、勝五郎まださきだ〳〵といつて先にたつて行ほどに、此家だと、つやにかまはずかけこむゆへ、つやもつゞいてはいり、まづ主じの名を問ふに半四郎とこたへ、妻の名を問へばしづと答ふ、此うちに藤蔵といふ子のありしやといへば、十四年あと六ツの年ほうそうでなくりましたといふ、つやははじめて勝五郎がいゝし事の眞事なる事をかんじ、涙せきあへず勝五郎が前世をおぼへてはなせし事をつぶさに語れば、半四郎夫婦も誠に奇異のおもひをなし、勝五郎をいだき共になみだにしづみ、前世藤蔵といゝて、六ツの時の顔色より、きりよう一段あがりたりなどいふに、勝五郎は向のたばこやの屋根にゆびさし、まへかたはなかつたの、あの木もなかつたなどいふに、皆その通なれば半四郎夫婦もいよ〳〵かおりしとなり〔(補)かおり不審仙臺方言にがをると云ふは我折るにて閉口の意に用ゐる同語ならん〕扨其日は谷津入にかへりしが、その後も二三度半四郎かたへつかはし實父久兵衛が墓へも参らせしと也、勝五郎時々、おらアのゝさま〔(補)のゝさまは神佛の事〕だから大事にしておくれといひ、また祖母にむかひ、おらア十六で死ぬだろう御嶽さまのおしへさしつたが、死ぬはこはいものではないといゝしとぞ、両親勝五郎に、手前はぼうさまにならぬかといへば、おらアぼうさまになるのはいやといひし、近頃村中にては勝五郎といはずして、ほど久保小僧とあだ名呼び、近村より見に來る人もあれば、はづかしがりて、やにわにかけかくるゝにより、勝五郎直ばなしは聞こともかなはず、祖母のものがたりにて此を書とむるものなり扨源蔵夫婦祖母つやのうち何ぞかねて善根をせし覺へありやと問ふに何もさのみよき事もせず祖母つや明暮ねんぶつをとなへ出家乞食の門口に立あればいつも銭二文づゝ法捨をするより外善事といふほどの事もせざりしといふ

(『甲子夜話』第一　明治四十三年國書刊行会発行より転載)（解説四・論考2　参照）

9　視聽草（見聞くさ）二集七　宮崎成身

武州程窪村小児前生話

○武州多磨郡柚木領中埜村小名谷津入（ヤツイリ）

根津七軒町　多門傳八郎　知行所

百姓　源蔵次男

当未九歳　文化十二年乙亥十月十日生

勝五郎

父　苗字小谷田（コヤタ）

源　蔵

当未四十九歳

貧窮ニ付かこ細工致し江戸へ商ふ

宿所馬喰町相模屋喜兵衛方

（欄外）

源蔵父尾州家士村田吉太郎尾州ニ而御弓役相勤せい十二才之時本多大之進殿へ奉公すと云、せい三才之時吉太郎有故永之御暇ニ而浪人と成、文政四年四月廿七日七十五ニ而病死、墓所禅宗えいれん寺

当未卅九歳　母　せい

当未七拾二歳　祖母　つや

若年之時松平隠岐守殿奥ニ奉公す

当十五歳　姉　ふさ

当十四歳　兄　乙次郎

当四歳　妹　つね

武州多磨郡小宮領程窪村

中根宇右衛門知行所

百姓　半四郎倅　実父藤五郎子

六歳ニ而死去　藤　蔵

文化二年乙丑生、同庚午二月四日昼四ツ時頃死、病症疱瘡、葬地同村之山、菩提所同

領三沢村禅宗医王寺
去文政五年十三回忌なり
藤蔵養父苗字須崎
当未五十歳　半四郎
当未四十九歳　母　しつ
藤蔵実父　藤五郎
初名を久兵衛と申、文化六己巳年
藤蔵五歳之時、四十八歳ニ而死去、此跡ニ半
四郎入夫之由、去文政四年十三回忌
藤蔵種替之兄弟
半四郎　倅　両人
同　娘　両人

去午年十一月の頃、勝五郎姉ふさとたんほにて遊ひなから勝五郎姉に向ひ、姉さんハとこからこちの家へ生れて来たと問ふ、姉とふして生れてきた先かしれるものかといへは、勝五郎あやしけなる体にて、そんならおまへも生れぬさきの事ハしらぬかといふ、姉てまへハ知つているかといへハ勝五郎しつているのサ、おらアあの程久保の久兵衛さんの子て藤蔵といったア、あねそんならおとつさんとおつかさんにいをふといへハ、勝五郎泣出し、おとつさんとおつかさんにいつちやアわるい、姉そんならいふまい、わるいことをするといつつけるそよとて、其後兄弟けんくわなとすれハ、彼事をいをふといふと直にやめる事度々なれハ、両親これを聞つけいかなる悪事をなせしやとあんじ、娘ふさにせめ問けれハ、ふさやむことをえす、ありのままに告るに、源蔵夫婦祖母つやも甚ふ審におもひ、勝五郎をすかしていろ〳〵とせめ尋ねけれハ、そんならいをふとて、おらア程久保の久兵衛さんの子にておつかさんの名ハおしつさんといつた、おらか五ツの時久兵衛さんハ死んて、そのあとに半四郎さんと云か来てをれをかわいかつてくれたが、おらアそのあくる年六ツて疱瘡て死て、それから三年目におつかさんの腹にはいつて、それから生れたよと云、両親祖母これを聞て大に驚き、どふぞして程窪の半四郎と云者を尋てミんとおもへとも、身すきにまきれそのまゝにうちすておきしに、母しつ（せい）ハ四ツなる娘常に乳をのまする故、勝五郎ハ祖母つやにたかれて、毎夜〳〵ねものかたりするゆへ、つや勝五郎のきげんを見合せ、その死せし時の事を尋ね問ふに、勝五郎四ツぐらい迄ハよくおほへていたがたん〳〵わすれたが、疱瘡て死んて壺に入られ山に葬むられた時、穴をほつて壺を落した時、とんといつた音ハよく覚へている、それから内にかへつて机の上にとまつていたら、なんともしれぬじいさまのやうな人来て、つれて行と空を飛んてあるいて、昼も夜もなしにいつも日くれ方のやうたつけ、寒くも暑くもひたるくもなかつた、いくら遠くにいつても、内て念仏を唱声と、なにか話す声か聞へた、内てあつたかいぼた餅を供へると鼻から烟を呑むやうであつたから、おはアさん、仏さまにあつたかいものをすへなさいよ、そして僧さまにものをやらつしやいよ、これがいツちいゝ事だよ、それからそのじいさまかつれて此内の向ふの路を通ると思つたが、じいさまもう死んてから三年たつたから、あの向ふの家に生れろ、我がばアさまになる人ハきのいゝばアさまだからあそこにやとれといつて、しいさまか先にいつてしまつてしまつた、おらアこの家にはいろうと思つて、門口にいたら内になにか、おつかさんか家がひんほうておつかさんか江戸に奉公に出すハなるまいと云相談かあつたから、まアはいるまいと庭に三日とまつていたか、三日めに江戸へ出る相談かやんたから、夫から其夜あの窓のふし穴から内へはいつて、竈のわきに又三日居て、それからおつかさんのおなかにはいつた、おなかのうへのほうにいたらせつなかろうと思つて、わきのほうによつていた事も覚へている、生れた時くろうのなかつた事も覚へているか、おとつさんとおつかさんにハいゝが外の人にハ云なさんなと云、祖母この由、源蔵夫婦に語る、それより後ハ、両親に前生の事ともありのまゝかたり、程久保にいきたい、久兵衛さんの墓にやつておくれと度々云事なれハ、源蔵思ふやう勝五郎希有なる子なれハ、もしもその内に死ぬましきものにもあらねハ、なるほと程窪に半四郎と云者のありやなしやを尋ねたきものなれと、男の身としてあまり跡先かんがへなきやうに人の思わくもいかゝなれハと、当正月廿日祖母つやに勝五郎をつれて行へしといゝけれは、つや勝五郎をつれて程窪村に行、この家かあの家かと云ハ、勝五郎まださき〳〵といつて先に立て行ほとに、この家たとつやにかまハずかけ込ゆへ、つやも続いてはいり、まづ主しの名を問ふに半四郎と答、妻の名をとへハしつと答ふ、此うちに藤蔵と云子かありしやと云ハ、十四年跡、六ツの年ほうそうで

なくなりましたと云、つやハ始めて勝五郎か云しことのま事なる事をそんし、涙せきあへず、勝五郎か前生を覚へて話せしことを、つぶさに語れハ、半四郎夫婦も誠に寄（奇）異の思ひをなし、勝五郎をいたき、ともに涙にしつミ、前生藤蔵と云て、六ツの時の顔色よりきりやう一段あがりたりなと云に、勝五郎ハ向の烟草屋の屋根を指さし、まへかたハなかつたの、あの木もなかつたなと云に、皆其通りなれハ、半四郎夫婦もいよ〳〵我を折しと也、扨其日ハ谷津入にかへりしが、其後も二三度半四郎方へ遣し、実父久兵衛か墓へも参らせしとなり、勝五郎時々おらアのゝさまたから大事にしておくれといひ、又祖母に向ひおらア十六で死ぬたろう、御嶽さまのおしへさしつたか、死ぬハこハいものでハないといひしとぞ、両親、勝五郎にてまへハほうさまにならぬかと云へハ、おらア坊さまになる事ハいやたといひし

近頃村中にてハ勝五郎といはすして程窪小増（僧）とあだ名を呼こと村よりみにくる人もあれハ、はつかしかりて、やにハに、にけかくれるにより勝五郎か直はなしハ聞こと叶ハす、祖母のものかたり此を書とむるものなり、扨源蔵夫婦祖母つやのうち、何そかねて善根をせし覚へありやと問ふに、何もさのミよきこともせす、祖母つやあけくれ念仏を唱ひ出家乞食の門口に立つあれは、いつも銭弐文つゝ法捨をするより外善事といふほとの事もせさりしといふ

右は、冠山老侯の自ら彼地に至り給ひて源蔵か家御尋なされ勝五郎をも御覧之上、祖母つやのものかたりを直にきかせられ御自身に御筆記遊され候を老侯より直ニ御話も伺ひ、且御筆記を拝借して書写するものなり

文政六年癸未三月念八日　　山崎美成識

同日書写納不忍文庫　　弘賢

（国立公文書館内閣文庫所蔵）

＊「幼女遺筆」は省略した。

（解説四参照、解読　片山幸和）

10　藤岡屋日記　第一巻―第六

○文政七甲申年七月廿八日

小児前世を不忘居る事

中根宇右衛門知行所

武州多摩郡程久保村

百姓　藤五郎

妻　やを（しつ）

前世　忰　藤蔵

六歳

文化九申（七午）年二月二日（四）疱瘡ニて死す、右父藤五郎、藤蔵二才之時死去し、後入夫半四郎今父と呼。

多門伝八郎知行所

武州多摩郡柚木中野村

百姓　源蔵

妻　勢井

現世　忰三男（二男）　勝五郎

文化十二乙亥年十月出生、文政七甲申年十歳也、

右兄弟五人（四人）在。

右勝五郎四五歳の頃より、親いひ教へざるに神仏に朝暮香花を備へ経をよミ、亦朝々仏に飯を供する事を急ぎ、すべて烟の有ものを供すべきとて母にさとしたり、亦元より人の喰さしたるものはたとへ父母の喰さしたり共不喰、六歳の時姉に向ひて問ふニ、婦人（姉）ハ前の世は何処の人なるやといふ、婦人（姉）答へて言、いかに夫を知るべきやといへバ、また兄に向ひて同問ふ、兄もまた知らずといふ、時ニ婦（姉）の言様ハ、たれとても前の世を知るべきにあらず、乍去おことハ知れるやと問ふニ、勝五郎答て、我ハ前の世の事を能知たりと云、姉曰、然らバ語り玉へと云、勝五郎云様、此事語りたるを父母の聞玉ひなバいましめ給わんこそ恐しけれバ語り難し、若堅くもらし給わずバ語るべしと云、我過し世ハ此後の峰を越て、隣りたる里程久保村といへる処の藤五郎と云者の子ニて藤蔵と言もの也しが、六才の春もがさいたく差重り、まだき命のきわにもあらねども、貧しけれバ薬もともしくて終ニ死たりといふ、姉また其末を問ふニ、夫より人々寄つどひて野辺の送りをいとなむとき、我親の墓ハ道の程もへだゝり、殊に人のしめおけぬ畑山を越行バとて、家の後の山に新たに墓所を求めてそこに送り埋る時、我も棺の上に居て墓迄ハ行たりしが、又家に帰り居たり、去共生きて有時ニたがいて親しミも薄き心知（地）して、住べくもあらねバ家を立出で、村の限りなる山の尾上に立並べる松の元に至る時、優婆塞の如き白髪の翁、灰色なる袖の長き衣を着て来たり玉ひ、我に向ひてのたまわく、汝我と共

ニ来たるべしと有ける故、夫より翁ニ伴ひて地を走り、あるハ中空を行に、草花など取てもてる時、鳶からすなどの奪わんとする故、翁の袖に隠れてしのぎたり、兎角して三日四日も過たりと思ひしに、有庭の柿の木のもとに来りしが、其時正月と覚へたり、翁の曰く、最早三年を過たり、汝此家に生れよ、十六歳迄の命保たんと言て、翁ハ何処共なく去玉ひぬ、翁に別るゝ事の悲しく思ひしがせんすべなく、爰に止りて家に入らんとする時、すこしき壁の崩れより内を伺ふに、何やらんかまびすく云あらそふニ入得ずして、庭にたゝずミたりしニ、漸〳〵静りたれバ内ニ入ニ、母人ハ遠き方へ行玉わんとの物語りあれバ、我思ふ様、此家ニ生んと来りしニ母人の遠きに去り玉ふ事本意なし、いかゞわせんと思ひたゆたひ、二日三日計り竈の後ろに隠れ居たりしが、兎まれ角まれ翁の教へなれバ、いかにも此家に生んと思ひしが、其後ハ生れ出る迄のことは知らず、生れて後ものいわざる前迄、前の世のこと共つばらニ覚へ居たり、歳重る程つばらなる事ハ忘るゝ心知せり、去共おほよそのことはいさゝかも忘れずといふ、姉聞て、不思義なる事をいふもの哉と思ひしが、兼て言契りたる言葉を守りて、両親ニも更に云ずして過けるが、勝五郎がもてあそべることなどのよからぬ時ハ、其事を親人ニ告るなど云へれば驚て止ぬ、斯て年月を経て、文政五年の冬、勝五郎ハ姉のいへる事を背たる故、亦其事を親人ニ告んといへれバ驚きわぶるニ、最早今度ハひたすらに言告んといへれバ、泣くるいて止んとするを、母聞付て姉にいふ様ハ、いかにせむるとておとなしからずといふニ、姉又母ニ言ハ、勝五郎が空をいへれバなりといふに、母又勝五郎にいふハ、未だ十歳ニもたらずしてうそいへるとはにくきもの成といたくのゝしれバ、泣事暫くも止ざりけれバ、母のいふ様、おこと打たゝかれもせず、言葉にていましめたるをいかに長泣きするぞやといへれバ、勝五郎いふ、我ハうそいわざりしニ我のミいたく叱り玉ふと云へバ、母いかりて、其うそと言へるハいかなることなりと姉に問へバ、答へていふ、さいつとし我に然〳〵のことを語り、親人ニハもらすなと深く包める故、是迄語らざりしが、うそならんと云、母聞て驚き、勝五郎ニつばらに問ふに、姉のいへる如くなれバ、猶夫是のこと共をとへれバ答へいふ、翁ニ随ひて、或時ハ夜るとも昼共わかず、朧夜の如くなり、また家ニて前の父母の香花飯など手向玉へバ、何処にありても能知りてけぶりをうくれバうゆることなく、都て何ニても、ものを我ニ手向らるれバよろこばしきなり、又家ニて火をたく時ハ家に帰りたりといふ〔案るニ火をたく時と云しハ七月霊むかいの火なるべし〕、又前の世の我家ハしか〳〵の所ニて斯作りなせるなど、其家の向ひたる方と（も）残る方もなく語り、前の夜（世）の母人の顔形ハかしこのたれに似てやせたるなど、其辺りの人につらへてつばらニ語りけれバ、母其ことを夫にいひつどうれ共、うない子のたはごとの様ニ覚へて、まことともせざりしが、其後ハ勝五郎、父ニ願ひいづるハ、前の世の親を尋まミへて、うからのちなミこそなしてほしけれとて、日々にせめけれバ、父思ふ様、余りにしたふせちなれバ、まがごとにも有べきや、さりとて我年久しく江戸に住たれバ隣れる里なれ共知人もなけれバ、斯名乗る人在やと、まだうたがわ敷折からニ、幸ニ其村の人来たれるニ問へバ、実ニも藤五郎と言者在て、其子のなくなりたるよしたがいなしと答へければ、同六年未正月十六日、勝五郎が後のはゝなるもの伴ひて、程久保むらニ行ニ勝五郎ハ其家を能知て、母に先立て家ニ入れバ、前の世の母も兼て其事を聞伝へて恋しく思ひ居る折からなれバ、悦び限りなく、我子にありける時のこと共を尋るニ、露計りもたがふ事なし、またの世に親子めぐり逢たる事をいと嬉しく思ひ、是より後ハ互に行来して勝五郎をめづること限りなく、彼是を親ニも親しきうからの因となりてむつびぬ、勝五郎もかれこれの父母のわかちもなく、皆今の親の如く思ひける、今ハひんく（ママ）遠近に聞へて、やんごとなき上つかたニもめさゝるゝこととはなりぬ。

右文政七年七月廿八日、勝五郎が家をとぶらふに、父母はらからまでむれ居たれバ、つばらに其ことを問ふニ先ニかい付たる如く、父なる者の曰く、勝五郎がいへる処、前の世のことは更ニして、我家ニ来りし時を考へつるに、其夜いさゝかのものいゝあらそへることあり、我まづしけれバ江戸ニ出で奉公せんと姉（婦カ）夫語り合たるも当れり、既ニ我妻なるものハミごもりたるも知らで奉公ニ出たりしが、勝五郎を孕める故に勤も成難き故ニ、衣更木の頃ハ家ニ帰りたりといふ、また勝

五郎を見るニ顔形人並よりすぐれて、山里ニ生れてもひなびたることも見へず、親なる者のいわく、いやしきことを好まず、幼きながらもふミまなびして、武士ニもならんなどいゝて、夫是の賤しき業ニハおろかなれども、ものゝ覚へる事ハさもあらず、耳少し遠しといふなり、母問ふ、腹の内ニ去ける時のことハ知らずやといふ、いさゝかも知らずといふ、按ずるニ諺ニ親子ハ一世の縁と言共、勝五郎ハ現世一世の身をもて二世の親母にそふ、夫婦ハ二世の縁といへ共またの世ニ夫婦ニ成たると言もの有ことを不聞、諺むなしかるべし、扨世の中ニなやめる人の薬をあやまりて救わざるに至り、或ハ心まどひ心乱れたる人の自からのど腹ニつるぎをつらぬき、またハ海川ニ身をしづめて死するなどの者、皆命の数のきわまり成らんと思ひつるニ、勝五郎が命のきわミにもあらね共、薬を用ひざるニよりて死たるといへバ、長き命をあやまりて死することもあれバ、ミぢかき命も能事と仕たるむくいニハ長くたもつことも有べし、小児のこと葉といへ共、前世を知る程なれバ命の限りも知らざらんものかハ、然有共薬を放す人の病ハ薬もていやし、命ハ天に任するなどいへるハたゞあやまりを隠す言葉の様ニも思われぬ、扨人の福ハ施すが一なり、無病なるが次也、財宝ハ其次なり、されバ人ハこゝろをまめやかにもちて、たゞものをあわれむのミ、人ハ更にして、おのれさへ知らぬ徳の積りなバ、ミぢかき命の長く保つ事もあるべし、自ら能事の種蒔んと思はゞ百万のこがねをすてゝ施す共むなしかるべし（と脱）思ひ侍りぬ、又勝五郎が死たる時のこと共思ふニ、野べ送りより帰りて内ニ居たる時ハ机の上に居たりと言、又内を立出たりといへるも、四十九日程の様ニ押はかられバ、人死して四十九日の間ハ生前の如く思ひてことをなすべし、又火をたきし時ハ、宿に帰たりといふハ七月霊祭りの迎ひ火なるべし、然あれバ霊祭りハ先祖こゝにいますと心得て大切に祭るべき事なり、仏ニ供したるものも慥ニ受ると聞バ、常々霊前江物を供するもなをざりにすべからず。

（『近世庶民生活史料　藤岡屋日記』第一巻　三一書房刊より転載、解説四参照）

11　睡余操觚（すいよそうこ）　巻十五

○文政六癸未年四月、多門傳八郎知行所百姓の悴生れ替り前世の事共覚居物語いたし候奇談、所々専風説故、右百姓親子とも地頭傳八郎方へ呼出相糺候処、相違無之、未曽有之珍事故、同人組頭迄耳打申達候書付写

私知行所武州多摩郡中野村百姓源蔵悴勝五郎、去午年八才ニ而秋中より同人姉ニ向ひ、前世生れ替候始末相話候へ共、小児之物語故、取用不申候処、度々右様之咄申候ニ付、不思儀成事と存、姉儀父母へ相噺申候間、此年十二月中、改而父源蔵勝五郎へ相尋候処、前世父ハ同国同郡小宮領程窪村百姓久兵衛と申者之悴藤蔵と申、自分弐才之節久兵衛儀ハ病死仕候間、母後家之入夫ニ而半四郎と申者後ニ相成居候処、右藤蔵儀六才之時疱瘡ニ而病死仕、夫より右源蔵方へ生替申候由相答へ、難取用筋ニハ候へ共、悉（委）く慥成事共申候ニ付、村役人へも申出得と相糺候処、世上取沙汰仕候故、程窪村半四郎方ニ而も沙汰承り及、同人儀知行所源蔵方へ尋参り候故、相糺候処、小児勝五郎申候通相違無之、前世父母面体其外住所等も相咄申候ニ付、程窪村半四郎方へ小児召連候処、是又少も相違無之、家内ニ対面為致候処、先年六才ニ而病死仕候藤蔵ニ似合候小児ニ有之、其後当春迄ニ折々懇意ニ仕候内、近村へも相知れ申候哉、此節ハ日々右勝五郎見物ニ所々より参候者有之候ニ付、知行所より訴出候間、源蔵勝五郎呼出相糺し申候処、右之通両人も相答申候、尤折々世上にて取沙汰仕り候間、難取用筋には御坐候得共、御内々此段御耳打申上置候、以上

四月　　多門傳八郎

前世疱瘡相煩候節、田舎之儀、殊ニ貧窮之百姓之事故、薬用も不致、病死致候由、尤父ハ随分いたはり遣候由、葬送之節、瓶へ入、棺へ入葬候節ハ、瓶計埋候由、右葬候節ハ、棺之上へ上り見物致居、夫より大造成広野原へ出候へは、此所へ地蔵菩薩并老人罷出合、両人ニ而所々連歩行、四季之草花有之山谷海川、絶景言語に及ひかたき所々連歩行見物いたさせ、扨三ケ年過最早生替らせ可申十六才ニ相成候ハゝ、又々此方へ立戻り可申、夫迄生替可申旨為申聞、中野村源蔵家之前へ連れ行

置候而、地蔵と老人ハ帰り候間、源蔵内へ這入候処、其節源蔵夫婦殊之外いさかひ致居候間、胎内へ難入、暫見合候内、いさかひも相済候間、胎内へ入候旨右いさかひ之訳も荒増覚居候由、半四郎今繁昌ニ而源蔵より承候処、少も相違無之趣申候由、其外色々不思議も有之候得共、一夕ニ承尽兼荒増書留畢、

右勝五郎儀、賤き百姓之悴ニハ不似合至て行儀能おとなしく生付も奇麗ニ而何を申も、漸く九才之小児故、万端委く承度、強而尋候へハ大ニ恐れ答出来兼、又ハ泣出候仕合故、菓子など与へ遊ハせ置だまし〳〵尋候故、聢と難分事も多く、前世病死後地蔵の手元に罷在り候三ヶ年の事共、二度目出生之節、家内騒々敷紛れ多く忘却いたし候由申之、十六才迄には死候事故、只今之内親之為仕事いたし溜置候迚(トテ)、一体籠細工を親共細工ニいたし候処、勝五郎篭細工上手にて至て手きれいに出来候、昼夜精を出し拵へ、夫のみに掛り居候由、平生至て小食にて一度に漸一椀位にて余ハ不食、魚類ハ何方ニ而も一切給不申、菓子類少々食候由なり

松平長門守殿隠居冠山態々中野村へ被参、小児を見て殊の外賞美之上敬し被申、始終小児を様付ニ尊ミ被申、自分方へも駕にて送迎、至て尊敬被致候由、何故ニ候哉、未分らず、傳八郎番頭佐藤濃州組頭森勘右何ニも右勝五郎を見被申度由ニ而近々差遣候趣也

（国立国会図書館所蔵）

注　『睡余操觚』全二十四巻は、江戸神田雉子町の町名主斎藤月岑(さいとうげっしん)の著作。調査報告⑩を参照。

（解読　大河内祥行）

12　山海里

（1）初篇　巻之一

応化菩薩辞世の事

一　松平冠山侯の息女露子といへりける方、年六ツにして疱瘡したまひ、文政五年午十一月廿七日逝去なり、死後にいたりて手箱を開くに、やうやくいろはの仮名にて、あやしげにかきつらねたまひたる辞世のうた、あまた出たりとぞ、第一にハ、父君に酒を停じたまへとの書おき、第二には、兄君へ画讃にしての書おき、第三には、産たまひし御はらの方への書置、第四には、めしつかひ給ひし婦女両人への書置、第五には、家臣老職の人への御しめし、第六の終には、菩薩の本門をあらはしたる言葉にて御両親への告命とみえたる一章あり、去年文政七申の孟春より、普門律師、立寛比丘、旧華叟等の高徳の人々、ふかく随喜ありて、其筆跡のまゝを梓行し、応化菩薩辞世帖と題号にあらはしたる物、印施となり、あまねく人のみる所なれども、旧華のいへるごとく、経説に菩薩長者の家に生れ、其身いのちをみじかうして、二親を済度すと説たまへる事、眼前なる事を尊みて人にしらしむるものなり

第一

おいとだからごしゆあがるな、つゆがおねがい申ます、めてたくかしく

おとうさま　まつたいらつゆ

上あける　つゆ

第二

十いちかつ御きうそくでかく

おのがみのすへおしらずにもふこてう

つゆほとのはなのさかりやちこさくら

あめつちの、おんはわすれじちとはは

六ツつゆ

第三

まてしはし、なきよのなかのいとまこい、むとせのゆめの、なこりおしさに

おたへさま　つゆ

第四

ゑんありて、たつときわれにつかわれし、いくとしへても、わすれたもふな

〔とき　たつ〕様　六ツつゆ

第五

うたかいの、ふかきしゆちやうをしめさんと、つたなきふてに、かきのこしけり

かみほとけ、へたてぬようにこころもて、このよわさかへ、ごせわあんらく

ごしようおは、ねかわすとても、だいいちわ、ぢひとなさけと、ほとこしとみち

しうとなり、けらいとなしたそのほかもきせん上下のへたてなく、たすけてやろうこゝろひとつてこれはみんなほんのこと、うたがいふかいとじやどうという　つゆ

第六の終に

へにしふかきかゆへに、ちちとなし、こころみちあるゆへに、ははとなし、おんをうけおんおゑんとして、みちひくむまれでて、おやよりおもしみつのおん

つゆ

〔上巳〕此うたのこゝろをおもふに、はじめ父君へのいさめとみゆるハ酒にあしきくせありて、やゝもすれば、御身のあやまちともならんことをおいとしうおもふゆゑ、酒をやめたまへとの事を、江戸言葉にておいとだから、御酒あがるなとのいさめとみゆるなり

次ニ蝶と桜と雨との絵をかきてのうたに、蝶によせて、兄君に後世をしりたまへとのいさめとみえたり

又児桜のうたに、つゆほどのとあるは、自身の名をうたによみいれたるこゝろならん

次の母君へのうたハ、生れたる子さへ死ぬれバうみたる母はなほさらと、まてしばし、なき世を夢なりとしりたまへとのこゝろならん

次の婦女二人へのうたに、たつときわれにつかわれしとハ、婦女の名のたつとときとをよみ入たる物ならん

次の家臣への御しめしは、国をまもる道の邪正をわきまへさしめ給ふ御ことばなりとぞ聞え侍る

第六の終のところは、開迹顕本なり、此書置、病床に伏ての後なれば、そばの人はなれざるゆゑしたゝむるひまなし、御きうそくにてかくとあれば発病まへに、御休息の間におゐてひそかに書て、手箱に入置給ひしに必せり、実に応化身ならずしてはなんぞや

（2）初篇　巻之二

前生を知たる事

一　武州江戸近辺八王寺村柚木長兵衛（源蔵）悴、今年文政八酉のとしは十一才に成けるが、此悴六才の時姉にいひけるは、あね様には元の家をしりて居けるやと姉のいふ、元の家とはいづれの事ぞ、ちかごろ家のかはりたる事はなしといへば、弟の小児いひけるは此内へうまれてこぬさきの家の事なりといふ、姉あやしみてたづねければ、とゝにもかゝにもばゞにもいふ事なくバ姉ばかりにいふべしとて、前生の事をくわしくかたりけり、其後はなに事にてもわんばくなる事をすれば、姉これをしかるとき、かの事をとゝかゝにいふぞといへば、たちまちにわるさをやむる事あまたゝびなりければ、両親あやしみて、かのかくす事とは何たる事なるやと姉にたづねければ、姉はひそかに父母へかたりけり、両親はなはだあやしみて、よな〳〵は小児ばゞにいだかれて寝る事なれバ、ばゞにとはせてみんとて、ばゞに其事をさづくるに、ばゞ承知していだきて寝たる、夜もすがらたづねければ、姉に聞きたる上はぜひなしかたるべしとて、小児のいふやう、われ此内へ生れてこぬさきには、これより西北の方五六里へだちて、（程）久保村といふ所なり、父は藤五郎といふ人、母はおしつといふ、今二人ながら居らるゝかしらぬ、巳（己）は藤蔵といふた、六才になる時おもき疱瘡にて死にたり、瓶に入れ穴に入れた事をしりて居るなり、墓へ送りてゆきし人の帰るのにつれだち帰りて内の机の上に三年の間居たり、其内に今の母や祖母が膳をすへてくれたりしていたはるに、こちの内へこひといふたゆゑ、今の家へ来てみたるに、夫婦喧嘩ありて、父（母）は江戸へゆくといふて、家内おだやかならぬゆゑ、三日三夜門口に居たり、其後家内おさまりしゆゑ内へ入たり、あとさきにわすれた事もあれどもそれらの事はおぼえて居るといひけるゆゑ、両親これを祖母より聞て、いかにしてもあやしき事なれども、いかにも夫婦喧嘩の事、江戸行の事みないふとほりなり、其時より来り生じて、今年六才になる事すこしもいふにたがはねば、其久保村へたづねてみたきものなり、しかれどもあやしき事におもはれんも、いかゞなれば、長兵衛自身にはゆきがたし、やはり祖母つれゆきてみたまへとて、老母に手をひかせて、かの所をたづねゆかしむるに、其村の近辺へいたれば、つねに遊びなれたる所なりとて、此家はたれの家かれの家などいふて、祖母にをしえ、かの藤五郎が門前にいたればこれがこちの内なりとて、祖母よりさきにたちて家内へ入り、台所に座して家内をみまはし、此棚はなかりしが出来たり、此所はかべなりしが、戸を入られたりなどいふゆゑ、家内中大にあやしみ、此小児はいづれより来りしぞ、十三年已前疱瘡にて死去せし藤蔵にすこしも〳〵人相のたがハぬ子なり、ものいふ声まで藤蔵なりとて女房なつかしげに

よりそへば、おまへはかゝ様じやわしは藤蔵じやといふゆゑ、女房は夢心なりといふゆゑつれてゆきし祖母なるものは、門口にひかえて居たりしが、其やうすをかんがへて内へとほり、藤五郎様と申すは此方にて候か、御内室はおしつ様と申かといへば、女房の返答には、いかにも御申のとほりに候へども、藤五郎（半四郎）は近所へ用事にて罷出留守にて候といへば、祖母のいふには、それなる小児ハわたくしの孫にて候が、かく〳〵の事にて候ゆゑ今日つれ来り候ところ、只今門口にて承候へば十三年さきに死たる藤蔵にすこしも〳〵たがはぬ人相にて、声まで藤蔵なりと実母の御申をきけば、きつねたぬきのたぶろかすにてもなく、生れかはりて来りしものとおもひ候といひければ、いよ〳〵女房はなつかしげにいたはる所へ藤五郎も帰り来り、始末をきゝて相よろこび、今日より此小児は此方へ申うけたしといへば、小児のいふには、いへ〳〵とゝかゝのたんとあるがよきゆゑ、両方におきて下されといふゆゑ、今生の両親、過去の両親和談の上にて、今は両方の家の子と成て居るよし、委く普門律師、江戸より上洛の節の物がたりなり、松平冠山侯も息女露子の事をおもひて、態々其土地にたづねゆかせられ、くわしく書とめて、小児にも面会して帰り給へりとぞ、むかしにありては、これらに相似よりたる事もあまたありけれども、今存命にして四人の実父母ある事隔生即忘とのミいふべきにもあらず、別に因縁のある事ならん、河内国玉手万福寺の夏屋和尚は、次の生には尾州へ生る事を知り、紀州根来の法住師は、前生智道比丘尼にてありし事を知れりといふも、尋常ならぬ因縁にて、三世はなき事におもひける外道をいましむるの摂化髄縁ともいふべき事なり、河内の寂照入唐の時、もろこしにていふに、先年死去したる寂照にすこしもたがはぬかほかたちなる法師の、日本よりわたりきたれりといひしとぞ、しかれば寂照の前世ハ唐人にて名も同じかりしとみえたり、人の名も形も前生の縁をひく物ならんと、扶桑故事にかきたるも可なり

（鳥取県立博物館所蔵）

（解説四参照、解読　鈴木淳世）

13　武蔵名勝図会　多摩郡之部　巻六

前生覚知の小童

前生覚知の小童　右同所中村（野）村の村民源蔵といえるものゝ小童幼名勝五郎といふハ文化十二亥年十月十日に生れ、文政六未年に九歳なり、此小童、文政六未年の前年八歳の時、十一月庭にて十四歳になれる姉へ遊戯の折ふし不図語りけるハ、姉さんハもとの生れし家をしりけるやと問ふ、姉のいふ、もとの家ハしらす、爰より外に生れし家なしと答ふ、小童いふ、我はもとの内をしりたりといふ、姉ハ拾四歳ニもなりて物心もしれるゆへ、戯のことと思ひ、其もとの家ハいつくそと問へは、誰にも語り給わすハ噺さんといふゆへ、姉も其ことを誓ひ、さらばいつくやと問ふ、小童かいふにハ、爰より半里も西北にて、程窪村なり、父の名ハ藤五郎、母の名はおしづといえり、六ツの時疱瘡にて死せり、其後爰の家の子にならんと思ひ庭迄来れるか、夫婦いさかひなと兎角やまさるゆへ、内へ入兼て庭の木のもとに久敷忍ひ居たりけるか、機嫌なをりしゆへ内へ入て、爰の子に生れたりといふ、姉も戯れの事と思ひしか、或時母に此事を告けり、母も戯とハ思ひなから人目なき時小童勝五郎をすかして問ひけれとも、秘していわす、さま〳〵の事を謀りて問ひしに、嚮に姉に語りしにたかわす、母のいふ、前生程窪村の家ハ村の何方にあるやと問へハ、勝五郎いふハ、程窪へ行き給へは、其家を知らすへしといえり、其年も暮けれは、翌文政六未年正月廿日母勝五郎背負ひ、高幡不動参詣なから程窪村へ掛り過行しに、小童いふ、此家こそ前生の家なりと教へけり、扨、程窪村の前生の実父半四郎（藤五郎）ハ小童か五歳の時病死し、翌年継父を入し其年の十月小童死せし、依之、継父ハ半四郎といえるとそ云々、斯て再生の母は小童勝五郎か教にまかせ、さあらぬ体にて、ちと御ゆるし下され、不動参詣に由木辺より参りしものなりとて、内へ入て色々聞けるに、小童が物語少も違わさりける、此小童か話せし事はしか〳〵のことなりといへは、半四郎夫婦もろともに奇異の思ひをなし、互に感涙を流けるといふ、此こと近村に伝へ聞て、所々より尋来れるもの夥し、江戸なとへも其奇事を伝へ聞て、専ら奇談の事となれり、同所の名主も地頭所へ届に及ひけれハ、地頭ハ根津七軒丁多門伝八郎といふ人も其前に此奇談を聞ける上ゆへ、小童を伴ひ可参旨申聞

られ、同四月五日小童か親源蔵、勝五郎を伴ひ地頭へ参れり

（個人蔵　日野市郷土資料館寄託）
（解説四参照、解読　鈴木淳世）

14　桑都日記　続編巻七（読み下し）

○文政五年壬午の冬十一月、柚木領中（野）村の百姓源蔵の子、勝五郎、九歳にして前生の事を語る。皆符信有り。

勝五郎の前生は程窪村の百姓半四郎の子なり。藤蔵と曰ふ。文化七年庚午の二月四日、疱瘡に罹りて死す。時に六歳。里中の医王寺に葬る。文化十二年乙亥十月十日、中村の百姓源蔵の家に生る。父は即ち源蔵、母は勢伊と曰ふ。今茲文政壬午の年甫、九歳にして其の姉、布佐と前生の事を語る。父母聞きて之を異とし、携へて前生の家に至りて訪ね問ふ。言、皆、符験有り。両家の父母慨嘆せり。亦、異ならずや。郷党以て奇譚と為せり。

按ずるに、晋の鮑靚は東海の人也。年五歳のとき、父母に語りて曰く、本は是れ曲陽の李家の児、九歳のとき、井に墜ちて死せりと。其父母訪ね問ひしに、皆符験あり。又曰く、晋の羊祜は泰山南城の人なり。年五歳の時乳母をして弄する所の金環を取らしむ。乳母曰く、汝先に此の物無しと。祜即ち隣人李氏の東垣なる桑樹中に詣り、探りて之を得たり。主人驚きて曰く、汝吾が亡児の失ひし所の物、云ふ、何くにか持ち去ると。乳母具に之を言へば李氏悲惋す。時人之を異しみ、李氏の子は即ち祜の前身也と謂ふ。是等の二件の事に拠りて之を稽ふれば即ち、今茲の勝五郎の前身を語るの説、又、之を誣ふべからず。

（八王子市極楽寺所蔵　八王子市郷土資料館寄託）
（解説四参照、解読　鈴木淳世）

15　珎説集記

（付箋「文政六未年未年生替物語」）

文政六未年生替物語

私知行所
武州多摩郡中野村
百性源蔵二男
勝　五　郎
未九才

右源蔵二男勝五郎儀八才ニ而去年秋中同人姉ニ向ひ前世生れ替候始末相咄候得共小児之物語故取用不申候処、度々右様之咄申出候ニ付姉義不審ニ存し父母江咄候而昨年十二月中改而父源蔵より勝五郎相尋申候所、先世之父は同国同郡小宮領程窪村百姓久兵衛と申者、後之父ニ相成居候処右悴六才之時疱瘡ニ而病死仕、夫より右之源蔵方江生れ替候由、難取用筋ニは有之候得共委細慥成事共申候ニ付、村役人共申出得と相糺候所世上取沙汰仕候故程窪村半四郎方ニ而も沙汰承及、同人義知行所源蔵方江尋参相糺候所、小児勝五郎申候通り相違無之、前世父母面躰其前住居等も咄出申候ニ付、程窪村半四郎方へ勝五郎召連参候所、先年六歳ニ而病死仕候藤蔵ニ似合候小児ニ有之、其後当春迄も折々懇意仕候内、近村江も相知レ候哉此程は日々勝五郎を見物ニ所々より参候者有之候由知行所より訴出申候ニ付源蔵呼出相糺候処右之通両人共相答申候、尤折々世上取沙汰も仕候間誠難取用筋ニは有之候得共、此段内々御耳ニ達申上置候、以上

四月　　多門傳八郎

右之御届書写昨廿日夕方志賀兵左（右）衛門様御持参ニ付奉入御覧候、先日拝見之冠山様御書ニ御添置被遊可然哉ニ奉存候、以上

六月廿一日　　和　直

勝五郎再生話入尊覧候、是ハ仏説不信の族ヲ降伏之方便にて鄙俗ニしたゝめ申候、御慰而已差上申候、私自ら勝五郎祖母へ承り候ニ付話ハ相違無御座候、御一覧之上御返却可被下候、以上

廿日　　冠山拝

弔　啓

此物語は江戸鉄炮州松平冠山様当癸未三月廿二日態々彼地江御立越被遊候間、右勝五郎祖母ニ逢ひ逐一御糺之上有之儘御筆記之実事ニ而相違無之候、右冠山様其後四月十四日吾寺江御来駕被為在御直之物語之上猶又同月廿日右筆記為御見被下候間不取敢写し置者也

文政六未年四月廿一日　泉岳寺貞鈞叟(花押)

武州多摩郡柚木領中野村小名谷津入
多門傳八郎知行所屋敷根津七軒町
百姓源蔵次男
当未九才文化十二年　勝五郎
乙亥十月十日生
父苗字小谷田
当未四十九才　源　蔵
源蔵（妻せい）尾州家士村田吉太郎尾州ニ而御弓役相勤せい十二才之時本多大之進殿江奉公スと云、せい十三才之時吉太郎故有而永之御暇ニ而浪人ニ成、其後文化四年四月廿五日七十五ニ而病死墓所禅宗下柚木村之永林寺
貧窮ニ付かご細工いたし江戸江商フ、宿所馬喰町相模屋喜兵衛方

源蔵妻
当未三十九才　母　せい
当未七十二才　祖母　つや
若年之時松平隠岐守殿奥へ奉公す
当十五才　姉　ふさ
当十四才　兄　乙次郎
当四才　妹　つね

武州多磨郡小宮領程窪村
中根宇右衛門知行所屋敷下谷新シ橋通
六才ニ而死去　藤　蔵
文化二年乙丑生、同庚午二月四日昼四ツ時頃死ス、病症疱瘡、葬地同村之山、菩提所同領三沢村禅宗医王寺、文政五年十三回忌也

藤蔵養父苗字須崎
当未五十才　半四郎
当未四十九才　実母　しつ
藤蔵実父
久兵衛改
藤五郎
初名を久兵衛ト申候、文化五戊辰年藤蔵五才之時四十八才ニて死去、此跡ニ半四郎入夫之由、文政五年十三回忌

藤蔵種替り兄弟
半四郎（怜）両人
同娘　両人

去年十一月の頃勝五郎姉ふさとたんほにて遊ひなから勝五郎姉に向ひ、姉さんはどこからこちの家へ生れて来たと問ふ、姉どふして生れて来た前がしれるものかといへバ勝五郎あやしけなる躰にてそんならおまへハ前の事ハしらぬかといふ、姉てまへハ知つているかといへバ勝五郎しつて居るのさおらアあの程窪の久兵衛さんの子で勝蔵（藤蔵）と云たヨ、姉そんならおとつさんとおつかさんにいをふといへハ勝五郎泣出しおとつさんおつかさんにいつちやアわるい、姉そんならいふまい、わるい事をするといつつけるぞよとて其後兄弟けんくわなどすれハ彼の事をいをふと云と直ニやめる事度々なれバ、両親これを聞つけいかなる悪事をなせし哉とあんし有のまゝに告るに源蔵夫婦祖母つやと甚不審におもひ勝五郎をすかし色々とせめ尋ければ、そんならいをふとて、おらア程くぼの久兵衛さんの子にておつかさんの名はおしづさんといつた、おらア五ツの時久兵衛さんハ死んて其跡に半四郎さんと云が来てをれをかわいがつてくれたか、おらア其あくる年六て疱瘡で死でそれから三年目におつかさんの腹にはいつてそれから生れたよと云、両親祖母是を聞て大に驚き、どふぞして程窪の半四郎と云者を尋てミんとおもへとも身すきにまきれ其まゝに打捨て置しに、母しづ（せい）ハ四成ル娘常に乳ヲのまする故勝五郎ハ祖母つやにだかれて毎夜〳〵ねものかたりするゆへ、つや勝五郎かきげんを見合其死せし時の事を尋ねとふに、勝五郎四つぐらい迄は能覚へていたが段々わすれたが、疱瘡で死で壺に入られ山に葬むられた時、穴をほつて壺を落した時どんといつた音ハ能覚へている、それから内に帰て枕（机カ）の上にとまつていたらなんともしれぬじいさまのやうな人か来てつれて行と空をとんであるひて昼も夜もなしいつも日暮時分のやうだつけ、寒くも暑くもひたるくもなかつた、いくら遠くにいつても内で念仏を唱声となにか話す声か聞えて、内てあつたかいぼた餅を備ると鼻から烟をのむやうてあつたからおばアさん仏さまにあつたかいものをすへなさいよ、そうして僧さまに物をやらつしやいよ、これがいつちいゝ事たよ、それから其しいさまがつれて此内の向ふの路を通るとおもつたが、しいさまもう死んでから三年たつたからあの向ふの家に生れろ、我がばアさまに成ル人ハ気

のいゝばあさまだからあそこにやとれといつてじいさまハ先にいつてしまつた、おらア此内にはいろうとおもひて門口の柿の木の下にいたら、内になにかおつかさんが家がひんぼうておつかさんか江戸に奉公に出ずハなるまいと云相談があつたから、まアはいるまいと庭に三日とまつていたが三日目に江戸へ出る相談がやんでから夫からその夜あの窓のふし穴から内へはいつて竈の脇にまた三日居て夫からおつかさんのおなかにはいつた、おなかのうへのほうにいたらせつなかろうとおもつて脇の方に寄て居た事も覚ている、生れた時苦労のなかつた事も能覚へているが、おとつさんとおつかさんにはいゝが外の人ニハ云なさんなと云、祖母此由源蔵夫婦に語る、夫より後ハ両親に前生の事とも有之儘語り、程窪に行たい久兵衛さんの墓にやつておくれと度々云事なれハ、源蔵思ふやう勝五郎希有なる子なれバもしも其内死ぬまじきものニもあらねハ成程程窪ニ半四郎ト云者ノ有やなしやを尋ね度ものなれバ、男の身として余りあと先かんかへなきやうに人の思わくもいかがなれバと、当正月廿日祖母つやに勝五郎ヲ連て行へしと云けれハつや勝五郎をつれて程窪村に行、此内かあの家かと云バ勝五郎まだ先〳〵といつて先に立て行程に、此内だとつやにかまハずかけこむ故つやも続てはいり先ツ主しの名を問ふに半四郎と答、妻の名をとへハしづと答ふ、此内に藤蔵と云子か有りしやと云ハ十四年以前頃六ツの年疱瘡で無なりましたと云、つやは始めて勝五郎か云シ事の真事なるを存涙せきあへす、勝五郎か前生を覚て話せし事具に語れバ半四郎夫婦も誠に奇異のおもひをなし、勝五郎を抱きともに涙にしつミ、前生藤蔵と云て六ツの時の勝五郎よりきりやう一段上りたりなと云に、勝五郎向ふの烟草屋の屋根をゆびさしまへかたハなかつた、あの木もなかつたなと云に皆其通りなれバ半四郎夫婦もいよ〳〵我を折しと也、扨その日ハ谷津入りに帰りしが二三度半四郎方江遣し実父久兵衛が墓へも為見しと也、勝五郎時々おらアのゝさまだから大事ニしておくれといひ、また祖母に向ひおらア十六で死ぬだろう御嶽様のおしへさしつたが死ぬハこハひものでハないといひしとぞ、両親勝五郎にてまへハ坊さまにならぬかと云へハおらア坊さまに成事ハいやたといひし、近頃村中ニてハ勝五郎とハいわずして程窪小僧とあた名を呼事村より見に来る人もあれバはづかしがりてやにハにけ隠るにより勝五郎が直咄しハ聞事不叶、祖母の物語にてこれを書とむるもの也、扨源蔵夫婦祖母つやの内何そ兼て善根をせし覚へあるやと問ふに、何もさのミ能き事もせず、祖母つや明ケ暮念仏を唱へ出家乞食の門口に立つあれハいつも銭二文ツヽ法捨をする外善事と云程の事もせざりしといふ

生替物がたり終

（『珎説集記』裏表紙見返し）

「文政年中より天保年迄分

江戸　芝車町

南仙波氏

持主」

「明治二巳年二月廿一日

西久保大和屋作次郎方求」

（同裏表紙）

「江戸　芝車町

南仙波氏

持主」

（國學院大學図書館所蔵「佐佐木高行旧蔵書」）

図1『珎説集記』表紙
（國學院大學図書館所蔵　佐佐木高行旧蔵書）

図2 同「文政六未年生替物語」（同）

注　小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）が、『仏の畠の落穂』収載の「勝五郎の転生」を執筆するときに底本とした資料。調査報告⑪参照。

（解読　小宮　豊・大河内祥行）

（参考）小泉八雲『佛の畠の落穂』

第十章　勝五郎の轉生

一

これから書き下す事柄は作り物語では無い――少くとも私の作り出した物語の一つでは無い。これは日本の古い一つの記録――或は寧ろ記録類系ともいふべき物を飜譯したのであるが、それにはちやんと署名もしてあれば捺印もしてあり、その上この世紀の初期に溯つての日付さへ記入してあつた。私の友人の雨森氏は日本や支那の珍しい寫本をいつも獵つて歩く仁で、さういふ珍本を掘出すことにかけては非凡な腕前を持つてをるやうに見えるが、その仁がこの寫本を東京の佐佐木伯爵家の書庫で見出したのである。氏はこれを珍しい本だと思つたので親切にも私にこれを寫させてくれた。私はその寫した書物を臺本としてこの譯をものしたのである。私は本書の附録として書いたところの二三の註釋以外の事柄に關しては何らの責任を持つてをらぬ。

この譯文は讀み始めは多分面白味が讀者にうつつて来ぬと思ふが、それを忍耐して終り迄全部通讀して貰ひ度い。と言ふのはこの書は人間の前生追憶の可能であることを私達に教へてをる以外に多くの事柄を暗示してをるからである。例へば既に消え去つて了つたところの封建時代の日本に關して、或はこの國の昔の宗教――假令それが高尚な佛教で無かつたにせよ、西洋人の目から見て容易に眞相を捕へることの出來なかつた物のその幾部分かをこの記事によつて窺ふことが出來る――換言すれば日本の人達が前生と更生とに關して一般に抱いてをつた思想がこの書の中に能く現れてをる。故にこの事實の上に立つて觀察すればお役所の吟味が正確であつたことゝか、或は證據として認められた事柄が信ずべき筋の物であつたとかなかつたとかいふことは當然小さな問題となつて仕舞ふ。

二

㈠　多聞傳八郎の調書寫

私の地内の百姓で目今武蔵國多摩郡中村に住んでをる源蔵と申す者の二男で當年九歳になりまする勝五郎の一件は次のやうな次第であります。

昨年の秋の間のことでありましたが、或時、源蔵の子、前記勝五郎がその姉に彼の前生のことや轉生のことを物語つたさうですが、姉はそれを子供の出鱈目な話だと思つて注意を拂はなかつたのです。併しその後勝五郎は同樣の物語を幾度も幾度も繰返すので姉も初めて不思議なことに思つて終にこれを兩親にも告げたのであります。

去年十二月の間に源蔵自身がこの事柄について勝五郎に質ねましたところがそれに對して勝五郎はかう公言したのであります。

『私は前世では武蔵國多摩郡の小宮樣の領内程窪村の百姓久兵衛とかいふ者の子でありました――『久兵衛の子と生れたこの私勝五郎は六歳の時に疱瘡を病んで死にました――

『それから後源蔵の家に轉生つたのであります』

この話は嘘のやうでしたが勝五郎は餘りに委しく餘りに明かにその物語の事情を繰返して話しますので、その村の庄屋や長老等はこれを形式の如く調べてみました。ところでこの事が早速世間に廣く知られたので伴四郎とかいふ者の家族の耳に入りました。伴四郎は程窪村に住んでをつた者であります。彼は私の地内の百姓、前記源蔵の家へと參りました。そしてこの少年が彼の前世の両親の肉體の容子や顔の特色等に關してかねがね話してゐた事柄や、或は又、彼が前生で住んでゐた家の樣子等について物語つてをつた事柄が皆一つとして事實で無い物は無いといふことを知りました。そこで勝五郎は程窪村の伴四郎の家に引取られました。村の人達は勝五郎を見て藤蔵さんそつくりだと申しました。藤蔵といふのは餘程以前に、然かも六歳の時に死んで仕舞つた子供であります。その時以來この二家族は折さへあればお互に往復してをります。他の隣接村の人達はこれを傳聞したものと見え、勝五郎の顔を見に來る人が毎日毎日絶えないといふ有樣であります。

以上の事實に關する證言が私の地内に住んでをる人達に依つて私の面前でなされましたから、私はその源蔵なる男を私の家へ呼出して調べてみました。私の訊問事項に答へた彼の言葉は他の人達の述べた前記の口供事項と何等矛盾するところはありませんでした。

この種類の評判は世間に於て人々の間にひろがることは時々あるものであります。このやうな事柄は信ずることが困難であるのは固よりでありますが、私はただこの差當つての事件を御耳に入れまして、私の怠慢の罪を免れ度いばかりに御報告申上げる次第であります。

〔署名〕多聞傳八郎

文政六年（一八二三年）四月

㈡　泉岳寺の僧貞金に與へた

和直の書狀寫

多聞傳八郎の調書が志田兵右衛門様の手で寫されて、それが私の掌中に入つたので私は好都合でありました。私は今それを貴僧にお送り致すことの出來るのを光榮と存じてをります。貴僧はこの調書寫本と、それから貴僧が先般私に見せて下さいました觀山様の御書とを一緒に、永く御保存相成ることは、貴僧にとりて御利益のことゝ思ひます。〔署名〕和　直

六月二十一日（他に年代の記入無し）

㈢　松平觀山から泉岳寺の僧貞金に與へた書狀寫

この書面と同封で勝五郎轉生の物語書をお送り致します。この書は私が通俗的に書いてみたもので、その趣旨はかの佛教の難有い御教へを信じない人達を沈黙させる為にはこの書が效果が多いと思つたからであります。言ふ迄も無くこれは文學書としてはつまらぬ作であります。私が今これを貴僧にお送りするのは、かういふ見方でこれを御覽下さつた場合にのみ御興味を引くことが出來得ると思つたからであります。併しこの話其物について申せば誤謬の點は一つもありません。と申しますのは私がこの話を勝五郎の祖母の口から直接に聽いたからであります。これをお讀みになつたら何卒私に御返却を願ひます。

〔署名〕觀　山

二十日（他に如何なる年代の記入も無し）

【寫し】

勝五郎轉生の話

㈣　僧貞金が序（はしがき）に書いた説明書

これは一つの眞實の出來事を書いた書である。その證據には編者松平觀山様がこの事柄を委しく取調べる為に本年三月二十二日親しく（中野村に）御出馬になつてをるではありませんか。觀山様は勝五郎を一瞥なされた後にその祖母に凡ゆる委しい事をお質ねになつた。そして祖母の答へるまゝに委しくお書きになつた。

その後この觀山様は辱け無くもこの四月の十四日に是所（この寺）へお出でになつて、前記勝五郎の家族訪問の事柄をその貴い御口からお話になつた。剩へ同月二十日には前記の書を私に讀むことをお許しになつた。で私はこの御厚意に甘えて時を移さずこれを寫した。

〔署名〕貞金僧（書きはん即ち筆で個人用の署名印を書いたものゝ寫し）

泉岳寺

文政六年（一八二三年）四月二十一日

【寫し】

㈤　この二家族の人達の名前

源　藏　の　家　族

勝五郎――文化十二年（一八一五年）十月十日生、文政六年（一八二三年）當九歳、武藏國多摩郡中村、谷津入に住める百姓源藏の二男――この村は多聞傳八郎の所有地（多聞の屋敷は江戸根津七軒町にあり）に在つて柞木（ゆずき）管内。

註　西洋人が記憶すべきことは日本では生れたばかりの子供は一歳として計算されるのが常であるといふ事實である。

源藏――勝五郎の父、姓は小矢田氏、文政六年當四十九歳、貧のため日夜籠を造つて江戸で商賣す、江戸居住中の旅宿は馬喰町相模屋といふ、宿屋の亭主は喜平と呼ぶ者。

せい――源減の妻、勝五郎の母、文政六年當三十九歳、嘗て尾張様に事へたことのある弓術家村田吉太郎と呼ぶ武士の女、せい十二歳の時本田大之進殿の家に下女となつたと傳云、十三歳の時父吉太郎何かの理由で尾張様から永のお暇がでて浪人（註）となつた、そして文化四年（一八〇七年）四月二十五日七十五歳で歿した、彼の墓は下柞木（しもゆずき）村の永林寺といふ禪寺の墓地にある。

註　浪人とは主君を持たぬ流浪の武士を云ひ、一般にこの徒は自暴自棄の甚だ危險な者共であつたが、中には立派な人物もあつた。

つや――勝五郎の祖母、文政六年當七十二歳、若い時松平隱岐守殿（大名）の御殿女中を勤めた。

ふさ――勝五郎の姉、本年十五歳。
乙二郎――勝五郎の兄、本年十四歳。
つね――勝五郎の妹、本年四歳。

伴四郎の 家 族

藤蔵――武蔵國多摩郡程窪村で六歳の時に歿した、こゝは江戸下谷新橋通に屋敷を持つてをる中根右衛門の所有地、小宮管内……（藤蔵）は文化二年（一八〇九年）に生れ文化七年（一八一〇年）二月四日四刻（午前十時）頃死す、病名は疱瘡、前記の程窪村の丘上の墓に葬る、菩提寺は三澤村の醫王寺、宗門は禪宗、去年文化五年（一八二二年）藤蔵の為に十三回忌の法會營まる。

註　佛教では亡者の為に一定の年期毎に法會を營むことになつてゐて、それが次第に永さが多くなつて來て死後百年目に至るやうに定めてある。十三回忌とは死後十三年目の法會である。第十三回といふ數は前後の意味から考へて死者の死んだ年が第一年目として算へられてをることを讀者が了解しなくてはならぬ。

伴四郎――藤蔵の養父、姓は鈴木、文政六年當五十歳。

しづ――藤蔵の母、文政六年當四十九歳。

久平――（後に藤五郎）、藤蔵の實父、原名は久平、後藤五郎と改名す、文化六年（一八〇九年）藤蔵五歳の時四十八歳にて死す、彼の代りに伴四郎入婿。

註　入婿とは両親と同棲してをる女の第二番目の夫となること、但し養子。

子供、二男二女――何れも藤蔵の生母と伴四郎の間に出來た子。

㈥　大名松平觀山殿が通俗文で書かれた物語の寫し

去年十一月の或日のこと、勝五郎が姉のふさと畠で遊んでゐた時このやうなことを質ねた、

『姉さん、貴女はこの家へ生れて來る前に何所にをつたの？』

ふさは答へた、

『生れる前にどんなことがあつたかどうして分るものか』

勝五郎は驚いた様子で叫んだ、

『では姉さんは生れる前に何があつたか思ひ出せないの？』

ふさは問うた、

『お前さんがそれを覺えてをるの？』

勝五郎は答へた、

『覺えてをりますとも、僕は程窪の久平さんの子でその時は藤蔵といふ名であつたんだよ、姉さんはそれを皆知らないの？』

ふさは言うた、

『あらまあ！何を言ふんですか、お父さんとお母さんに告げるわ』

勝五郎は直に泣きだした。そして言うた、

『姉さん告口しないで頂戴、お父さんとお母さんに告口したら大變だ』

暫時の後ふさは答へた、

『よし、よし、この度だけは言はないで置きませう、でも復このやうな善くないことを少でも言うたらその時こそは告口するよ』

その日以後二人の間に喧嘩が持上る毎に姉は弟を嚇して『いゝわ、いゝわ、――あの事をお父さんとお母さんに告げてやるから』と言つてゐた。これを言はれると勝五郎はいつも姉に降參して了つた。ところがこれが幾度も起つたのでたうとう或日のこと両親はふさが弟を嚇してをるのを立聽きして了つた。そこで両親は勝五郎が何か善くない事をやつたに相違ないと思つて、それを何とかして知り度いと考へた末ふさにこの事を質ねたのである。ふさは終に事實を明かした。これを聽いて源蔵夫婦も勝五郎の祖母も何といふ不思議な事だらうと愕いて了つた。そしてその結果彼等は勝五郎を呼んで最初は甘言で賺し次には嚇して、一體お前はどういふ意でこのやうなことを言ふのだかと質ねた。

勝五郎は躊躇した後かう答へた。

『殘らず申します、僕は程窪の久平さんの子でありました、そしてその頃の僕のお母さんはおしづさんといふ名でありました。僕が五歳の時久平さんは死んでその代りに伴四郎さんといふ男が養子に來て僕を大變に可愛がつてくれました、併し僕はその翌年丁度六歳になつた時に疱瘡にかゝつて死んで了ひました、それから三年目に僕はお母さんのお腹に宿つて復生れて來ました』

これを聽いて両親も祖母さんも大に驚いた。そして彼等は程窪の伴四郎といふ者について出來得

る限り委しく調べて見ることにした。併し何といつても彼等は生活の糧を得ることに毎日追はれてゐて、他の事柄の為に殆んど時間を用ひることが出來なかつたので直に彼等の目的を遂行しようとしても駄目であつた。

勝五郎の母せいは今はその女兒つね――[註一]四歳の――に夜な夜な乳をくれなくてはならなかつた。それが為に勝五郎は祖母のつやに抱れて寝た。彼は時々寝ながらお祖母さんに話すことがあつた。或夜彼が非常に打寛いだ様子で何事でも彼女に話しかけるといふ氣分になつてをつたので、お祖母さんは彼にお前が死んだ時にどんな事があつたのか私に教へてくれぬかと言ひ出した。さうすると彼はかう答へた。――『四歳の時迄僕は何でも記憶してゐたが、それから後といふものはだんだん物忘れするやうになつて、今では澤山の事を忘れてをる。それでも未だ忘れてをらぬ事は疱瘡にかゝつて死んだことだ。それから未だ覺えてをることは[註二]壺に入れられて丘の上に埋められたことだ。丘にゆくと其所の地面に穴が一つ造られた。そして其所へ來た人達はその穴の中へ私の入つてをる壺を落した。ぽんといつて落ちたよ――あの音だけは今でも能く覺えてをるよ。それからどうしたのか知らぬがともかく僕は家へ戻つて僕の[註三]枕の近くを離れなかつた。暫くすると或る老人――お祖父らしい老人――が來て僕を連れ去つた。歩いてゆく時何だか飛行でもやるやうに虚空を突切つて走つた。二人が走つた時は夜でも晝でも無かつた事を僕は記憶してをる。それは常に日没時の様であつた。暑くも寒くも無く亦お腹もへらなかつた。二人は餘程遠く迄往つたやうに僕は思つてをるが、それにしても僕は僕の家で人々の話してをる聲をいつも聽くことが出來たよ、幽かではあつたが――そして僕の為に[註四]念佛の聲が上げられてをるのが聞こえた。亦家庭の人達が佛壇の前に温い[註五]牡丹餅を供養してくれると僕はその香氣を吸ひ入れたことも　記憶してをる――お祖母さん、佛様に温い食物を供へることを忘れてはいけません、お坊さんにでもさうですよ――これは[註六]大きな功徳になるんだよ――それから、これはつい思ひ出すだけのことであるが、その老人は何か迂廻した道を經て僕をこの場所へ伴れて來たやうである――僕達の通つたのはこの村の向うの所だ。そして僕達は是所へ來た。彼はこの家を指差して僕に言うた――『さあ是所で轉生するんだよ、――お前は死んでから三年目になるが今この家で生れかはることになつてをる、お前のお祖母さんに成る人物は大いさう親切だ、だから其所でお腹に宿つて生れて來るのはお前の幸福さ』かう言つて了うと老人は消え去つた。僕はこの家の入口の前で柿の樹の下で暫く立止つてゐた。それからいよいよ家に入らうとすると家の内側から話し聲が聞こえて來た。誰れかが言うた、『お父さんの収入が餘りに少いから、お母さんが江戸へ奉公に出掛けなくてはならぬだらう』。僕は『これではこの家へ入らないことにする』と思つた。そして三日間庭の中に留つてゐた。三日目になると結局こゝのお母さんが江戸に出掛けないことにした。そこで私はその夜雨戸の節孔から家の中に入つた――　その後三日間といふものは[註七]竈の側にとどまつてゐた。そしてその後初めてお母さんの[註八]お腹に入つた――私は全く少しの苦痛も知らずに生れて來たことを覺えてをる。――お祖母さん、『これはお父さんとお母さんに話してもいゝがその外の人には誰れにも話さないで下さいよ』

註一　日本の貧しい階級では西洋であるならば當然乳離れをさせる年齢に子供が達した頃でも容易に乳離れをさせないで大きくなる迄乳をくれてをる、併しこの本に書いてある四歳は西洋の算へ方による三歳よりも著しく少いことになる。

註二　死者を大きな壺に納めて埋葬する風習は日本の遠い昔から見らるゝ例である、骨壺は普通に赤い土器である、所謂かめといふものである、かういふ壺は今日でもなほ用ひられてをる、但し今日では死者の大多数は西洋で知らない一種特有の形をした木棺の中に納められてをる。

註三　この意味は枕に頭を横へて寝るといふつもりでは無くて枕のあたりをさまよふとか、或は昆蟲でもとまる様にその上に休むといつた風のことを意味するものである、肉體の無い霊魂は普通に家の家根の上に休むといはれてをる、

次の文章に述べてある老人の幽霊は佛教よりは寧ろ神道の思想であるらしい。

註四　佛教のお禱りの句は南無阿彌陀佛を繰返すことである、念佛は阿彌陀宗―眞宗―以外の多くの佛教宗派で繰返すものである。

註五　牡丹餅は米の飯に砂糖を混じて造つた一種の菓子。

註六　日本の佛教文學の中にはこの種の忠告は陳腐となつてをる、こゝでいふ佛様の意味はこの子供の心では佛其者を指差すのでは無くて寧ろ死者を愛した人達が後生の幸福を希ふつもりで佛と呼んでをる人達の霊魂を指差したものである、これは恰も西洋に於て死者を呼んで天使といふことが時々あるのと同様である。

註七　日本の臺所に於ける料理場である、西洋のかまどと非常に異つた意味を持つことがある。

註八　こゝで私は原文の二句を省くに如かずと思つた。それは西洋趣味にとりて餘りに露骨だと思つたからである。併しその句は興味が無いといふ譯では無い、省略した句の意味をいふならばこの子供は母親のお腹の中に居つてさへ愼重な態度で動作し、特に孝道を守つてをつたといふことを書いてをるに過ぎぬ。

祖母は勝五郎が彼女に話してくれた事柄を源蔵夫婦に語り聞かせた。そしてそれ以後勝五郎は少しも恐るゝことなく自由に彼の前生話を両親にしてゐた。彼は屢々両親に『程窪へ行き度い。久平さんのお墓参りをさせてくれ』と言つてゐた。源蔵は勝五郎が變な子だから遠からず死ぬかも知れぬ、だから伴四郎といふ者が程窪に事實居たかどうかを迅く調べてやつた方がよからうと考へた。併し彼はこのやうな事（このやうな事情の下でか？）を為（す）るのは男としては輕卒でもあり亦出過ぎたことにも見えると考へたから自分からすゝんでこの調べを實行することを欲しなかつた。そんな理由で彼は程窪へ自分で行くことは止めてお母（ふくろ）のつやにこの年の一月二十日に其所へ孫を連れていつてくれと頼んだのである。

つやは勝五郎を連れて程窪へ行つた。二人が其村へ入ると彼女は手近の家を指差して勝五郎に『どれなの？この家？あれ？』と問うた。勝五郎は『否、もつともつと遠くだよ』と答へた。そして彼女の前に立つてさつさと急いだ。やつと一軒の住家に着いたので彼は『これなんだよ！』と叫んだ。そしてお祖母さんの來るのも待たないで其家へ走り込んだ。つやは彼の後について家に入つて、この家の主人の名を問うた。問はれた者の一人は『伴四郎の家だよ』と答へた。お祖母さんは更に伴四郎の妻の名を質ねた。答へは『しづ』といふことであつた。次に彼女はこの家に藤蔵といふ子が生れたことがあつたかと問うた。『あるよ、併しその子は六歳の時に死んで仕舞つて今は十三年目になる』といふのがその答へであつた。

この時つやは初めて勝五郎が今迄事實を話してをつたことを知つて溢れ落つる涙を禁ずることが出來なかつた。彼女はこの家の皆の人達に勝五郎が彼の前生を覺えてをつて彼女に話してゐたことを語り聞かせた。これを聽いて伴四郎夫婦は非常に驚いた。彼等は勝五郎を撫でて涙にかきくれながら、勝五郎は昔六歳の時に死んだところの藤蔵として美しかつたよりも、今の方がもつと遙に美しいなぞと言つてゐた。そのやうなことのあつた間勝五郎は周圍を見廻してゐた。そして伴四郎の家の向側に在る煙草屋の屋根を見て其所に指差しながら『あれは彼方はなかつたんだが』と言うた。亦こんなことも言うたのである、『彼方の樹木はあんな所に無かつたが』と、是等は悉く眞實であつた。こんな譯で伴四郎夫婦は終に心の底から疑念を棄てて仕舞つた（我（が）を折つた）

同日につやと勝五郎は中野村の谷津入に戻つて來た。この後源蔵はその子を幾度も幾度も伴四郎の家に遣つて彼の前生の實父久平の墓に參詣することを許した。

時としてはこのやうなことを勝五郎は言ふのである――『僕は註一佛様（ののさま）だ、だから何卒僕を大切にして下さい』亦お祖母さんに『僕は十六歳になると死ぬよ、でも註二御嶽様（おんたけさま）が僕に教へて下さつたことによると死ぬことは何でも無いさうだ』と言ふことも時々ある。両親が彼に『お前は出家する心はないか』と問ふと彼は『そんな氣は無いよ』と答へる。

註一　ののさん又はののさまは子供の用ひる

言葉であつて亡者の霊、即ち佛様のことである、神道では神様といふ。のの さんを拜むといふことは神々を祭るといふことで兒童の用ひる言葉である、先祖の靈魂はののさんになる、即ち神道の思想によれば神になる。

註二　御嶽様を引合ひに出したことに関しては特に興味の多い物がある、併しこれにはやゝ長い説明を必要とする。

御嶽（おんたけ）又はみたけは信濃國の一霊峰の名である、巡拜人の霊場として崇められてをる所だ、徳川将軍家の時代に律宗派の一心と呼ぶ僧侶がこの山に参詣した、彼は彼の生れた場所―江戸下谷坂下町―に戻つてから新しい宗教を説き始めた、そして彼は御嶽山に参籠してをつた間に修め得たといはるゝ法力を以て奇蹟を行ふ者として大に名聲を上げた、将軍は彼を危険な人物と見做し八丈島に流した、彼は其所へ流されて数年を送つた、後許されて江戸に還りあづま教といふ新しい宗派を興した、これは神道を倣ねた佛教であつた―即ちこの宗教の信者が特に崇めてゐた神は佛の權化としての大国主命及び少命彦命であつた。開闢祝詞（かいびやくのりと）はこの宗派のお祈禱であるがそれにはかう書いてある―『神聖な物ありその名を不動といふ、不動なれども動く、又形無し、形無けれども自ら形をとりて現はる、覺知し得ざる神聖の體たり、天地にありては神（かみ）と呼ばれ、萬有の中にありては靈と呼ばれ、人間にありては心と呼ばる、天も、四海も、三千世界の大世界も、この唯一無二の實在から生れ出たものである、即ち唯心から三千大千世界の形が出て來る』

文化十一年（一八一四年）に下山應助といふ、もと、江戸、浅草、平衛門町の油商人であつた男が一心の教法に基づいて巴講といふ宗教團體（だんたい）を組織した、この派は将軍家滅亡の時迄榮えてゐたが、幕府の滅亡した時、混合の教義を教へたり或は教佛両教を混同したりすることを禁止する法令が發布された、下山應助はその時御嶽教（みたけ）といふ名の下に新しき神道の一派を興すことの許可を願ひ出た――御嶽（みたけ）教は通俗的には御嶽（おんたけ）教と呼ばれてをる、そしてその願ひは明治六年（一八七三年）に許されたのである、應助は其後不動經といふ神典を神道の祝詞（のりと）に改作し、之に名づくるに神道不動祝詞の名を以てした、この宗派はなほ續いてをる、その主なる寺院の一は東京の私の現住宅から約一哩にある。

御嶽（おんたけ）さん（又は様）はこの宗派の崇めてをる神の通俗的名稱である、即ち實際は御嶽（みたけ）又は御嶽（おんたけ）の峰に住んでをる神のことであるが、それは亦時としては御嶽の神の御告げによつて或は御威力によつて實相を啓示する高僧を指差すことにも用ひられる、勝五郎の言うた御嶽様の意味は其頃（一八一三年）の高僧、即ち應助自身を指差したことであるのは殆ど十中八九迄明かである、何故ならば應助はその當時巴教の教主であつたから。

村の人達は彼を最早勝五郎とは呼ばないで程窪小僧（小僧とは僧侶にならうとして修業する若者のことである、併しこれは使走りをする者や或は時としては下僕の年若き者を呼ぶに用ひられたこともある、恐らく昔は男の子供は頭を剃つてをつたからだ、私はこの文の場合に於ての意味は佛教の僧にならうとしてをる若者といふことだと考へてをる）と渾名をつけた。誰れかが彼に會はふとして家を訪れると彼は直（すぐ）に羞がつて奥へ走つて隠れて了ふ。だから彼とめんと向つて話をすることは出來ぬ。私はこの話を彼のお祖母さんから聽いたままに書き下した。

私は源蔵、その妻及びつやにお前さん達は何か功徳をしたことがあるんだらうと質した。源蔵夫婦は別にこれといつた善行は行（や）つた覺えは無いが、ただお祖母さんのつやが毎日朝と晩には必ずお念佛を繰返して唱へることにしてをる、そしてお出家さんや巡禮者が戸口に來れば二文（もん）（當時にありては最も小さな貨幣で一仙の十分の一に相當す、

今日厘といふ銅貨があつて中央に四角な孔が一つ明いてゐて、表面に支那文字のついてをるのがあるが文はそれと略々同じものである）施すことにしてをつたと答へた。併しつやは是等の小功徳の外に特に目立つた大善事を行つたことは無かつたのだ。――（勝五郎轉生の話はこれで終つた）

(七)　譯者の註

以上は『椿説集記』と題した寫本から採つた物である。年代は文政六年四月から天保六年十月（一八二三年――一八三五年）迄の間のことである。寫本の終に――『文政年間から天保年間に至る――所有主、南仙波、江戸、芝、車町』とある。又その下に『西の窪、大和屋佐久治郎より購入、明治二年（一八六九年）廿一日（?）』と書いてあつた。これに據つて考へて見るとこの寫本は南仙波と呼ぶ者が一八二三年から一八三五年の末に至る十三年箇年間親しく耳に入れた話や、或は手に入れた寫本等からこれを寫し出したものと見える。

三

今、誰れでも私の信、不信がこの事柄に何か關係でもあるかの如く考へて、お前さんが一體この話を信じてをるのかねと質問する者があるとするならば、それは恐らく理由のたぬ無理な質問だと思ふ。前生を思出すことが出來るかどうかといふ問題は、追憶する物は何であるかといふ問題に擊依してをることと私は考へてをる。若しそれが私達各人に宿つてをるところの無限性の全我といふものであるならば、私は『佛本生譚』の全部を苦も無く信ずることが出來る。これに反してかの感覺や慾望の經緯で織りみだされてをるところの妄我といふものに就いて考へるならば、私が夢に見たことのあるものを話せば私の考が最も能く現れることになる。これが夜の夢であつたか或は白晝の夢であつたかといふ問題は何人にも關係の無いことだ――それはただ一場の夢であつたのだから。

『小泉八雲全集』第五巻
大正十五年十二月十五日　発行
発行所　第一書房
（最初に刊行された『小泉八雲全集』）より転載（翻訳者　金子健二）
（論考3参照）

16 『神判記實』

祭主兼大教正正二位三條西季知　閲
皇大神宮主典兼権大講義山口起業　撰
五編巻之上より

武蔵国多摩郡なる藤蔵が再生して六とせ幽冥にありたるよしを語れる話

武蔵国多摩郡中野村の百姓に源蔵といへるあり。其子の勝五郎といへるが八歳に成れるとき。門田の畔に遊戯れ居たるが。風と其兄の乙次郎といへるに。兄ハもと何処の子にて今の家にハ生れつるぞと問ふに。乙次郎我ハ知らずと答ふ。また姉のふさに向ひ同じさまに問ふに。姉ハ是時十五歳にもなれるを以て。勝五郎が問ふ趣を不測におもひながら。笑しき事を問ふものかな。生れぬ先のことの知るゝものかはと嘲るに。勝五郎ハひとりいぶかしきおもゝちにて。然は兄も姉も生れぬ先の事ハしり給ハぬにやと言ふに。姉のいふやふ然らバ汝ハ知れりやといふに。我ハもと程窪村の久兵衛の子にて藤蔵といひたりしと語るに。姉と兄とハあやしミて。然らバいそぎ其事を父母に告げてむといふに。勝五郎いたくわびて。人の皆しらぬ事を独しれりといハヾ人の笑ひ侍りなむ。かならず父にも母にも余所人にも語りきこえたまふなと泣きかこつにぞ。然らば此後姉と兄とのいひ入るゝ事をあらがひなバ。必ず告てむと約して止ミぬ。斯て此後ものあらがひする事あれバ。何時もかの事を父母に告げてむといへば頓にやめたりしかば。両親ハあやしみ思ひて姉のふさに問ふに。始ハつゝみて言ハず。されど両親ハいかばかりの悪しき事やあると気遣ひて。密にふさに責め問ひければ。ふさハ止む事を得ず。ありし事がらを語るに。両親も祖母もいたく不審くおもひて。勝五郎をさま〳〵すかし拵へて尋るにしぶ〳〵語り出けるやうは。我はもと程窪村の久兵衛が子にて母の名はおしづといへり。父の久兵衛は我が幼き時に死て半四郎といへるが来りて後の父となりぬ。さて我ハ六歳になりける時疱瘡を病ミて。死たるが。後に此家に生れたりといふ。余りに奇しき物語なれば。容易く聞とるべきにもあらずと念ひて打過ぎけるに。勝五郎の妹の四歳になれるが母と共に臥すを

以て。勝五郎ハ常に祖母の被に寝たるに。或夜勝五郎祖母にいふやう。程窪の半四郎許いてゆき給へ。先の両親に逢まほしといふ。祖母も始ハけしかる事と思ひ打まぎらし居たるが。夜毎に泣かこちて責ワぶるに祖母も今ハこしらへかねて。然バ此処に生れつる先のことを委しく語るべしといふに。さらば父母をおきては余所人に語りたまふなと堅く口かためて然いへるやう。前生の事四歳ばかりまでハ能く覚えて有つるが漸々に忘れたり。疱瘡を病て死ぬ命にてはなかりしかど。薬を食せざりし故に死たるなり。其時己ハ疱瘡病たりといふことハ知らねど。死て後人のいふを聞て知りたり。息の絶る時ハ何の苦しミもなかりしか暫して苦しかりき。其後ハ少しも苦しき事ハあらず。屍を桶の中につよく押入るゝ時飛出て傍に居り山に葬りにもてゆく時ハ。龕の上の白き覆の上に乗りて行たり。桶を穴に落し入れたる時。其音の響きたる事心にこたへて今も能く覚えたり。それより人々につきて家に帰り。机の上に居て。我ハ此処にありといひて人々に物いひかけたれど聞つけず。只死したる事を語りあひて泣き哀しミたり。其時白髪を長く垂れたる翁の此方へ来よとて誘ひ給ふに従ひて。何処とも知らず次第に高き奇麗なる芝原に行て遊ひありき。又花の盛りなる処に遊びたるほどに。家にて親等のもの言ふも聞え食物を供へたるも。温なるは湯気の香ひて甘く覚えたり。斯て遊びあり経るほどに。或時翁と此家の向ひの路を通るとき。此家を指て彼家に生れよと曰ふまゝ庭の柿の木の本に三日佇居て。それより窗（窓）の穴より内にいり。龕の側にまた三日居て。其後母の腹のうちに入りたりとおもハるれど。能くハ覚えず。扨其時母の何所なるしむ遠き所に行きたまふ事を父と語り給ひしを聞とりたりと言へり。此事ハ源蔵が家ハ貧しき上に子も二人持て老母を養ふに侘しければ。妻ハしバし江戸に奉公に出なむと約しつる事にて。其後其事をはたしつるが。既に懐胎したりし故暇乞て家に帰りて勝五郎を生り。此事ハ勝五郎が今いふにつけておもひ出る事にて。夫婦の外は知らぬことなりしを聞とりて覚え居たるもいとあやし。然して腹の内にて母の苦しからむとおもふ事のあれバ側によりて居たるもおぼえあり。生るゝ時ハ何の苦しき事もなかりし。この外何くれの事四歳五歳までは能覚えて有しかど漸々に忘れたり。死する事ハおそろしからぬものなり。己を死せりと人のいひし故に死たるぞと心付き亡体も見ゆれど。自らハ其時に死たりとも思ハざりき。苦しミも人の見る目ほどハくるしからず。死して居たる間ハ腹飽きて食ふ事もせず。暑しとも寒しともおもハず。また夜もさばかり闇からず。歩ミにあゆめども疲るゝ事なく。翁のもとにだに居れば何の恐しき事もなし。六年過て生れたりと聞けど彼方にてはしバしの間とおぼえたり。御嶽さまも死する事ハ恐からぬものと宣ひたりとなむいひける。祖母も此を聞くより奇しミを重ねけるに。或とき老嫗どち集へる所にて程窪村に久兵衛といふ人のあるを知り給へる人やおはすと問ふに。一人がいふやう。己ハ知らねども彼村人に因あるあれバ問ひ合せて参らせなむ。さるにても何の事ありて尋ね給ふらむといふに。黙止かねて事のよしをあらまし語りきこへけり。さるほどに文政六年の正月七日のことになむ。程窪村の老人某が源蔵の家許来ていふやう。己は程窪村の半四郎に親しき者にて侍り。先日久兵衛が事を尋ね問ひ給へるよしなるが久兵衛といひしハ若きほどの名にて。後に藤五郎と改め。今より十五年前文化三年に身罷りて今ハ村の中に其名を知れるもの侍らず。其妻の後の夫は半四郎と称ひ侍り。此頃其久兵衛が子なりし藤蔵の疱瘡を病ミて往し文化七年二月に六歳にて死したりしが。此家に再生せしよしを聞て。事の本末を問ひきかまほしがりて。己にあとらへて遣せたるなりといふに。其言の勝五郎が語る旨に能く符合ふに。互に奇しミを重ねつゝ老人ハ帰りにけり。是より此事人多くしりて勝五郎を見むとて来る人多きに。勝五郎ハ恥て其後ハ外に出ず。かゝればこそ口かためつるに。人に語り給ひしまゝ斯く有けれといひて恨ミかこちけり。斯くしつゝ半四郎が許にゆかまくする事弥まさりつゝ。毎夜よもすがら泣きいざつを。夜明て其由を問へば知らずといふ。さては半四郎許ゆかまほしとおもひ入りたるより斯ハあるらむ。あらぬ虚事なりとも男ならばこそあれ。老嫗のけしうはあらじ。われ一たび連れゆきなむと祖母のいふにまかせ源蔵もうべなひていざ給へとて往しめたるに。祖母ハ勝五郎を誘ひ。中野村より山一ツ隔てゝ其間一里半に過る程窪村に至りぬさて村に入て何れか半四郎の家なるといふに。勝五郎先に立て此処よりハ己塾く知りぬ。な

ほ先なり猶先なりといひて。とくあゆみつゝ兼ていへるが如く三軒並びて裏の方ハ山につらなりたるが。其中に引き入りたる家の門にいたり。頓て此家なりと祖母より先にかけ入るにぞ。祖母もつゞきて内に入り。まづ主人の名を問ふに半四郎と答へ妻ハしづといへり。半四郎夫婦ハかねて聞居て。相見まく思ひしほどなる上に。祖母と勝五郎が今かく尋ねきて。祖母の物語るを聞て或ハ悲しみ或ハ奇しミ共に涙にくれて。しづハ勝五郎を抱き上げてつく〳〵と顔うち守り亡くなりつる藤蔵が六歳の時の面貌によくも似てけりとかきくどき居たるに。勝五郎ハ懐かれながら向ひの烟草売る家の屋根を指さし。先つ年にハ彼屋根はなかりし。彼木もなかりしなど。なにくれと過にし事をいふに。皆たがハねバ弥不測を重ねける。斯て半四郎が親族の寄来る中に。久兵衛が妹の嫗ありて兄の久兵衛に能く似てけりなど泣くどきてしほれしとぞ。然て其後ハ半四郎源蔵も常に行きかひて。親類のむつびをなして長く交りを結びけるとぞ。さて此勝五郎が幽冥にありつるほど。誘ひ給へる老翁の事をおもひ合すに。勝五郎が姉の夢に時として見えたまへる本居神の御すがたと同じよしなれバ。正しく本居神に坐せる事疑ひあらずと人皆いひけるとなむ。

注　報告書（初版）では、「雑記録」（府中市個人蔵）森田亀吉書写本より翻刻したが、遺漏があることが判明したので、明治八年二月刊神宮教院蔵版『神判記實』五編上（勝五郎調査団所蔵）を底本とした。『神判記實』は、伊勢神宮の神官山口起業が、神道関係の神罰や霊験についての説話九十四編を集め、編纂したもの。

（解読　上野さだ子）

図3『神判記實』五編上挿絵

17　「再生勝五郎覚書」

程久保村久兵衛忰藤五郎（藤蔵）
弐才之時久兵衛死去、
後添半四郎、
藤蔵六才ニ而死去、
中里村（中野村）藤蔵（源蔵）忰
勝五郎事当未九才、
御地頭様より御屋敷之方へ
御同道被遊、衣類并帯
くわし類金子五両余
いたゝき、親も拾両も
いたゝき候由、十六才ニ
相成候以後ハ死去致し
候由、夫ゆへ祭替ニ而も
致し可申旨被仰候、
廿五日逗留ニ而帰村
仕候

（裏書）（三行は書き損じカ）
柚木村之内程久保村
父久兵衛藤五郎（藤蔵）弐才ニ而死去後添
藤蔵（半四郎）

半四郎方へ参り候而ハ、
夜ハ実之親子之様ニだかれて
休ミ候由、半四郎中里へ
参り候得ハ、酒ヲ買ニ行
地走いたし候由、十六才迄と
申ゆへ仕事ハ致さぬ
よふニ申候ても、父之渡せい籠又ハ
いさる作り候よし、
老分由半四郎妻
此間私親類参り
咄し申候、余ハ
先達而御咄し
申上候通り

（裏書）（反故紙利用カ）
のし
御祝儀

図4「再生勝五郎覚書」（表）

（日野市栄町　立川明家文書　№１２３）

注　日野市内の旧家に残る資料。半紙を横半分に折った用紙に記されている覚書。半四郎の妻しづ（藤蔵の母）は、日野本郷の枝郷下河原（したがわら）の鈴木家の出身。立川家のある同枝郷東光寺とは、日野宿を挟んで東西の位置にある。年不詳の資料であるが、しづが里帰りした時に話した内容を記したものと推察される。

（解読　髙橋國夫）

18　「小谷田勝五郎紀念碑」碑文

（1）佐藤玉陵草稿

故小谷田勝五郎君紀念碑

君姓①小谷田氏。通称勝五郎。父名源蔵。多摩郡柚木中野村人。世業農。母尾藩士村田太郎右衛門之女勢子。有故辞藩父子為庶人。而嫁源蔵。有二男二女。君乃次子。文化十二乙亥年十月十日生焉。幼而成器辞藻壮麗。年甫八歳。兄弟相携出于牧野。互問前世。君曽詳叙所諳記。父母聞異之。試訊其同郡程窪村藤蔵者。果②有此事。距今六年。一子藤蔵。甫六歳。文化七年二月病没。於是初知其言不虚。故世人伝奇。牧守徴見之江都。許多有賜。実文政六年四月矣君及長明敏寡慾。而好直言。不避威権。別興一家。自業鋤犁。君之配〇子毎歎無嗣。年〇〇〇先没。後無幾君得病。明治〇年〇月年〇〇終了天寿而家跡廃絶云。③兄乙次郎承父之家姉房子〇村嫁某氏既死。妹常子帰同郡四谷村市川万吉老而益健。常子悼君之廃跡建記念碑於百草公園以祷冥福。持当時学士所記之再生録。而以請銘余摘行実乃作銘曰。

人生惟天。有此因縁。栄誉恩賜。
生々無辺。悲吟顧況。旋魄簷上。
古今表揚。何論奇状。

玉陵佐藤俊宣撰

＊佐藤玉陵草稿に小島守政が①～③の頭注を記している。

①此文ニ拠レバ、藤蔵文化七年ニ死ス、勝五郎ノ生レシハ文化十二年ナリ、ソノ間六年トス、然ルニ藤五郎ニ尋ねテ其事ヲ知リシハ、勝五郎ガ八歳ノ時ナリ、然レバ藤蔵ノ死セシ時ハ既ニ勝五郎生レテ二年モ立ツヤフニ覚フ、如何々々

②果有此事ト云、又知其言不虚ト云、意重複ニ似タリ、距今六年ト云又文化七年ヲ述ブ、繁ヲ覚フ

③碑文必ズシモ兄弟ヲ詳叙セズ

（2）小島守政添削後の碑文

故小谷田勝五郎君紀念碑

君通称勝五郎。小谷田氏。父称源蔵。多摩郡柚木中野村人。世業農。母村田氏尾藩士太郎右衛門之女也。生二男二女。君乃其次子。幼而聡慧。年甫八。兄弟相携游于野。互問前世。君曽詳叙所諳記。父母聞異之。試訪其同郡程窪村藤五郎者。而問焉則曰。一子藤蔵。甫六歳。以文化七年二月病没。於是初知其言不虚。故世人伝奇。牧守徴見之江都。賜物許多。実文政六年四月也。君及長寡慾。而好直言。不避威権。別興一家。自業鋤犁。以明治〇年〇月年〇〇〇病没。距生文化十二年十月十日。享年〇〇〇。配某氏先没無子。同郡四谷村市川万吉妻。常子実君之妹也。悼君之絶祀将建記念碑於百草園以祷冥福。持某生所著之再生録来。而属銘於余摘其要乃作銘曰。

人生惟天。有此因縁。栄誉恩賜。
生々無辺。悲吟顧況。旋魄簷上。
古今表揚。何論奇状。

玉陵佐藤俊宣撰

（3）佐藤玉陵宛小島守政書簡

拝啓、然者尊嘱ノ文、別紙ノ通愚考差上候間、可然御勘考御取捨希望候、失敬トワ存候得共原文ヲ改ムル頗多シ、請フ海容アランコトヲ、蓋（けだし）、碑文ハ尋常ノ文ト違ヒ石ヱ刻シ後世ヱ残スモノニ付、軽率ニスベカラズ、此文モ尚御勘考ノ上退庵先生トモ御相談、岡鹿門ヘデモ一覧ヲ乞ヒ、然ル後御彫□（斉カ）（ととのえ）可然ト奉存候、尤鹿門ニハ限ラズ何人ニテモ是君ト退庵先生ノ御相談ニ在ル耳（のみ）、何レニ致セ此マヽ直ニ石ヱ刻スルワ後日ノ笑ヲ遺（のこ）ス、能々御勘考奉祈候

○　先日勝五郎ノ事蹟余リ少ク、碑文ノ気力ニ乏シキヲ以テ此外ニ何歟（なにか）事蹟有之候ハヽ、御探索有之度旨葉書ヲ以テ申上候得共、若（も）シ事蹟ノ宜（よろ）シキモノ有之候ハヽ、今一度拝見、愚考可仕候、若シ其義も無之候ハヽ、夫レニテ差置可申候

○　勝五郎再生ノ事蹟ハ、遠山氏ノ百物語ト云書ニ仮名雑リノ文アリ、夫レニ依テ碑文中ヱ入候間、

若シ再生録ト違ヒ候ハヽ其段被御聞度候
○ 再生録モ其内一覧致度存候
○ 顧況ノ故事宜シ、然レドモ一家中ニテ再生ス、他家ヨリ入テ再生スルニ非ズ、勝五郎ノ事ニ於テ少シク穏当ナラザルヲ覚フ、因テ換フルニ蒙求巻上ニアル鮑靚記井羊祜識環ノ事ヲ以テス絶好ノ証左ト存候、尊意如何
○ 紀念碑ト暮（墓カ）碣トノ区別ハ先日御答申上候ニ付、今贅セズ
○ 尊作日野雑詩ト之題ノ詩ハ佳作ト謂フ可シ
右申上候、再拝
九月日
小　政拝
佐藤様
侍史中
（佐藤彦五郎新選組資料館所蔵）

《解説》「小谷田勝五郎紀念碑」建立計画

平成二十年一月、佐藤彦五郎新選組資料館より、彦五郎の長男俊宣が執筆した「小谷田勝五郎紀念碑」の草稿が発見された。俊宣は、玉陵と号し漢詩を能くし、他の漢詩の草稿数枚の中から発見された。草稿には、添削を依頼した小島守政（慎斎）からの手紙も添えられていた。

碑文によると、四谷村（府中市）の市川（山岸）万吉に嫁した勝五郎の妹常子（つね）が、勝五郎を祀る人が絶えてしまったことを悼んで、百草園（日野市）に建立しようとしたことが伺え、玉陵は常子の求めに応じて碑文を作成したと推察される。年代は記されていないが、他の草稿に明治二十八年（一八九五）とあるものがあり、この前後かと思われる。

碑文の添削と、佐藤俊宣に手紙を書いた小野路（町田市）の小島守政（慎斎）は、小島為政（鹿之助）の長男で、小島家に残る『慎斎文稿』三には、慎斎が手を入れた碑文の草稿も記されている（小島資料館館長小島政孝氏のご教示による）。小島家と佐藤家は親交があり、佐藤彦五郎とともに小島為政が新選組の支援者であったことは良く知られている。また小島守政は、大沼枕山などに教えを受けた漢学者で、当時は慎斎を囲んで多くの漢詩人が小島家に集っていた。

しかし百草園に勝五郎の記念碑が建立された形跡はないので、建碑は実現にまでは至らなかったようである。

常子の娘とめが嫁いだ森澤國平は、落川村新田（多摩市）の新倉順之助の二男で、潰株となっていた森澤家を継いだ。國平の実姉たかは、明治二年に百草村の青木亀吉に嫁いでいたが、亀吉の長兄は、百草園を作った青木角蔵である。こうした縁で、常子は勝五郎の記念碑を百草園内に建てようとしたのではないだろうか。

碑文の最後に「持当時学士所記之再生録」とあり、勝五郎が所持していた「再生記聞」を指すものと推察される。（調査報告⑨参照）

勝五郎調査団では、平成三十年（二〇一八）五月、有志の寄付により、高幡山金剛寺大日堂の横に、「藤蔵・勝五郎生まれ変わり　ゆかりの地記念碑」を建立した。

（解説・解読　上野さだ子・鈴木淳世）

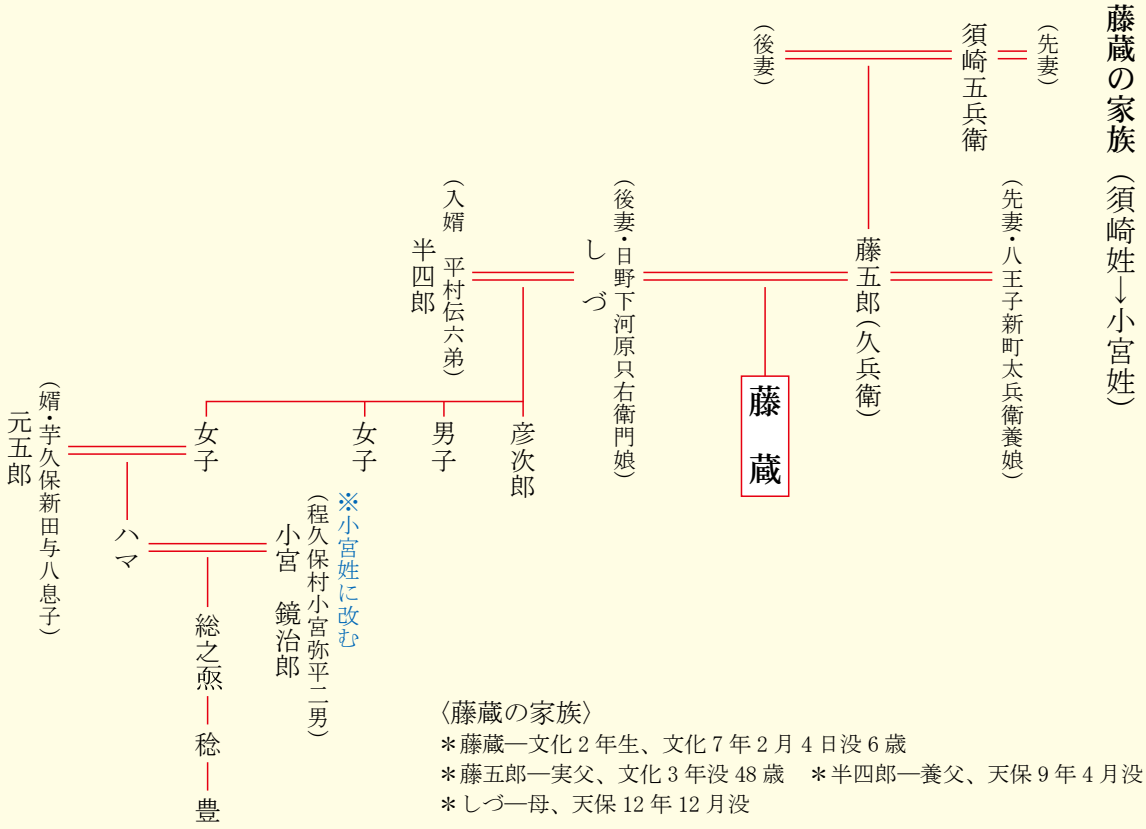
図5 小谷田勝五郎紀念碑草稿（佐藤彦五郎新選組資料館所蔵）

図6 佐藤玉陵宛小島守政書簡（同）

藤蔵と勝五郎の家系図

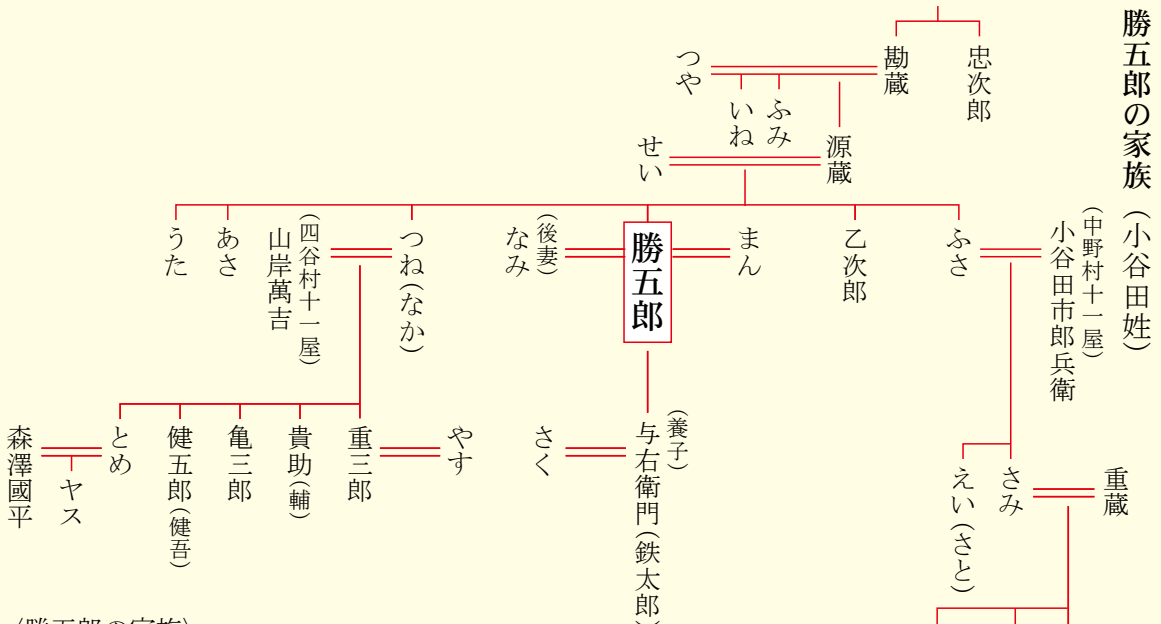
＊『勝五郎再生前生話』『勝五郎再生記聞』、宗門人別帳・戸籍・墓誌などを参考に作成した（解説七を参照）

藤蔵の家族（須崎姓→小宮姓）



〈藤蔵の家族〉
＊藤蔵―文化2年生、文化7年2月4日没6歳
＊藤五郎―実父、文化3年没48歳　＊半四郎―養父、天保9年4月没
＊しづ―母、天保12年12月没

勝五郎の家族（小谷田姓）



〈勝五郎の家族〉
＊勝五郎―文化12年10月10日生、明治2年12月4日没55歳
＊勘蔵―祖父、文政4年没　＊つや―祖母、天保5年9月没
＊源蔵―父、安政2年7月没　＊せい―母、天保14年5月没
＊源蔵は、農業の傍ら目籠の仲買を副業としていた。せいの父は武士で浪人し、せいは12歳の時本多大之進家の下女となった。2人は、源蔵が江戸で奉公しているときに所帯を持ち、文化6年長女ふさが生まれた後、中野村に戻った。

関連年譜　（※年齢は数え年、小泉八雲は満年齢）

黒字…勝五郎・藤蔵関係　青字…池田冠山・露姫関係　茶字…平田篤胤関係　緑字…小泉八雲関係　赤字…関係書物

元号	西暦	日付	項　　目
明和 4年	1767	10月 3日	池田冠山（定常）誕生（旗本 池田政勝の二男 鉄之助）
安永 2年	1773	7月 9日	鳥取西館四代藩主池田定得死去
		7月28日	池田冠山（鉄之助）西館に養子入り（7歳）
			第五代西館藩主となる（天明５年 家督を襲封）
安永 5年	1776	8月24日	平田篤胤 秋田佐竹家藩士 大和田清兵衛の四男として出羽国秋田郡久保田に生まれる
天明 6年	1786	12月18日	池田冠山 従五位下 縫殿頭に叙任される（20歳）
寛政 7年	1795	1月 8日	平田篤胤 江戸に出奔（20歳）
寛政12年	1800	8月	平田篤胤 備中国（岡山県）松山藩士平田篤穏（あつやす）の養子になる（25歳）
享和元年	1801	8月13日	平田篤胤 石橋織瀬と結婚（26歳）
		11月20日	池田冠山 家督を長子定興に譲る（冠山35歳）
享和 2年	1802	5月20日	平田篤胤の長男常太郎 生まれる
享和 3年	1803	6月20日	平田篤胤の長男常太郎 死去
			平田篤胤 本居宣長の没後の門人になる（28歳）
文化元年	1804		平田篤胤 私塾「真菅乃屋（ますげのや）」を開く（29歳）
文化 2年	1805	1月16日	平田篤胤の長女千枝子 誕生（後の銕胤妻）
		7月29日	冠山の六男 定保 誕生（冠山39歳）
			藤蔵（須崎姓）誕生
文化 3年	1806	8月27日	藤蔵の実父 久兵衛（藤五郎） 死去
文化 4年	1807		平村の半四郎が藤蔵の継父となる
		11月 3日	西館六代藩主池田定興死去（17歳）
文化 5年	1808	2月	池田定保 西館七代藩主となる（4歳）
			平田篤胤の次男 半兵衛（後に、又五郎に改名） 生まれる
文化 6年	1809		勝五郎の姉 ふさ 生まれる
文化 7年	1810	2月 4日	藤蔵死去（6歳）
			勝五郎の兄 乙次郎 生まれる
文化 9年	1812	8月27日	平田篤胤の妻 織瀬 死去（31歳）
		12月 5日	平田篤胤『霊能真柱（たまのみはしら）』を著わす（翌10年に刊行）
文化10年	1813	8月25日	池田定常「冠山」と号す（47歳）
文化12年	1815	3月	勝五郎の母せいが江戸へ奉公に行く、（勝五郎を）身ごもっていることがわかり、暇を貰って戻ってくる
		10月10日	勝五郎（小谷田姓）誕生
文化13年	1816	4月19日	平田篤胤 常陸・下総旅行の途中、小浜村（千葉県銚子市）の八幡宮で「天磐笛」を拾得、屋号を「気吹舎（いぶきのや）」と改める（41歳）
			平田篤胤の二男 又五郎 死去（9歳）
文化14年	1817	11月 2日	冠山の十六女 露子 誕生（冠山51歳）
文政元年	1818	11月18日	平田篤胤 りよ（後のお里勢）と再婚（篤胤43歳）
文政 3年	1820	3月	平田篤胤 湯島天神男坂下へ転居
		10月	平田篤胤 初めて天狗小僧寅吉に会う
			勝五郎の妹 つねが生まれる
文政 4年	1821		勝五郎の祖父勘蔵死去
文政 5年	1822		藤蔵の十三回忌

黒字…勝五郎・藤蔵関係　青字…池田冠山・露姫関係　茶字…平田篤胤関係　緑字…小泉八雲関係　赤字…関係書物

元号	西暦	日付	項　　目
			平田篤胤『仙境異聞』を著わす（47歳）
		11月27日	露姫逝去（6歳）（冠山56歳）
		11月	勝五郎が前世の記憶を語る（8歳）
文政 6年	1823	1月20日	勝五郎が祖母と程久保村須崎家（現・小宮家）を訪問する（9歳）
		2月	池田冠山が中野村を訪問。祖母つやから話を聞き『勝五郎再生前生話』を著す（冠山57歳）
		4月 5日	中野村の領主旗本多門傳八郎が、源蔵・勝五郎親子を江戸に呼び話を聞く（4月26日まで滞在）
		4月14日	池田冠山が泉岳寺の貞鈞和尚を訪ねる。貞鈞和尚が冠山から「勝五郎再生前生話」を見せてもらう（貞鈞の手紙の写しは、「珎説集記」に掲載）
		4月19日	多門傳八郎が御書院番頭に調書を届出
		4月21日	勝五郎親子が駒込の西教寺を訪問
			平田篤胤が多門宅を尋ねるが勝五郎不在で会えず
		4月22日	平田篤胤 気吹舎で勝五郎と初めて会う（23・25日も通う）
		4月26日	源蔵・勝五郎親子が中野村へ戻る
		6月	平田篤胤『勝五郎再生記聞』を著わす（48歳）
		7月 9日	勝五郎の父源蔵が勝五郎と兄・姉を伴って気吹舎を訪れ、三日間滞在した。 篤胤は留守だったため、門人たちが話を聞く
		7月22日	平田篤胤 関西旅行に出発（11月19日まで）
		8月	平田篤胤 京に着き、冨小路治部卿の内奏で著書を仁孝天皇と光格上皇に献上、 『勝五郎再生記聞』を上覧に供する
			『武蔵名勝図会』「前生覚知の小童」（植田孟縉）
文政 7年	1824	1月15日	碧川篤真（後の銕胤）篤胤の養子になり篤胤の長女千枝（後のお長・織瀬）と結婚（篤胤49歳）
		7月28日	『藤岡屋日記』「小児前世を不忘居る事」（須藤由蔵）
		11月27日	露姫の三回忌の法要（冠山56歳）
			『玉露童女行状』…冠山の家臣服部脩蔵が記した露姫の逸話集 『応化菩薩辞世帖』…露姫の遺墨を刷物とし、南勢州飯高郡上川の浄林寺より版行 この他、『睡余操觚』（斎藤月岑）、『甲子夜話』（松浦静山）、『桑都日記』続編（塩野適斎）などにも勝五郎の再生が記録されている 『視聴草』（宮崎成身）には、勝五郎の再生と露姫の事跡の両方が記されている
文政 8年	1825	8月26日	源蔵・勝五郎気吹舎へ行く　勝五郎、平田篤胤の門人となる（以後は、気吹舎に寄宿か）
		9月	池田冠山が寄せられた露姫追悼の書や詩歌・絵画を巻子にした「玉露童女追悼集」（30巻）を淺草寺に奉納（冠山59歳）
			『山海里』（信暁）勝五郎の再生と露姫の事跡あり
文政 9年	1826	3月25日	勝五郎、越谷へ行く（越谷には気吹舎の有力門人山崎篤利がいた）
文政10年	1827	7月21日	勝五郎、気吹舎へ行く
		7月22日	勝五郎、気吹舎へ行く（以後の「気吹舎日記」に勝五郎の事見えず）
文政12年	1829	12月 3日	江戸大火 鉄砲州の上屋敷が焼失、多くの著書が灰燼に帰した 小名木川筋の亀高村の下屋敷に移る（冠山63歳）
天保 4年	1833	7月 9日	池田冠山逝去（67歳）江戸牛島弘福寺に葬る
天保 5年	1834	9月21日	勝五郎の祖母 つや 死去
天保 9年	1838	4月19日	藤蔵の継父 半四郎 死去（62歳）
天保12年	1841	1月 1日	平田篤胤 幕府により著述差し止め、国許秋田への帰還を命じられる（66歳）

黒字…勝五郎・藤蔵関係　青字…池田冠山・露姫関係　茶字…平田篤胤関係　緑字…小泉八雲関係　赤字…関係書物

元号	西暦	日付	項　　目
		12月20日	藤蔵の母 しづ 死去（63歳）
天保14年	1843	5月	勝五郎の母 せい 死去（59歳）
		閏9月11日	平田篤胤逝去（68歳）
天保14年	1843		勝五郎(29歳)・妻まん(23歳)(天保14年中野村人別帳による)
年月不詳		(この頃か)	勝五郎の姉 ふさ、隣家の小谷田市郎兵衛(中野村名主・十一屋)に嫁ぐ
弘化 2年	1845	10月 3日	勝五郎の妹 つねと山岸萬吉の一家が、四ツ谷村十二番屋敷内に店借
弘化 3年	1846	6月 7日	平田篤胤の後妻 お里勢 死去
嘉永元年	1848	12月	勝五郎が、なみ(多摩郡片倉村源太郎方)と再婚（勝五郎34歳）
嘉永 2年	1849	8月12日	武蔵国多摩郡宇奈根村儀右衛門四男が、小谷田市郎兵衛(中野村名主・十一屋)の養子になり重蔵を襲名し、市郎兵衛の長女 さみ と結婚
		8月19日	勝五郎姉 ふさの夫 小谷田市郎兵衛 死去（56歳)(墓誌より推定)
		12月28日	徳川家斉七回忌により平田篤胤御赦免となる
嘉永 3年	1850	6月27日	小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)ギリシャにて誕生、英国陸軍軍医補チャールズ・ブッシュ・ハーンの二男、母のローザ・アントニオ・カシマチはギリシャ人
		8月12日	勝五郎姉 ふさ 死去（42歳)(墓誌より推定)
嘉永 7年	1854	4月	懐安(府中本宿小野宮・内藤家六代目当主重鎮)、勝五郎より「再生記聞」(平田篤胤より贈られたもの)を借りて写し、「小谷田異童伝」とした 懐安この時期、勝五郎と勝五郎妹(つね)と行き来あり
		8月	勝五郎が、与右衛門(牛込神楽坂吉兵衛二男、当時六歳)を養子にする
安政 2年	1855	7月23日	勝五郎の父 源蔵 死去（80歳）
			ハーン 大叔母ブレナンのもとで生活する（5歳）
安政 4年	1857		ハーンの両親が離婚（7歳）
慶応元年	1865		ハーンはゲームで飛んできたロープの結び目で左眼を打ち、左眼を失明する（16歳）
		11月21日	ハーンの父 チャールズが死去
慶応 4年	1868	3月 4日	平田銕胤 内国事務局判事に任命される
明治元年	1868	11月	与右衛門(勝五郎の養子)、中野村井上仲右衛門の妹 さくと結婚 (与右衛門 20歳 さく 20歳)
明治 2年	1869		ハーン 初夏の頃、移民船でニューヨークへ渡り、汽車でシンシナティに行く（19歳）
		7月27日	平田銕胤 大学大博士に任命される
		12月 4日	勝五郎 死去（55歳）
明治 3年	1870	4月15日	中野村の名主であった小谷田重蔵が、隣家で跡継ぎのいない小谷田源蔵家を再興する ※この再興も重蔵一代で終わる
		6月	平田銕胤 大学大博士を辞職
年月日不詳		(この頃か)	中野村井戸之上の金子種治郎二男 権六が、勝五郎養子の与右衛門夫婦が横浜に移るのに際して、買い養子となって空屋敷を譲り受け、小谷田姓を名乗る
明治 5年	1872	1月24日	平田延胤(銕胤の長子) 死去
明治 8年	1875	6月	ハーン、当時白人との結婚を禁じられていた黒人の女性 アルシア・フォーリー と結婚(25歳)
明治10年	1877		ハーン、アルシア・フォーリー と離婚（27歳）
			ハーン、ニューオリンズへ転居
		12月22日	北多摩郡四ツ谷村 山岸万五郎(萬吉)の四男健五郎(健吾)が、小谷田重蔵の養子になる（19歳）

黒字…勝五郎・藤蔵関係　青字…池田冠山・露姫関係　茶字…平田篤胤関係　緑字…小泉八雲関係　赤字…関係書物

元号	西暦	日付	項　　目
明治13年	1880	10月 5日	平田銕胤 死去
明治22年	1889	5月16日	小谷田健五郎が失踪（31歳）
明治23年	1890	3月 8日	ハーン ニューヨークを出発日本を目指す（40歳）
		4月 4日	ハーン 午前6時横浜到着、人力車で神社仏閣をめぐる
		7月	ハーン 島根県松江尋常中学校（現・島根県立松江北高等学校）と松江師範学校（現・島根大学）の英語教師に就任する契約を結ぶ、この契約書に「ラフカヂオ・ヘルン」と記載されたため、以後「ヘルン」と呼ばれるようになる
		8月30日	ハーン 松江到着
明治24年	1891	1月	西田千太郎のすすめで松江藩士小泉湊の娘 セツ が住み込みの手伝いとしてハーンの世話をすることとなり、やがて結婚する
		6月22日	ハーンは旧松江藩士 根岸千夫 方が空屋になっていたので借用する （現・国指定史跡 小泉八雲旧居）
		11月19日	ハーン 熊本到着
		11月24日	ハーン 第五高等学校（現・熊本大学 当時の校長 嘉納治五郎）英語教師に就任
明治26年	1893	11月17日	ハーンの長男 一雄 誕生（43歳）
明治27年	1894	9月29日	ハーン著『知られざる日本の面影』が出版される（44歳）
		10月上旬	ハーン 神戸到着 神戸クロニクル社へ転職
明治28年	1895	（この頃か）	勝五郎紀念碑の碑文が作成される（撰文：佐藤俊宣、添削：小島守政） ※紀念碑の建立には至らなかったようである
明治29年	1896	2月10日	ハーン 日本に帰化し、小泉八雲と改名（46歳）
		9月 8日	小泉八雲 東京到着、帝国大学文科大学の英文学講師に就任
明治30年	1897	2月15日	八雲の次男 巖 誕生（47歳）
		3月 5日	八雲の友人 西田千太郎 死去
		9月	小泉八雲、米国ボストン・ニューヨークと英国ロンドンで『仏の畠の落穂』を出版 この中に「勝五郎の転生」を執筆、海外にも勝五郎の再生が知られることとなる
明治32年	1899	12月20日	八雲の三男 清 誕生（49歳）
明治36年	1903	3月31日	八雲 東京帝国大学を退職（53歳）
		9月10日	八雲の長女 寿々子 誕生
明治37年	1904	3月	八雲 早稲田大学文学科の講師に就任（54歳）
		9月26日	午後8時頃、心臓発作により小泉八雲死去（54歳）
明治43年	1910	1月19日	小谷田健五郎が北海道函館区新川町函館慈恵院で死去（50歳）
大正 4年	1915		小泉八雲に従四位が贈られる
昭和 9年	1934	1月 5日	小谷田権六 死去

※本年譜は、平田篤胤『勝五郎再生記聞』『気吹舎日記』、小谷惠造『池田冠山傳』、田原嗣郎『平田篤胤』（人物叢書）、『平田篤胤』（別冊太陽）、「ラフカディオ・ハーン年譜」（『ラフカディオ・ハーン著作集』15）、「宗門人別帳」、「戸籍簿」、墓誌などを参考に作成した。

関係資料一覧（勝五郎の生まれ変わりについて記述がある主な資料・論文・書籍など、◎は本書に掲載のもの）

◎池田冠山『武州多摩郡中野村勝五郎再生前生話』
◎平田篤胤『勝五郎再生記聞』
◎松浦静山『甲子夜話』巻27
◎宮崎成身『視聴草』2集7
◎須藤由蔵『藤岡屋日記』第1巻-第6
◎斎藤月岑『睡余操觚』巻15
◎信暁『山海里』初編巻1,2
◎植田孟縉『武蔵名勝図会』多摩郡之部巻6柚木領
◎塩野適斎『桑都日記』続編巻7
◎『珎説集記』（文政六未年生替物語）
・塵哉翁『巷街贅説』巻7
・栗原信充『柳庵雑筆』4
・春登上人『藁裏』
・庭仙『近世百物語』9巻（農児語前生）
◎山口起業『神判記實』5巻上
◎小泉八雲「勝五郎の転生」（『仏の畠の落穂』M30）
・渡邊金造『平田篤胤研究』（S17）
・柳田國男『先祖の話』（『定本柳田國男集』10）
・折口信夫『平田国学の伝統』（『折口信夫全集』20）
・橋本徹馬『霊感と奇蹟の話』（S37）
・猿渡盛厚『武蔵府中物語』下（S38）
・宮本常一『愛情は子供と共に』（『宮本常一著作集』6　S42）
・板谷　樹・宮沢虎雄『霊魂の世界』（S42）
◎下田九一「史料から見た勝五郎とその周辺」（『日野の歴史と文化』2～4　S44～45）
◎勝五郎研究グループ「勝五郎再生の実地調査」1～5（『心霊研究』23・24　S44～45）
・水木しげる『偶然の神秘』（S46）
・池田弥三郎『日本の幽霊』（S49）
・佐藤有文『霊魂ミステリー』（S50）
◎中嶋繁雄「蘇った勝五郎」（『歴史と旅』S50.6）
・百目鬼恭三郎『奇談の時代』（S53）
・小倉英明『伝説「勝五郎の再生」についての一考察』（由木郷土研究会）
・小倉英明「伝説勝五郎」（『あおぎり』33 S59）
・谷川健一『魔の系譜』（講談社学術文庫661　S59）
・松谷みよ子『あの世へ行った話・死の話・生まれかわり』（『現代民話考』5　S63）
・小谷惠造『池田冠山傳』（H2）
・イアン・スティ-ブンソン『前世を記憶する子どもたち』（H2）
・常光　徹『学校の怪談』2（H3）
・鎌田東二『聖なる場所の記憶-日本という身体-』（講談社学術文庫1217　H7）
・高野　澄『江戸の天狗騒動』（H8）
・染村絢子「勝五郎再生記の原典「ほどくぼ小僧前生話」」（『へるん』33　H8）
・叶内匡子『二度生まれた少年』（H9）
・森久保忠雄『勝五郎再生物語』（私家版）
・浅野三平『近世国学論攷』（H11）
・井上円了「妖怪学講義」（『妖怪学全集』3）
・戸塚ひろみ「記憶の中の「前世」-再生譚再考-」（『世間話研究』10　H12）
・子安宣邦校注『仙境異聞・勝五郎再生記聞』（岩波文庫　H12）

関係資料一覧（勝五郎の生まれ変わりについて記述がある主な資料・論文・書籍など、◎は本書に掲載のもの）

・鎌田東二『平田篤胤の神界フィールドワーク』（H14）
・北村澄江「勝五郎再生記聞-日野市に伝わる不思議な話-」（『多摩のあゆみ』108号　H14）
・鈴木淳世「勝五郎再生記聞と老侯池田冠山」（同）
・浅野三平『八雲と鷗外』（H14）
・中川和明「平田篤胤の転生観」（『日本思想史学』35　H15）
・鈴木棠三『江戸巷談藤岡屋話』正・続（『ちくま学芸文庫』H15）
・山崎祐子・松尾あずさ「多摩市落合の社会組織と葬送儀礼」（相模民俗学会『民俗』184　H15）
・『生まれ変わりレストラン』（『怪談レストラン』29　H15）
・北村澄江「小泉八雲「勝五郎の転生」をめぐる研究課題」（『日野市郷土資料館研究紀要』3　H20）
・北村澄江「愛される子どもたち-藤蔵と勝五郎、そして露姫」（『多摩のあゆみ』131号　H20）
・『ほどくぼ小僧　勝五郎生まれ変わり物語』（特別展図録　日野市郷土資料館　H20）
・吉田真樹『平田篤胤-霊魂のゆくえ』（H21）
・絵本『ほどくぼ小僧　生まれ変わりの勝五郎』（日野市郷土資料館　H21）
・松村　恒「「勝五郎再生」の原典とそれに関わる諸問題」（『八雲』21　H21）
・松村有美「ハーン作品における再話と実録の間」・松村　恒「勝五郎の墓所」（『へるん』47　H22）
・松村　恒「日野市の勝五郎再生グループの活動」（『へるん』48　H22）
・門脇　大「『勝五郎再生記聞』小考」（『鈴屋学会報』28　H23）
・中川和明「平田篤胤『勝五郎再生記聞』とその波紋」（『東洋文化』106号　H23）
・中川和明『平田国学の史的研究』（H24）
・中川和明「羽田八幡宮文庫所蔵本の写本の広がりについて-平田篤胤著『勝五郎再生記聞』を例に-」（『羽田八幡宮文庫フォーラム発表資料集』H24）
・今井秀和「前世を辿る少年の旅路-転生勝五郎と八王子～日野の旧道」（『怪』0039　H25）
・池川　明『前世を記憶する日本の子どもたち』（H26）
・小泉　凡『怪談四代記　八雲のいたずら』（H26）
・加賀　義『江戸の霊界探訪録』（H26）
・梅原勇樹・苅田　章『超常現象　科学者たちの挑戦』（H26）
・笹原昭五「勝五郎再生奇話　史料の内情と意義」①～③（『中央評論』H26～27）
・小谷田忠一良「談話　勝五郎奇話についての随想」（『第25回中央大学学術シンポジウム　東京・多摩地域の総合研究　報告書Ⅱ』歴史文化編　H27）
・谷口智子「生まれ変わり・輪廻思想の現在-平田篤胤『勝五郎再生記聞』から映画『かみさまとのやくそく』まで-」（『共生の文化研究』9　H27）
・大門正幸『なぜ人は生まれ、そして死ぬのか-過去生記憶、臨死体験が示す人生のほんとうの意味』（H27）
・今井秀和「江戸の知識人と〈怪異〉への態度-　幽冥の談　を軸に」（『怪異を媒介するもの』アジア遊学187 H27）
・竹倉史人『輪廻転生-〈私〉をつなぐ生まれ変わりの物語』（講談社現代新書2333　H27）
・松村　恒「生まれ変わりの科学からみた「勝五郎の再生」」（『八雲』27　H27）
・青山英正「ほどくぼ小僧 勝五郎生まれ変わり物語 調査報告書」（『多摩のあゆみ』163号　H28）
・簗瀬　均『魂のゆくえ-篤胤「再生記聞」を読む』（秋田魁新報社　H29）
・染村絢子『ラフカディオ・ハーンと六人の日本人』（H29）
・北村澄江「勝五郎生まれ変わり物語調査報告概要」（『心霊研究』840　H29）
・谷川ゆに『「あの世」と「この世」のあいだ-たましいのふるさとを探して』（『新潮選書』794　H30）
・今井秀和『異世界と転生の江戸-平田篤胤と松浦静山』（R1）
・大門正幸『生まれ変わりを科学する―過去生記憶から紐解く「死」「輪廻転生」そして人生の真の意味』（R3）

（映像資料）
・『丹波哲郎大霊界』Ⅲ（H4）
・DVD『ほどくぼ小僧勝五郎生まれ変わり物語』（日野市郷土資料館　H20）

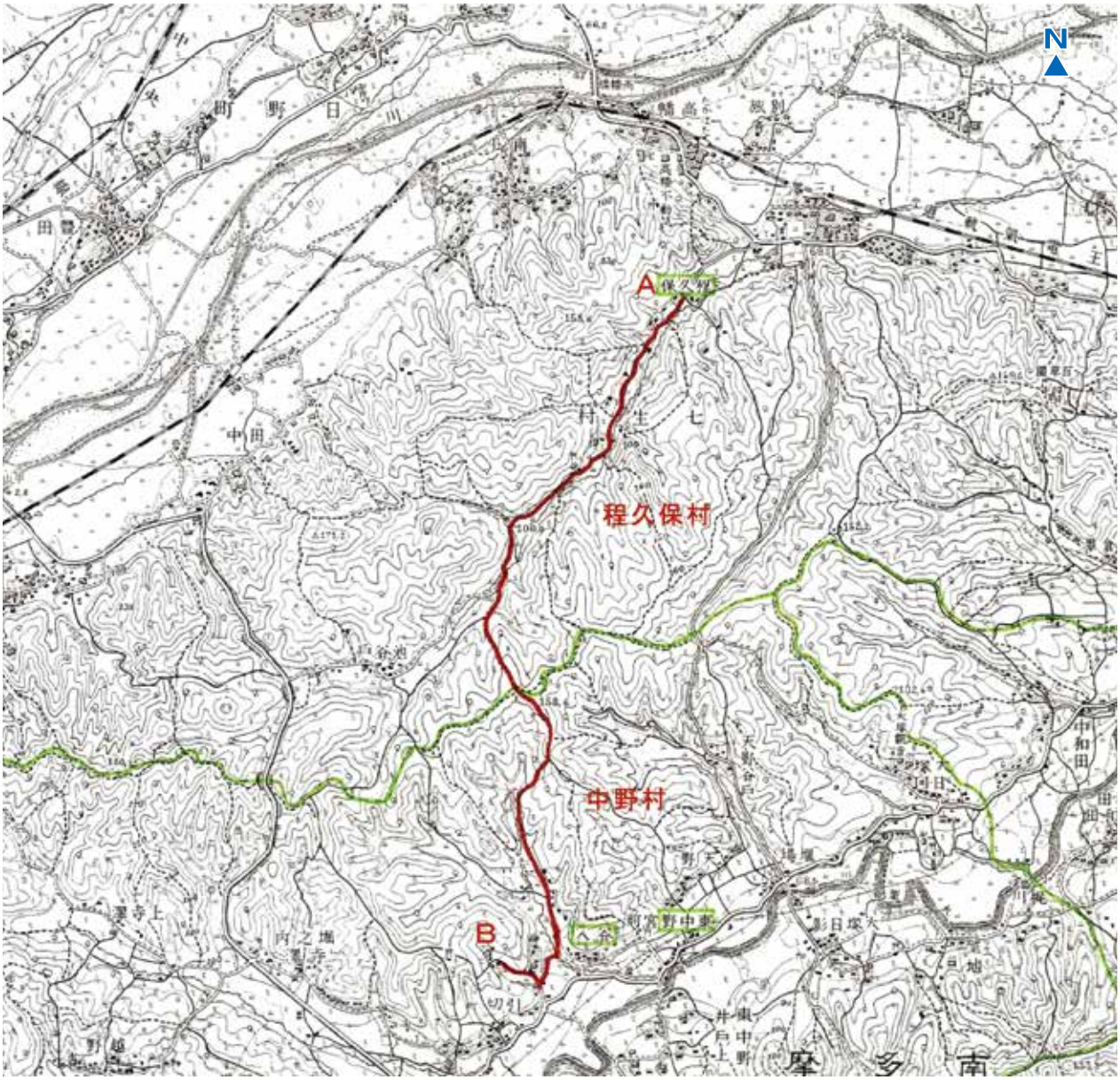
程久保村と中野村について

藤蔵の生まれた程久保村（日野市程久保）と勝五郎の生まれた中野村（八王子市東中野）は、同じ武蔵国多摩郡に属する隣村で、江戸時代には共に「日野宿寄場組合」に、明治初期には八大区に属していた。

程久保（程窪）村は、村高50石2斗3升5合。はじめ幕府領で、宝永4年（1707）に旗本曾雌（そし）氏と中根氏の相給知行地となった。曾雌氏は上分（かみぶん）（上程久保・村の西側）の25石1斗1升8合を、中根氏は下分（しもぶん）（下程久保・村の東側）の25石1斗1升7合をそれぞれ知行した。藤蔵の生まれた須崎家は下分にあり、下分の鎮守は神明社である。村の約8割を山林が占め、薪・炭の生産が盛んだった。昭和30年代に東京都立多摩動物公園ができ、宅地開発も進んだが、かつては「程久保　細道　迷い道」などと歌われるほど山深い村であった。

中野村は、村高384石5斗6升4合。旗本多門氏と勝田氏の相給知行地である。勝五郎の生家は小名「谷津入（やついり）（八ツ入）」の「センヤト」にあった。鎮守は熊野神社である。明治22年から由木村東中野となった。

明治12年頃の程久保村の村誌には、程久保村から中野村への道について、「（村の）西南ノ方日草刈谷（ひぐさかりやと）ヨリ東南ニ曲折シテ登ル、三町弐拾六間ニシテ頂上ニ至ル、此ヨリ東中野村へ通ズ」（『七生村誌』）とある。中野村へ通じる道の村境は「八ツ入峰」といい、「境松」があったという。昭和52年に中央大学多摩キャンパスが出来て、この旧道は分断された。



藤蔵生家（A）と勝五郎生家（B）を結ぶ旧道（赤道）　　※緑色の線は現在の市境を表す
（1：25,000「武蔵府中」大正 10 年測図昭和４年鉄道補入に加筆）

「勝五郎生まれ変わり物語探求調査団」の活動について

＊「勝五郎生まれ変わり物語探求調査団」は、平成18年(2006)7月、日野市郷土資料館の委託調査事業として発足した。17年４月の日野市郷土資料館開設（日野市ふるさと博物館の改称・移転）に伴い、地元に根差したテーマを市民参加の事業として掘り起こしていくという、新たな方針に拠って企画された事業である。調査は、委託費で賄われる場合もあるが、有志の自主活動もあり、この場合は費用は自己負担となっている。

＊地元に伝えられている「勝五郎生まれ変わり物語」に興味・関心があり、これをテーマにした調査・研究・普及事業を日野市郷土資料館とともに行なっていく意思がある人という以外に、参加の条件は特に設けていない。日野市民だけでなく、市外在住の人も、活動に参加可能であれば受け入れている。ただし、勝五郎の生まれ変わりに関する様々な側面について調査・研究は行なうが、「生まれ変わり」の真偽を問うことは目的としていない。

＊発足当初32名だったメンバーは、令和4年8月現在52名（病気療養等休会中含む）となり、30代～90代まで、幅広い年齢層が参加している。主力となるメンバーは現役を引退した一般の人たちで、「生まれ変わり」そのものに興味のある人、郷土史や民俗学に興味のある人、地元の人や子孫の関係者などで構成されているが、研究者も参加している。

＊活動は、毎月1回第2水曜日の午後に例会を行ない、事業計画・調査報告・学習活動等を行ない、知識の向上と情報の共有に努めている。総会と公開講演会、高幡不動尊との共催で「子ども講座」（平成20年～）、「藤蔵・勝五郎生まれ変わり記念日イベント」（平成21年～）などを開催し、「勝五郎生まれ変わり物語」の普及に努めている。要請があれば随時出張展示・出張授業なども行なっている。調査・研究は、原則としてそれぞれのメンバーの自主活動として行ない、テーマによって共同調査や調査旅行も実施している。平成20年9月には、それまでの調査成果を日野市郷土資料館特別展として発表し好評だった。特別展の図録の他、物語を紹介したDVD・絵本・子どもリーフレット・ミニリーフレット（藤蔵墓地用）を刊行している。

＊調査事業を企画した平成17年は藤蔵生誕200年、平成22年には藤蔵没後200年（墓地案内板を設置）、平成27年は勝五郎生誕200年、令和4年は勝五郎が生まれ変わりを語ってから200年・露姫没後200年と、たまたまではあるが200年という節目の時期に調査事業が行なわれている。平成27年以降は、これまでに収集された資料、調査・研究の成果をまとめ、次世代に引き継いでいくことが大切であると考え、記念事業として調査報告書・ブックレットの刊行、特別展の開催、ホームページの開設などを行なってきた。令和2年からは、コロナ禍で停滞する活動を広げるため、動画の配信にも挑戦している。

＊平成30年5月には、はじめての調査団自主事業として、賛同する方々の寄附金により、高幡不動尊境内に記念碑を建立した。同時に、配布用リーフレットも作成した。

＊調査団は令和4年で発足17年目を迎えたが、いまだに新たな資料の発見もあり、情報も寄せられている。これは、調査団の普及活動によって、以前に比べ多くの人々に勝五郎の生まれ変わりが知られるようになったこと、それにより眠っていた資料・情報が少しずつ掘り起こされていることによるものと考えられ、調査団の活動の成果とも言えるものである。今後も情報を発信していければと考えている。

活動成果報告（年報）（調査団メンバーは敬称略）（日付ごとの活動の詳細は、ホームページを参照）

〈平成18年度〉

平成18年7月に調査団が発足したが、まだ定期的例会等は行なわず、勝五郎の生まれ変わりについての知識を深めるための講座を3回開催した。内2回は、地元程久保と池田冠山の菩提寺墨田区向島弘福寺や文人の遺跡をたどる見学会とした。調査団の発足を知らせる新聞記事がきっかけで、八王子市東中野の小谷田忠一良（勝五郎の祖父勘蔵の実家の子孫）が活動に参加することになり、藤蔵の生家の子孫である小宮豊との対面を果たした。調査団では調べることのできなかった永林寺の勝五郎の墓所の位置も教えて貰うことが出来た。藤蔵・勝五郎両者の子孫が参加してくれることで、調査団の活動は前進するきっかけを得た。

〈平成19年度〉

4月にはじめての総会を開催（以後5月第3日曜に開催）、7月から月1回（第2水曜日）例会を開催することとなった。『勝五郎再生記聞』の講読を行ない、露姫・冠山ゆかりの地の見学会など、勝五郎生まれ変わり物語への知識を共有する活動に重点を置いた。11月6～8日、鳥取・松江への調査旅行を実施し、有志15名が参加した。『池田冠山伝』の著者小谷惠造氏や、小泉八雲曾孫の小泉凡氏に面会することが出来、鳥取県立博物館・県立図書館での資料調査

や鳥取雲龍寺での露姫位牌の発見など、多くの成果を得ることが出来た。さらに、市内百草松連寺の住持魯庵が玉露童女追悼集に追悼詩を寄せていることや、「勝五郎顕彰碑建立関係資料」の存在など、あらたな事実の発見が相次ぎ、調査団の活動はようやく軌道に乗り始めた。

〈平成20年度〉

第1回特別展（会期9月27日～ 12月14日）を開催することとなり、調査団は、展示解説・広報活動・立体紙芝居作画・ジオラマ作成・資料解読・写真撮影・現地見学会解説、資料提供・情報提供・調査活動などに全面協力、特別展成功のための大きな力となった。調査団の叶内匡子が立体紙芝居の作画を担当、ジオラマの作成には29日間延べ241人が携わり、川崎和彦の指導の下すべてを手造りした（特別展観覧者3,141人、事業参加者619人、調査団参加者延491人）。特別展期間中には、4回の講演会（①遠藤潤氏「平田篤胤の考える幽冥界」②北原進氏「文化文政期の多摩と江戸―勝五郎再生譚の背景」③小谷惠造氏「池田冠山侯の人と思想」④小泉凡氏「魂の探求者、小泉八雲」）、3回の見学会、体験学習会（竹籠造り）を開催した。

以上の他、7月には第1回子ども講座を開催した。無窮会専門図書館・国立歴史民俗博物館資料調査、鳥取県立図書館などの資料調査、平田神社等平田篤胤ゆかりの地などの見学会、関係資料講読などを行なった。八王子市生涯学習センター（南大沢）での出張講座、高幡不動尊でのパネル展示なども実施した。特別展の開催にむけての様々な活動を行なうことで、調査団の結束が高まった。

〈平成21年度〉

5月の総会の後に公開講演会を開催することになり、調査団の中川和明が「平田篤胤『勝五郎再生記聞』とその波紋」と題して講演した。6月10・11日に研修旅行（歴史民俗博物館・成田山新勝寺・伊能忠敬記念館他）を実施、有志が参加した。7月には第2回の子ども講座を実施、小学校の出張授業、日野市の放課後子どもプラン「ひのっち」などへの出張講座を行ない、子ども向けの普及活動を充実させた。

20年度の特別展後の活動の目標が定まっていない中で、今後も継続して活動を行なうことが確認され、立体紙芝居をもとに絵本を製作することが決まり、作画を叶内匡子、文を調査団有志が担当した。

普及活動の充実のために、毎年決まった日程で行なうイベントの必要性が検討され、勝五郎の生誕日10月10日を「藤蔵・勝五郎生まれ変わり記念日」（以下記念日と略）とすることが決定。同日、第1回のイベントが行なわれた。程久保長生会（老人会）の方々を招待し、マイクロバスでの見学会と絵本の発表会・座談会を開催した（郷土資料館にて）。調査団の小谷田忠一良の尽力で、10月の中央大学ホームカミングデー（以後平成29年まで毎年参加）や由木東市民センターまつりなどで出張展示を行ない、勝五郎の生誕地八王子市東中野方面での普及活動を充実させることが出来た。12月に港区の泉岳寺・瑞聖寺などの見学会を実施した。

平成22年2月の藤蔵没後200年を記念して、高幡不動尊内の藤蔵の墓地に説明看板と案内板を設置、6日に関係者を招いて記念する会を高幡不動尊で実施、絵本をもとにした大型紙芝居の披露を行なった。墓地案内用のミニリーフレットを作成し、墓地で配布することになった。

〈平成22年度〉

公開講演会は、小池淳一氏（国立歴史民俗博物館准教授）「再生の民俗史―勝五郎の話を糸口に」、第2回記念日講演会は、医師で僧侶という経歴を持つ倉松俊弘氏（栃木県鹿沼市薬王寺住職）「いのちのつながり」を実施（高幡不動尊五重塔地下ホール、以下毎年同じ）。調査研究や普及事業とはまた別の視点からの勝五郎生まれ変わり物語へのアプローチが示され、勝五郎調査事業の新たな展開の可能性を見出すことが出来た。

8月24 ～ 26日に平田篤胤生誕祭参加のための秋田研修旅行を実施、平田篤胤墓所を参拝し、秋田市彌高神社の北島宮司様や氏子の皆さんとの交流を深めた。5月には平田篤胤ゆかりの埼玉県越谷市へ、23年3月には、勝五郎が訪問したという西教寺（東京都文京区）の見学会を実施、池田冠山と住職潮音上人との交流について知ることが出来た。

八王子市での出張展示2回・講座1回、中央大学でのゲスト講師など、勝五郎の地元東中野関係での普及活動を行なった。東光寺の立川家文書や西教寺の池田冠山関係の資料など、新たな関連資料の発見があった。

〈平成23年度〉

公開講演会は、調査団松村恒（大妻女子大学教授）「勝五郎生まれ変わり物語の側面を探る―小泉八雲のつなぐ了然尼・黄檗宗・勝五郎」、第3回記念日講演会は、宮地正人氏（東京大学名誉教授・前国立歴史民俗博物館館長）「平田篤胤と再生譚―勝五郎と天狗小僧寅吉物語」を実施。宮地氏の講演は、時代背景にも言及していただき、示唆に

富んだ講演だった。

7月には日本民話の会の見学会を案内、11月16 ～ 18日広島・鳥取方面への研修旅行（広島県三次市稲生物怪録絵巻ゆかりの地探訪・鳥取県琴浦町小谷惠造氏面談・鳥取市雲龍寺・池田家墓所見学など）を実施した。

調査事業としては、勝五郎の妹「常」に関する調査が格段に進展し、夫である越後の杜氏山岸萬吉についても、かなりの情報を得ることが出来た（府中市四ツ谷市川閧子家・国文学研究資料館調査）。

第4回子ども講座は、高幡不動尊の協力を得て新たに御護摩体験を取り入れてみたが、好評だった。また、子ども向けリーフレットを作成した。

〈平成24年度〉

公開講演会は、吉田麻子氏（相模女子大学講師）「化政期の怪談を読む―『雨月物語』と江戸の思想」、第4回記念日講演会は、川澄祐勝高幡不動尊貫主「儀海上人と多摩の寺々」を実施した。

見学会は、4月徳川家霊廟（増上寺）と池田家初代藩主室芳心院墓所（本門寺万両塚）、25年3月中央大学構内勝五郎の道探索を実施した。11月13 ～ 14日静岡県焼津市（小泉八雲記念館他）への研修旅行を実施した。

調査事業としては、勝五郎の妹「常」と夫である越後の杜氏山岸萬吉について、引き続き多くの情報を得ることが出来たが、まだ子孫の存在を確めるところまではいかなかった。

第5回子ども講座は、この年も御護摩体験を取り入れ好評だった。参加人数も増え、ようやく活動が認知されてきたと思われる。

日野宿交流館と高幡不動駅でパネル展を2回開催し、多くの人々に観覧いただいた。潤徳小学校での出張授業を実施した。

〈平成25年度〉

公開講演会は、調査団今井秀和（大東文化大学講師）「江戸の人々の死生観」、第5回記念日講演会は、常光徹氏（国立歴史民俗博物館教授）「妖怪の民俗文化」を実施した。26年3月例会のなかで、ペン・セタリン氏（カンボジア王立プノンペン大学教授）「カンボジアの生まれ変わりについて」でカンボジアの生まれ変わり伝承についての興味深い講演をしていただくことが出来た。セタリン氏は、カンボジアの子どもたちに勝五郎の生まれ変わり物語を紹介してくれており、思いがけず生まれ変わり伝承を媒介としての国際交流を実現させることが出来た。

調査事業は、勝五郎の妹常とその夫山岸萬吉の追跡調査・八王子市東中野での聞き取り調査などを実施し、多くの成果があった。また、藤蔵の母の実家の所在がわかり、江戸東京博物館の古文書調査により、勝五郎に２人の妻がいたことも判明した（天保14年中野村宗門人別帳）。

第6回夏休み子ども講座など子ども向けの普及事業も引き続き行なった。今年の子ども講座では、初めての試みとしてマイクロバスを利用し、例年参加者が少ない日野本町方面の子どもたちへの参加の便宜を図り、日野第一小学校・仲田小学校の親子が多数参加してくれ、好評だった。（以後毎年2校ずつへの参加呼びかけを行なった）

この年は、市民評価の対象となり、思いがけず「廃止・見直し」という評価をうけたが、調査団としては委託調査の廃止・継続の如何によらず、勝五郎生誕200年をむかえる平成27年度までは活動を続けるということで、会員の意志確認をすることが出来た。幸い、本部評価で継続が認められたが、市民評価委員に調査団の活動の内容や意義を十分理解して貰えていない現状を痛感させられる出来事だった。これまでも努力を重ねてきた調査団としては、心外な出来事であったが、これを機に、勝五郎生誕200年にむけて、活動の総まとめをすることや、活動のアピールをどのようにするかということに対し、具体的に考える機会ともなった。

〈平成26年度〉

今年度より、勝五郎生誕200年記念事業（平成27年）の準備を開始し、報告書・ブックレットの刊行、特別展の開催、記念日事業を実施することが決まった。

公開講演会は、調査団青山英正（明星大学准教授）「江戸のあの世」、第6回記念日講演会は、池川明氏（産科医師・胎内記憶研究者）「前世の記憶―生まれ変わりはあるのか」を実施した。

5月21 ～ 22日、常の夫山岸萬吉の出身地である上越市への研修旅行を実施、萬吉が住んでいた家を訪ねることが出来た。平成27年2月例会のなかで、見学会「字切図で程久保を歩く」を実施、藤蔵が小刀を失くした桑畑の場所・藤蔵墓地などの正確な場所を地図上に落とすことが出来た。

6月から、記念事業の準備のため、例会の日の午前中をあてることとなり、編集委員を引き受けてもらった14人のメンバーと、報告書の編集（掲載資料の選定・翻刻・解説の執筆）や、PRのためのホームページ・ブログの開設

準備、カウントダウンニュースの発行準備、ジオラマの修理などを行なった。

第7回夏休み子ども講座では、マイクロバスを利用し、日野第二小学校・平山小学校の生徒にむけて、参加の勧誘を行なった。また、両校の「ひのっち」で出張講座を開催した。例年以上の人数の参加があり、ようやく子ども講座の存在を認識してもらえるようになったのではないかとの感がある。参加者の反応も大変好評で、子どもたちは楽しんでくれた。

調査事業も積極的に行ない、多くの成果を上げることが出来た。未調査だった宮内庁書陵部所蔵の『勝五郎再生前生話』の閲覧が出来、『心霊研究』の調査報告の内、未見だった2回分の内容を入手出来た。その中で調査が行き詰まっていた、山岸萬吉・つね夫妻の消息のうち、つねの娘とめの嫁ぎ先が判明した。嫁ぎ先である多摩市森澤商店の調査から、まだ確定はできないものの、つねの家族が函館へ渡った可能性が高くなった。また、国文学研究資料館にある多摩市石坂家文書の調査により、江戸から明治にかけて、山岸萬吉が、府中市四谷で十一屋の屋号で酒造業を営んでいたことが確認できた。今まで集めた資料の精査のなかから、勝五郎の姉ふさが、隣の十一屋に嫁いだことがほぼ確実と思われることが判明した。これらはすべて、メンバーの自発的な調査・研究の成果である。27年3月には、懸案だった國學院大學図書館所蔵佐佐木高行旧蔵書の調査を行ない、小泉八雲が、「勝五郎の転生」執筆の資料とした『珎説集記』の存在を確認、内容を調査することが出来た。『珎説集記』は、特別展で借用が出来る見込みとなった。

〈平成27年度〉

勝五郎生誕200年という、調査団が活動の目標としてきた記念の年を迎え、特別展の開催、調査報告書（1000部）・ブックレット（1500部）の刊行を行なった。（前年度より編集委員会22回開催）

特別展は、前回よりも規模は小さかったが、内容は充実し、時系列で現在までの変遷を示すことが出来た。

公開講演会は、調査団今井秀和「江戸の学者・役人たちと勝五郎の転生騒動」、第7回記念日講演会は、大門正幸氏（中部大学教授・バージニア大学客員教授）「勝五郎と世界の生まれ変わり事例―実は身近な過去生の記憶」、特別展関連講演会として、小泉凡氏（島根県立大学短期大学部教授・小泉八雲曾孫）「文化資源としての人と物語－小泉八雲の世界をめぐってー」を実施した。さらに、東京都埋蔵文化財センターと共催で「勝五郎生誕200年記念ウォークー多摩のお墓と勝五郎生まれ変わり物語」を実施した。

普及活動の一環として、調査団鈴木俊子の尽力でホームページをたち上げることが出来た。

夢が丘小学校と日野第六小学校が、朝の会（DVD鑑賞とお話）で取り上げ、全校生徒参加で勝五郎の生まれ変わりについて学んだ。

出張展示は、毎年参加している中央大学ホームカミングデーに加えて、初めて明星大学の学園祭に参加、モノレール高幡不動駅コンコースでの展示も実現した。さらに勝五郎墓所の永林寺近くの八王子市由木事務所での出張展示も初めて行うことが出来た。記念事業の記念品として、クリアファイルを1,000枚作成し好評だった。

調査事業としては、4月に府中市郷土の森博物館で閲覧した『小谷田異童傳』が、奥書から勝五郎が所持していた「再生記聞」の写しであることが判明し、勝五郎が平田篤胤から再生記聞をもらって所持していたことが明らかになった。森澤家資料の調査で市ヶ谷の山岸写真館の存在が明らかになり調査を行なったほか、十一屋の子孫である多摩市在住の小谷田重助家の調査も実現し、今後の進展が期待された。勝五郎の生家が、由木東小学校の前身である「生蘭学校」の校舎として利用されたことがわかり、十一屋に借蔵していた大坂屋の関係者、松岡茂雄氏の提供資料により、錯綜していた十一屋と松岡酒造の関係が整理された。

勝五郎生まれ変わり物語の委託調査事業は27年度で一つの区切りを迎えたが、28年度からは、新しく市内文化財伝承・発信事業委託として、委託調査を継続することとなった。

〈平成28年度〉

公開講演会は、田村正彦氏（明治大学講師）「子供の魂の行方－生まれ変わりと六道輪廻」、第7回記念日講演会は、東雅夫氏（文芸評論家）「幽冥文学談義－平田篤胤から水木しげるまで」を実施した。

今年度は、大学でのゲスト講師依頼が2校３回、ゆかりの地見学依頼が4回あったほか、研究者の来訪、取材依頼、勝五郎をテーマに作品を執筆したい、ホームページへの転載希望などの依頼が相次いだ。前年度の生誕200年記念事業・ホームページ・ブログの立ち上げ、報告書・ブックレットの刊行といった活動の効果を実感した。

調査活動としては、2回の函館調査を実施したほか、勝五郎の地道な身内調査が行なわれ、貴重な成果があった。勝五郎の妹「つね」の一家が函館に渡ったことの確証が得られ、函館調査は大きな成果を上げた。また、多門傳八郎の菩提寺（新宿区法正寺）の調査で過去帳の閲覧をさせてもらい、消息のわからなかった多門傳八郎のことが少

し解明され、子孫の存在や、甲府勤番を務めていて甲府で亡くなったことなどが判明した。金沢の染村絢子氏の著書『ラフカディオ・ハーンと6人の日本人』により、『珎説集記』の持主「南仙波」が、これまで思ってきた人名ではなく、芝・高輪（港区）で牛による運送業を営んできた仙波氏の一族、「南の仙波氏」であることが判明、今後の調査への大きな手掛かりを得ることが出来た。

5月の総会で、記念碑の建立について検討することが提案され、実現に向けて活動が開始した。29年3月で例会は100回となり、調査団今井秀和が「勝五郎の－転生語り－に向かう姿勢」と題する記念講演を行なった。

〈平成29年度〉

「記念碑の建立」という、調査団としては初の自主事業に取り組んだ1年だった。日野市への事業計画打診、高幡不動尊へのお願いなどに続き、どのくらいの予算でどのような碑を建立するかということを検討し、試行錯誤の末にようやく方針が決まった。このようななかで、記念碑の建立に理解を示し、自ら場所も選定してくださった川澄祐勝貫主が、10月10日に亡くなられた。記念碑の完成を見ていただけなかったことが心残りだった。

公開講演会は、多田仁一氏（中央大学特任教授）「人々とともにある怪異」、第9回記念日講演会は、吉田麻子氏（相模女子大学講師）「交響する死者・生者・神々―平田篤胤の世界」を実施した。

調査活動としては、山岸萬吉・常一家の函館移住の背景を探る調査を進めることが出来た。露姫坐像や玉露童女追悼集関係資料が台東区文化財に指定された。

11月に夢が丘小学校で学習発表会があり、3年生の生徒が、先生の脚本で、勝五郎生まれ変わり物語を劇にして、上演してくれた。子ども講座などの普及活動がようやく地元にも浸透してきた結果ではないかと思われ、調査団としては、大変うれしい出来事だった。

〈平成30年度〉

調査団初の自主事業として高幡不動尊境内に記念碑を建立することが出来た。勝五郎没後150年記念事業の一環であり、高幡不動尊のご協力と、有志の方々の寄付により実現した。あわせて説明板と解説リーフレットも作成した。夏休み子ども講座は第11回となり、市内の小学校へのマイクロバス送迎が一巡したこともあって、次年度は、猛暑対策として春休みの実施を検討することに決まった。

5月の総会に併せて記念碑の除幕式・祝賀会を行なったので、公開講演会は中止とした。第10回記念日講演会は、調査団今井秀和（大東文化大学講師）「勝五郎の転生、寅吉の異世界―『再生記聞』と『仙境異聞』」を実施、さらに、31年3月には、勝五郎没後150年記念講演会として、子安宣邦氏（大阪大学名誉教授、岩波文庫『仙境異聞・勝五郎再生記聞』校訂者）「平田篤胤と死者と生者の世界」を開催することが出来た。

調査活動として、11月に甲府方面の調査旅行を実施、甲府市内の教安寺で、勝五郎を取り調べた多門傳八郎の墓所を見つけることが出来、今後の調査の進展にも期待が持てる状況となった。

また、没後150年記念事業の一環として、12月に八王子市下柚木の永林寺にて、勝五郎150回忌法要を行ない、永林寺ご住職に法要を執行していただき、交流を深める場ともなった。

この年度は、読売新聞WEB版・東京人・東京新聞・週刊ポストなどの取材があり、金光教会や心霊科学協会を初めとする、様々な団体・個人の方々からの問い合わせも多く、報告書・ブックレットの販売も好調で、勝五郎生まれ変わり物語の浸透の広がりを感じた。モノレール程久保駅の駅名板にほどくぼ小僧ゆかりの地と紹介してもらうことが出来、八王子市東中野勝五郎生家跡の緑道に案内板を立ててもらうことが出来た（緑道を管理するNPO法人ひと・まち・みどり由木による）など、普及事業を後押ししてくれる出来事もあった。

〈令和元年度〉

公開学習会として種市孝氏（IRI理論物理研究所長）「生まれ変わりを科学する」、第11回記念日講演会は、調査団松村恒（小泉八雲研究家・元大妻女子大学教授）「異なる時間の体系から勝五郎の再生を再考する」を実施した。

池上本門寺日蓮宗現代宗教研究所（現地見学と例会参加）・淑徳大学（展示のための写真提供）・中央大学（ゲスト講師）・明星大学（小泉八雲をテーマとした貴重書コレクション展協力）などの外部団体から様々なアプローチをいただいて、資料や情報を提供することが出来、交流を持つことが出来た。

調査関係では、勝五郎の子孫調査が最終段階を迎え、常の曾孫の墓が群馬県館林市にあることがわかり、子孫の存在を突き止めることが出来た。これは数年前の函館調査の結果を裏付け、山岸夫妻が函館に移住したことが事実であるとするもので、大きな成果と言える。

11月に、山岸萬吉と常が酒蔵を営んでいた府中市四谷の見学会を行ない、多くの収穫があった。

新型コロナウイルスの流行により、３月の例会・猛暑対策で時期を変えた春休み子ども講座の中止を余儀なくされた。例会の休会は、調査団始まって以来のことだった。

〈令和2年度〉

前年度に引き続き、新型コロナウイルスの流行による緊急事態宣言の発令により、4月、5月、3年2月の3回の例会が中止され、3年1月も書面開催となった。総会・公開講演会・記念日イベントも開催できない事態となり、活動は停滞を余儀なくされた。そのような中、第12回記念日事業に代えて動画（調査団今井秀和の講演・立体紙芝居・紙芝居・活動紹介など6つのプログラム）の配信をすることになり、思いがけず新しい挑戦をすることが出来た。動画配信に詳しいメンバーはいなかったが、日野宿発見隊副代表清水直氏（後に調査団メンバーとなる）の全面協力により実現させることが出来た。動画の配信が全国に広がったため、より多くの人々に、勝五郎生まれ変わり物語を知ってもらうことが出来るようになった。報告書･ブックレットの購入依頼が相次ぎ､残部がほとんどなくなってしまった。

2年続いて子ども講座が開催できなかったが、郷土資料館の学校見学プログラムに、「勝五郎のDVD鑑賞とお話」を加えてもらえたことで、4つの小学校の3年生全員に勝五郎生まれ変わり物語を知ってもらうことが出来た。

外に出ての調査事業は出来なかったが、『淺草寺日記』の記載により（文政11月27日）露姫坐像が露姫七回忌に際して納入されたことが判明した。

〈令和3年度〉

新型コロナウイルスの流行により、5・8月の例会と5月の総会・公開講演会の中止を余儀なくされ、総会は書面開催となったが、第13回生まれ変わり記念日講演会はWEB配信することが出来た。（小泉吉永氏（往来物研究家・立正大学講師）「勝五郎の胎内記憶と江戸の胎教論」。）調査団のみ参加の講演会を録画し、編集して動画配信した。4月に小泉氏が主宰する「江戸楽舎」の見学会の案内を行なったことが､記念日講演会の講師依頼につながった。「胎教」という、今まで考えたことがなかった視点からの講演で新たな知見を得た。

2015年の勝五郎生誕200年記念イベントで講演を依頼した大門正幸氏（中部大学教授、バージニア大学客員教授）が、「Psi Encyclopedia」に長文の英文で、勝五郎の生まれ変わりと調査団の活動を紹介してくれた。このため海外の普及活動の一層の進展が期待される。大門氏には、著書『生まれ変わりを科学する』でも、調査団の活動を紹介していただいた。

3年ぶりに春休みに日程を変えて実施した子ども講座は、積極的な勧誘活動を行なわなかったので参加者は少なかったが、新たなプログラムも加えて、充実した内容となった。次年度からの企画を考える上で、参考となるものだった。

郷土資料館の学校見学プログラムで4校の小学3年生約360人への普及活動が実施出来、子どもたちの反応も良好だった。

八王子市郷土資料館での中野村等の宗門人別帳調査で、勝五郎の家族の新たな情報が得られ、大きな成果があった。

残部がなくなったブックレットを増刷（部分訂正のみ、500部）し、報告書改訂版刊行に向けての様々な検討を行なった。

〈令和4年度〉（12月まで）

今年11月は、勝五郎が生まれ変わりを語ってから200年、露姫没後200年の記念の年であるが、新型コロナウイルスの流行が収まらないため､総会･公開講演会は実施できなかった。5月の例会の中で総会を行ない、勉強会として、調査団今井秀和（共立女子大学専任講師）が「転生と憑依のあわいで―前世Ａと現生Ｂの「人格」をめぐる問題―」と題して講演した。

懸案だった報告書改訂版の刊行に予算措置がなされ、500部の紙版刊行とホームページ上でのPDF公開が決められた。新規原稿も含め約30頁分の増頁が見込まれる。

今年度も記念日事業の実施は困難となり、報告書刊行後にシンポジウムなどをWEB配信することが計画されている。

11月の例会を「露姫没後200年記念例会」とし、小宮家の露姫位牌・露姫遺墨軸・七回忌の法要で淺草寺に供えられた美作餅（今坂餅）を用意して、露姫の事蹟を偲んだ。

刊行物一覧

＊『日野市郷土資料館特別展　ほどくぼ小僧　勝五郎生まれ変わり物語』（平成20年9月　特別展図録）
＊ DVD『ほどくぼ小僧　勝五郎生まれ変わり物語』（平成20年）
＊『ほどくぼ小僧　生まれ変わりの勝五郎』（平成21年10月　絵本）
＊『勝五郎生誕200年記念　ほどくぼ小僧　勝五郎生まれ変わり物語　調査報告書』（平成27年9月）
　同　改訂版　（令和5年1月）
＊『ほどくぼ小僧　勝五郎生まれ変わり物語』
（平成28年2月　-2刷-令和4年3月　日野市郷土資料館ブックレット１）

〈リーフレット〉
＊平成20年特別展リーフレット
＊平成27年特別展リーフレット
＊藤蔵墓所配布用ミニリーフレット
＊子ども配布用リーフレット
＊記念碑配布用リーフレット
＊藤蔵・勝五郎ゆかりの地探訪マップ

図1 立体紙芝居（15場面・平成20年の特別展に際し作成）

図2 平成27年特別展展示風景

（ホームページ・ブログアドレス）
http://umarekawari.org
http://blog.umarekawari.org

調査団名簿（平成18年～令和4年）

朝倉　海玄	青山　英正	按田　宗忠	伊藤　香奈	今井　秀和	市川　三千代
伊藤　英一（故人）	上野　さだ子	大河内　祥行	大窪　俊彦	大溝　次子	岡田　忠昭
岡田　美惠子	岡野　久美子	荻田　勝代	片山　幸和	加地　勝（故人）	門脇　鮎子
家弓　昌子	川島　純	金子　紀美子	叶内　匡子	川崎　和彦	北村　澄江
車谷　ノブ（故人）	小杉　博司	小宮　豊	小宮　壽子	小谷田　忠一良	小谷田　久美子
斎藤　薫	笹原　昭五（故人）	清水　直	清水　守男	鈴木　淳世	鈴木　俊子
鈴木　宏彰	須永　征一（故人）	平　幸雄	高井　利子	高津　美保子	高橋　克寿
高橋　清貴	髙橋　國夫	田倉　利子	谷　富二	豊泉　ちか子	戸塚　ひろみ
中川　和明	西村　勉（故人）	秦　哲子	羽田　鎮子	福本　秀子	藤井　正二
藤井　陽子（故人）	ペン・セタリン	塀内　功	堀内せつ子	松村　恒	松本　智恵
松本　美虹	宮下　清子	矢口　祥有里	山本　真由美		

図3 調査団手作りのジオラマが完成（平成20年9月）

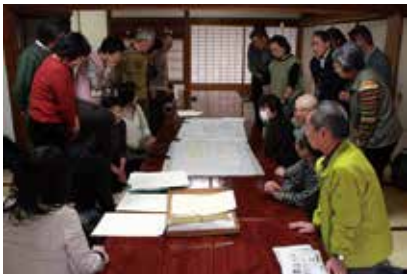


図4 見学会風景（文京区西教寺 平成23年3月）

図5 小学校で大型紙芝居を上演（平成23年6月）

図6 子ども講座で藤蔵墓所を案内（平成25年7月）

図7 第6回藤蔵・勝五郎生まれ変わり記念日（平成26年10月）

図8 露姫没後200年記念例会（令和4年11月）

初版あとがき

本報告書を刊行するに当たり、ご協力いただいた関係各位に厚く御礼申し上げます。勝五郎生誕二百年という節目の年に当たり、調査活動十年のなかで出会うことのできた様々な資料・情報を一つにまとめておきたいというのが、本書刊行の目的です。まとめる過程で新たな資料の発見があり、足りない調査が見えてくるということもありましたが、現在の状況を示すことが出来たのではないかと思います。

調査成果をまとめるという作業は思いのほか大変でしたが、昨年六月より、編集委員会を立ち上げて取り組んだことで、これまでしてきたことと、今後何をしなければいけないかということが、少し明確になったように思います。

幸いなことに、私たちには、郷土史家下田九一氏の先行研究があり、これを後追いする形で「勝五郎生まれ変わり物語」の概要を学びました。これを越える発展はあまりないのではないかと思っていましたが、予想に反して、行く先々で新たな資料・情報の発見に出会うことが出来ました。

私たちは、「勝五郎の生まれ変わり」という一つの切り口を持つことで、様々な分野の資料・情報・人々に出会い、その世界に深く入っていくことが出来たように思います。教科書には書かれていないことを学び、新たな資料の発見に立ち会う幸せを共有できたことを、この活動に関わった者の喜びとしたいと思います。

勝五郎を巡る家族の調査はまだ道半ばですが、勝五郎が決して特別な人だったわけではなく、普通の人として、普通の人生を懸命に生きた人だったことが、見えて来たのではないかと思います。

池田冠山研究者の小谷惠造先生、宮地正人先生を初めとする平田篤胤研究者の方々、小泉八雲研究者の小泉凡先生など、多くの方々にご支援をいただき、高幡不動尊川澄祐勝貫主様にも、一方ならずご理解とご支援をいただきました。

郷土資料館の呼びかけに応じて集まってくれた調査団の人々が、調査研究・普及活動においてそれぞれの持てる力を、惜しみなく発揮していただけたことが、大きな力となりました。調査団をまとめ導いて下さった朝倉海玄代表、子孫という立場で強力なご支援をいただいた小宮豊氏夫妻、小谷田忠一良氏、絵本の挿絵を描いていただいた叶内匡子氏をはじめとする調査団の皆様に、感謝申し上げます。

次第にその姿が明らかになってきた「勝五郎生まれ変わり物語」を、次の世代に継承していけるように、これからも様々な情報を発信していく所存です。

平成二十七年九月

日野市郷土資料館　北村　澄江

改訂版あとがき

平成二十七年に刊行した調査報告書は、大変好評で、多くの方々の手に取っていただくことが出来ました。ホームページの立ち上げと共に、勝五郎生まれ変わり物語の普及活動を推し進める契機となりました。また、調査団にとっても、今までの調査の経緯を整理することが出来たことは、これからの活動を考える上で、大変役に立つものとなりました。

千部を刊行した報告書は、令和三年に完売し残部がなくなりました。令和元年ごろから、改訂版の刊行を考えて来ましたが、予算の問題など様々な困難があり、試行錯誤の検討を重ねました。今年度になり、ようやく「勝五郎が生まれ変わりを語って二百年・露姫没後二百年」記念事業として、改訂版の刊行が実現の運びとなりました。刊行部数は五百部ですが、ＷＥＢ版の配信が可能となりましたので、より多くの方にご覧いただけるばかりでなく、今後の改訂がＷＥＢ上で行なえることになったので、最新の調査成果をいち早く伝えられるようになると思います。

報告・論考・資料と、細部の見直しや加筆・訂正を加えたほか、多門傳八郎についての調査報告と小泉八雲に関する新たな論考（３）を加えることができ、二十頁余の増頁となりました。謎の人物だった多門傳八郎のことが、かなり明らかになりました。

論考３を執筆していただいた松村恒氏は、調査団のメンバーですが、小泉八雲の研究者です。調査団では、活動をはじめた当初から、小泉八雲「勝五郎の転生」の原典と雨森信成のかかわりについて調査を進めて来ましたが、資料を見つけることが困難で、なかなか核心にいたることが出来ませんでした。平成二十七年の生誕二百年記念展で、ようやく國學院大學図書館から『珎説集記』を借用させていただき、その一端をあきらかにすることが出来ました。

今回の松村氏の論考は、雨森信成の翻訳原稿を掲載することで、これを更に深める内容となりました。ここで雨森自筆原稿掲載の経緯について一言説明させていただきたいと思います。

資料を提供していただいた染村絢子氏は、金沢在住の在野の小泉八雲研究家で、多くの論考や著書があります。生誕二百年展開催中の平成二十七年十月、染村氏から電話をいただきました。染村氏が雨森の翻訳自筆原稿の写しをお持ちだという事、その取扱いについて、松村氏に相談したいので連絡先を知りたい（当時松村氏はニュージーランドに在住していた）という内容でした。この時のお話で、染村氏が、ずっと八雲の「勝五郎の転生」の原典についての調査を進められていたことを、はじめて知りました。図らずも、調査団と染村氏は、まったく別々のところで、同じ問題の探求を行なっていたことになります。

染村氏は、平成二十九年一月に大部の著書『ラフカディオ・ハーンと六人の日本人』を上梓されました。この中に、『珎説集記』と雨森の自筆原稿が掲載されていますが、松村氏にも、この写しの利用をお許し下さったという事です。松村氏の、自筆原稿の掲載には、報告書改訂版が最も適しているという判断のもとに、掲載の運びとなりました。池田冠山の著述に由来する『珎説集記』が、ハーンによって海外に紹介されていく経緯が、このように明らかにされたことは、大変よかったことだと思います。資料の提供だけではなく、染村氏の著書からは、多くのことを教えていただきました。改めて感謝を申し上げたいと思います。

さて、勝五郎と家族の調査は、調査団メンバーの地道な調査によってさらに進みました。確証となる資料がもう一歩たりないところはありますが、妹つね夫妻が函館に移住して「山岸商店」を営んでいたことは、間違いのないことだと考えます。さらに、「宗門人別帳」の調査により、勝五郎を巡る地元の登場人物は、すべて実在の人々であるという確証を得ることが出来ました。勝五郎や家族の人々は、起こったことをありのままに語り、池田冠山・多門傳八郎・平田篤胤も、語られたことをそのまま記録したということではないでしょうか。

ここに至っても、調査団の探求に終わりは見えません。今後も地道な調査・研究を進めていく所存です。ご協力いただいた関係各位に厚く御礼申し上げるとともに、今後もご指導ご鞭撻を賜りますよう、お願い申し上げます。

令和四年十二月

日野市郷土資料館　北村　澄江

【調査団の活動でお世話になった方々並びに資料提供者】

（五十音順・敬称略）

秋田県立博物館　彌高神社（秋田市）　雲龍寺（鳥取市）　永林寺（八王子市）
江戸東京博物館　教安寺（甲府市）　宮内庁書陵部　小泉八雲記念館（松江市）
弘福寺（墨田区）　國學院大學図書館　国文学研究資料館　極楽寺（八王子市）
国立公文書館　国立国会図書館　国立歴史民俗博物館　小島資料館（町田市）
西教寺（文京区）　佐藤彦五郎新選組資料館（日野市）　三一書房　上越市総合
博物館　新宿歴史博物館　淺草寺（台東区）　高幡山金剛寺（日野市）　丹波哲
郎オフィス　中央大学　帝京大学図書館　天理大学附属天理図書館　鳥取県
立図書館　鳥取県立博物館　日本心霊科学協会　函館市中央図書館　市立函
館博物館　八王子市郷土資料館　パルテノン多摩歴史ミュージアム　平田神
社（新宿区）　広島県立歴史民俗資料館　府中市郷土の森博物館　法正寺（新
宿区）　三次市歴史民俗資料館　明星大学　焼津小泉八雲記念館　早稲田大
学図書館

安藤　義三　安藤和次郎　池川　明　石井　隆　石川　禎一
市川　閲子　市川　紀子　市川　博（故人）　牛米　努　遠藤　潤
大門　正幸　小川　八郎　金子みさを　川澄　祐勝（故人）　北嶋　昭
北原　進　倉松　俊弘　小池　淳一　小泉　凡　小泉　吉永
小谷　惠造　子安　宣邦　小谷田重助　小谷田　稔　古山　悟由
佐藤　福子　下田　九一（故人）　杉田　純一　杉本　好伸　鈴木　一彦
染村　絢子　武田　清治　立川　明　常光　徹　内藤　治
中嶋　繁雄　橋場万里子　花木　知子　東　雅夫　松岡　茂雄
宮川　榮一　宮地　正人　森澤　國夫（故人）　山岸研之輔　山岸　勤
簗瀬　均　吉田　麻子　吉野　治子（故人）

＊以上のほかにも、多くの機関・個人の方々にお世話になりました。厚く御礼申上げます。

ほどくぼ小僧
勝五郎生まれ変わり物語　調査報告書
－改訂版－

発行日　平成二十七年九月三十日
　　令和五年一月三十一日（改訂）

編　集　勝五郎生まれ変わり物語探求調査団

発　行　日野市郷土資料館
　　〒一九一－〇〇四二　東京都日野市程久保五五〇番地
　　電話　〇四二－五九二－〇九八一
　　e-mail museum@city.hino.lg.jp

印　刷　日野テクニカルサービス株式会社

無断転載を禁じます
本書は、再生紙を使用しています。

日野市郷土資料館

東京都日野市程久保550番地

TEL.042-592-0981

HP http://hino-museum.jp